純華の誓い ~ブルー サイド ストーリー~

翠月 那奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純華の誓い ～ブルー サイド ストーリー～

【Nコード】

N8224C

【作者名】

翠月 那奈

【あらすじ】

百年前のあの日、愛する人を失った。何度転生を繰り返しても、彼女は未だに見つからない。そんな時に現れたのは、異世界からやってきた女の子だった。悲劇に向けて歯車は回り続ける

第1章 追憶（前書き）

このお話は scene of phantom green side story のサブストーリーです。

理解出来ない部分もあるかと思うので、少なくとも green side story の第10章までは読んでおく事をお勧め致します。

一部、流血シーン・死ネタがありますので、苦手な方はご注意下さい。

第1章 追憶

過ぎ去った時を慰めるかのように、穏やかな風が吹き抜ける。その度に真っ白な花たちが揺れ、花びらが舞った。

「カノン……」

両手を伸ばした程の大きさがある緑色の透明な石には、カノン・ディオ・エメラルド 俺の最愛の人の名前が刻まれている。それを優しく指でなぞる。

あれから、もう一か月が過ぎ去ろうとしていた。

この地に封じられている全ての元凶は、今も不気味な笑みを湛えているのだろう。いくら憎んでも憎み足りない。

最後に彼女を抱いた温もりが、儂げな笑顔が未だに残っている。

だが、俺の元に戻ってきてくれる事はもう無い。

今日は一週間ぶりの会議の日だ。

今の俺には、そんなものはどうでも良い。会議と言っても決める事なんて無いのだから。二人で俺を慰めるだけなのだろう。此処に居る時間の方がよっぽど大切だ。

だが、そうとも言っていない。会議に出ず、ヴィクトに殴られるのは御免だ。

「行ってくる。また、此処に来るから……」

名残惜しいがそっと微笑み掛け、墓石を撫でる。手に伝わる感触は固く、冷たい。それがまた、俺の心を抉る。

こうしていると此処を離れられなくなってしまう。
現実を振り切るかのように踵を返し、静かに瞼を閉じた。

浮遊感が消え去る。瞼を開けると、重厚感の漂う扉が立ち塞がった。溜め息を吐きなくなる程憂鬱だ。

嫌々右手を前へと出し、それを押し開ける。古い扉特有の鈍い音が響き、それと同時に二人の顔が目に飛び込んできた。

「オマエ、また、カノンの所に行ったのか？」

「うん……」

目を合わせようとせず、曖昧に頷く。

あの惨劇の前は俺が遅刻する事など無かった。叱る側だったのだ。それが、今は逆転してしまっている。

ヴィクトもアイリスも俺が毎日のようにカノンの所へ行く事を良く思っていない。

ワープを繰り返せば寿命に大きく関わってくる。それを心配しているのだろう。

だが生きる希望を失ってしまった今、寿命なんてどうでも良い話だ。

食い入るような視線をかわし、いつもの席に腰掛ける。隣りに彼女の姿は無い。

「気持ちは分かるけどよー、あんま無理すんなよ?」

「分かってるよ……」

気持ちが分かるのならば放っておいてくれ。心の中では呟くが、口には出さない。言ってみたところで怒鳴り散らされるだけだ。

大袈裟に溜め息を吐くヴィクトを視界の隅へと追いやった。

ヴィクトの隣りでは、アイリスが揺れる瞳でこちらを見詰めているのだろう。痛い程の視線を感じる。

八つ当たりに近いが、こんな二人に会うと腹が立って仕方が無い。

「あのさ、話があるんなら早く始めようよ」

「あ？ ああ………」

腹立たしさが声にも表れている。喧嘩を売っていると取られてもおかしくはない。それでも、ヴィクトは大人しくそれに従う。こんな光景は、今までは考えられなかった。

「いや、世界の修復の事なんだけどよー………」

はつきりとせず、しどろもどろに話すヴィクトに更に腹が立つ。俺の様子でも窺っているのだろうか。

「あつ、前も話してた事？ エメラルドをどうするかって」

ヴィクトを庇おうとしたのだろう。だが、『エメラルド』と口に
した途端、アイリスは慌てて口を覆い、申し訳無さそうに俯く。

いつまでこんな状態が続くのだろうか。気を遣ってくれているのは分かるが、此処までされては心の傷が広がるばかりだ。

右手で頬杖を付き、ヴィクトとアイリスの会話を受け流していく。こんな会議が一刻も早く終わる事を願う。

「……おい、リザード。オレらの話、聞いてたか？」

「うるさいな……」

突然振られた話に無意識のうちに反応していた。自分で発した言葉に気付いて正面を向いた時には、ヴィクトもアイリスも目を丸くしていた。

「あつ……。ごめん……」

途端、罪悪感が襲ってくる。頭を掻き毟りたくなったが、片手を頭に当てたところで踏み止どまった。

俺の様子にヴィクトとアイリスは困ったように顔を見合わせ、溜め息を吐く。

カノンの命だけではない。黒の魔導師は俺たちの団結力さえ奪い去っていた。いや、俺が勝手に乱しているだけだろうか。

その場の雰囲気は悪くなったが、何とか会議は終わったらしい。今『らしい』としたのは、話し合った内容を覚えていないからだ。もう此処に居る必要も無い。すぐにカノンの所へ行こうと、勢い良く席を立つ。すると、ヴィクトに右腕を捕まれた。何か癪に触る事でもしただろうか。と考えてみたが、そうではなかった。

「おい。オマエ、何処に行くんだ？」

「えっ？ 帰るだけだけど……」

険しい表情をこちらに向けるヴィクトに、俺も不機嫌な顔を返す。

「『サファイアに』帰るんだよな？」

「ただ。また、俺がカノンの所へ行くのを止めようとしている。アイリスもこちらを心配そうに見詰めている。」

いい加減にして欲しい。

「……………うん」

勿論、これは嘘だ。だが、こうでもしなければ此処から出る事は出来ないだろう。

顔を背けて無愛想に頷くと、腕を掴む手が離れていった。

「今日はもう、カノンの所に行くなよ？ 一週間後、また此処に集合だからな」

「分かったよ……………」

適当に返事をし、早速魔法を使う。

ヴィクトたちにはほんの少し悪いと思いつつも、カノンの待つ花畑へと直行した。

「……………ただいま」

カノンの墓石の上にそつと左手を乗せる。その親指には、彼女と

交わした結婚の誓いの印が輝いている。そして胸に下がるネックレスの先では、戻ってきてしまった彼女の指輪が揺れている。

あの時に彼女の異変に気付いていれば、死なせずに済んだのだろうか。

ごめん。と心の中で謝らずにはられない。とその時、心臓が変に飛び跳ねた気がしたのだ。

「……っ?!」

今のは何だったのだろうか。ただの気のせいだろうか。

右手で胸を触ってみるが、特に異変は感じられない。

だが、それは気のせいではなかった。突如として、胸を刺すような激痛が襲ってきたのだ。

「……う……ッ……!」

鼓動がおかしい。脈が速過ぎる。それに、真面に呼吸すら出来ない。

苦しさに耐え切れず、両手で胸を押さえ付けながらその場にくずおれた。

俺も此処で終わってしまうのだろうか。

だが、それも良いかもしれない。これ程の悲しみを背負って生きていける程、俺は強くないのだから。

喘ぎながら墓石の方へと目を向ける。すると、透けてはいるが、カノンがにっこりと微笑んで俺に手を差し延べていたのだ。無邪気に笑うその表情も、艶やかな長い髪も、当時と何一つ変わっていない。

「カ……ノン……」

こんなにも腑甲斐ない俺を迎えに来てくれたのだろうか。

何とか彼女の手を取ろうと必死に自分の手を伸ばす。

だが、触れるか触れないかというところで意識が遠のき始めてしまった。瞳から涙が零れ落ちる。

ごめん。俺は何も出来なかった。してあげられた事は沢山あった筈なのに。

でも次こそは、必ず君を幸せにしてみせるから。君がどんな姿をしようとして、何処に居ようと、必ず見つけ出す。だから、どうか忘れないでいて。

君を 愛してる

「……っ！」

目を開けた瞬間に布団をはね除け、ベッドから飛び起きていた。

嫌な汗を掻いたせいで服はびっしょりと濡れているし、息は上がっているし、最悪だ。

しばらくの間、こんな夢なんて見ていなかったのに。

額の汗を拭っていると、慌ただしい足音が聞こえてきた。

「ラウド様！ 朝御飯ですよ！」

顔を見なくてもすぐに分かる。これ程騒がしいのは、俺の使い魔のカイルしかない。とは言っても、この部屋に来るのなんてカイ

ル以外には居ないのだが。

大きな音を立て、食器をテーブルの上へと置いていく。

俺が返事をしないのを不思議に思ったのだろう。カイルは珍しく、静かに口を開いた。

「……リザード様の夢でも見たんですか？」

「うん……」

顔も見ずに返事をし、大きく溜め息を吐く。

そんな俺にカイルは何も言わない。いや、言えないのだろうか。静かな部屋の中で引き出しの動く音だけがする。

「お着替えは此処に置いておきますね」

そう言われ、やっとカイルの方を向いた。木製の背もたれの付いた椅子に薄いグレーの服を掛けている。

その後、小さく息を吐くとこちらに向き直った。

「それでは、失礼しますね」

カイルはいつものように、丁寧にお辞儀をする。一つに束ねられた青い髪を揺らしながら、静かに部屋を出て行ってしまった。

それを合図に嫌々立ち上がる。

シャワーを浴びるため、先程カイルが用意してくれた服を手にする。

ふと顔を上げると、寒さで曇った窓ガラスが目に入った。何となく、その曇りを手で取り除く。

街は一面、銀世界だ。立ち並ぶ三角屋根にはこんもりと雪が積もっている。

その手前には、俺の姿が映っていた。この金髪も、青い瞳も、幼い顔立ちもリザードを思い起こさせる。自分がその生まれ変わりだという事を忘れさせないためだろうか。

“ラウド、ごめん”

自分の髪を掴んでいると、俺を憂鬱にさせた張本人の声が聞こえてきた。

リザードの声が聞こえるようになったのは一年程前、俺が魔導師として覚醒した時だ。百年前からこれで四度目の転生だが、こんな事は初めてだ。

「何で？」

“だってさ、俺の夢見たせいでうなされてたみたいだし”

申し訳無さそうに、最後は声が萎んでいった。

夢にうなされるくらい、なんて事無い。それよりも命を削る事を転生する度に続けてきたのだから。

「別に、謝る事無いよ」

それに、リザードは俺自身でもある。自分に謝る必要なんて無い。

“……うん”

多分、納得はしていないだろう。だが、頷いてくれただけで十分だ。

恐らく、リザードは罪悪感を抱えているのだろう。何度も生まれ変わる自分の姿を見てきた筈だ。

俺の前の三人は三人とも魔導師だった。魔導師の寿命は四十歳程だが、その誰もが二十五歳までに死んでいる。リザードよりも長生きをした者がいないのだ。

それは、生まれ変わったカノンを探すために何度もワープを繰り返していたからだろう。リザードの最期の意志を貫き通すかのよう

に。

だが、カノンは未だに見つからない。

俺もたまにエメラルドへ出掛けている。まだ前世程に頻繁に行ってはいないが、年月を重ねることにその回数は増えていくのだろう。そしてこのままカノンが見つからなければ、前世と同じ道を辿る事になるのだろう。

二十五年という歳月は、俺が一人で生きていく事の出来る限界値なのかもしれない。

「これは俺の人生だから。自分で決めて、自分で行動する。だから、リザードは気にしないで」

まるで自分自身に言い聞かせるかのように、しっかりとした口調で語りかける。そんな俺に、リザードは何も言わなかった。

これは、俺の残り六年間の人生に対する覚悟の表れだ。誰かの責任には出来ない。自分自身の責任、その頭の中に植え付ける。

この直後、そんな決意が覆される事になるなんて全く考えてもいなかった。

第2章 期待

憂鬱な気持ちを引き摺りながら、濡れた髪をタオルで拭いていく。シャワールームのドアを閉め、焦点の定まらない瞳に映ったものは、

「ラウド様！ 今すぐダイヤに行きますよ！」

息を切らして部屋の入口で蹲っているカイルだった。

ダイヤに行くとと言っても、次の会議まではまだ五日残っている。カイルの様子を見れば、何かがあったのだらう。という事は予想出来るが、こんな事は日常茶飯事だ。大した事ではないのかもしれない。

「何があったの？ 説明してよ！」

「とにかく行くんですっ！」

俺の言葉を見無視し、こちらに近寄ってきたカイルはひたすら俺の腕を引っ張る。引っ張ってみたところで、ダイヤにはワープして行くのだから意味は無いというのに。

「ちょっと落ち着いてよ！ 何があったのさっ！」

呆れてしまい、悪いと思いながらもカイルの手を払い除ける。するとカイルは、はっと我に返って顔を赤く染めた。

「あっ！ すっ、すみません！ つい興奮してしまいました……」

片手を口に当て、大きく咳払いをする。更に深呼吸までしている。

「落ち着いて聞いて下さい……」

真剣な瞳で俺を見詰める。それを呑気にも大袈裟だ。と思っていた。落ち着いていないのは明らかにカイルの方だったのだから。

次の瞬間、その考えが吹き飛んでしまう事になる。

「良いですか？ ……地の魔導師様が現れたらしいですよ……！」

「ふーん。……えええっ?!」

地の魔導師はカノン以降、現れていない。恐らく、地の魔導師だという事はカノンの生まれ変わりなのだろう。

そう言い切れるのには理由がある。俺だけではなく、『風』のアレクと『火』のフレアもヴィクトとアイリスの生まれ変わりなのだ。期待がどんどん膨らんでいく。

やっと逢える。百年間も探し続けた君に。

「今日来るのっ?! すぐ会えるのっ?!」

我を失って手にしていたタオルも放り投げ、カイルの肩を鷲掴みにすると大きく揺さぶっていた。そのせいでカイルは首を上下に揺らし、

「わあああ〜」と情けない声を上げている。

「ラウド様〜っ! 落ち着いて下さい〜っ!」

「……あっ! ごめんっ!」

ようやく自分がしている事に気付き、慌てて手を離した。顔がみるみると熱を持っていく。

カイルは目が回ったのか、首をゆっくりと回すと安定しない焦点でこちらを見る。

「それが、何でも異世界からいらしたようで……。申し上げにくいですけど、今日はダイヤには来ませんよ」

「異世界……?!」

開いた口が塞がらない。異世界から魔導師が いや、一般人ですら、スティアに来るなんて聞いた事が無い。勿論その逆も、だ。時間の流れそのものが違うのだから。

だが、百年間もカノンが見つからなかった説明がつく。異世界に居たのでは俺たちに分かる訳も無い。いくらスティア中を探しても見つからない筈だ。

とにかく、異世界から来たのであったとしても、

「でも、地の魔導師が現れたのはホントなんだよね?!」

こちらの方が重要だ。

またカイルの肩を掴んでしまいたい衝動を何とか抑え、代わりにこれでもかという程カイルの顔を見詰める。

疑いを持たれた事に不満を感じたのだろうか。カイルは大きく丸い青色の目を少しだけ吊り上げた。

「嘘なんて言っただろうですか！ ホントですよ！」

力強い答えに涙が溢れそう。心臓も高鳴っている。

カノンの生まれ変わりに会ったからと言って、この空白の百年間が埋まる訳では無い。それでも俺の過去が報われるような気がするのだ。

カノンを探し続けた事は無駄ではなかった。そう思いたい。

ただ、今すぐに会えないのは残念だが。

「早く行きますよ！」

「うん！」

唇を噛み締め、必死に涙を堪える。アレクに泣顔を見せる訳にはいかない。もし見せてしまえば絶対に馬鹿にされる。そんなのには耐えられない。

そんな事を考えているうちに、カイルは元の姿 青く輝く毛並みをし、片手を伸ばした程度の体長を持つイヌの姿に戻っていた。外からの光を受けて輝く円らかな瞳が俺を見詰めている。

カイルに大きく頷いてみせ、そっと瞼を閉じた。

とその時、嫌な気配を感じた気がしたのだ。昔にも一度、体験した事のある気配を

会議室の扉を目前にし、一人固まっていた。

今の気配は何だったのだろうか。気のせいでは無いと思う。だが、そんな筈が無い。いや、そうであってはならない。

湧き起こる疑義を打ち消し、扉を睨み付ける。気持ちを落ち着か

せるために一度深呼吸をし、目の前に立ち塞がる物を押し開けた。

「オマエ、遅かったなー！」

「もう少し早く来ると思ったのにね。お陰で助かったわ」

「どうやら、俺が最後になってしまったらしい。」

広がる視界の先ではアレクとフレアが椅子に座り、同じように頬杖を付いている。

この二人はカノンが居た頃と変わらずに接してくれる。お陰で気を遣わずに済む。

ただ、二人はいつの間にか仲良くなっていた。俺が初めて此処に来た時には既に付き合っていたらしい。ヴィクトとアイリスはそうでも無かったと思うのだが。

「カイルの説明が遅いんだよ」

頭を掻きながら椅子に歩み寄って腰を降ろす。

百年もの間空席だった俺の隣りの席は、次の会議の時には埋まるのだろう。そう思うと、自然と口元が緩む。

「オマエ、気持ち悪いぞ？」

「何が？」

「ニヤけ過ぎだろー！」

片方だけ口元を吊り上げて笑うアレクの言葉で、一気に頭に血が上っていく。

「そういう事言うつ？！俺が今まで、どんな気持ちで生きてきたと思ってるのさっ！二人はいつつも一緒に居れるから良いけどさ！」

信じられない。何故、そんな事が平然と言えるのだろうか。

怒りで頬は熱を持っている。思い切り目を吊り上げ、アレクを睨み付けた。

「今のはアレクが悪いわよ！もう少し考えて欲しいわ！」

フレアを味方に付け、俺の怒りも勢いを増す。

そんな俺たちにも動じず、アレクは未だに笑みを浮かべている。反省する気は無さそうだ。

「わりいわりい」

口先だけで謝るアレクに、更に腹が立つ。頭の血管が切れるのではないかという程だ。

思い切りテーブルを拳で叩き付けて顔を逸らした。手がじんじんと鈍く痛む。

「ラウドも少し落ち着いて？ 気持ちは分かるけど、話し合いが出来ないわ」

申し訳無さそうなフレアの声に、渋々視線を元へと戻す。すぐさま、嫌味な笑顔から苦笑いへと表情を変えたアレクに睨みを利かせた。

アレクは一瞬、首を竦める。

「んな顔しなくても良いじゃねーか。でもよー、オレらの言った通

りだっただろ？ カノンが生まれ変わったら、魔導師になるってよー」

「ん？ うん……」

今度は俺の方が、立場が弱くなってしまった。曖昧に頷いてみせる。

リザードの時だけではない。転生する度にワープを繰り返していた俺をアレクたちは止めようとしていた。その度に言われたのだ。

「カノンが転生したら、魔導師になる筈だ。無駄な事は止める」と。だが、そんな言葉に耳を貸す訳も無く、二人には呆れられたものだった。

「あのさ、俺がカノンを探してた事、『地』の子には内緒だよ？ 恥ずかしいし……」

とは言ったものの、理由はそれだけではない。重く思われたくないのだ。それに、俺がそんな事をしていたと知れば、いくらカノンの生まれ変わりだと言っても同情するのだろう。そんな愛情なら欲しくない。

俺の心の内を理解してくれたのか、フレアはにっこりと微笑む。しかし、アレクは違っていた。

「言える訳無い」

「どーだろーなー」

フレアの言葉を遮り、また口元を吊り上げる。喧嘩を売っている

としか考えられない。そうでなければ、他人の気持ちを考えられないだけの馬鹿だ。

収まりかけていた怒りがふつふつと煮えたぎる。

「アレク！」

「本気で『地』の子に喋るつもり?! 俺の気持ち、考えた事ある?!」

勢い余って両手をテーブルに突き、立ち上がっていた。そんな俺に、叫び声を上げたフレアでさえ目を丸くする。

それでもアレクは微動打にしない。人間としての感情を持っているのかすら疑いたくなってくる。

「そんなにムキになるなよ。冗談だ」

しらつと言われ、それに対して言葉を返すのも面倒になり、乱暴に腰を下ろすと大きく溜め息を吐く。次に、何故かアレクまで溜め息を吐いた。

もう、相手にしていても疲れるだけだ。頼杖を付いてうんざりしているよ、

「……良いか? 『地』のヤツは、カノンの事は覚えてねーんだ。ソイツにオマエの感情を押し付けても困らせるだけだ。それだけは覚えとけよ」

突然、説教を始めたのだ。それまであんな発言をしていた人物が話しているとは思えない内容だ。

しかし、そんな事は言われなくても分かっている。アレクとは違
い、そこまで俺は馬鹿ではない。

「……分かってるよ」

目も合わせずに返事をする、またアレクは大袈裟に溜め息を吐
く。何がそんなに気に食わないのだろうか。

「なら、良いんだけどよー」

そこで一度言葉を区切ると、自分の頭を掻いてみせた。

「次の会議で『地』のヤツも呼ぶからな。オマエらに聞きてー事も
あるし」

「皆様っ！ 会議は終わりましたかっ?!」

不意に会議室の扉が勢い良く開く。驚いて反射的にそちらに目を
やると、カイルが俯き、そこにへたり込んでいた。今朝のような状
態だ。

その後ろでは、焦っているのかアリアが拳を握り締めながら額に
冷や汗を浮かべている。眉間には皺まで寄せていた。

カイルはそうでもないが、アリアがこんな状態になるのは珍しい。
一体、どうしたというのだろうか。

「おおっ?! オマエら、終わんの早過ぎねーかっ?!」

突然の出来事に対応仕切れず、俺だけではなく、アレクもフレア
も目を丸くしていた。

いつもなら、少なくとも一時間は会議室に閉じ籠ったままだ。勿

論、使い魔たちも別室で同じように会議をしている。

それなのに今日は話し合いを始めてから、まだ十数分しか経っていないのだ。驚くのも無理は無い。

「ごくりと唾を飲み込むと、カイルが勢い良く顔を上げる。

「それが」

「『地』の方が部屋を抜け出したようなのです！ 次の会議はいつですか?!」

「おあつ?!」

カイルの言葉を遮り、アリアが叫ぶ。それに対し、アレクが奇声を上げた。

サファイアもそうだが、魔導師が住んでいるのは地上から遙か高く聳え立つ塔の頂上だ。エメラルドも例外ではない。

部屋のドアを開けると、そこには闇へと続く螺旋階段が延びている。恐らくまだ、アリアは魔法の使い方を教えてはいない。ワープも使えないのにその階段を降りようとするなんて、余程の勇気が無くては出来ないだろう。

呆気に取られてしばらく返事が出来なかったが、アレクが何とか口を開いた。

「そーだなー……。んじゃ、五日後にするか！ オマエら、それで良いだろっ?」

「……えっ? あつ、あたしは良いわよ」

フレアも何とか言葉を返したが、頭は働いていないのだろう。未だにぼんやりと扉の方に目をやったままだ。

だが、これは俺にとって重大な問題だ。待ちに待っていた瞬間を目先にぶら下げられ、一人で長い時間をやり過ごさなくてはいけないなんて。苦痛以外の何物でもない。

「……うーん、俺は、もう少し早くても良いと」

「よし、五日後だ！」

「分かりました！ 五日後ですね？！ その時には『地』の方も連れて参りますので」

俺の意見を完全に無視したアレクの言葉を聞くと、アリアはすぐさま踵を返して光の中へと消えてしまった。

それを確認すると、カイルも会議室を出ていった。

こうなってしまった今、もはやアレクに従うしかないのだろう。心を屈辱感が支配していく。

何処まで俺の感情を蔑ろにすれば気が済むのだろうか。
血が滲むのではないかという程、拳を強く握り締めた。

「流石、カノンの生まれ変わりだな……」

「ええ……」

そんな俺には目もくれず、二人は顔を見合わせる。もう黙ってな

んていられない。

「……俺の話、無視した」

意識はしていなかったが、いつもよりも声は低い。途端、二つの顔がこちらを向く。それを思い切り睨み付けた。

するとアレクは腕を組み、ゆっくりと首を横に振る。

「……あのなあ。それがオマエの感情を押し付けてるって言うんだ。五日後つてのは、オマエにとっては『遠い未来』でも、『地』のヤツにとっては『突然』だぞ？」

諭すかのように語りかけてきた。フレアまでもが慰めるように、こちらに視線を送る。

それでも納得出来ずに大きく溜め息を吐き、二人を視界の隅へと追いやった。

結局、それ以上話は進展しないまま会議は終わってしまった。俺のせいかもしれないが、そんなものは気にしない。明らかに向こうの方が悪いのだ。

今日の会議は散々だったが、サファイアに帰った時にはアレクに対する怒りよりも、これからに対する喜びの方が勝っていた。

次の会議の数日後には魔法を獲得するため、過去の記憶を辿る旅を始めるのだらう。それが終われば、きっと俺の想いを伝えられる筈だ。数十日の辛抱なんて、百年間の苦しみに比べれば多少だらう。

だが、この考えは甘かった。何も分かっていなかったのだ。

次の会議以降、『地』の子はカノンの事を覚えてはいない。俺の感情を押し付けても困らせる。その事実を痛い程思い知らされる事

になる

第3章 想い人

今日までの五日間はとても長く感じた。

読書などをして時間を潰そうと試みたが、『地』の子の事が気になりって全く集中出来なかった。その度に大きく溜め息を吐く。すると、カイルがこちらを見て笑うのだ。

何故、俺が笑われなくてはいけないのだろうか。とカイルに顔をしかめてみせるものの、全く気にしていないようだった。そんな態度がどうしても癪に障る。更に時の流れを遅く感じさせた。

だが、それがいつまでも続く筈が無い。いや、続いて堪るものか。降り注ぐ朝日を全身で浴び、早々に準備を済ませる。まあ、準備と言っても持つていく物は無いのだから着替えくらいなのだが。

ふと自分の胸元で光を放つ物に目がいった。カノンの結婚指輪だ。これは過去を思い出す度に、肌身離さず身に付けてきた物だ。いつかカノンに返せる日が来る事を夢見て。

『地』の子と逢える日がやってきた今、それもそう遠くはない未来なのだろう。

とても小さな指輪を握り締めて深呼吸をする。会議の事を考えると胸は高鳴り、身体を巡る血は温度を上げる。

早く、この耐え難い時間が過ぎ去ってくれる事を願いつつ読みかけの本に手を伸ばすが、頭に入る訳が無い。数行も読まずに分厚い紙の束を閉じてしまった。

いつそ場所だけではなく、時間までもワープする事が出来れば良いのに。

だが、俺たちの使える魔法にはそんな力は無い。

落ち着かず、腕を組みながら部屋の中を歩き回る。その間、何度溜め息を吐いたか分からない。

リザードも俺と同じ気持ちだったのだろう。

“『地』の子、どんな顔してるのかな”

大き過ぎる独り言を呟く。

“やっぱり、カノンに似てるのかな”

そんな事を言われては、どうしても『地』の子の顔を想像してしまっ

大きく丸い目に、緑色の瞳 いや、まだ緑色にはなってはいないか。それに、通った鼻筋に小さな口。美人と言うよりは可愛らしい顔立ちだ。髪は長いのだろうか。それとも短いのだろうか。

数時間後に迫った再会の瞬間に思いを馳せ、ぼんやりとしていると、

“……あつ。カイルが来る”

というリザードの言葉通り、慌ただしい足音が聞こえてきたのだ。次の瞬間、ドアが大きく開け放たれた。

「ラウド様！ お茶をお持ちしましたよ！」

湯気の立ち上るカップを乗せた盆を手にし、カイルはテーブルへと近付いていく。そこへ辿り着くと、中身が零れるのではないかという程の勢いでカップをテーブルの上へ置いた。小気味の良い音

が響く。

一応、カイルはカップの周辺を確認すると、すぐさまこちらを振り向いた。

「どうせ、落ち着かないのでしょうか？」

俺の顔を見てにっこりと笑う。

「うん。ありがとう」

恐らく、カイルは気を遣ってくれているのだろう。と素直に感謝し、そこへと近付いてカップに手を伸ばした。

ハーブの良い香りと、砂糖の甘い香りが鼻をくすぐる。

だが。

口を付けた途端、甘美が衝撃へと姿を変えた。

「……熱っ！」

沸騰したお湯でも入れたのだろうか。僅かにお茶を口に含んだだけで舌を火傷してしまった。

顔をしかめながら舌を出す俺を見て、カイルは慌てふためく。

「だっ、大丈夫ですかっ?! すぐに水をお持ちしますからっ！」

「そんな事しなくて良いよ! 自分で何とかなるから」

大急ぎでドアに向かおうとするカイルを引き止め、その腕を掴んだ。

俺が魔法を使えるという事を忘れてはいないだろうか。それに火傷を冷やすのなら、水よりも氷の方が良い。

早速空いている片手で飴玉程の氷を出すと、口の中へと放り込んだ。冷気が舌に心地良く染み入る。

「すみません！ お茶を入れる時に、つい、ぼんやりしてしまいました……」

「ぼんやりって……」

いくらぼんやりしていたからと言って、ここまで熱くなったお湯に気付かないものだろうか。顔を赤く染め、うなだれるカイルに呆れてしまった。

それでも少しは感謝しなくてはいけないだろう。この間だけは、時間が早く過ぎ去ってくれたのだから。

「早く、逢いたいな……」

そんな事を考えたせいで、押さえ切れない思いが溢れてしまった。カイルからは謝罪の表情が薄れ、笑みが広がっていく。

「行ってみますか？」

言いながら、俺の顔を覗き込む。

「もしかしたら、先に『火』と『風』のお二人が来ているかもしれませんか？」

「うん、そうだね」

アレクとフレアが先に会議室へ来ている可能性は限り無くゼロに近い。前回集まった時は偶然、俺が最後だったが。それでも、此処に居るよりは気が楽だろう。とカイルの意見に従う事にした。

いつものように、扉が目の前に立ち塞がる。昨日までは、この扉を見る度に憂鬱な気分になっていたのだが、今は希望に胸が膨んでいる。

百年前は俺がこの扉を開けると、眩い程の日の光を浴びた彼女が佇んでいたのだ。その瞬間のときめきが今になって甦ってくる。期待せずにはいられない。

汗ばむ手を伸ばし、ゆっくりと扉を押し開ける。隙間から光が溢れ出す。

だが、

「やっぱり、居ない……か」

予想通り、そこには誰も居なかった。『地』の子どころか、アレクやフレアまでも。

「はあ……」と大きな溜め息を吐き、落胆を露にした。

黙って一人で座っている事も出来ず、会議室の中を歩き回ってみる。それでも気が紛れる訳も無く、緊張は高まっていった。

そんな事をしながら、どれ程の時間が過ぎたのだろう。ふと扉のある方向から、誰かの視線を感じた気がしたのだ。

勿論、扉が開けばすぐに気付く。必ず錆びた蝶番が軋む音が響くからだ。

しかし、それらしき音は何も聞こえなかった。この部屋に俺以外

の誰かが居る筈も無い。

不審を抱きながら、恐る恐る視線を移動していくと、そこには。

「誰も居ない……」

やはり、ただの勘違いだったのだろうか。と首を傾げてはみるものの、答えが出てくる筈も無い。

たった一つ浮かび上がった可能性を自分の中から追い出し、気のせいだ。と片付ける。

そんな時、今度こそ確かに扉が開いたのだ。

「……おっ！ やっぱ、今日は早いなー！」

「いよいよだものね」

アレクとフレアが同時に顔を覗かせる。

いつもの事だ。どうせ会議が始まる前に、二人で何かしているのだろう。別にそれを責める気は無いが、ただ、

「『今日は』じゃなくて『今日も』じゃんー！」

俺がいつも遅刻している。と取られる発言は止めて欲しい。

しかしそんな俺に、アレクは目を吊り上げる。

「オマエ、前、遅かっただろ！ 反省しろー！」

しかも俺を指差して声を荒げる。

たった一回遅れただけで、何故、此処まで言われなくてはいけないのだろうか。

「反省しろって……待たせた回数、どっちが多いと思ってるのさっ
！」

「オマエだろっ？」

嫌味に薄ら笑うアレクのたった一言で、俺の怒りに火が付いた。

「数も数えられないの?! ホント、アレクってバカだよね！」

「何ー!?!」

毎回遅刻するのは明らかにアレクたちの方だ。それに今日に至っ
ては、もう太陽が真上に来ている。よくそんな事が言えるものだ。

言い争う俺たちを見て、フレアは大袈裟に溜め息を吐いてみせる。

「もう、止めてよ。喧嘩してる間に『地』の子が来たらどうするの
よ」

そんな事を言われては黙らない訳にもいかない。仕方無く、口を
開く事を止めた。

まあ、アレクを睨み付けている状態なのには変わらないのだが。

反省する気配をみせもせず、アレクは自分の椅子へと近付く。フ
レアもその後を追った。

一言文句を言ってやりたくなかったが、言っても無駄だろう。また
フレアに呆れられるだけだ。

俺もこのまま突っ立っているのも間抜けだろう。と椅子に近付き、
手を伸ばした。

ところが、椅子に座る直接で又しても扉が開いたのだ。一体、何だろうか。と不機嫌なまま視線を移動させる。その瞬間に心臓は飛び上がり、顔は熱を上げた。

「あの……」

フレアのお陰で静まり返った会議室に鈴の音のような可愛らしい声が響く。その声を発した人物の額には確かに緑色の魔導石が付いている。待望の『地』の子だ。

俺が想像していた通りの子だった。

焦茶色の髪は胸まで届き、艶やかに流れている。髪と同じ色の円らな瞳は緊張のせいか僅かに揺れる。頬にも赤みが差す。

まだあどけなさが残るが、カノンに良く似ている。

やっと、やっと逢えたのだ。溢れそうになる涙を必死に堪える。扉の前に佇む子に釘付けになり、反応する事も出来なかった。それはアレクとフレアも同じだったのだろう。

「……おっ！ オマエが『地』のヤツだな！」

「初めまして。よろしくね」

二人が返事を返した時には、大分時間が経っていたように感じられた。

しかし、二人の事をとやかくは言えないだろう。時間が経っていても、俺はそんな簡単な返事をする事さえ出来なかったのだから。

一通り部屋の中を見回すと、『地』の子はおどおどしながら小さくお辞儀をした。

「よろしく願います……」

震える声を振り絞り、益々頬を赤く染める彼女の健気な姿がとても可愛らしい。それでいて、お辞儀をした拍子にはらりと零れた髪を掻き揚げる仕草は上品だ。

「こつちにいらっしやい？」

一向に扉の前に立ち尽くしたままの彼女に、フレアが手招きする。彼女はフレアを見詰めたままで一度片手を口に当てたが、徐々に警戒心は薄れてきているようだ。ゆっくりとだが、こちらに近付いて俺の隣りの椅子に手を伸ばす。

彼女が居る側の右半身が妙に緊張している。彼女が座るよりもほんの少し早く椅子へ腰掛けたが、その動作はぎこちなかっただろう。恐縮しているのか、彼女は俯いてしまった。その愛らしい顔から目が離せない。

俺の心情には似つかわしくないアレクの声が会議室に響く。

「おつ！ 名前が分かんねーと不便だよなー！ オレは『風』のアレクだ。んで、オレの隣りに居るのが『火』のフレア。最後に、オマエの隣りに居るのが『水』のラウドだ。まあ、名前なんかすぐに覚えられるだろーけどよー！」

いつもの嫌味な笑顔とは違い、アレクはにっこりと笑っている。どうしても俺には気持ち悪く見えてしまうが。

まあそれは良いとして、彼女の事を『オマエ』呼ばわりするのは許せない。しかも何故、俺の紹介が最後なのだろうか。

やはり、アレクはまるで分かっていない。

堪らず口を開いた。

「……さっきからさ。オマエって失礼じゃない？ 初めて会う子なのに」

咄嗟に出てきた文句だ。だが口にした途端、後悔してしまった。自分で言った言葉に胸が痛む。俺の中では『初めて会う子』なんかではない。

そんな心中を他の三人に悟られないよう、必死に平常を保つ。

「だってよー。コイツの名前知らねーし」

「そんなの、聞けば良いじゃない」

はつきり言って、アレクとフレアの会話は上の空だ。しかし、何故だろう。

「えっと……私はミュです」

彼女 ミュの声だけは、しっかりと俺の心に響く。自然と笑みが零れる。

「ミュか……。あつ！ 敬語じゃなくても良いよ！ ねっ？」

変わった名前だ。異世界から来たのだから仕方無いか。などと考えながら、アレクとフレアにも確認してみる。答えは分かっているが、一応、だ。

「おう！ 当たり前だ！」

「そうよ。長い付き合いになるんですもの」

二人とも、普段以上の笑顔だ。そんな俺たちに、ミュモ大きく頷いてくれた。

彼女の仕草一つ一つが眩しく輝いて見える。

ところが、折角和やかになった雰囲気を持ち壊すかのように、アレクは話題を変えた。

「よし！ ミュモ馴染んできたみてーだし！ 早速本題にいくぞ！」

腕を組み、嫌味に笑ういつもの表情が俺に緊張感を与える。

本題というのは、恐らく前回の会議でアレクが言いそびれてしまった内容だろう。嫌な予感が当たらないよう祈るばかりだ。

あの先程感じた視線がこのまま勘違いで終わってくれていれば、どれ程良かっただろう。

アレクは交互にフレアと俺の顔を確認し、思い切ったように息を吸い込む。

「最近、何か感じる事ねーか？」

言われた瞬間、心臓が大きく飛び跳ねた。

ひたすら否定し続けてきたものを突然、目の前に突き付けられたのだ。動揺せずにはいられない。

俯き、拳を握り締める。

「ええと……。あたしは、魔法のコントロールが少しだけ難しくなっただけかしら」

フレアが答えているのに、俺だけ答えない訳にもいかないだろう。黙っていれば、後でアレクに何をされるか分からない。

「俺は、何て言うか……たまに、近くに気配を感じる時がある」

言い終わるや否や、唇を噛み締めた。

重たくなった雰囲気、アレクも気付いたのだろう。小さく息を吐き、ほんの少し言い吃る。

「ああ、ミユはまだ分かんねーよな。実は、オレも変な気配を感じてんだ。これってよー、『アイツ』だと思わねーか?!」

信じたくもない内容に思わず顔を上げた。

『アイツ』とは、もしか黒の魔導師の事を言っているのだろうか。そんな事がある筈が無い。いや、あつてはならない。

フレアが何か叫んでいるが、それも俺の耳にはほとんど届いていない。

百年前の光景がありありと甦ってくる。

透明な結晶に覆われた不気味な笑顔、力無く横たわるカノンの身体、彼女の血で濡れた自分の手と身体

思い出したくもないのに、何故、こんなにも鮮明に覚えているのだろうか。頭が狂いそうだ。

無意識のうちに、テーブルに思い切り両手を突いて立ち上がった。いた。

「そんな事ある訳無いよ！ それじゃあ、何のために……！」

何のために、カノンが死んだのか分からない。

我を忘れ、叫んでしまった。

すぐに自分を取り戻したが、もう遅い。会議室はしんと静まり返っている。

思わず、隣りに座っているミユの顔に目がいった。彼女は不思議そうに俺を見詰めるばかりだ。何も覚えていないのだから、当然の反応だろう。

何故、俺は覚えているのだろうか。こんなにも辛くて、苦しい思いを背負い続けなければならぬ意味はあるのだろうか。

溢れる感情をどうする事も出来ず、頭を抱えて座るしかなかった。

「気持ちは分かるけどよー、実際、オレらの身に何かが起こってんじゃないか。これしか考えらんねーよ」

受け入れるしかない事くらい分かっている。分かってはいるが、どうしても無理なのだ。

百年前、俺たちが命懸けで戦った事は無意味だったのだろうか。

カノンが命を落とした事も、全て無意味だったのだろうか。

俺の心に悔しさと憎しみが満ちている。

しばらく頭を抱えたまま、顔を上げる事が出来ずにいた。そうしている間にどれ程の時間が流れたのだろうか。ミユはアリアに何も教えて貰っていなかったのか、アレクが百年前に起きた出来事の説明を始めたのだ。

俺がこんな状態になっているにも関わらず、何故、傷を抉るような話を聞かなくてはならないのだろうか。耳を塞ぎたくなっただが、瞼を思い切り瞑って必死に耐えた。

とそんな時だった。

「黒の魔導師は放っておくの!？」

突如として放たれたミュの声に瞼が開き、肩が震える。

もう二度と彼女の口からその言葉は聞きたくはなかった。言わせたくはなかった。それなのに。

ミュに視線を向けると、彼女は初めて見た時の表情からは想像出来ない程、真剣にアレクを見詰めていた。

無知であるが故に、彼女は真剣になれるのだろう。過去に自分を殺めた相手だと知ればどうなる事か。胸が痛んで仕方が無い。

だが、アレクは決定的な言葉を放つ。

「勿論放っておく訳ねーよ！ただ、アイツが力を取り戻すまでには時間がある。それまでに、オレらがオマエに魔法を使えるようにさせてやる」

魔法を使えるようにする。それは過去の記憶を取り戻す、という事でもある。

昨日までは、あんなにカノンの事を思い出して欲しかったのに。黒の魔導師が復活したかもしれない。と知った今、それが不安で堪らない。

彼女の精神に及ぼす影響は計り知れない。それに彼女が魔法を手にする事で、再び黒の魔導師に狙われるかもしれないのだ。

だが、そうとも言っていない。ミュが魔法を手に入れなくては、少なからずスティアに悪影響が出るのだ。

魔導師がいない間は王がその代わりをしている。が、魔導石が他の者に渡ってしまえば代わりなど出来ない。

このままでは世界のバランスが崩れてしまう。

「そうよね。それしか無いわよね」

「うん。やるしか無いよ……」

やるしか無い。そう納得させる術しか持たない自分自身に腹が立つ。

暗い雰囲気を通ち切るかのように、アレクは口元を吊り上げて勢い良く立ち上がった。

「よし！ じゃあ決まりだなー！ 出発は明後日だ！ オマエらも色々準備があるだろーし、ゆっくり休めるのも最後かもしれねーしな。んで、明後日の集合は此処だ。解散！」

一方的に話を切り上げ、満足そうに目を細める。対して俺はきつく拳を握って口を結んだ。

あまり間を置かず、頃合を見計らったかのように扉が開く。四人の使い魔も会議を終え、この部屋へ入ってきたのだ。

一度大きく溜め息を吐き、ゆっくりと立ち上がる。憂鬱な気分を引き摺りながら、扉の傍で佇むカイルたちの元へと歩み寄った。後からアレクとフレアも付いてくる。

今朝とは全く違う俺の様子から事態を把握したのだろう。カイルも表情を曇らせ、俺たちの顔を見比べる。

「やはり、皆様も同じ結論に辿り着いたんですね」

溜め息を洩らしながら肩を落とす。という事は、使い魔たちの間でも『黒の魔導師』という言葉が出たのだろう。もう、疑う余地す

ら残されていないようだ。

いつの間にか俺の一步手前に来ていたアレクがふと視線を外す。その行き先はミュだった。

先程までは嫌味に吊り上がっていた目が、今は慈しみに満ちている。それは勿論、仲間としての、だ。心に広がる不安を彼女には見せまいとしていたのだろう。

束ね切れていない長い前髪を掻き上げ、静かに口を開く。

「作戦会議しねーとな……っと、その前に」

言い終わった途端、俺に顔を向けて再びにやりと笑った。何をする気なのだろうか。と俺も臨戦体勢に入る。

「オマエ、ミュとほとんど喋ってねーだろ」

「えっ？」

言い終わると、身構える俺の肩を思い切り平手打ちしたのだ。衝撃で身体はよろめき、叩かれた肩には鈍痛が残る。

「痛っ！ 何するのさっ！」

「オレらは部屋の外で待つてやるからよー、話してこい！」

「えっ?! ちょっと」

咄嗟に手を伸ばしたが間に合わなかった。アレクの肩を掠り、虚しく宙を掴む。

フレアも二人の使い魔も、アレクに従って出て行ってしまった。直前にはフレアなんて、にっこりと笑って俺にウインクまでしてみ

せた程だ。

扉の動く鈍い音がイヤに耳に残る。

いきなり二人きりに　いや、カイルとアリアも居るから、二人きりではないか。だとしても、こんな状況に置かれるなんて思ってもいなかった。顔は一気に熱を帯び、鼓動は速度を上げる。

一体、何を話せば良いのだろうか。カノンの事を全く覚えていない彼女と。異世界での話を聞けば良いのだろうか。それとも、趣味の話でもすれば良いのだろうか。

俺がひたすら悩んでいる間も事態は進んでいく。

「ちょっと待って！　私、分からない事いっぱいなんだけど……！」

「それは、帰ってからでもお話出来ますから」

アリアが混乱するミュを宥め、今にも魔法を使おうとしていた。

このままでは二人ともエメラルドへと帰ってしまう。アレクの思い付きだと言っても、折角の機会を逃すなんてあまりに勿体ない。

「……ミュっ！」

勢い余って声を掛た。が、その先が続かない。

口ごもる俺に、彼女は首を傾げる。その仕草がとても可愛らしい。と見惚れている場合ではない。アリアを待たせているのだ。

「また明後日ね！」

咄嗟に思い付いた言葉がこれだけだった。

「うん……」

そんな俺に、彼女は目を丸くして小さく頷く。
結局、時折俺を気にしながらアリアと共に光に包まれていくミュ
を笑顔で見送る事しか出来なかった。

何故、俺はこんなにも腑甲斐ないのだろうか。

「オマエ、そりゃねーだろ……」

彼女が消え去った瞬間、頭を抱えてしゃがみ込む俺に、追い討ち
を掛けるように言葉を浴びせる。扉から顔を覗かせているであろう
アレクの姿を確認する事すら億劫だ。

「アレクのせいだ……」

「ああっ?!」

あのまま三人で彼女を見送っていれば、こんな事にはならなかつ
たかもしれないのに。しかも、

「ミュに、変な人だって思われたかもしれないじゃん……」

「いや、ソレはオマエのせいだろ！」

彼女にとっては、ほとんど知りもしない人物から突然声を掛けら
れたのと同じだ。あの時の俺の行動は不審人物と取られても仕方が

無い。

もし、このまま嫌われてしまったら 俺の人生は終わりだ。
潤み始めた目を擦り、大きく溜め息を吐いてみる。それでも落ち込んだ気分は元に戻らない。

と細く息を吐く音が頭上から聞こえてきた。

「ラウドの気持ちは分からなくもないけど……作戦会議するんでしょ？ さっさと終わらせましょう？」

恐らく、フレアはいつもの調子で俺を見下ろしているのだろう。最高の出逢いの場になる筈が、今までの人生で最悪の日になってしまった。それなのに、まだ話し合いをしなくてはいけないのだろうか。

ところが、俺のそんな気持ちを顧みなかったのだろう。未だにしやがみ込む俺の腕を強く握り、力尽くで椅子まで引つ張ろうとする人物が居たのだ。

「ラウド様、しゃきつとして下さい！ それでは余計、ミュ様に嫌われてしまいますよ！」

カイルだ。

鬱陶しいが、その手を振り払う元気も無く、されるがままに引き摺られた。

カイルは何とか俺を椅子に座らせ、自身も隣りに腰を下ろす。勿論、ミュとは反対側の席だ。そんな俺たちに呆れつつも、残る四人も席に着いた。

俺を取り残し、五人は話を進めていく。

何故、今になって黒の魔導師が現れたのか。だとか、また黒の魔

導師を倒すための羽根を取りに行かなくてはいけない。だとか、多分そんな話をしているのだと思う。

こんなにも曖昧なのは、勿論そんな事を考えられる程の余裕が無いからだ。まあ、俺が話し合いに参加したとしても、俺の意見を無視してアレクが勝手に物事を決めていただろう。

一刻も早く、こんな会議が終わる事を願うばかりだ。

「おい、ラウド。一番しつかりしなきゃいけねーのは、オマエなんだぞ？ 氣いしつかり持てよ」

俯いたまま目を伏せていると、突然アレクに話を振られてしまった。虚ろに顔を上げてみると、俺に視線が集中する。

「分かってるよ……」

適当に相槌を打ち、再び視線を落とす。すると、大きく溜め息を吐く音が聞こえてきた。しかもそれは一人のものではなく、数人のものだ。

そんなに呆れるのならば、一度俺の立場に立って欲しい。こんな態度を取る事なんて出来ない筈だ。

心の中で文句を言ってみるが、相手に通じる訳も無い。溜め息混じりで会話が再開する。

「……カイル、コイツを頼んだぞ。何しでかすか分かんねーからな」

「当たり前ですよ！ それが私の仕事ですから！」

どうやら会議は終わったらしい。

カイルは勢い良く立ち上がると俺の肩を揺さぶった。

「ラウド様、帰りますよ！ ワープ出来ますか？」

「うん……」

細々と返事をし、椅子から立ち上がりもせず魔法を使う。部屋から消える瞬間、また溜め息の漏れる音が聞こえた。

サファイアに着くとすぐさま近くの壁まで這っていき、そこへと凭れ掛かった。

感情がもつれ、自分でもどうすれば良いのかが分からない。頭を抱えて唸り声を上げるばかりだ。

俺がこうなつては手も付けられない事をカイルは知っている。

「夕飯が出来たらお持ちしますからね。きちんと食べて下さいよ」

静かにそれだけを言うと部屋から出ていってしまった。その声も、ほとんど俺には届いていないのだが。

ミュに変人だと思われたかもしれないという不安は取り敢えず置いておこう。それを除いても、頭の中はまとまらない。

彼女のために出来る事は何だろうか。見守り続けるだけならば、百年前と何も変わらない。それだけでは足りない。

とは言っても、良い案が思い付く訳でもなく、時間だけが無駄に過ぎていった。

夕飯が運ばれてくればフォークを片手に溜め息を吐き、寝ると言われれば布団の中で眉をしかめる。翌日も同じような状態だ。

時たまりザードが話し掛けてきたが、何を言っていたのか覚えていない。恐らく、励ましていたか謝っていたのだろう。大した事で

はない。

ひたすら悩み続けたものの、結論が出る筈も無かった。あまりにも大き過ぎる問題だ。

ただ、決意は固まった。この先どんな未来が待っていていようとも、彼女を守れるのは俺だけだ。

今度こそ、彼女を守り抜いてみせる。そして幸せを掴み取るのだ。心に誓い、胸元で輝く指輪を握り締めた。

第4章 始まりの疾風

当然のように、出発前夜はほとんど眠れなかった。これからしばらくの間はミュと一緒に居られるという期待と、未来に対する不安が入り交じる。

ベッドの中で重い瞼をこじ開け、大きく溜め息を吐いた。考えても仕方が無い。結論は出ないのだ。そう自分に言い聞かせてみるが、頭は勝手に働いてしまう。

もう、黙って此処に止どまっではいられない。

青色の布団を身体から剥がしてベッドから抜け出る。そのまま移動し、一気に布団と同色のカーテンを開けた。

曇る窓越しに薄紫色の光が差し、それが目に飛び込む。まだ、陽も昇っていなかったのだ。

そう言えばカーテンを開ける前から、朝にしては部屋の中が薄暗かった。それにも気付かない程、俺の感覚は麻痺しているらしい。

気分転換も兼ねて、段々と空の色が変化していく中、シャワーを浴びて着替えも済ませた。これで、いつでもダイヤへ行ける。

“ラウドなら大丈夫だから。俺みたいな失敗はしない”

そつとカノンの指輪に触れた時、リザードの声が聞こえた。無意識のうちに取った行動が、その感情を動かしたらしい。

そつだと良いけれど。そんな風に言ってしまったが、出来なかった。言ってしまったら、リザードの想いを踏みにじる事になる。

服の内側に指輪をしまいながら無言で頷いた。

そうこうしている間に空は白み、雪化粧を纏う街並みがあらわに

なっていた。踵を返して窓に背を向ける。

「カイル！ 行ってくるから！」

ドアに向かって叫ぶと、いつもの足音が響き始めた。
そして、

「えっ?! 早過ぎませんか?!」

開け放たれたドアの前にカイルがへたり込む。俺を見上げる顔は
疲れのせいで歪んでいる。

「うーん、ちょっと早いけど、此処に居るよりは良いから」

「でも、まだ朝ご飯も食べていませんよ?!」

言われて初めて気付いた。

今朝は空腹を全く感じていなかったのだ。だから、もし朝食を運
ばれてきたとしても殆ど手を付けられないだろう。

カイルを振り切り、ダイヤに行くと口を開き掛ける。それなのに。

「その様子では、どうせ言っても聞かないのでしょうか? それなら
……」

言いながら、いつの間に用意したのか、カイルが背後からパンを
取り出したのだ。それを俺の手に押し付ける。

「これ、ダイヤで食べて下さい！」

俺を真剣に見詰め、しゃがみながら掴んだ手を放そうとしない。

うん。と言つ他に無いだろう。

「ありがとう。貰つてくよ」

笑顔を作り答えると、カイルもにっこりと笑う。パンを俺の手の中に残し、束縛も解かれる。

「じゃ、行つてくるから」

「はい！ 気を付けて下さいね！」

会話が終わるや否や、カイルから顔を背けて気付かれない程度に溜め息を吐く。すぐさま此処を離れた。

今日は先に誰も来ていないのは分かり切っている。躊躇う事無く、扉を押し開けた。降り注ぐ朝日が俺の視界を奪う。

腕でひさしを作り、間近の窓際に立った。無造作にパンを口へと放り込む。

どんな顔をしてミュと会えば良いのだろうか。笑顔を維持する事は出来るのだろうか。未だに悩みは尽きない。

このままでは駄目だ。余計に気分が落ち込んでしまう。そう思い、自分で飲み物を作る事にした。パンを食べたせいで喉も渴いていたから丁度良い。

早速、会議室の近くにある厨房へと移動し、レテイの粉と砂糖をカップに入れる。因みに『レテイ』というのは、赤い色をしたほろ苦い飲み物だ。ミルクと砂糖を加えると甘いお菓子のような味へと変わる。

湯気の立ち上ぼるカップを手に、今来た道を引き返す。すぐさま椅子に腰を下ろして頼杖を付いた。カップを片手に、大きな溜め息も吐く。

こうしていても気が紛れる事は無い。俺の頭の中は、回転して渦巻くレティのようだ。

余程の時間が過ぎ去ったのだろう。物思いにふける間にレティが冷め切ってしまった。それを一気に飲み干す。同時に、手に掛かる重みが減少する。そちらに自然と目がいった。

カップを厨房に戻さなくてはいけないだろうか。此処に置きっ放しにしてアレクに怒鳴られるのも御免だ。

嫌々椅子から立ち上がり、再び厨房を目指す。

しかし、この行動が俺の心に悪影響を与える事になってしまうのだ。

人の気配にも気付かずに、隙間の空いたドアを開ける。

見てはいけないモノを見てしまった。

あの二人がいちゃついていたのだ。アレクがフレアの口の中へ飴玉を押し込めている。

一体、何を考えているのだろうか。一昨日の朝とは状況が違う。

こんなにも大変な時期に、こんな場所でする事ではない。するなら、せめて自分たちの部屋でやって欲しい。

此処に何をしに来たのかも忘れて落としかけたカップを持ち直し、ドアを閉める事もせずに引き返した。

二人の幸せをまざまざと見せ付けられたかのようにだ。悔しさが沸き起こってくる。

怒りは会議室へと戻っても収まらない。腕を組みながら、テーブルの周りを歩き回る。恐らく、鬼のような形相になっているのだろ

う。

俺に覗かれた事など露ほども知らず、当事者たちが姿を現した。あれから、それ程時間は経っていない。

「おっ！ 居るなー！」

「おはよう」

「遅いつ！」

いつも通りにのほほんと挨拶して退ける二人に、つい怒鳴ってしまった。突然の出来事に、俺を見る目は丸くなる。

「おおっ？！ 今日は早いだろ！」

「何処がっ？！」

怒りを制御出来ない。それが言葉に、声に表れている。訳が分からない。とても言いたそうにアレクの目は吊り上がり、フレアの眉はしかめられた。

「ラウド、何かあった？」

「……別に」

こんなの、八つ当たりだという事くらい分かっている。二人に非は無い。

顔を背けて口をつぐむ俺に、フレアは溜め息を吐く。

「取り敢えず、落ち着いて？ ミユも、もうそろそろ来る頃だわ」

慰めの言葉を掛けるフレアの後ろで、アレクは騒がしい足音を立
る。そのまま自分の席に腰を下ろしたのだらう。椅子の引き摺る音
と、そこに体重が掛かる音が響く。

ミユの名前を出されては従わない訳にもいかない。痛い程の視線
に耐え、空のカップが置かれた自分の席へと座る。顔を上げると予
想通り、正面には俺を睨み付ける黄色の瞳があった。

その目付きが癪に障る。

「何さっ」

「オマエ、何怒ってんだっ？」

同じように睨み返す俺に、アレクは不満を隠そうとはしない。テ
ーブルに肘を付き、一層目を細める。

「さっき言ったじゃん!」

「ああっ?!」

「遅刻ばかりしてさ! 今日なんて、大変になるの分かってるじ
ゃん! それなのに、何考えてるのさっ!」

先程のフレアの忠告に反し、更に怒りをぶつけてしまった。拳に
力が入り、わなわなと震える。

一向に言い争いを止めない俺たちに、フレアはアレクの隣りで頭
を抱えた。俺が叫んでいる間に席へと移動したのだらう。

とその時、不意に扉が開いたのだ。けたたましい音を立て、それ

は壁へと激突する。

ミュが到着したのだ。息を切らし、顔をしかめている。余程急いで来たのだろう。

「おはよう！」

自然と口から言葉が溢れ出る。

今までの怒りが嘘のようだ。彼女の顔を見ただけで、こんなにも穏やかな気持ちに変わる。いつの間にか笑みまで零れていた。

しかし、

「ごめんなさいっ！」

ミュは深々と頭を下げる。

彼女を責める者など一人も居ない。だが、ゆっくりと上げられた顔は不安に満ちていた。瞳は揺れ、真っ白なスカートを握り締めている。

そんな彼女に、フレアが声を掛けた。

「あたしも、さっき着いた所だから大丈夫よ」

すると彼女の肩の緊張が解け、手もスカートから離れる。強張っていた表情にも微かに笑みが戻った。

早速、彼女は俺の隣りに腰を降ろす。

昨日のように、又しても右半身だけが痺れてしまう。それでも何とか右側を向き、彼女に笑顔を見せた。視界の隅でフレアも同じように微笑んでいる。

だが、アレクは違った。

「オマエ、オレらが着いた時は怒ってたじゃねーか！ 何でミュに

は怒らねーんだ?!」

乱暴で嫌味な言葉が俺を攻撃する。

ミュの前で何という事を言うのだろうか。先程の腹いせだと予想は付くが、身体は反応してしまっ。

僅かに頬が熱を持ち始める。

「だってさ、ミュはまだ慣れてないし。俺、一時間前に着いたのに……。二人とも遅いよっ!」

こんなもの、ただの言い訳だ。俺がミュを叱れる筈が無い。到着した時間すらも定かではないのだ。恐らく、もっと前に着いていただろう。

本当の事を言えば、更に呆れられてしまっ。そう思って適当にあしらったのだが、それでも、

「オマエが早過ぎんだよ……」

思い切り呆れられてしまった。しかも、ミュにまで。目が合った瞬間、細く小さな溜め息を吐かれた。

こっぴなっぴは自棄だ。

「皆が遅いんだよ! ってか、時間決めなかったアレクが悪いっ!」

「何ー!?!」

彼女の目の前で、いつものように言い争いを始める。俺たちにとっては日常茶飯事なのだが、慣れていないミュにとっては予想もしていなかった事なのだろう。胸の前で手を組み、おろおろとする彼

女の姿が視界の隅に映った。

「はいはい。ミュが困ってるでしょ？ それに、もう出発しなきゃいけないんじゃないかしら？」

彼女に見兼ねてか、フレアが俺とアレクの顔を見比べながら腕を組む。

もっともな事を言っているのだが、それで腹の虫が収まる筈も無い。

「だけども……！」

鋭い目付きのまま、フレアを見詰めた。そんな俺に、溜め息を吐いて気怠そうに片手で頬杖を付いてみせる。

「もう良いでしょ？ ラウドはまだ子供ね」

そう、言い返されてしまった。
しかも。

「ぶっ……」

ちらりとこちらを見たミュが吹き出したのだ。彼女はすぐさま慌てて口を覆ったが、俺に衝撃を与えるには十分だ。

「ミュにまで笑われちゃったわね」

追い討ちを掛けるように、フレアまでもが言いながら笑う。

羞恥心に耐えられずに俯いてみたものの、高熱を発する顔は隠し切れていないだろう。

一昨日に続き、ミュに恥をさらしてしまった。最悪だ。穴があるのなら今すぐに入りたい。

だが、そんな事をしている場合では無かった。アレクの言葉で現実に引き戻される。

「初めに何処から行くんだ？」

「そうね……。風か火じゃない？ 水は後の方が良いんじゃないかしら……。」

そのやり取りに、思わず顔を上げた。フレアが遠慮がちに答えると、今度は二人の視線がこちらを向く。

顔の火照りは多少気になるが、小さく口を開いた。

「俺もそっちの方が良いと思う……。」

塔の中で見る映像はカノンと関わった俺たちの記憶だ。何の免疫も持たない彼女にリザードの記憶を見せられる訳が無い。刺激が強過ぎる。

「そーだな。んじゃ、風から行かねーか？」

「良いわよ。」

『風』という言葉でフレアの表情が和らいだような気がした。

カノンは最期の二日間、ずっとアイリスを恨み続けていたのだ。フレアもそれを気にしているのだろう。

ぼんやりとしながら憂鬱な気分にはまっていると、

「何の話してるの？」

ミュが首を傾げて声を上げたのだ。驚いた拍子に顔が右側を向く。

「あつ！ ごめん！ どの塔から行くかだよ」

彼女への配慮が足りなかった。などと反省し、何とか笑みを作ってみせる。

「どの塔からでも良いんじゃないの？」

「ミュのためにも、先が良い塔と後が良い塔があるんだよ。それに俺たちも、黒の魔導師をまた封印するための道具を取りに行かなくちゃ駄目だからね……」

何故、俺がこんな説明をしているのだろうか。自分自身の心の傷を抉るだけだというのに。

助けを求めるように、ちらりとアレクたちに視線を送ってみたのだが、頭を抱えたまま何も言っはくれなかった。本当に当てにならない。

事情を知らないミュは更に質問を重ねる。

「えっ？ どうして？」

「……それはまだ秘密！」

過去の記憶の事は、覚醒前の魔導師に言ってはならない。と何故か脳内にインプットされているのだが、言うてはいけない、という以前に言える筈が無い。

先程作った笑顔は既に崩れているだろう。

「……よし！ 目的地も決まったし、行くぞ！ オマエら、準備は出来たか?!」

言いながら、アレクは俺にほんの少しだけ申し訳無さそうな顔を作り、立ち上がる。が、準備が出来ている訳が無い。

忘れているのはアレクの方だ。

「あたしたちはすぐに行けるけど、このままじゃ、ミュがワープ出来ないでしょ?」

俺の気持ちを代弁するかのように、フレアが溜め息混じりで呆れ顔を向ける。

ようやく気付いたのか、アレクは顔をしかめた。はっきり言って間抜けだ。

「……あ。そーだったな……」

「ホント、肝心なところ抜けてるよね。アレクって……」

「何ー!?!」

椅子に座り直すと、拳を握り締めて俺を睨み付ける。

いくら怒ってみたところで、悪いのは明らかにアレクだ。

「はいはい。アレクも子供ね」

「うっ……」

フレアの一声で、アレクは縮こまる。

今更だが、また困らせてしまっただろうか。とミユの事が気になる、そちらを見てみた。すると今度は、彼女は口を中途半端に開け、俺たちの顔を見比べていたのだ。

そんなに呆れてしまったのだろうか。全てはアレクが原因だ。

これ以上、彼女に変人だとは思われたくないのに。

「アレクのせいで、ミユ、呆れちゃったじゃん！」

「いや！ オマエのせいだ！」

確実に俺のせいではない。アレクが魔法陣を描き忘れなければ、こんな事にはならなかった。

しかし彼女は、

「二人とも面白いよ〜！」

につこりと笑い、言って退けたのだ。途端、俺の顔が火を吹いた。熱を持っているから、恐らく耳まで真っ赤になっているのだろう。

あまりにも恥ずかしい。

顔を背けて俯いていると、フレアが何かを言った。が、殆ど俺には聞こえていない。どうせ俺たちをけなしていたのだろう。

隣りでミユの表情が曇ったのにも気付かずに、小さな唸り声を上げていた。

と、そんな時だった。

「……ミユ？」

ふと、フレアが心配そうな声を上げたのだ。
彼女に何かあったのだろうか。と不安が脹らみ、ミユの顔を確認してみた。が、本人はきよとんと首を傾げる。

「へっ？」

「何ぼーっとしてんだ？ んじゃ、魔法陣作るから待ってるよー！」

ただ、考え事をしていただけらしい。大ごとでは無くて良かった。
彼女の事をさほど心配せず、アレクは得意気に立ち上がる。杖を出して部屋の隅へと移動すると、風の塔へ行くための魔法陣を描き始めた。

ミユはと言うと、それを物珍しそうに見詰めている。焦茶の瞳は爛々と輝き、歓声を上げそうな程だ。そのころころと変わる表情は見ていて飽きない。

「よし！ 出来たぞ！ オマエはこの魔法陣の中心に立て。そーしたら塔まで行ける。オレらは自分でワープして行くからよー！」

「……へっ？！ ……あつ。うん、分かった」

アレクの説明にも一々驚いている。その反応がとても可愛らしい。不意に愛しさが込み上げてきて彼女の頭に触れなくなったが、何と

か思い止どまった。

恐らく、彼女が居た異世界には魔法は存在しなかったのだろう。そう言えば、俺も初めて魔法を見た時は驚いたものだ。その時、初めてアレクにけなされたのだが。

アレクもフレアも、ミュや俺のように驚いた筈だ。だが、そんな昔の事は忘れてしまったらしい。

「オマエ、さつきから大丈夫か?!」

「うん! 大丈夫!」

「何だか心配ね」

「大丈夫だよ!」

冗談ではなく、かなりミュの事を心配している。

一方、彼女は慌てて両手を振って否定した。俺はというと、その様子を笑顔で見詰めていた。彼女を見ていると、どうしても口元が緩んでしまう。

間を置かずに一気に真面目な表情を作ると、ミュは立ち上がって深呼吸をする。アレクに言われた通り、躊躇う事無く魔法陣の中心に立つと、溢れ出した光の中へと消えていった。

「俺たちも行こう?」

この世界に慣れていない彼女を待たせてはいけない。と二人の返事も聞かずに、その後を追った。

強風が髪をあまり、黄色の砂を巻き上げる。それが目に入りそうになってしまつて片腕で顔を覆つた。何度か此処へは来たが、やはり嫌いだ。

前方にはミユが居る。それ程離れてはいない。

風から庇おうと、すぐさま足を動かす。彼女の肩に触れようとした時、俺たちの目の前に光が現れた。

アレクとフレアが到着したのだ。

「よし！ 全員着いたな！」

アレクは俺たちの姿を確認すると、満足そうに笑う。腰に手を当てて胸まで張っている。かなり偉そうだ。

「んじゃ、アレを取りに行つてくるぞ！ オマエらは此処で待つてろよー！」

言い終わるや否や、アレクはミユを置き去りにし、一人で砂と同じ色をした円錐形の塔へと歩き出した。

もつと彼女に気遣いをして欲しいものだ。と目を細めていると、アレクの足が止まつた。ようやく、ミユがこの場に止どまつている事実気付いたのだらう。

勢い良く長い髪を横へ靡かせて振り返る。

「オマエも付いて来いっ！」

アレクが悪いにも関わらず、あろう事がミユを指差して声を荒げた。

「……………私？」

「当たり前だーっ！」

彼女がぱちくりと瞬きをしながら呆然とする一方で、アレクは顔を真っ赤に染めている。信じられない。

気にしなくても良いよ。そう言おうと思って口を開いた。が、間に合わなかった。彼女はアレクの元へと走って行ってしまったのだ。本当は俺も一緒に付いていきたい。此处でひたすら待ち続けるなんて、心配で胸が張り裂けそうだ。ミュには辛い試練が待っている。だが、それは許されない事だ。たった一人で、それに耐え切らなくてはならないのだから。

妙に脈打つ胸を片手で押さえ付けた。

「……ミュっ！」

気付いた時には、既に叫んでいた。

彼女がくるりと振り返る。

「ミュなら大丈夫だから！ 頑張ってね！」

まるで、自分にも言い聞かせているかのようだ。

心配を隠し切れていない俺に、彼女は笑顔を返してくれる。

「……うん！」

言いながら頷くと、再びアレクと共に歩き出す。そんな彼女の姿を視界から消えるまで、いや、塔の中へと消えていった後も、しばらくの間、入口を見詰め続けていた。

「うーん……」

ミュは今、何をしているのだろうか。塔の中で酷い事をされては
いないだろうか。体調を崩してはいないだろうか。
気になって仕方が無い。

「はあー……」

腕を組み、塔から数十メートル離れたこの場所で右往左往して
みるものの、気が紛れる事は無い。時折強く吹き付ける風も俺には通
じない。

「ラウド、少し落ち着いて?」

今、何か聞こえたような気もするが、どうでも良い。
掛けられた言葉を無視し、また自身の思いの中へと入っていく。
そんな俺に、遂に痺れを切らしたのだろう。

「ラウドっ!」

フレアの叫び声が山頂に響き渡る。山彦でも聞こえてきそうな程
の大声だ。

「……えっ? あっ。うん……」

こうなつては無視し続ける訳にもいかず、曖昧に返事をする。
適当に視線もフレアへと向けた。

俺が心此処にあらざる状態にある事に気付いたのだろう。フレア

は自身が座っているのと同じくらいの大きさの岩を指差す。

「取り敢えず、そこに座って？ うろろろされてたら、気になって駄目だわ」

「うん……」

拒否する理由も見当たらず、言われるがままにそれに従った。再び「はあ……」と大きな溜め息が漏れる。

フレアの顔を見る事無く、頬杖を付きながら塔を見詰めてみる。一向にミュが出てくる気配は感じられない。

「ミュは、きっと大丈夫よ。あの子は強いわ」

恐らく、フレアはにっこりと笑っているのだろう。声だけでそれが伝わってくる。だが、フレアが言っている事は間違っている。

彼女は強くなんかない。強がっているだけだ。百年前、それを嫌という程に思い知らされた。

弱音を吐いてくれても良いのに。何度もそう思ったが、彼女に伝わる事は無かった。結果、あの悲劇を招いてしまったのだ。

フレアは更に続ける。

「アレクも付いてるもの。まだ、一つ目だし……」

アレクが付いているから安心だ。という保証は何処にも無い。魔法陣の先では、彼女はたった一人なのだ。

アレクが居る事で、むしろ不安をあおる。彼女に無理をさせるのではないか。そう、思ってしまう。

しかも、一つ目であろうとなかろうと、大変である事には変わりはない。俺の場合、一つ目だとしても塔の中で倒れたのだ。過去の記憶が相当酷いからなのだろうが、それはミュも同じだ。

フレアに返事もせず、受け流しながら唸り声を上げる。その時、足を引き摺りながら砂地を踏みしめる音が聞こえてきたのだ。塔の入口には小さな人影が見える。

ミュが出てきたのだ。アレクが彼女の肩に腕を回して、その身体を支えている。

表情ははつきりとは見えないが、やはり大丈夫なんかではなかった。居ても立つてもいられずに慌てて地面を蹴る。

「ミュっ！」

アレクなんか任せていられない。俺が傍に居なくては。

近づくにつれはつきりとしてくる可愛らしい顔は汗で濡れ、俯き加減だ。余程辛いのだろう。

「お帰りなさい！」

俺の後ろでフレアも声を掛けるが、そんな呑気な事を言っている場合ではない。

彼女の元へと辿り着くと、すぐさま顔を覗き込んだ。

「大丈夫……？」

大丈夫ではない事は分かっている。それでも聞かすには無理ない。

そんな俺に、彼女は苦笑いを見せる。

「へへ……。ちょっと駄目……」

まさか、弱音を吐くなんて。そんなに体調が思わしくないのだからか。

「休もう！ アレク、ごめん！」

「ああ」

彼女に触れているアレクの手を振り払い、咄嗟にその肩を抱いていた。手近に丁度良い大きさの岩を見つけ、そこへそっと座らせる。手を離しながら、俺もその場へしゃがみ込む。そうしている間も彼女から目を離したりはしない。

ミユはほんのりと頬を赤く染めて俺を見詰め返す。だが、その反応は恋愛感情には結びついていないのだろう。照れているか、体調の悪さからくる発熱か、そのどちらかだ。

自分で出した予想に落ち込みながらも、声に表れてしまわないように気を配る。

「今日はもう戻ろうか？」

あまり無理はさせたくない。それが、たとえ魔法の獲得を遅らせようとも。

目を合わせようと顔を覗き込むと、彼女は俺の視線から逃げるように目を逸らして頭に手を当てる。

確実に俺を避けている。更に、心に衝撃が加わった。

「うん。休めば大丈夫！ 今日、もう一つくらい行けそうだし…
…まだお昼過ぎだよな？」

俺の不安と動揺を余所に、彼女は再び笑顔を作って天を仰いだ。
自然と目がその視線を追う。

確かに太陽は西へ傾き始めたばかりのようだし、此処へ着いてから、それ程時間は経っていない。しかし、そういう問題ではないのだ。

本当ならばゆっくり休養を取らせてあげたい。一方で、言い出したら聞かない性格なのも知っている。

半ば諦めながらも口を開く。

「うん、そうだけど……。ホントに大丈夫？」

「多分、大丈夫だよ！ もし駄目になっちゃったら……ごめんね？」
思っていた通りの答えだ。

「えへへ……」と舌を出しながら笑う彼女に、苦笑いを返す事しか出来なかった。

「そう……。じゃあ、休んで。次の塔に行く魔法陣は作っておくわ」

背後から、呆れ気味の声が投げ掛けられる。振り返ると、アレクの傍で俺たちの様子を見ていたフレアが微笑んでいた。だが、目は笑っていない。むしろ影がある。

哀愁を漂わせながら背を向け、火の塔へ移動するための魔法陣を描いていく。

塔での出来事を思い返しているのだろう。急にミュが無口になってしまった。眉間に皺まで寄せている。

そんな時、

「おい、ラウド。こっちに來い」

アレクが腕を組み、言いながら首で合図を送ってきたのだ。

ミュがこんな状態なのに離れたくはない。一体、何なのだろうか。渋々立ち上がり、アレクの元へと歩を進める。向かい合つと、同じように腕を組んだ。

「何さ」

不満を隠さずに眉をしかめる。

しかし、アレクの表情は真剣そのものだ。

「オマエも分かってるだろ？ 次は『火』だ。フレアとミュの間に何が起きるか分かんねー。問題が起きたら、オレはミュに構ってられなくなる。それだけ断っておこうと思っただけ」

今更、何を言っているのだろうか。アレクがフレアを第一に考えている事くらい分かっている。断るまでもない。

「話、それだけ？」

「ああ、悪かったな」

返答を聞くと、すぐさま踵を返して来た道を引き返した。

アレクの言っている『問題』をあまり重要視していなかったのだ。ただ、ミュの傍に居たい。その思いだけが俺をつき動かす。数時間後、アレクの嫌な予感が当たるとは思ってもいなかった。

引き返す途中でフレアに目を向けると、魔法陣は完成間近だった。地面が淡い赤色の光を放っている。あまり間を置かず声上がる。

「……出来たわ。これで、いつでも行けるわよ」

この時には、既にミュの元へ到着していた。笑顔を作つて膝を折る。

「ミュ。無理しないで、ゆっくり休んで良いからね」

「うん。でも、もう大丈夫だよ〜！」

言いながら、彼女も笑顔を返してくれる。しかし、慎重に立ち上がる姿は心許無い。

倒れはしないだろうか。と咄嗟に手を伸ばした。腕に触れると、彼女の顔がこちらを向く。何処か不思議そうな表情だ。

しっかりと細い腕を両手で掴み、魔法陣の前まで移動する。

「それじゃあ、またミュは魔法陣で移動してね。あつ。ラウド、先に行つてミュを支えてあげて」

「分かってるよ」

言われなくても、そのつもりだった。

無愛想に頷くと、フレアから視線を外してミュを見据える。

「ミュ。すぐ付いて来れる？」

「うん。行けるよ〜！」

少し心配は残るが、彼女の答えを聞くとすぐに火の塔へと向かった。

第5章 灼熱の地

光が消え去った瞬間、熱気が身体を包む。雪国育ちで暑い所が苦手な俺にとつて、この場所は苦痛以外の何物でもない。

陽炎で歪む赤い塔が余計に暑さを増長させる。

吹き出る額の汗を拭っていると、辺りが一瞬明るくなった。ミュが到着したのだ。しかし、前方には何も変化が無い。

後ろだろうか。と振り向いてみると、顔を両手で覆い、崩れるようにしてしゃがみ込む彼女の姿が目映った。

「ミュっ！ 大丈夫?!」

慌てて砂の地面を蹴って手を伸ばす。自分の事なんて構っていない。腰を折ってその顔を覗き込む。が、彼女の手が邪魔をしていて、

表情を窺い知る事は出来ない。

「此处、暑過ぎだよ……」

何とか返事をしてくれたが、声にも元気は無い。

折角、良くなったであろう体調が再び悪化してはいけない。と日陰になりそうな場所を探してみる。

何故、こんなにも植物が少ないのだろうか。辛うじて数本生えている木にも、葉はほとんど付いていない。

だが、文句ばかりを言っても仕方無いだろう。とにかくミュを少しでも涼しい場所で休ませなくては。

「日陰に行こう?」

しっかりと肩を抱き立ち上がらせてはみたが、手を離せば、また崩れてしまいそうだ。

本当なら抱き抱えてしまいたい。しかし、そんな事をしては彼女を動揺させてしまう。

もどかしいが片手を引くに止どまらせ、それ程離れてはいない木陰へと移動する。

腰を下ろすと、すぐ隣りに居る彼女は

「はあ……」と大きな溜め息を吐いた。

「二人とも遅いね……」

彼女は溜め息混じりに小さく呟く。

『二人』というのは勿論、アレクとフレアの事だ。火の塔の周辺が灼熱の砂漠だという事はあの二人も知っている。それなのに、未だに姿を現さない。何を考えているのだろうか。

「ホント、何してるんだろう……」

よりもよつて、体調の優れないミユと暑さに弱い俺を放置して、苛々しながら頭を軽く掻き篦る。

口をへの字に曲げて目を細めたまま、時間だけが無駄に流れていた。

二人が現れたのは、それから数分後の事だ。

「ごめんね。待った……？」

細々と申し訳無さそうなフレアの声に、不機嫌なままで振り返る。なんと、アレクは詫びもせず堂々とこちらに近付いてきたのだ。大股で歩き、手も大袈裟に振っている。

そんな事をされると、余計に苛々してしまう。

「二人とも遅いよ！」

反省した様子を見せるフレアを気にも止めずに言い放った。すると、

「ごめんなさい」

「しょうがねーだろ?!」

フレアの声をかき消し、アレクが開き直ったのだ。

これの何処が仕方無いのだろうか。座ったままで、膝に置いていた拳を握り締める。

「しょうがない!」

「ホントにしょうがなかったんだっ!」

俺たちの事を考えれば、こんな発言は出来ない筈だ。余程、馬鹿なのだろう。

遅れた理由があるのなら言ってみる。そう言おうとしたが、口にする前にフレアの怒号が響き渡った。

「二人とも喧嘩してる場合じゃないでしょ?! 一番大変なのはミユなんだから! あたしはミユと行ってくるけど、喧嘩しないで待

ってるのよ?」

そう言われると肩身が狭くなる。まるで、俺が悪い事をしたかのようだ。

だが、ミュに迷惑を掛けてしまったのは事実だろう。俺はただ、彼女を庇いたかっただけなのに。何だか悲しくなってくる。

「ごめん……」

「分かれば良いのよ。ミュ、行きましよう?」

俯く俺に、フレアは笑顔を見せたりはしない。腹立たしさをあらわにし、強引にミュの手を取る。

段々と遠ざかっていく足音が耳に残る。

「行ってくるね〜!」

途中でミュの声も聞こえてきたが、落ち込んだ気分は元へは戻らなかった。

「はあ……」

つくづく嫌になってくる。自分自身も、この暑さも。

木に凭れたまま溜め息を吐き、溢れ出る汗を拭う。そんな俺を突っ立ったままのアレクが見下ろす。

「オマエ、そんなに落ち込む事ねーだろ」

そう言っている表情は何故か暗い。肩を落とし、猫背気味だ。こつなる原因を作ったのはアレクだと言つのに。

「……何でアレクまで落ち込んでるのさ」

「落ち込んでねーよ」

いや、絶対に落ち込んでいる。

心の中では否定してみるが、口に出す気にはなれなかった。こんなにも暑苦しい場所で、これ以上無駄な言い争いをしたくはない。一向に座ろうとしないアレクに、背凭れになっている木を指差して口を開く。

「取り敢えず、座ったら？」

「あ？ ああ……」

アレクは俺の意見におとなしく従い、同じ木の下へ腰を降ろした。僅かに肩が視界に入る程の距離だ。

時間の経過と共に日陰になっている場所は段々とずれ、俺から遠ざかってしまった。が、移動するのも面倒だ。どうせ、そこもいつかは日向に変わってしまうのだ。

容赦無く、日差しは俺たちを照り付ける。

「……暑い」

暑い。暑過ぎる。この気温は俺の限界を超えている。

耐え切れず、頭上から水を降らせて顔を上げた。喉もからからになっっているから、ついでに口も開ける。冷水が喉を潤す。

「オマエ、ずるいな」

気持ちは良いが、このまま続ければ体力を失ってしまふ。仕方無く、身体の火照りが引いた所で魔法を止めた。途端、水分が蒸発していく。あつという間に、ずぶ濡れになっていた服は渴いていった。

「おい、無視か？」

水の魔法が使えるのは俺の特権だ。そんなに涼みたいのなら、アレクも冷風を送ればいいのに。

恐らく、そんな事は思い付かないだろう。これ以上騒がれたくはないし、仕方無い。

「うおおっ！」

返事もせずに、アレクの頭上から大量の水を降らせてやった。

全く準備が出来ていなかったのだろう。驚いたアレクは大きな奇声を上げた。

流水音が止むと同時に、鋭い視線が突き刺さる。

「オマエ、やるんならやるって言ってからやれよ！」

そうは言うが、こんなにも気分が落ち込み、苛立ってもいるのだ。喋る事すら面倒臭い。

よく、こんな状況で怒鳴れるものだ。と呆れながら、溜め息を吐いてみる。

するど、

「また無視すんのかっ?!」

更に怒ったであろうアレクの横顔が視界の隅に現れたのだ。ぼやけていてはつきりとは分からないが、相当目を吊り上げて睨みを利かせている。

もう、いい加減にして欲しい。

「……うるさい」

「何ー!?!」

何故、自分の事しか考えられないのだろうか。塔の中でミュがどうなっているか分からないと言っのに。俺もかなり辛いけど、彼女の比ではない筈だ。

「アレク、心配じゃないの?」

「ああっ?!」

「ミュの事」

彼女の名前を口にした途端、アレクの鋭い眼差しから開放された。顔が視界から消える。

「……心配に決まってるだろ。ミュだけじゃなくて、フレアもな」

何処か寂しそうな声だ。

アレクも一応は考えてくれていたのか。と感心したが、そんな風に言われると返答に困ってしまう。

口を開けられずにいると、アレクの顔が再びこちらを向いた。

「でもよー、それとこれとは話が違っただろ」

反射的に俺の顔も声の主の方へと動く。

アレクの表情は先程までの恐ろしいものに戻っていた。

「オマエなあ、少しは先輩を敬おうとか思わねーのかつ?!」

「先輩つ?!」

「そっだ!」

何故、此処で歳の問題が出てくるのだろうか。

実際、アレクは俺よりも三つ年上だ。だが、俺がアレクに水をかけた事は勿論、ミュたちの事にも無関係ではないだろうか。

「何で今更つ?! 訳分かんないし!」

「ああつ?! 分かるだろ!」

茹だるような暑さにも負けずに言い返す俺に、アレクは身を乗り出す。左手は地に突いているが、右手はきつく握られている。

「何で自分の都合の良い時だけ、歳持ち出すのさっ! 俺たちには別に関係無いじゃん!」

「いや、関係あるな!」

俺たちには過去からの絆がある。今の俺はアレクやフレアに比べれば経験は浅いのかもれない。が、魂の経験は四人とも対等だ。それでも、オレの勝ちだ。とでも言いたそうにアレクは口を吊り上げる。しかし、そんなものに負ける俺ではない。

「そんな風に思ってるの、アレクだけだよ！」

「何ー！？」

遂に、怒りが一定値に達したのだらう。アレクは睨みを利かせたまま立ち上がり、俺を見下す。その態度が気に食わず、同じように正面に仁王立ちをした。瞬間、俺の胸倉を片手で掴んだのだ。

「何するのさっ！」

「オマエが生意気だからだろ！」

力は思いの外強く、少し息苦しい。抵抗するようにアレクの胸倉も掴んでみたが、力では劣る。その分、瞳に怒りを込めた。

だが、それも長くは続かなかった。ふとした拍子に横を向いたアレクの目が大きく見開かれたのだ。同時に、俺の呼吸も楽になっていく。

自然と俺の目もアレクの視線を辿る。

瞳に映ったものは、

「オマエら……どーしたんだ……？」

拳を握り締めて足速にこちらに近付いてくるフレアと、俯きなが

ら遅れがちにその後を付いてくるミユの姿だった。その表情は暗く沈み、ミユの瞳には涙が溜まっている。それ以上に、フレアの瞼は泣き腫らした時ように赤く変わっていたのだ。

戸惑う俺たちの元へと辿り着くと、ミユとフレアは同時に口を開く。

「私」

「何でもないのよ！ 何でも……。今日はもう、ダイヤに戻りましよう……?」

ミユの言葉を遮って叫ぶフレアの表情は痛々しい。僅かに重く被さる瞼の下で、必死に俺たちを見詰める。胸の前で手を重ね、何となく右手を庇っているようにも感じられた。

その状況に、誰も口を挟めない。掛けるべき言葉が見つからないのだ。

思い悩んでいるうちに、フレアはたった一人で光に包まれて消えてしまった。

アレクが恐れていた事態が起きたのだ。迂闊だった。

とは言っても、たとえ俺が思いを巡らせたとしても、何も出来なかったのだらうが。

「……っああつ！ オレは先に戻るぞ！ ……ミユ、あんま無理すんじゃないぞ?!」

「うん……」

ミユとアレクの会話を聞き、思考を止めて気持ちを切り換える。既に起きてしまったものはどうしようもない。後は俺たちがどう

行動するか、だ。

俺以上に、ミユは衝撃を受けているのだろう。こんな事になってしまった原因を何も知らないのだから。

「わりいな」

アレクは擦れ違いざまに俺の肩を叩き、ミユには聞こえない程度の大きさを囁く。瞬間、すぐ傍で光が発生してアレクの気配が消えた。

瞳を潤ませて俯くミユを取り敢えず、先程座っていた木の下へと移動させた。俺の顔を見る事無く、彼女はゆっくりと腰を降ろして小さな溜め息を吐く。その様子を見届けて、俺も彼女の傍に腰を降ろした。

何と声を掛ければ良いのだろうか。また体調が悪化してはいないか心配でもあるが、それどころでは無いだろう。

空を見上げれば、地平線には薄い橙色の帯が姿を現し始めている。気温は大分下がり、背中がしっとりと汗ばむ程度だ。しかし、いつまでも此処でこうしている訳にもいかない。

傷付けてしまわないように。と配慮しながら、意を決して話し掛ける。

「何が……あつたの……？」

声を発した瞬間にミユがこちらを振り向き、目が合った。

焦茶の瞳は微かに揺れ、口はきつく結ばれている。それを確認出来たところで、再び俯いてしまった。長い睫毛が彼女の下瞼に影を

落とす。

彼女は一度ゆっくりと瞬きをすると、それまで隠していた桃色の唇を震わせながら言葉を紡ぎ出した。

「分かんない……」

「分からない……?」

俺の問い掛けに

「うん」と小さく頷く。

「覚えてないの……。フレアに聞いても、何も教えてくれないし……。でも、あんなの普通じゃないよ。私……。どうしちゃったのかなあ……。」

必死に堪えていたのだろう。彼女の瞳に溜まっていた涙が一気に溢れ出した。両手で顔を覆い、指の間から滴が零れて乾いた黄色の砂を茶色に染め上げる。

恐らく過去の映像を見たせいで、カノンの思いが暴走してしまったのだろう。ミユは何も悪くない。

彼女を慈しむあまり、手が出てしまった。焦茶の髪にそっと触れ、その流れを辿る。

「大丈夫だよ。ミユは大丈夫。それに、フレアなら分かってくれるから」

言いながら、微笑み掛ける。すると彼女は僅かに顔を上げ、俺を見たのだ。途端

「ふえっ……」と声を漏らし、咽び泣く。

この時、初めて意識した。ミュはカノンとは違う。もっと繊細で
儂い心の持ち主だ、と。

守りたい。使命感にも似た感情が俺の心を満たしていく。

どれ程の時間が過ぎていったのだろうか。涙の止まったミュの瞳
は虚ろに宙を眺めている。生気は感じられない。そこに映し出され
た色の変化に気付いて顔を上げる。

先程空を支配していた橙混じりの青は姿を消し、代わりに赤紫が
押し寄せていた。闇が訪れるのも時間の問題だ。

「俺たちも、もう戻ろう？ 明日のためにゆっくり休まなきゃね」

日が沈む前に此処を離れなくては。こんな場所では身体も休まな
いだろう。

彼女の頭を撫でながら、顔を覗き込んでみる。

しかし、

「うん。そうだね……」

彼女の目はこちらを見たものの、未だに虚ろなままだ。

恐らく、ワープが出来る程度には体力は回復している筈だ。が、
精神面には不安が残る。

何とか微笑んでみたものの、きちんと笑えてはいないだろう。

「立てる……？」

「うん……」

ミュはか細い手を地に突いて立ち上がることはするのだが、僅かに上半身が浮き上がるだけだ。

いてもたってもいられずに手を差し出した。

「大丈夫？」

肩を抱き、彼女の身体を支える。

俺が取った行動は、やはり彼女を驚かせてしまったのだろう。こちらを向いた顔は桜色に染まっていた。

その表情がカノンを思い起こさせ、俺の頬も高揚する。

「ワープ出来る？」

何とか気持ちを声に表さないように気を使い、平静を保つ。

ゆっくりと彼女の身体から手を離していく。心許無く足は震えているものの、身体を支える役割は果たしているようだ。

「うーん……」と唸り声を上げると、彼女は静かに瞼を閉じる。すると、淡い光が身体から溢れ出した。ワープをするために魔法を使ったのだ。

「大丈夫みたいだね」

ミュに遅れを取らぬように、俺もこの場を離れた。

瞼を開けた瞬間、重苦しい扉が目飛び込む。右側にはミュの頭部も映る。俯いたまま動こうとしない。

「取り敢えず、中で休もう？ 喉も渴いたでしょ？」

陽炎が現れる程暑い場所に居たのだ。喉が渴いていない筈が無い。俺の声に反応して、ミュも顔を上げる。

「でも、私……」

「大丈夫だよ。きっと、フレアなら部屋で休んでるから」

恐らく、フレアに負い目を感じているのだろう。と笑顔を作って背中を押した。

ミュがいつ戻り、会議室に入るか分からないのだ。アレクが黙って傷付いたフレアを会議室に置いておく訳が無いだろう。そう考えたのだ。

忘れていた。今朝、二人は俺がいつ覗いてもおかしくない厨房でいちゃついていたという事実を。

不安げに恐る恐る手を伸ばし、ミュが扉を押し開ける。すると、

「オマエっ！ さっさと休んでこい！ 明日も塔に行くんだぞ?!」

なんと、部屋の中からアレクの叫び声が響いてきたのだ。慌てた様子でこちらに駆け寄って俺を指差す。

「オマエっ！ ミュを部屋まで送ってこい！」

アレクの後ろには、椅子に座って顔を背けるフレアの姿があった。ミュの瞳には映っていないように祈るばかりだ。

アレクは両手を扉の縁に掛けると、口を吊り上げて嫌味に笑った。

「じゃ、また明日なー！」

鼓膜が破れるのではないかという程の豪快な音を立てて、再び視界を扉が覆い尽くす。

まさか、アレクが此処まで馬鹿だとは思わなかった。頭が痛くなってくる。

「アレク、何なんだよ……」

これでは俺の面目丸潰れだ。扉を睨み付けてはみるものの、この気持ちはアレクには届いていないのだろう。

隣りで佇むミュと一緒に、しばらくの間、微動打に出来なかった。

時間を置いて、何とか気持ちを切替えるために

「ふう……」と溜め息を吐いてみる。

「じゃ、行こっか。此処に居てもしょうがないし」

「うん……」

ミュの返事を聞くと、早速踵を返す。天井の小さなシャンデリアが廊下を照らす中、彼女はほんの少し後ろを付いてくる。その姿を確認しながら、ゆっくりと歩を進めた。

頼り無い手を繋ぎたかったが、先程は肩を抱いただけで驚いてしまったのだ。そんな事をしては、また驚かせてしまうだろう。

あと半分でミュの部屋へ辿り着く。そんな時だった。歩きながら

彼女が隣りに並び、上目遣いで俺を見上げる。

「私、一人で行けるから大丈夫だよ？」

その言葉に足が止る。と同時に、ミュの足も止まった。離れない視線に鼓動が速まる。

「ホントに一人で大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ」

にっこりと微笑んではいるが、瞳には力が宿っている。意見を譲ろうとはしない。

そうは言うのだが、心配で堪らない。部屋に辿り着く前に倒れでもしたら大変だ。

しかし、それ以前に、

「……やっぱり一緒に行くよ。戻ってもまた、アレクに追い返されそうだし。それに、ミュ、部屋の場合分かんないんじゃない？」

今日、初めてミュは自分の部屋へ行くのだ。縦横に伸びる廊下で、同じような茶色のドアが沢山並んでいる中から目的の場所を見つけられる確率は皆無に等しい。

その事実初めて気付いたのだろう。彼女は

「あっ……」と声を上げ、片手で口を覆った。おまけに小さく溜め息を吐き、落胆を露わにする。

「うん……。しょうがないかあ……」

「しょうがないって……」

いくらカノンの事を覚えていないと言っても、『しょうがない』
は無いと思うのだが。

今度は逆に、俺が溜め息を吐いて肩を落とした。

あつという間だ。折角、ミュと二人きりになれたのに。また、あまり話が出来なかった。

何度か廊下を曲がり辿り着いた、突き当たりのドアを指差す。

「此処がミュの部屋だよ」

百年前、カノンが使っていた部屋でもある。戦いの後でアリアが整理をして以来、足を踏み入れた者は居ない。

一度ドアを見やると、ミュは俺に眩い程の笑顔をくれた。

「送ってくれてありがとう」

「うん」

嬉しくて、俺も笑顔を返す。

短いやり取りが終わると、早速彼女はドアを開ける。途端、驚愕の表情に変わった。エメラルドの部屋の造りとこの部屋の造りが同じだという事を全く予想していなかったのだろう。

因みに色の違いはあるものの、俺たち三人の部屋の造りとも一緒である。

ミュは雪のように真っ白な絨毯に、ゆっくりと足を伸ばす。そして、部屋の中を一通り見渡した。確認が終わると、エメラルドグリ

ーンの布団が敷かれたベッドへ直行する。余程疲れたのだろう。しかし、彼女はベッドへ潜り込んだまま俺を見詰めて眠る気配を見せない。

どうかした？ と口を開きかけるが、声を発したのはミユの方が早かった。

「……戻らないの？」

不思議そうに首を傾げて布団の端を掴む。

俺が此処に居るのは、やはり不自然な事なのだろうか。今の彼女にとって、俺はただの仲間ではない。分かってはいるが、何だか寂しくなってくる。

それと同時に、俺の気持ち伝わってしまっただろうか。と恥ずかしさも込み上げてきた。

「……心配だから」

返事をする俺の顔は赤くなっているだろう。

「もう大丈夫だよ？」

しかし、それを特別気にはしなかったようだ。彼女の声の調子は変わらない。

大丈夫だ。と言われても、どうしても不安は消えないのだ。身体も動こうとしない。

「そんなに見られてたら、眠れないよ……」

「……じゃあ、見ないようにする」

呆れに近い声に、彼女へ背を向けた。睡眠妨害をしまつては元も子もない。

あまり間を置かず、寝息が聞こえ始める。振り向いてみると、盛り上がり、ゆっくりと上下する布団が目に入った。取り敢えず、今日はもう大丈夫だろう。ずっと此処に居座る訳にもいかないし、仕方無い。

見えている筈も無いが、そっと彼女に微笑み掛けて踵を返した。

最悪な気分にした物の前に立ち、その先に居る筈の人物に睨みを利かせる。

一言文句を言つてやるう。そう心に決めて重たい扉を押し開けた。一気に視界が広がる。

フレアは瞼を更に腫らして俯いていた。テーブルの上に置かれた右手も赤く腫れているようにも見える。フレアの奥の椅子に腰を降ろしているアレクにも先程感じさせた覇気は無く、その瞳は物悲しい。何やら二人で話をしているようだが、声が小さくてはつきりとは聞き取れない。

そんな表情をされては、文句なんて言えないではないか。心に宿っていた怒りの炎はたちまち消えていった。

「もう、アイツ眠つたかー？」

アレクは扉の前で立ち尽くす俺にちらりと目を向け、適当と思われる口調で話し掛ける。

「うん。今眠つたよ……」

恐らく、フレアの事で頭がいつぱいなのだろう。
咎める気にもなれず、指定席へと歩み寄る。その間もアレクとフ
レアの会話が途切れる事は無い。

「ミュが過去を見れば、こうなる事は分かってたわ。でも、実際に
こうなると……。あたし、ミュとどう接すれば良いのか分からない
……………」

「普段通りで良いさ。そーじゃねーと、ミュが困るだろ？ ミュは
ミュだし、オマエはオマエのままだ。過去を見ようとそれは変わら
ねーだろ」

「……………そうね。あたし、やってみるわ」

前向きな言葉とは裏腹に、フレアの様子は未だ硬いままだ。
タイミングを見計らい、邪魔にならないように椅子を動かして腰
掛ける。

「次は水か……。明日も大変な事になるかな、ミュ……………」

心に残る不安が不意に零れてしまった。
フレアに向けられていた眼差しが俺に移動し、鋭く変わる。

「その分、オマエがしっかりしなきゃダメなんだぞ？」

「分かってるよ。分かってる……………」

言いながら手を組んで固く握り締めた。

一度は会話に参加したものの、それ以降、傍観に徹するしかなかった。フレアの落ち込みは予想以上に激しく、一向に笑みを見せる気配は無い。そんなフレアの肩を抱き、アレクが一生懸命励ましの言葉を囁く。

此处に居ても、俺は邪魔になるだけだ。と思いつき、静かに会議室を抜け出した。

廊下の窓から望める満天の星空が時間の経過を物語る。確実に明日は迫っているのだ。

すつきりとしぬい感情を引き摺りながら部屋に到着すると、自動でほんのりと灯がともる。それを気にする事無く、すぐさまベッドに腰を降ろした。深海の水のように深い青の布団が空気の抜ける音を発する。

「ミユ……」

頭を抱え、そつと目を閉じた。

あの愛くるしい顔が明日もまた苦痛に歪むのだ。しかも、次は俺の記憶のために。

悔やみにも、苛立ちにも似た感情が渦巻く。

“ラウドも少し休んだ方が良いよ”

物思いにふけっていると、リザードが話掛けてきたのだ。

ミユがこんなにも辛い思いをしているのに、俺だけ休める筈が無い。

「でもね……」

“『でもさ』じゃない。そんな事してたら、ラウドまで体調崩すよ？ あの子、守れなくなるじゃん”

それに対して

「はあ……」と大きな溜め息を吐いた。

返す言葉が見つからない。そんな事を言われては従っしかないではないか。

仕方無く、身体をベッドに横たえた。指を弾いて部屋を照らす灯も消す。が、こんな頭が休まる筈も無い。

布団の中で何度溜め息を吐いただろうか。熟睡なんて出来ず、時だけが無情に過ぎていった。

第6章 輝く氷雪

何度、眠れぬ夜を過ごしてきたのだろうか。きちんと睡眠をとっていないにも関わらず、眠気は感じない。ベッドに身体を預けたままで、カーテンを閉めていない窓から日が差し込む時を待ち、瞼を開ける。

高ぶる緊張からか、手の平は汗ばみ、心臓は早鐘を打つ。

このまま横になつていても駄目だ。と部屋に隣接する浴室でシャワーを浴び、真っ白な衣服の袖に手を通した。

何となく窓に歩み寄り、窓ガラスに軽く触れる。

このところ、外は晴天続きだ。明るい未来を暗示しているのであれば良いのだが。眼下の草原には風が吹き、草の波を作り出している。サファイアの城からは決して見る事の出来ない幻想的な光景だ。一時は景色に心を奪われたのだが、またすぐに影は押し寄せてくる。拭い去れない過去がある限り、この不安は消えない。ミュの事を想えば想う程、胸は締め付けられる。

と彼女の名前を思い浮かべた途端、とんでもない事実を思い出したのだ。

ミュはまだ、ダイヤの間取りを殆ど知らない。無闇に出歩けば迷子になってしまう。ワープも真面に使えない頃、エメラルドの塔を抜け出したくらいだ。彼女の場合、それは冗談では済まされない。

まだ部屋に留まっていてくれ。祈りながら、胸元で揺れるカノンの指輪を内側にしまつてドアノブを引いた。

誰も居ない、静まり返った廊下を駆け抜ける。ミュの部屋は俺の

部屋からそれ程離れてはいないが、慌てたせいでほんの少し息が上
がってしまった。乱れがちになる呼吸を整えつつ耳を澄ます。

どうやら、ミユは部屋から出ていないようだ。中から小さな物音
がする。

間に合った。と安心し、ほっと胸を撫で下ろした。が、慌てるあ
まり、これから先の事を何も考えていなかったのだ。

ミユにどうやって接触すれば良いのだろうか。

ノックをして、部屋の中へ入ってしまうのが妥当なのだろう。し
かし、相手は女の子だ。アレクとは訳が違う。もし着替えの最中だ
ったりすれば、とんでもない事態になる。

となれば、此处で待ち続けるのが良いのだろうか。いや、離れた
所で待機して、彼女が部屋から出て来たところで偶然を装い話し掛
ければ良いのだろうか。

ドアの傍に寄り掛かり、腕組みをしながら思案する。

そんな時、不意にドアが開いたのだ。ミユがその隙間から頭だけ
を出し、まずは俺が居ない方向を確認する。じっと廊下の先を見据
える様子をみせると、何故か彼女は溜め息を吐いて肩を落とした。

声を掛けようかどうか迷ったが、それよりも彼女の行動の方が早
かった。確認した方向の反対側　俺が居る方向に振り向く。その
瞬間、彼女の顔色が変わった。目は段々と丸くなり、血の気も引い
ていく。

「きゃあ〜っ!」

耳をつんざくような叫び声と共に、彼女は一目散に部屋の中へと
引き返す。まるで、化け物でも見たかのような反応だ。

悪気が無くとも、こんなに叫ばれてはかなり落ち込んでしまう。

恐る恐るドアの端に片手を掛け、部屋の中を覗いてみた。真っ白
なワンピースを纏った彼女は部屋の隅にうずくまっている。怯えた

焦茶の瞳が俺を見詰め返す。

「そんなに叫ばなくても良いのに……」

これでは、俺が酷い事をしたみたいではないか。

溜め息を吐いてうなだれる俺の様子に、ミュは頬を脹らませながら潤んだ目を擦る。

「そんな所に立ってなくても良いのに」

言い返す声は震えてしまっている。そんなに怖い思いをさせてしまったのだろうか。

いや、これはタイミングが悪かったただけなのだ。心の中で呟くものの、口には出さなかった。言ってみても、ただの言い訳にしか聞こえないだろう。

「だって、ミュ、迷ったら大変でしょ？」

「そんな所に人が居たら、誰だってビツクリするよ〜っ！」

言いながら、彼女は益々頬を脹らませる。その素振りが小動物のようで、見ていて可愛い。不謹慎かもしれないが、笑いが漏れてしまった。

「ごめんごめん！」

此処は素直に謝っておこう。

やはり、最初から部屋の中へ入ってしまえば良かったのだろうか。反省しながらも笑顔を保つ。

一方、彼女は俺の顔から目を逸らす事無く、まじまじと見詰めて

くる。

顔に何か付いているだろうか。と別の疑問が浮かび上がってきた頃、ミユは小さく口を開いた。

「ねえ」

「……ん？」

聞き返すと彼女は大きく瞬きをして、更に俺の顔を凝視する。

「この世界の男の人って、皆、優しいの？」

「えっ？」

一瞬、思考が止まった。

これだけミユの事を気に掛け、接してきたのだ。たとえカノンの記憶が無くとも、少しは俺の気持ち伝わっていると思ったのだが。

「ミユの想像に任せるよ」

これ以上の言葉は見つからなかった。

そんな俺に、彼女は首を傾げる。

「二人の所に行こう？」

落胆を悟られないよう、無理やり口角を上げて彼女に手を差し出した。その拍子に、服の内側に収めていたカノンの指輪が飛び出してしまった。小さな金属音を立てて、チェーンの手先で左右に揺れる。

すぐに指輪はしまつてしまおう。そう思ったのだが、出来なかった。それまで俺の顔に集中していた視線が指輪へと移ったのだ。

「それ……」

ミユはぼつりと呟くと、俺の首にぶら下がる自身の指輪を指差す。

「えっ？ ……あつ、これ？ どうかした？」

まさか、この指輪に反応するとは。

気になるのなら。と彼女の目の前に指輪を翳してみせた。動揺を隠し切れず、チェーンを掴む指は震えている。

もしや、この指輪に見覚えがあるのだろうか。無かったとしても、これがきっかけで過去の記憶がほんの少しでも戻るかもしれない。実現する事の無い期待に胸を膨らませ、彼女の返事を待つ。

するとやはり、

「これ……ラウドの？」

淡い期待は見事に裏切られた。胸に針で刺されたような痛みが走る。

「うっん。知り合いの、大切な人のもの……」

これは元々、君の物だったんだよ。本当の事を言ってしまったら、どれ程楽だろう。しかし、それは今の俺には許されない事だ。

軽く首を振りながら、精一杯の言葉を返す。

「そうなんだ……」

未だにミユはひたすら指輪を見詰め続けている。
もう、耐えられそうにない。

「そろそろ行こう？」

「……あつ。うん」

こうなるだろう。そう以前から分かっていたからこそ、指輪をミユの目から遠ざけていたのだ。これ以上、傷付きたくはない。そんな自己防衛も無駄に終わってしまった。

危険を冒しても指輪を傍に置き続けた理由なんて、説明しなくても分かるだろう。

彼女の顔を真面に見る事が出来なくなってしまう、小さな手も取らずに早々に部屋を後にした。歩きながら、この悲しみの原因になった指輪をしまう。

会議室へと向かう道程は耐え難いものだった。無言のまま廊下を突き進み、涙を堪える。俺とミユの足音だけが無機質な廊下に変化を与えた。

大きな扉が見えてくると目を擦り、僅かに溜まった涙を払う。歩く速度を緩める事無く、右手を前へと突き出し扉を押し開ける。

「おっ！ おはよー！」

同時に、アレクの暢気な挨拶が俺たちを出迎えた。

俺たちと同じように真っ白な衣服に身を包み、アレクとフレアは指定席でこちらを確認する。が、フレアは一瞬で顔を背けてしまっ

た。昨日の出来事を吹っ切れていないのだろう。

この場の空気を読む気は無いのか、アレクはいつものように口元を吊り上げる。しかも、俺の気持ちを逆撫でするかのような言葉を口走ったのだ。

「オマエら、二人とも仲良さそうだな！　もしかして……」

『もしかして付き合ってるのか？』とでも言いたいのだろうか。それが実現しそうにない状態だと分かっているにも関わらず。

しかも、これの何処が仲良さそうなのだろう。先程、あんな事があつたばかりなのだ。少なくとも、俺はこの部屋で一度も笑顔を見せてはいない。それなのに。

握り締める拳はわなわなと震えている。隣りに並ぶミュに至っては、

「……なっ！　そんな事、ある訳無いでしょ〜?!」

顔も耳までも真っ赤に染めて大声で叫んだのだ。

その内容に、更に心は抉られる。

アレクさえ変な事を言い出さなければ、こんなにも深い傷を負わずに済んだ筈だ。そう思うと、怒りをぶつけずにはいられない。

「……アレク」

これまでに無い程目を吊り上げ、アレクを睨み付ける。殴ってやりたい衝動にも駆られたが、理性が歯止めを掛けた。

そんな状況にも動じず、アレクの顔から笑みが消える気配は無い。

「……んな顔しなくても良いじゃねーかよ！　まっ、オマエらも座れよー!」

何処まで無神経なのだろうか。

俺の怒りは止どまるところを知らない。

アレクから目を逸らす事無く自分の席まで移動すると、乱暴に椅子を引いた。鈍い音と共に、椅子は大きく傾く。それをさほど気にせず、思い切り体重を預けた。

俺とは対照的に、ミュの動作は穏やかだった。ゆっくりと椅子を動かし、しとやかに座る。

彼女が立てた音を最後に、部屋はしんと静まり返った。ほんの僅かな間、沈黙が流れる。

「昨日はごめんなさい……」

そんな静寂を打ち破ったのもミュだった。遠慮がちにフレアへ囁く。

「……ミュが謝る必要なんて無いわ」

それに対し、フレアも物静かに返す。

腕を組みながら事の成り行きを見守っているうちに、怒りも徐々に収まっていった。ミュとフレアの放つ不思議な雰囲気部屋に充滿している。

俺と同じように、アレクの心も変わったのだろうか。

「んじゃ、今日は水の塔に行くぞ。ミュ、大丈夫か？」

言いながらミュを見詰める顔には笑みのかけらも無い。これで、自分のした事を反省してくれていれば良いのだが。

それに対し、彼女も真剣な表情で答える。

「うん。大丈夫」

すっかりとした口調なのだが、それでも心配せずにはいられない。昨日、塔を二つも周ったのだ。身体に相当の負担が掛かっているに違いない。

「ホントに？」

「……うん」

彼女の顔を覗き込むと、俺から目を逸らして頷く。

恐らく、彼女は強がっているのだろう。こうなっては、俺が何と言おうと自分の意見を曲げないのだ。

「……じゃあ、俺、魔法陣作ってくるよ」

仕方無くミュに笑顔を作って、重い腰を上げる。

俺が魔法陣を作るのは、これが初めてだ。

扉に近い、テーブルも椅子も何も置いていない場所に移動し、そつと瞼を閉じる。

魔法陣を作りたい。そう念じながら片手を床へ翳すと、すぐに手の平に何か当たった感触がした。先端に青色の丸い宝石が付いている、木製の細長い杖が現れたのだ。

早速、その宝石の部分の部分を床へと向けると、杖は勝手に動き始める。杖が描いた道筋は淡い青色の光を放ち、両手を広げた程の大きさの図形を形作っていく。不思議な感覚だ。

こうして一人で居ると、どうしても思考は嫌な方へと傾いてしま
う。

ミュの体力は保つだろうか。倒れはしないだろうか。ミュの心が
壊れてしまわないだろうか

と、そんな事を考えていると、程無く杖を持つ手がぴたりと止ま
った。魔法陣が完成したのだ。

一呼吸置き、三人が居る筈の場所へと振り向く。

「ミュ、出来たよ！」

精一杯の笑顔で声を掛けた。すると、

「うん！ それじゃあ、行こっか〜！」

ミュは脇目も振らずにこちらへと駆け寄り、躊躇いもせずに魔法
陣へと飛び込んだのだ。

一瞬で、その姿は光の中に掻き消えた。

その場に残されたアレクは苦笑いをし、フレアは腕組みをしながら
アレクに冷たい視線を送る。

こんな雰囲気は絶対に普通ではない。また、アレクが何かをやら
かしたとでも言うのだろうか。

「……………何があったの？」

声を掛けると、フレアの顔がこちらへと向けられた。その表情は
アレクに向けたものとは違い、何処か物悲しい。

「アレクがミュに聞いたのよ。あの、塔で見せられる記憶の事を」

フレアが話している間に、アレク表情までが曇っていく。腕を組んで、何かを考える素振りを見せる。

「やっぱアイツ、気付いてねーみたいだな……」

何故、こんなにも余計な事をするのだろうか。今朝、身を以てその事実を掴まされたばかりだというのに。

やはり、さっきは反省なんかしていなかったのだ。無神経にも程がある。

「……アレクっ！ 何でそういう事するのさ！ 俺の事も考えてよ」

「悪かったな。でもやっぱ気になってよ……」

怒りと悲しみに身体をわななかせる俺に、アレクは見向きもしない。俯いて片手で前髪を掻き上げる。

そんなアレクに、フレアはもう一度振り向いて目を吊り上げた。そのままの勢いで口を開く。

「アレク、今回はやり過ぎよ！ 急がなくても、いずれは気付くんだもの……。ラウドもあまり気にしない方が良いわよ」

「分かってる……」

気にしてみたところで、俺の力ではどうにもならないのだ。

俯いたまま、アレクは一応

「わりい……」と呟く。が、そのたった一言だけでアレクに対する憤りを払拭出来る筈も無い。

ミュと共に消え去った魔法陣を描いた場所に佇み、唇を噛み締め
た。

そうして自分の殻に閉じこもっている間に、かなりの時間が経過
してしまった。水の塔でミュを待たせているというのに。

気付くのと同時に慌ててワープしたが、謝って済まされるような
失敗ではない。

後ろから付いてくるアレクとフレアに見向きもせず、足場の悪い
雪原を駆ける。サファイアの中でも珍しい氷で出来ている木や湖に
架かる橋も、気に留めたりはしない。ひたすらミュの名前を呼びな
がら、前方に佇む彼女を指す。

ようやく彼女の肩に触れる事が出来、軽く叩いてみる。瞬間、肩
が小さく縦に震えた。振り返った彼女の目は大きく見開かれている。

「ごめんね。待たせちゃって……」

怒られる事を覚悟し、恐る恐る口を開く。だが、彼女は予想外の
反応をしたのだ。

丸くなっていた目は元の大きさに戻っていき、眉間には力が入る。
小首を傾げて

「うん」と唸り声まで上げた。

その後、返ってきた答えは。

「……そんなに待ってたの？」

「えっ?!」

今度は逆に俺たちが驚かされてしまった。
今朝、もしかすると彼女は鈍感なのでは　と思っただが、まさか
此処までだとは。

いや、そんな筈は無い。恐らく、俺たちに気を遣ってくれている
のだろう。

一瞬にして頭の中を思いが駆け巡る。
すると、

「気にしてねーんなら、良いんじゃないか？」

後ろからアレクが横槍を入れたのだ。

「良くないっ！」

何を言っているのだろうか。気にしていない筈が無い。
しかし、

「でも、気にしてないのに謝られても困るわよ？」

フレアにまで呆れ声で返されてしまった。

こうなっては、俺の意見なんて通せないだろう。納得は出来ない
が、仕方無い。

「……………しょうがないか。じゃ、ミュ、行こう？　これで、やっとア
レクたちも、二人きりになれるしね」

さらりとミュへ言葉を発した。

はつきり言ってしまうえば、これはアレクへの仕返しだ。俺の心の
傷を抉り、冷やかしまで入れたのだ。当然の報いだろう。

フレアは巻き添えになってしまったが、アレクと付き合ったのが

運の尽きだ。

突然の公表を受けて、俺の周りの時間が止まる。風すら吹く事を止めてしまった。

振り返らなくてはアレクとフレアの表情を確認出来ないが、見なくとも後ろからかなりの殺気を感じる。だが、後悔なんかしていない。

ミュの目が再び丸くなり、頬はほんのりと赤みを帯びる。

「えっ?! そうなのっ?!」

「気付いてなかった?」

ミュがアレクたちの関係に気付いていないだろう、という事は予想していた。それでも、わざとらしくミュの顔を覗き込んでみる。

「オマエっ! 何バラしてんだっ!」

怒鳴られて初めて、アレクの方に振り返った。その顔はタコのように真っ赤になっている。

目を吊り上げて怒りをぶつける様子が無性に面白い。

「……さっきのお返し。行こう?」

言いながら、意識的に口元を上げて目も細めた。しかし、何故か胸に鈍い痛みが走る。

ミュの手首を握って足を踏み出す。途端に彼女は悲鳴を上げたが、それを気に掛けてあげられなかった。

瞬時に気付いてしまったのだ。胸が痛んだ原因に。

俺は冗談でも『ミユと付き合っている』なんて言えない。たとえ過去に結婚の誓いを交わした相手であろうと、今の俺たちには関係無いのだ。

アレクの事を羨ましいと思ってしまっなんて不覚だった。

前方に聳える、円錐形の氷で出来ている塔は霞んで見える。いや、塔だけではない。空も、輝く木々も全てだ。

零れそうな涙をミユに見られてしまわないよう振り返りもせず、湖に架かる橋を駆け抜ける。

塔に到着して俺が手を離れた途端、ミユの足は身体を支える機能を失ってしまった。崩れるようにしてしゃがみ込んで、床に両手を突く。

「はあっ……。着いたっつ……」

「ミユは体力無いなあ……」

外からはそうは見えないが、塔の壁は外側からの光を一切通さない。中は薄暗いのだ。入口から日光が差し込み、俺たちが居る場所は淡い光に照らし出されている。

逆光になっているため、ミユの表情ははっきりとは分からない。だが、荒い息づかいと大きく上下する肩が彼女の疲労を物語っている。

「凄いね……」

「俺は普通だよ。この世界ではね。ミユも、もっと体力付けなきゃ

「！」

笑いながらそうは言ってみるものの、悪いのは俺だ。ミユの体力不足が大きな原因ではない。無理に走らせなければ、彼女が疲れる事も無かつたのだから。

先程抱いた自分の感情を誤魔化す良い術が思い付かない。素直に謝る事の出来ない俺に、彼女は小さく溜め息を吐く。

「多分、自然に付いてくれるよ……」

疲労のせいで、声もきちんと発せられていない。

俺は馬鹿だ。守ると決めたにも関わらず、一番辛い状況の彼女をこんな目に遭わせてしまった。

膝を折り、彼女の顔を覗き込む。そこには僅かに汗が滲んでいた。

「……大丈夫？ 行けそう？」

「うん……。まだ無理……」

此処で『行ける』と返されても困るのだが。と思いながらも、口から飛び出してしまった。

ミユの答えにほっと胸を撫で下ろして、自分の頭に手を乗せる。

「じゅめんね」

言いながら立ち上がって彼女の横へと移動した。それ以上何も言わず、静かに胡座をかいてみる。

自己嫌悪に陥りながらも、溜め息を必死に堪えた。俺の感情を表

に出してしまえば、ミュを驚かせてしまっただろう。

代わりに何とか自然な会話を探してみる。が、なかなか思い付かない。ミュに対する自分の想いばかりが浮かんでくる。

手を組み合わせて強く握る。

そんな時、救いの手が差し延べられた。ミュの方から話し掛けてきてくれたのだ。

「……皆って、何歳なの？」

振り向くと、小首を傾げる彼女の姿が目映った。先程よりも呼吸は安定しているようだ。

「えっ？ 一番年上はアレクで二十二。その次がフレアで二十一。俺は十九」

そう言えば、そんな事も教えていなかったか。などと考えながら言葉を返す。

そんな俺に、彼女は目を丸くする。

「え〜っ！ 私が一番下だ〜……」

別に、叫ぶような事では無いと思うのだが。それに、彼女の方が年下だろうという事は予測していた。フレアと比べてしまうと、顔の造りも口調もかなり幼く見えるのだ。

彼女が居た世界では、それ程までに年齢が重要視されていたのだろうか。

「ミュは何歳？」

「……十八歳」

「そつか。でも、誰も歳なんて気にしてないから、ミユも気にする事ないよ」

俯いて言い渋る彼女に笑顔を返した。

誰も歳を気にしていないのは事実だ。昨日はアレクに年齢の事とやかく言われたが、冷静になれば分かる。俺を言い負かすために咄嗟に口から出た言葉だろう。

俺の答えに安心したのか、ミユはにっこりと笑って息を吐く。

「うん……。そろそろ行けそう！」

そう言うなり、彼女は恐る恐る立ち上がった。

此処へ来てからそれ程時間は経っていないと思う。本当に、体力がきちんと回復したのだろうか。

今回は、昨日までのものよりもかなりの体力が必要だ。安易に行かせる訳にはいかない。

俺も腰を上げ、彼女の顔を覗き込んでみる。

「……大丈夫？」

「……うん！」

元気に返事をする彼女の顔から笑みが消える事は無い。薄暗くて確かな事は言えないが、頬がほんのりと桃色に染まっているように見える。

疲れのせいで、少し体温が上昇してしまったのではないだろうか。と心配になったが、こんなに元気に返されては引き止めるための言

葉が見つからない。

「……そっか」

曖昧に相槌を打つ事しか出来なかった。

「行ってくるね！」

この先に何が待ち構えているかも知らずに、ミュは俺に大きく手を振る。床の中央に描かれている魔法陣に足を踏み入れ、一気に放ち出した青色の光の中へと消えていった。

あっと言う間の出来事だ。

彼女を飲み込むと、何事も無かったかのように魔法陣の様相は元へと戻った。

「ミュ……。カノン……」

焦点の合わない目で魔法陣を眺め、届く筈も無いのに呟く。

どうか、無事に戻ってきてくれ。俺にはそう願う事しか出来ない。ぶら下がる両手に力を込め、拳を握る。

“ラウドも羽根取りに行かなきゃ。あの子よりも先に戻ってこない
と大変じゃん？”

一向に動こうとしない俺に、リザードは語り掛ける。

そうなのだ。ただミュを塔へ連れに来たのではない。俺にも行かなくてはいけない場所がある。

それでも、彼女の事を思うと足が動かない。

“何してるのさ、早く!”

そんな俺に、遂に痺れを切らしたのだろう。いつもよりも大きな声が頭に響く。更に、誰かに背中を強く押されたのだ。身体が前へとよろめく。

これも、リザードがしたのだろうか。

「うん……」

仕方無く適当に返事をし、その勢いに任せて足を前へと踏み出した。

ミユの時と同じように、青色の光が俺を包み込む。

辿り着いた先は真つ暗な空間だ。天井と床の見分けも付かない。何処からともなく流水音が聞こえてくる。

前方には青白い光を放つ真つ青な羽根が漂っている。丁度、俺の顔程の高さだ。

これからどうすれば良いのかは分かっている。百年前の情景と、今日にしているものが重なる。

ぼんやりとしながら手の平程の大きさの羽根へと近づき、そつと瞼を閉じた。すると魔導石と羽根が共鳴したのか、感じられる光が一層強くなる。

僅かな風を巻き起こし、羽根は俺の前から姿を消した。

目を開けると、そこにはひたすら闇が広がっていた。間を置かず、浮遊感が俺を襲う。

此処で俺がやるべき事は終わったのだ。なんて簡単なのだろうか。軽く悪態を吐いている間に、帰るべき場所へと戻されていた。まだミユの姿は此処には無い。

彼女が戻ってきた時にすぐに身体を支えてあげられるよう、立つたまま腕を組んで魔法陣を見詰め続ける。

今頃、彼女はリザードの記憶を見せられているのだろうか。楽しい思い出、愛し合った事、彼女と過ごした最後の日、彼女自身の死、その全てを。

耐え難い記憶を何故、生まれ変わって尚見なければいけないのだろうか。何故、魔法を手に入れるために記憶が必要なのだろうか。その理由を俺たちが知る事は無いのだろうか。

ただ与えられた義務を果たさなくてはいけないのだ。それがたとえ、どんなに辛くとも。

辛い思いをするのは俺だけで充分なのに。

止めどなく、様々な思いが交錯する。

そんな時、突如として魔法陣に変化が起きたのだ。塔の天井を突き破る程の光が溢れ出す。中央には微かに人影も見える。

ミュが試練を終えて戻ってきたのだ。

光が薄らぐのと共にミュの身体は後ろへと傾き、地へ落ちていく。このままでは床に激突してしまう。

「大丈夫っ?!」

咄嗟に右手を伸ばして背中を支えた。左手でも彼女の肩を掴み、どうにか身体を床へ触れさせずに済んだ。

ミュは頭を抱え、眉間に皺を寄せる。

「えへ……。今日は駄目みたい……」

苦笑いをする彼女は顔を上げる事すら辛そうだ。胸に鋭い痛みが走る。

「ごめん、俺のせいで。心の中で謝ってみるが、後悔が消える事は無い。」

肩を支えていた左手を彼女の膝の裏へと回し、身体を持ち上げた。そのままの状態を外へと歩を進める。

見た目と変わらずに軽いその身体は、疲労のためか微動だにしない。唯一首だけが動き、俺の顔を見上げた。驚きの表情を見せているものの瞼は重く、焦茶の瞳は半分程が隠れている。

「ミュ、立てないでしょ？」

「うん……。ごめんね……」

言葉を返してはくれるが、そうしている間にも目は閉じていく。

一気に彼女の全体重が腕に掛かったと思った時には、瞼が完全に光を遮断していた。

「あつ……」

苦痛に耐え切れずに気絶してしまったのだ。穏やかな呼吸が繰り返される。それが辛くて堪らない。

ミュが謝る必要なんて無いのだ。謝らなくてはいけないのは俺なのだから。生まれ変わって尚、過去の過ちが彼女を傷付けている。

「ごめん……」

彼女を抱く腕に力を込め、更に強く自分の身体へ引き寄せた。

アレクとフレアの元へと戻ると、既にダイヤヤへ繋がる魔法陣が用意されていた。こうなる事を予測していたのだらう。

二人並んで悲しそうに俺たちを見る。そこに会話は無い。

俺も二人へ僅かに視線を向けて、礼も言わずに魔法陣へと足を踏み入れた。

アレクとフレアの到着を待たず、会議室の扉に背を向ける。目的地は勿論ミュの部屋だ。

ドアを開けると、今朝と同じ景色が俺たちを出迎えた。彼女の身体をベッドへと横たえ、布団を被せる。

頬には赤みが差し、唇も桃色に染まっている。安らかなその寝顔は先程までの出来事を全く感じさせない。

ずっと此処に留まっていたいが、そうもいかないだろう。ミュが倒れてしまった今、明日の予定を考え直さなくてはいけないのだ。アレクとフレアが俺を待っている。

すぐにまた、此処に戻ってくるから。もしかすると、この思いは迷惑なのかもしれない。それでも心の中でミュに語り掛けて笑顔を向けた。

会議室に戻ると、二人は既に席へと着いていた。フレアは憂鬱そうに俺を見上げ、アレクに至っては顔を上げようともしない。

重苦しい空気を感じつつ、俺も椅子に腰を下ろす。

「ミュ、相当キテるな……………」

アレクの声は独り言とも取れる程に小さい。俯いたままで頭を掻く。

「このまま続けても大丈夫かしら……………」

そんなアレクに、フレアは不安気な瞳を向ける。が、アレクはそれに答えようとはしない。いや、答えられないのだろうか。それは俺も同じだった。

「俺はどうしたら良いのか分からない……」

彼女にとって最善の方法は分かりきっている。魔法を手に入れる事を諦めれば良いのだ。そうすれば、もう苦しめずに済む。

しかし、それを世界が許す筈も無い。いくら考えても結論は出ない。

「オマエの気持ちは、どうなんだよ……？」

頭を抱えて悩んでいると、アレクの声がこちらに飛んできた。その目はしっかりと俺を見据えている。

アレクが求めている回答は、今俺が考えていた事ではないだろう。俺の想いそのものだ。

「ミュに全部思い出して欲しい。折角、出逢えたんだから」

これが本音だ。思い出してさえくれれば、百年前の関係に戻れるかもしれないのだから。

しかし、それは俺の我が儘だ。一度細く息を吐き、また想いを零していく。

「でもミュには辛過ぎる。全てを思い出す事が、ミュにとって良い事だとは思えないよ。それに思い出したせいで、また昔みたいになつたら……」

黒の魔導師に狙われてしまえば、更に彼女を苦しめる事になる。
そんなのは嫌だ。

手を握りしめ、唾を飲み込む。

そんな俺をフレアはしつかりとした目で見据える。

「そんな事になった時のために、あなたが居るんじゃない」

こんなにもはっきりと言われると、返す言葉も無い。フレアの言う通りだ。

フレアは真剣な眼差しを今度はアレクにも向けて、再び口を開く。

「でも、これはミュの問題よ。少しはミュにも話すべきじゃないかしら」

『ミュに話す』つまり、『ミュが黒の魔導師に狙われるかもしれないという事を教える』という意味だろうか。

そんな意見を素直に受け入れる筈も無く、アレクは血相を変えて立ち上がった。椅子はぐらりと傾き、両手をテーブルに叩き付けたせいで大きく鈍いが部屋に響く。

「フレアっ！ 何言ってるんだ?! それでミュが止めるって言ったらどーすんだ?!」

アレクは完全に冷静さを失ってしまっている。怒鳴るうちに顔には血が上り、真っ赤に紅潮する。

一方、フレアの様子は変わらない。未だにアレクを力を込めて見詰めている。

「きつと、ミュはそんな風にはならないわ。ただ、心の準備が必要なんじゃないかって思ったのよ。あたしでも、何も知らされないで

あの映像見て凄く動揺したわ。ミュにとっては、今はこの世界は異世界なのよ？ それに、あたしやアレク以上に辛い過去なのよ？ 酷いわよ……」

一気に話すと、そのまま俯いてしまった。最後の方は声が震え、泣き出してしまいそうだった。それ程、ミュの事を考えてくれているのだろう。

感情表現が違うだけで、ミュの事を考えているのはフレアだけではなく、アレクも同じなのだ。

フレアの言う通り、確かにミュにも知る権利がある。選択権だけである。彼女の未来は俺たちが決めるべきではない。彼女自身が選ばなくては。

そのために、

「少しだけ話してみよう？ ほんの少しだけ……」

事実を教える事は必要だろう。

俺の発言にフレアは安堵した素振りを見せるが、アレクは目を大きく見開いた。

「……おおっ?! ……いや、しょうがねー。オマエがそう言うんなら」

言い終わると肩を落として席に座り直す。小気味の良い小さな音が椅子から発せられる。

アレクは両肘をテーブルに付き、合わせた両手に顎を乗せた。そのままの体勢で俺を見詰め続ける。

「でもよー、ホントは過去の事を覚醒する前の魔導師に話しちゃダメなんだぞ?」

「どうしてこんな過去を見るのか……。それだけにしておこう?」

それが禁止されているという事くらい分かっている。が、そんなものは他人の勝手な言い分だ。当事者には酷過ぎる。

あの映像が何なのか分かっていなくとも、何が起こったのかは理解出来ている筈だ。あんな映像を見る事が出来る理由を教えるだけで充分だろう。

過去の出来事やこれから起きるであろう事なんて、とてもじゃないが俺たちの口からは言えない。聞くのも嫌だ。

「そうね。それだけなら大丈夫よね? 状況が状況だもの……」

フレアもぼそぼそと呟く。恐らく、自分自身を納得させているのだろう。

これで、ほぼ意見は固まった。此処に居る必要も無いだろう。

「明日、ミュに話そう。俺はミュの傍に居るよ」

言い残してゆっくりと腰を上げ、その場を立ち去ろうとした。が、言い忘れがあった事に気付いた。片方だけ半分開いた扉に手を掛けて後ろを振り返る。

「……あつ。アレクにお願いがあるんだけどさ」

「何だ?」

そんな俺に、アレクは訝しげに返す。

「ミュにはアレクから話してくれないかな。俺の口からじゃ、言えそうにないから……」

「……ああ」

こんな頼み事をするなんて、逃げに等しい。嫌な役目をアレクに押し付けているのだから。

しかし、自ら口にしてしまえば堪えられないだろう。過去への後悔を表す涙も、ミュに対する想いも

会議室から抜け出すと、すぐさまミュの元へ向かった。廊下を駆け足で通り抜ける。

急いで開けたドアの向こう側の様子は先程と変わらない。ミュがベッドの中ですやすやと寝息を立てている。

窓に映る空は橙色に染まっているから、もうすぐ闇が訪れるのだろう。長い一日だった。

ドレッサーに備えられた深緑色の椅子をベッドの傍まで移動させて、そこに腰を下ろす。

あの映像が前世の記憶だと知った時、目の前の可愛らしい顔はどのように変わるのだろうか。

恐らく、ミュはカノンがアイリスを嫌っていた理由には気付いていない筈だ。気付いていれば、今朝フレアと仲直りなんて出来なかつただろう。

となれば、真っ先に彼女が避ける人物は俺だろうか。あれ程親密に接していたのだ。もし俺が彼女の立場なら、多分避けてしてしまうだろう。意識せずにはいられない。

ミユの頬にそつと手を伸ばして触れようと試みる。が、出来なかった。

今はまだ触れてはいけない。そんな気がしたのだ。触れてしまえば、彼女は俺から離れてしまう。根拠の無い不安までもが込み上げてきて、俺の行動を止める。

行き場の無くなった右手で拳を作り、膝の上へと戻す。

此処に居ても辛いだだけだ。それなら、このまま自室へ帰った方が良さだろうか。ミユの顔を眺め、思考を巡らせる。

いや、今日は此処で夜を明かそう。今朝は部屋に入る事を躊躇ったために、ミユを驚かせてしまったのだ。同じ失敗をして、また彼女を驚かせたくはない。それなら此処に留まっていた方が安全だろう。そう結論付けた。

そうこうしている間に、外はすっかり暗くなっていた。気付かないうちに部屋の灯りが付き、俺の時間感覚を鈍らせてしまったらしい。

明日も長く感じられるのだろうか。俺もそろそろ休もう。

「おやすみ」

ミユに向かってそつと囁き、翌朝差すであろう日の光を避けるために魔法でカーテンを閉め切る。室内を明るく照らす灯りも消した。途端、睡魔が襲ってきた。

久し振りに眠い。俺も相当疲れが溜まっていたのだろうか。などと考えている間に、ベッドに伏せた状態で深い眠りへと就いていた。

第7章 過去へ繋がる森

草むらで大の字になって横たわり、流れ行く雲を眺める。

今まで悪い夢でも見ていたのだろうか。頭の中がぼんやりとする。そんな時、視界が人の顔で塞がれた。

「こんな所に居たんだ！ 探したんだから〜！」

言いながら、愛しい人は俺の長い前髪を額から払う。

「……カノン」

「どうしたの〜？ 変な顔しちゃって」

何故、俺はこんな場所に居るのだろうか。今まで何をしていたのだろうか。何も分からない。そんな不安が表情に出ていたらしい。起き上がろうとする俺の腕と背中を支えながら、カノンは首を傾げる。

「俺、なんで此処に居るんだっけ……」

そんな彼女に、俺も小首を傾げてみせた。すると、彼女の訝しげな表情が驚きの表情へと変わる。

「えっ？ リザード、会議の休憩中に、外に抜け出しちゃったんだよ〜！ もしかして忘れたの？」

「うん、そうみたい」

そうか。だから、草原なんかで寝転がっていたのだ。一人で納得して彼女に苦笑いを向ける。

そんな俺に、彼女は

「え〜っ?!」と叫びながら目を丸くした。

カノンに呆れられてしまっただろうか。別に、あまり気にするよ
うな事でもないのだが、

「変な夢、見ちゃってさ……」

無意識のうちに、言い訳のような呟きが漏れていた。

「えっ? どんな夢?」

聞き返されて、妙にリアルだった夢の内容を思い出してみる。

「うーん、俺たちの前に敵が現れるんだよ。それで、カノンが……」

そこで言葉に詰まってしまった。いくら夢だとは言っても、カノンには教えられない。残酷過ぎる。

「何?」

「ううん、何でもないよ。それで、百年後にカノンとまた出逢って
さ」

再び君に出逢ったが、君は何も覚えていない。俺は全部思い出したのに。辛くて仕方が無い。

それでも、君と一緒に居られる時間が愛しくて幸せで。かけがえないものだった。

言葉にはせずに、カノンに微笑み掛ける。
しかし、そこで違和感に気付いた。何かがおかしい。

「それ、ホントに夢だった？」

髪の長さを見れば確かにカノンだが、彼女の瞳が緑ではなく焦茶だ。声も微妙に違う。

悲しそうに、傍げに彼女は微笑む。

そうだ。あれは夢なんかではない。現実だ。

それに、俺はリーダーではない。そして彼女も

「ラウドっ!」

ミュの叫び声と共に、上半身を預けている物が大きく軋む。
重くて開き切らない瞼を擦り、ゆっくりと顔を上げた。上半身だけを起こした状態で布団を握り締めて、目を見開くミュの姿がぼやけて見える。

「ん……？ ミュ、おはよう……」

やはり、先程見たものが夢だったのだ。あんな夢を見るなんて最悪だ。

目覚めは良くないが、何とか微笑み掛けてみる。
しかし、彼女は俺を呆然と見詰めるだけで返事をしてくれない。

「……どうかした？」

何故、無反応なのだろうか。
首を傾げて考えていると、

「どうかした？　じゃないよっ！　何で此処に居るの〜っ?!」

更に叫ばれてしまった。

よく部屋の中を見てみると、此処は俺の部屋ではない。置いてある家具や布団の色から考えて、此処はミユの部屋だろう。

そうだ。昨日はミユの部屋で眠ったのだ。彼女を驚かせないためにそうしたのだが、どうやら逆効果だったらしい。

「だって……心配だったから……」

他に良い言い訳が見つからない。恥ずかしさで顔の温度は上昇し、手は汗ばみ始める。

こんな俺の様子に納得してくれたのだろうか。彼女の顔からは驚きが消え、笑みが広がっていった。

「……そっか。ありがとう。もう大丈夫だよ！　行こう？」

明るく声も掛けてくれる。

だが、眠気が覚めていくうちに昨日の出来事も思い出してしまった。

塔へ行く前に、彼女に前世の話をする事と決めたのだ。その時が目前に迫っている。

「そっだね……」

行こうと言われても、素直に『うん』とは返せない。前世の話を

した結果、彼女に避けられてしまったら。そんな風に考えると、どうしても身体が動かないのだ。俺が決断した事なのに。

「……どうしたの？」

不意に声を掛けられて身体が僅かに震えた。ミュは不思議そうな表情で俺を見詰めるばかりだ。

「……あつ。ううん、何でもないよ」

気が進まないが、いつまでもこうしてはられない。彼女を困らせてしまう。

「行こう？」

思い切って腰を上げて、手を差し伸べた。

この現実から逃げ出したい。そんな否定的な思いが今朝の夢を見せたのかもしれない。

会議室が近付けば近付く程、鼓動は速度を上げていく。少し後ろを歩くミュの顔を真面に見る事も出来なかった。

扉を目前にしてみても、なかなか踏ん切りが付かない。一度、汗ばんだ手を拭うために腰へ右手を当ててみたのだが、そのまま固まってしまった。後ろに居た筈のミュが先にノブへ手を乗せる。

しかしどうだろう。彼女もまた、俺と同じように固まってしまったのだ。

もしかして、何かを感じ取っているのだろうか。第六感が働いているのかもしれない。

そつだ。此処で決まるのは俺の運命ではない。彼女の運命だ。一番辛い筈の彼女を差し置いて、俺が緊張していてどうするのだろうか。

「……………開けるよ？」

ほんのりと赤く染まる彼女の顔を確認し、椀のような小さな手に俺の右手を重ねた。生唾を飲み込み、そのまま扉を押し開ける。

ミュの頭越しに、暗く沈んだアレクとフレアの姿が映った。こちらを見詰めるその四つの瞳には、いつものような生気は感じられない。何か思い詰めたような、そんな表情だ。

この場の雰囲気はただ事ではないのを察知したのだろう。ミュは戸惑いながら二人の様子を交互に見る。拳を握り締め、部屋の中へ入ろうとはしない。

そんな彼女を慰めるようにそつと背中に触れ、軽く押してみる。

「今日はミュに話があるんだ……………。取り敢えず、座って？」

振り返った彼女の瞳は不安に揺れ、俺を見詰め返す。が、それも僅かな間で、何も言わずに素直に従ってくれた。

テーブルまで辿り着くと、まず先にミュの椅子を引いて彼女を座らせる。俺もすぐに指定席へ腰を下ろしたが、こんな状況で落ち着ける筈も無い。両手を固く組み合わせて唇を噛み締める。

沈黙が続く中、アレクが声を発する瞬間をひたすら待つ。

アレクの居る方向からは溜め息ばかりが聞こえてくる。誰だって言いにくい内容だ。こんなにも重大な責任を背負わしてしまった自

分が腹立たしい。が、今の俺にはどうする事も出来ない。
何度目かの溜め息の後、ようやくアレクは口を開く。

「ミュ、塔の中で見てきた過去、オマエは何だと思う？」

小さいが、はっきりとした声だ。

ミュの反応が気になり、顔を上げた。彼女はきよとした表情を浮かべ、アレクを見返す。

「この世界の、昔の魔導師の事でしょ？」

確かに彼女の言う通りだ。何一つ間違っではない。しかし、俺たちが求めている答えはもっと別のものだ。

返事に困るアレクの様子を見兼ねて、フレアが会話を引き継ぐ。

「落ち着いて聞いてね。確かに、これは過去の魔導師の事よ。でも、どうしてそれをミュやあたしたちが見れると思う……？」

その内容に、今度はミュが返事に困ってしまった。

「そんなの……分かんないよ……。私たちが魔導師だからじゃないの……？」

そう答えるのが精一杯、とでも言いたそうにフレアを見詰める。
やはり、彼女は気付いていない。今気付かせるためには俺たちから教えるしかないのだ。

アレクとフレアは顔を見合わせ、悲しそうに小さく首を振る。フレアはそのまま俯いてしまった。

一方、アレクはフレアに向けていた視線を俺へと移動させる。その瞳からは『これから言うぞ』という強い決意が窺えた。

俺も決意を固めなくては。いつまでも逃げてばかりではいられない。

しっかりと頷いてみせるアレクに、口を堅く結んで頷き返す。

「これから言う事は、ホントは覚醒してねー魔導師には言っちゃいけない事だ。……良いか？ 信じるも信じないも、オマエの自由だ。けどな、全部事実だからな」

いよいよだ。ミュが真実を知る瞬間が、すぐそこまで来ている。破裂しそうな心臓をどうにかしようと、自然と片手で胸を押さえつけていた。堅く瞼も瞑り、酷く遅く感じられる時の流れに身を置く。

俺の目の前に居る人物は一度大きく深呼吸をする。

「あの映像は……オレらの中の記憶だ。だからよー、過去の魔導師たちはオレらと関わりがあるって事だ。どーという意味か……分かるか？」

そんなに回りくどい言い方をせずに、はっきりと言えば良いのに。こんな言い方では分かる筈が無い。

思った通り、ミュは大きくゆっくりと首を振る。

アレクが次の言葉を発しようと僅かに口を動かした。瞬間、胸へ当てている手に、更に力が加わる。

「だよな……。つまり、あの魔導師は」

噛みしめられている下唇からは血が滲みそうな程だ。
早く言ってくれ。もう耐えられない。

「オレらの前世だ……」

その言葉が漏れた途端、身体中から力が抜けていった。瞼は中途半端に開き、歯も唇から離れる。

しかし、放心している場合ではない。気持ちを切り替えて視線をミユへと移動させた。

本番は真実を教える事ではない。未来の決断を迫られるこれからののだから。

彼女は目を見開き、信じられない。という様子でテーブルに置いている手を握り締めた。

「待つて！ 前世つて言つたつて、私、この世界の人間じゃないんだよ?! そんな筈」

「オレ、前に言ったよな？ 地の魔導師が百年間現れなかつたつてよ！。その間に何かあったのかもしれないし。オレらにも分かんねーけどよー……」

混乱する彼女をなだめるように、アレクは目元を和らげる。

その一方でミユは頭を抱えて、軽く首を振りながら思いを巡らせてしまった。その動作も段々と無くなり、最後には身動き一つしなくなつてしまった。

そして遂に、

「じゅめん……」

消えてしまいそうな程に小さく呟くと、勢い良く立ち上がってし

まったのだ。椅子は大きく傾いてぐらつくくと、そのまま横に倒れる。それも気に留めていないようだ。一目散に席を離れていく。

「……ミュっ！ 待って！」

俺も立ち上がって手を伸ばし、必死に叫んだ。しかし、それすらも彼女の心には届いていないのだろう。

部屋中の空気を振動させて扉が閉まる。そこには無言で立ち尽くす俺たち三人が残された。ミュの姿は無い。

俺はミュに避けられるのを怖れるあまり、彼女を追いかけれなかったのだ。

やるせない気持ちをどうする事も出来ず、どかりと椅子に腰を下ろした。テーブルに肘を付き、頭を抱える。

「やっぱり、言わない方が良かったのかな……」

大きな溜め息まで漏れてしまった。

言ってみたところで、どうにもならなかったではないか。ミュは真実を否定し、会議室から逃げ出してしまった。昨日はフレアの意見に乗せられてこんな決断に至ったが、今は後悔ばかりが押し寄せてくる。

二人はそんな俺を哀れむように見下ろしているのだろう。顔も見たくない。

「オマエ、今更んな事言っても遅えよ……」

溜め息混じりの声にも哀愁が漂っている。

フレアに至っては、口を開こうとする気配さえ感じられない。

「んで、どうする？ このままじゃマズいだろ」

そんな事、言われなくたって分かっている。分かっているが、解
決法が見当たらない。

俺が返事を出来ずにいると、ようやくフレアは重たい口を開いた。

「ミユを説得するしかないわよ。いずれは受け入れなきゃいけない
事実だもの……」

「でもよー、オレら三人でミユの部屋まで行くのか？ 余計アイツ
を追い詰めるだけだろ」

頭の中を二人の会話が流れていく。思考力がかなり低下してしま
っているらしい。いや、考えようとしていないだけだろうか。

「誰かが行くしかないわ。一人で」

「それじゃー、行くヤツなんか決まってるじゃねーか」

何となく、そんな会話も聞こえてくる。と二人の視線がこちらに
向けられたように感じた。

顔をゆっくりと上げてみると、二人の悲しげな瞳が俺の目とぶつ
かる。

俺に『ミユの部屋へ行け』と言うつもりなのだろう。他には考え
られない。俺がどんな気持ちでいるかも知らずに。

「……分かった。行ってくるよ」

命令される前に自ら重い腰を上げた。先にアレクたちの方から言われてしまうと、余計に苛立ってしまうからだ。

「お願いね」というフレアの小さな囁きと共に、扉は俺を部屋から追い出した。

気分は落ち込み、俯き加減だ。足取りも重い。それでも休む事無く、ミユの部屋を目指す。

どうやって彼女を説得しろと言うのだろうか。何度も溜め息を吐きながら思考を巡らせる。

今まで見てきたものは全部ミユが体験してきた事、だから真実を受け入れて、これからどうしたいか自分で決めて。そんな事を言う訳が無い。

うなだれ、片手で髪をがっしりと掴む。とその時、一つのドアが視界に現れた。

遂にミユの部屋の前まで来てしまったのだ。

悩んでいても仕方無い。いくら考えてみても結論は出ないのだ。

大きく深呼吸をし、瞼を閉じる。自分の鼓動を感じながら、一度気持ちを落ち着かせた。

再び目を開けてドアの向こう側を見据える。片手で拳を作って手首を動かすと、ドアが音を立てて震えた。

「ミユ、入るよ……？」

言いながら、ドアノブを回す。僅かに開いたドアの隙間からは薄日が漏れ出す。

恐る恐る部屋の中を覗き込んでみると、ベッドに寝転がるミュと目が合う。が、その瞬間、彼女は眉をしかめてそっぽを向いてしまった。

確実に俺を避けている。

覚悟はしていたが、胸には鈍い痛みが走る。唇を噛み締めてみるものの、受けた衝撃は和らぎそうにない。

しかし、いつまでもこうしている訳にもいかない。胸を押さえ付けながら、身体のやり場を求めて部屋の中を見渡してみる。すると、テーブルの傍に置かれた椅子に目が止まった。

静まり返った空間に、椅子の立てる小気味の良い音が響く。気まぐずい空気をひしひしと感じながらも腰を下ろした。

「ごめんね……」

無意識のうちに言葉が零れる。何故謝っているのか自分でも分からない。

ミュは微動だにせず、静かに口を開く。

「私、信じられない……」

「うん、分かるよ……。俺も最初は信じられなかったから……」

こんなにも酷い過去をそう簡単に受け入れられる筈が無い。

まして、今の彼女は異世界の人間だ。彼女が受けた衝撃は俺が受けたそれを遥かに上回っているのだろう。

溜め息を吐く小さな背中が痛々しい。

「無理に信じようとしなくて良いから……」

そっと囁き掛けてみるものの、何の慰めにもなっていないのだろ

う。
それ以上の言葉は出てきてくれず、そのまま喋れなくなってしまった。

何度も口を開いてはみるが、声を発する事は無い。言葉が出てこないのだ。何かを言える筈も無い。

そうしている間もミユは壁の方を向き、こちらを見ようともしてくれなかった。そんな彼女の素振りが余計に俺の行動に歯止めをかける。

静寂に包まれる中、絶望感に苛まれていた時だ。ミユは少し背中を丸めて吐息を吐いた。

「あの変な夢が、現実を起こってた事だったなんて……」

息の漏れる微かな声だ。

恐らく、彼女の独り言なのだろう。それでも条件反射のように、俺の口は動いていた。

「夢？　どんな……？」

声を掛けた途端、ミユの肩が僅かに震える。小さな溜め息まで吐かれてしまった。そんな様子に、更に胸は締め付けられる。

言わなければ良かった。と後悔してみるが、もう遅い。言ってしまったものは取り返しが付かないのだから。

「言いたくないなら、聞かないけど……」

これが精一杯の弁解だった。

彼女の返事は全く期待しない。どうせ、話してはくれないのだから。

だが、彼女は後ろを向いたままで夢の内容を語りだしたのだ。それは俺の考えを遥かに超えていた。普通、こんな事実を予想出来るだろうか。

「映像に出てきた地の魔導師と水の魔導師が……真つ白なお花畑に居るの……。地の魔導師はお腹を大怪我して倒れてて、水の魔導師がその女の人を抱き抱えてて」

「えっ?!」

話を聞いているうちに、思わず言葉を遮り立ち上がってしまった。その夢の内容は紛れもなく、俺たちの過去そのものだ。俺は勿論、覚醒前にそんな夢を見た事は無い。アレクやフレアからもそんな話は聞いた事が無い。

恐らく、ミュが初めてのケースだ。それ程までにカノン俺の事を想ってくれていたのだろうか。

そう思ったのだが、それは俺の自惚れだったのかもしれない。俺の叫び声でミュは勢い余って振り向き、こちらを見る。その瞬間、彼女は目を丸くして再び視線を壁側に戻ってしまった。

途端、現実に引き戻される。

「じゅめん……」

落胆を隠しきれず、膝から力が抜けて身体を支えられなくなった。そんな俺を椅子が受け止める。

そうだ。ミュはカノンの生まれ変わりだが、カノン本人ではない。一瞬でも一人で盛り上がってしまった自分が馬鹿みたいだ。

両手で頼杖を付きつつ涙を堪える。瞬きをすれば零れ落ちてしま
いそうだ。

だが、此処で挫けてはいけない。たとえ俺の意志ではなかったと
しても、ミユを説得しにこの部屋まで来たのだから。

以前から前世の夢を見ていたのなら、それを利用すれば良い。

「でも……」

言いかけて躊躇ってしまった。こんなの卑怯ではないだろうか。

しかし、言うしか無い。

指で軽く涙を払って口を開く。

「夢の事も、前世の事も、最後の塔に行ったら、全部はつきりする
から」

彼女の迷いを逆手に取り、塔へ連れて行こうという作戦だ。やは
り、大きな危険性を孕んでいる。という事実よりも、カノンの記憶
を全て取り戻して欲しい。という俺の欲求が勝ってしまう。

ほんの少しの間があった後、ミユの頭が僅かにこちら側を向いた
ような気がした。

「……絶対？」

小さい声も聞こえてくる。

「うん」

それに対して大きく頷いてみせた。

すると彼女の身体が大きく動き、顔がこちら側を向く。俺を見る

瞳はいつもよりも元気が無い。それでも、何かを決意したかのよう
な、そんな強さを感じさせた。

「私、行こうかな……」

印象通りの言葉だ。

椅子から立ち上がり、彼女をきちんと見据える。

「……ありがとう。行こうか」

言いながら微笑み掛けて、そっと手を差し伸べた。

そんな俺に、彼女もぎこちなく微笑む。そのまま頷いて起き上
がり、俺の手を取ってくれた。

俺は大事な話を話していない。恐らく彼女は気付いていない、命
を脅かしかねない相手の存在を。

だが、それを伝えられる程の強さを俺は持ち合わせていない。強
引に俺の感情を通したようなものだ。

後ろめたさを感じながら、彼女の温かい手をしっかりと握った。

ミュウが俺たちの望む結論を出してくれたのにも関わらず、俺の気
持ちは晴れない。廊下を歩く速度も、いつもよりも遅い。いつの間
にか、後ろを歩いていた筈のミュウに追い抜かれてしまっていた。

立ち塞がる扉を前にすると、彼女は躊躇いもせず、それを押し開
ける。

ミュウの頭越しに現れたアレクとフレアの姿が心なしか小さく見え
た。こちらに向けられる瞳は虚ろだ。部屋に漂う空気もどんよりと

沈んでいる。

「私、塔に行く……」

そこにミユの声が凜と響く。

「それで良いんだな？」

重圧感のあるアレクの問題にも、彼女は無言で頷いた。

恐らく、彼女は納得し切れてはいない。塔に行くという決断も嫌々下したのだろう。昨日は気絶までしてしまったのだ。進んで、そうなってしまった原因のある場所へ行きたいと思える人物なんて居ない。

だが、アレクとフレアは安堵の笑みを浮かべる。こっそりと溜め息まで漏らした。

「んじゃ、行くか！」

言うなり、二人とも音を立てて立ち上がる。

彼女の意志が変わる前に、塔へと連れて行きたいのだろう。もう少し、気持ちの整理を付ける時間をあげても良いと思うのだが。

アレクに続き、フレアまでもが彼女を急かすような発言を始める。

「地の塔だけは、自分でワープ出来る筈よ。やってみると良いわ」

ミユは声を発する事無く、僅かに頷く。そのまま俯いてしまった。塔に行く事を躊躇っているのではないか。そう思ったのだが、彼女の身体はすぐに発光を始めた。間も無く目映い程の光に包まれ、ミユは俺の目の前から掻き消えていった。

「……オマエ、アイツをどうやって説得したんだ？」

視界が開けた瞬間、アレクは腕を組ながら俺の様子を窺う。そんな話をするよりも、ミュを追いかける方が先ではないか。分かっている。と軽く首を振ってみせる。そのままアレクたちの姿を確認もせず静かに目を閉じて、地の塔へと向かった。

瞼を開けると、目に光が飛び込んできた。思わず腕でひさしを作る。

薄目を開けながら見た先には、柔らかな日差しを浴びたミュが佇んでいた。表情は重く沈んでいるのだが、光を受けるその様はまるで天使のようだ。彼女の持ち合わせている雰囲気の数々でもあるが、真っ白なワンピースを身に纏っているから、余計にそう思わせるのだろう。

だが、見惚れてばかりはいられない。俺を先頭にミュへと歩み寄る。

「……今回は誰も一緒に行つてあげられない。でも、ミュなら大丈夫だから」

本当なら、笑顔で見送るのが一番良いのだろう。しかし、今の俺には不安を隠し切れる程の心のゆとりは無い。

「うん……」

そんな俺に、彼女も小さく頷く。それでも目は見てくれない。この暗く沈んだ空気を少しでも和らげたかったのだろう。

「……オマエら大袈裟だなー！ まあ、なるようになるさ！」

溜め息を吐いた後、アレクはミュへ笑ってみせる。アレクは俺の後ろに居るから顔は見えないが、声は固い。恐らく、アレクも上手く笑えていないのだろう。空元気を出しているに違いない。

「ミュが戻ってくるの、待ってるわ」

フレアの声も、いつもより静かだ。

そんな俺たちの様子を気に掛けて、雰囲気を良くしようとしてくれたのだろうか。ミュの顔に段々と笑みが広がっていく。

「……うん！ 皆、ありがとう！」

それだけを言うと、彼女は目に力を込めて前方を見据える。生唾を飲み込み、俺たちの間をすり抜けて歩いていつてしまった。

その姿を見届けようと、ゆっくりと踵を返す。すると、大木にぽつかりと開いた不気味な穴が姿を見せた。周りには薄暗い森が続いている。

俺には彼女を応援する事しか出来ない。歯がゆくて仕方が無い。両手で拳を握り、塔の中へと吸い込まれていくミュを見詰めていた。

誰も口を開こうとはしない。日陰へと移動し、フレアを中心にして三人並んで腰を下ろす。

前方には光を浴びた草花の敷き詰められた長閑な風景が広がって

いる。風に揺れる色とりどりの花を見ても、心が安らぐ事は無い。

太い木の幹に身体を預けて

「ふう……」と細く息を吐いた。

「ミュウが……カノンの夢、見てた……」

「えっ?!」

「はあっ?!」

何気なく零れた言葉に、二人は驚愕の声を上げる。視界の隅には赤と黄の瞳を持つ顔が現れた。

気だるく振り向いてみると、見開かれた四つの目が俺を凝視していた。視線を逸らそうともせず、そんな二人を何となく、ぼんやりと見詰める。

「カノンの最期の夢……。だから、ミュウを説得出来たんだ」

言い終わると再び正面へ向き直り、草花に目をやった。

ミュウが夢の話をしていなかったとしたら、今頃はまだ彼女の部屋に居ただろう。会話も無く、気まづいままで。

先程までの出来事を思い出してしまって、もう一度溜め息を吐いた。心は塞ぎ込み、憂鬱な思いが重くのしかかる。

「オマエ、覚醒前に前世の夢、見た事あるか？」

「そんなの無いわよ」

アレクとフレアの会話も、ぼんやりと右から左へと流れていく。そして今度は、

「オマエはどうだ？」

こちらに声が飛んできた。

俺に話を振っているのだろうか。まあ、フレアには話し掛けていたから、他には俺しか居ないのだが。

わざわざ聞かなくても分かる筈なのに。

「……見た事無いよ」

「だよな……」

俺の返事に対しての呟きと共に、木が衝撃を受けて横に揺れた。

「異世界に生まれた事が影響してるのかしら……。それとも……」

「何だ？」

「……何でもないわ」

軽やかな曲線を描く黒髪が左右に振られる。

異世界に生まれた事が原因で夢を見るにしても、他の幸せな場面だつてあつた筈だ。よりもよつて、一番辛い瞬間を見る事も無いのに。

再び深く溜め息を吐いて頭を木の幹へと預ける。そのままゆつくりと首を動かし、虚ろに塔の入口を眺めた。

まだ、塔の中に変化は感じられない。ぽっかりと開いた穴には、ひたすら闇が広がっている。ミュが試練へと向かってから十数分し

か経っていないから、当たり前なのかもしれないが。

ミュは今、どうしているのだろうか。あの記憶に耐え切れるだろうか。不安で不安で堪らない。

自分が体験したあの時の事を考えると、今でも気分が悪くなってくる。

容赦無く頭の中に流れ込んでくる映像、自分でも分からない感情、急激に悪くなっていく体調、魔法を得るために魔導石へ集まる青い光と風

それらに耐えきれずに塔の中で倒れていた所を発見され、アレクに運び出されたらしいのだが。全く覚えていない。気絶していたから当然だろう。

ミュは俺のように倒れたりしないだろうか。無事に試練を終える事が出来るだろうか。

考えても考えても仕方の無い事ばかりが頭の中に浮かんでは消え、また浮かぶ。頭を掻き篦りたくなかったが、両手を頭に当てた所で止まって塞ぎ込んだ。

俺がそうしている間、アレクとフレアは一言も話そうとはしなかった。いや、話せないのだろうか。

静かで重苦しい森の中を一陣の風が吹き抜け、光に透ける俺の髪を揺らす。その風や視界を邪魔する横髪ですら、俺の気を紛らす事は無い。

手に汗を握り、思いに耽る。そうしている間も時間は流れ、陽は傾き始めた。永遠にも感じられる程に長い時だ。

もうそろそろミュが姿を現しても良い頃なのだが。焦りを抱えているせいか、彼女の気配を感じ取る事も出来ない。

嫌な予感が脳裏を掠める。

「……遅いよ」

「あっ？」

こんなにも切迫している状況なのにも関わらず、アレクは素っ頓狂な声で返す。

「ミュに何かあったんじゃ……」

まさか、塔の中で倒れていたりはしないだろうか。もし、魔法の獲得に失敗してもすれば、彼女がどうなってしまうか分からない。カノンの夢も見ていたし、何よりミュは異世界人だ。俺たちとは置かれている状況が違う。

魔法の拒絶反応でも起こしたりすれば そんな最悪の結果までもが頭の中に浮かび上がり、俺の心を急かす。

「俺、見てくる！」

咄嗟に立ち上がり、地面を蹴ろうと足を前へ出した。しかし、左手首を何かに掴まれて行動は阻止されてしまった。

こんな時に、何故止めるのだろうか。振り返って、俺を見詰めるフレアとアレクを睨み付けた。それなのに、手首を握る細い手から力が抜ける事は無い。

「もう少し、様子を見ましよう？」

「陽が暮れるまでは大丈夫だろ」

二人の顔は至って真剣なのだが、今の俺には逆効果な言葉だ。

「それじゃ遅いじゃん！ 何考えてるのさっ！」

何が大丈夫なのだろうか。暢気なものにも程がある。

未だに俺を此処へ止まらせようとする手を振り払い、一気に塔へ向かって駆け出した。すると、

「……ミュっ！」

たどたどしい足取りで塔から出てくるミュの姿を捉えたのだ。その表情は虚ろで、焦点も定まっていない。

このままでは、いつ倒れてもおかしくない。すぐさま彼女へと手を差し出し、彼女の元へ辿り着くとその背中を抱いた。

そんな俺に彼女は小さく首を傾げて、ゆっくりと瞬きをする。

次の瞬間、微かに開いた彼女の口から零れた言葉は

「リザード……」

呼吸をする事すら忘れてしまった。頭の中が真っ白だ。

ミュの瞼はゆっくりと落ち、身体からも力が抜けていく。それをはつきりとしらない頭でぼんやりと眺めていた。

しかしそれは僅かな間で、俺の腕にミュの全体重が預けられる。途端、正気を取り戻す。ずり落ちそうな彼女の背中を持ち直して、膝の裏側にも片手を伸ばした。

抱き抱えた彼女の表情はとても穏やかだ。つい先程、とんでもない人物の名前を口にしたとは思えない。

「……待ってる！ 今、魔法陣を作ってやる！」

後ろから掛けられたアレクの声もくぐもって聞こえる。

何故、こんなにも驚いているかと言うと、通常このような事は有り得ないのだ。塔の中で魔法を使う力を得たとしても、その力は莫大で、慣れるにはかなりの睡眠を必要とする。前世の記憶も眠りから覚めるまで呼び起こされる事は無い。ミュが俺の前世の名前を知っている筈が無いのだ。

もし夢の中でリザードの名前を知っていたとしたら、夢の内容を話してくれた時に一緒に教えてくれただろう。

「……出来たぞ！」

あの時はカノンの名前も一言も出てこなかったのだ。名前を思い出していた可能性は低い。それなら、何故

「おい！」

「ラウドっ！」

混乱し過ぎて、簡単な反応を返す事も出来なくなっていた。

返事もせずに踵を返し、柔らかな光を放つ魔法陣へと歩み寄る。

険しい表情を浮かべるアレクとフレアに目もくれず、ダイヤへと続く道に足を踏み入れた。

会議室の扉を背にして、ミュを抱えたまま廊下に呆然と立ち尽くす。程なく両脇から放たれる光を感じたが、それにも反応出来ない。

「おい！ 早くミユを運ぶぞ！」

「うん……」

せき立てられて、ようやくワイン色の絨毯を歩き始める。まるで、宙を漂うかのよう。視界に入るもの全てに霞が掛かっている。

「あああーっ、貸せっ！」

いつまでもぼんやりとし続ける俺に苛立ちを覚えたのだろう。アレクは俺の腕の中から強引にミユを奪うと、彼女の部屋へ向かって突進を始めた。その後ろをフレアも付いていく。

俺の頭は考える事を放棄したのだろうか。今起きている状況をきちんと把握出来ない。

無意識のうちに歩を進め、何となく角を曲がる。目的の物を見つけると、まじまじとそれを見上げた。

一呼吸置き、ドアノブに手を掛ける。金属同士がぶつかり合う音も響く。

部屋のドアを開けた時には既に、ミユはベッドに寝かされていた。すやすやと寝息を立てている。

先程俺を置いていった二人はと言うと、フレアはしっかりとミユの片手を握り、心配そうに見詰めていた。アレクも腰を曲げて、ベッドに片手を付いている。

その状態のまま、アレクはミユの顔をじっと覗き込んだ。身体を支えていない手を彼女の方へと伸ばすと、閉じている瞼を指で開く。その瞳を確認すると安堵の表情へ変わり、フレアへと笑顔を向けた。

「大丈夫だ。ちゃんと覚醒が始まっている。オマエも見るか？」

それに対してフレアは軽く頷き、身体を前に乗り出す。

「……良かった。焦茶の奥に緑色の渦が出来てるわ」

わざとらしく状況を言うと、こちらを振り向いた。どうやら、俺が到着した事に気付いていたらしい。

「安心して？」

一言だけ口にする、にっこりと微笑んだ。俺も軽く頷いてみせる。

段々と冷静に思惟出来るようになっていき、ミユの顔をしっかりと確認したくなってきた。歩み寄った彼女の頬にはほんのりと赤みが差し、唇も桃色に染まっている。大事は無いようだ。

ほっとしたのも束の間、森の中で起きた事を改めて思い出すと鼓動が速度を上げていく。へなへなとしゃがみ込んでしまった。

「ビックリした……」

そんな俺をアレクは呆れ顔で見下ろす。

「そりゃ、誰だってビックリするだろ……。オマエが一番驚いただろーけどよー。まさか、あんなに早く覚醒が始まるなんてなー……」

前世の事を話したその日に、ミユの口からリザードの名前を聞く事になるとは思ってもいなかった。

にこやかに笑ったまま、フレアも言葉を繋げる。

「カノンの想いが、それ程強いつて事かしら……。百年も間が空いたものね」

そう言うと、俺の顔を覗き込んで

「ふふっ」と笑った。

フレアの話聞いてるうちに、頬が高温を発し始めたのだ。いや、頬だけではなく耳までも。恐らく、茹でダコのように真っ赤になっているのだろう。

ミュと二人きりで前世の話をした時は捨ててしまった期待が、今更ながら再び膨らんでいく。百年間想い続けたのは俺だけではなく、彼女も一緒だったのだ。そう思いたい。

俺をからかえる絶好の機会をアレクが逃す筈も無く、

「嬉しいんだろ？」

追い討ちを掛けるように冷やかしを入れる。

恥ずかしさのあまり、顔を上げる事が出来ない。

「……嬉しいよ」

嬉しいか嬉しくないか。と聞かれれば、嬉しいに決まっている。

ミュが俺の気持ちに気付いてくれるかもしれないのだから。

しかし、嬉しさとは真逆の感情も持ち合わせているのも事実だ。

「でもさ、嬉しいのと心配なのが半分半分なんだ……。複雑……」

過去を思い出せば、ミュはどうなってしまっただろうか。命の危険に晒されはしないだろうか。

一つの事を乗り越えようと、新たな問題が浮かび上がってくる。悩みが尽きる事は無い。

俯きながら

「ふう……」と小さく溜め息を吐いた。

「取り敢えず、様子を見ましよう?」

声が上がから降ってくる。

「そうだね……」

それに対し、小さく頷いてみせた。

ミュの元を離れたくはないが、これ以上此処に居てもしてあげられる事は何も無い。それにミュが目覚めた時に俺が居たら、今朝よりももっと驚かせてしまうだろう。自身の胸をも痛めるだけだ。

アレクとフレアの視線をかわし、ミュの顔を改めて眺める。彼女の頬に触れようと出しかけた手も引っ込めて

「また明日ね」と囁いた。

名残惜しいが踵を返し、出口へと向かう。すると。

「今日はオマエの部屋に戻るのか?」

後ろからアレクに声を掛けられた。条件反射で振り返ると、二人が咄嗟に立ち上がって俺を見詰めていた。

「うん。またビックリさせたくないし」

何処か違和感があるのだが、さほど考えもせず回答する。

「……そうね。その方が良くかもしれないわ」

言うなりフレアもミュの顔を眺めて、そつと微笑みを向けた。アレクもが慈しみの眼差しを向け、小さな鼻息を漏らす。

「オマエが戻んなら、オレらも戻るか。な？」

「ええ」

俺に悪いと思ってくれたのだろうか。すぐさまミュの元を離れ、三人で部屋を出る事となった。

全員が廊下へ出たのを確認すると、アレクがドアノブを引く。ドアと壁との隙間が狭くなっても、完全にドアが閉じられた音が鳴っても、しばらくの間はミュへ向けた目を離す事が出来なかった。

俺の心中を察してか、二人とも無理に急かそうとはしなかった。ようやく決心が固まってドアから視線を外せた時、アレクは俺の肩を軽く叩く。

「あんま思い詰めんな」だとか

「気楽に待つてやろう」だとか、そんな事も話し掛けてきたと思う。だが、そんな事に一々気も留めず、適当に頷くとその場を離れた。

もやもやとした感情が心に渦巻き、俺の思考を支配する。惰性で自分の部屋へと辿り着くと、すぐさまベッドに寝転んだ。ドアを閉めた瞬間にしゃがみ込んでしまいたくもなったが、そんな事をすればそのまま夜を明かしてしまうと思ったのだ。出来る事なら痛い思いはしたくない。

瞼を閉じて

「はあー……」と溜め息を吐く。

どうすれば、この澱んだ気持ちをすっきりとさせられるのだろうか。黒の魔導師の存在を完全否定してみる。ミユは安全だと信じきってみる。

いや、そんな事をしても一時の慰めにしかならない。それなら。

そうだ。ミユがカノンの事を思い出した後の幸せな日々を想像してみよう。俺に向けられる可愛い笑顔、くるくると変わる表情、彼女に触れた時の温もり

思い込みと言うものは凄い。これらを思い浮かべただけで、暖かな気持ちへと変わってゆく。

この気持ちのまま眠りに就いてしまおう。彼女を奪う者が現れるなら、俺がそいつを退けるだけだ。二度と同じ過ちは犯さない。そんな根拠の無い自信までもがみなぎってくる。

百年間、夢にまでみた幸せがすぐそこにまで迫っている。そう思っていたのに。

誰もが予想もしなかった事態に、俺の想いが脆くも崩れ去ってゆくことは

第8章 指輪

これは俺の一目惚れから始まった。光を受けて輝く髪、象牙のように透き通った肌、天使のような笑顔、彼女の全てが俺を魅了したのだ。

最初は会話もぎこちなかったのだが、今は彼女に想いを告げる事いや、プロポーズする事まで考えている。

その前段階として、今の俺は机に向かい、頭を捻っているのだが。想像したものが上手く形にならない。まさらな紙にはいびつに歪んだ曲線ばかりが描かれている。

普段は絵なんて描かないのだ。試みるにしても無理があった。

「うーん……」

長い前髪を掻き上げながら唸ってみたところで絵の出来具合は変わらない。己の才能の無さに涙が出そうになってくる。

こんな出来でも、何となくでも他人に伝わってくれるだろうか。

「カイル！ 居る？」

取り敢えず、一度カイルに確認してもらおう。とドアに向かって声を張り上げた。すると間を置かず、いつもの慌ただしい足音が響き始める。

「リザード様！ 急にどうしたんですかっ?!」

これまたいつものように轟音を立ててドアが開き、カイルが息を切らして入口に座り込んだ。

本当にいつもの事ながらカイルには呆れてしまふ。こんなに身体を酷使していて大丈夫なのだろうか。

とは考えてみるものの、呆れを態度に表してしまうとカイルを落ち込ませるだろう。何とか冷静さを保ち、描き上げた絵をそちらへ翳してみせる。

「これ、何に見える？」

あまりにも自信が無いせいか、頬の温度が上昇していく。恐らく、赤く染まっているのだろう。

そんな俺を後目に、首を傾げるカイルは衝撃的な一言を放ったのだ。

「ドーナツですか？」

きっぱりと言い切るその瞳には一点の曇りもない。本気で言っているのだろう。

悪気は無いのだろうが、こんなにもはっきりと言われると落ち込んでしまふ。折角、カイルには気を遣ったというのに。

「ドーナツって……」

ドーナツ程太く描いたつもりは無い。それに、宝石と思われる物体も描写した筈だ。まあ、色付けはしていないから、判断はしにくいだろうが。

そんなに対象となる物とはかけ離れているだろうか。もう一度見てみようとして紙をひっくり返し、隅々まで確かめてみた。だが、やはり自身で見ると、何処からどう見てもそれなのだ。

肩を落とす俺に、カイルはそれまでとは反対の方へ更に首を傾げ

る。

「じゃあ、何ですか？」

「指輪だよ……」

中央に埋め込まれた宝石、細い曲線、金属を彷彿させる艶、拙くはあるが、どう考えてみても指輪だ。

「シルバーのリングで、此処が石。青い石と緑の石のペアリングのつもりなんだけど……」

頭を掻きながら、どうにか説明してみる。すると、カイルの表情がみるみると明るくなっていったのだ。『青』と『緑』という言葉に反応したように見える。

「リザード様！　もしかして、カノン様に……！」

流石は俺の使い魔だ。指輪の話をしただけで、瞬時に状況を察知したらしい。カノンの事は一度もカイルに話した事が無いのだが。

「まだ決まった訳じゃないよ！　もし、出来たらの話で……」

手に持っていた絵を思わず床に落とし、両手を大きく左右に振りながら咄嗟にはぐらかしてしまった。

しかし、カイルの顔はにやけていくばかりだ。

「分かりました！　それを買ってくれば良いんですねっ？　大丈夫です！　もし似たものが見つからなかったら、特注で作らせますか

ら！」

捲し立てるように言い切ると、俺の顔も真面に見ずにすくっと立ち上がった。そのまま出口へと突進していく。

「……待つて！ もう少し説明した方が」

「私に任せて下さい！」

俺の訴えは見事に無視されてしまった。カイルの声を残してドアは再び轟音を立てる。

カイルの事だから、最初から歪んだ絵のままに指輪を探し出そうとするかもしれない。特注なんかされたら、どんな出来になるのだろうか。歪んだ指輪なんて、絶対にカノンには渡せない。

頭を抱え、しばらくの間はその場にうずくまっていた。

数時間後には、カイルは部屋へと戻ってきたのだが。城下街で納得のいく指輪が見つからなかったらしい。先程予告していった通り、特別注文をしてきたそうだ。

頭を過ぎった不安が現実になるのではないか。指輪が届くまではずっと心配で堪らなかった。しかし、思っていたよりもカイルは単純ではないらしい。

数日後に届いたそれを渡された時には、不覚にも感動で瞳が潤んでしまった。滑らかなシルバーの曲線、目が眩む程に輝く宝石、しなやかでシンプルなデザイン、そのどれもが思い描いていた通りだ。ただ、一つの指輪に同じように並んでいて欲しかった青と緑のそれぞれの宝石がカノンの物には緑、俺の物には青、と分散してしま

っていたのだが。

たったこれだけの過ちのために、カイルに再び買出しへ行かせるのは酷だろう。そう思い、その場は素直に感謝を表した。

この指輪のように、俺たち自身までもが引き離される事になるうとは予想すらしていなかったのだ。あの、不吉な噂を耳にしていたとしても。

影が現れる所、災いが起きる

誰からともなく広がり、世間を騒ぎ立てる。根拠があるのかすら分からない。

カイルからこの噂を聞いた時も、実は半信半疑だった。何しろ、自分では影を見た事は無いのだ。まあ、災いは起きていないのだから、影が現れる事も無いのだろうか。

それよりも、世界の異変に敏感である筈のカイルが「ただの噂でしょう」と言っているのだ。信じられる訳も無い。

しかしその数日後、事態を重くみた他の使い魔たちが騒ぎ出し、緊急会議を行う事となった。

カノンに会う機会が増えた。それだけでもありがたい。そんな風に、気楽に考えていたのだが。

まさか、本当に災いが降り掛かろうとは。しかもサファイアだけではなく、世界中に

それは会議が行われる筈だった日の朝、予兆も無く始まった。

いつもよりも寝坊をしてしまった俺は、布団の中で唸り声を上げながら伸びをする。だが、その動作は途中で止まってしまった。

何処かから聞き慣れない音がするのだ。ふと気付き、部屋の中を見回す。すると、

「まさか……」

大量の水が窓に打ち付けられていたのだ。いや、ただの水ではない。雨だ。

サファイアに雨が降るなんて前例が無い。雨になる程気温が上昇しないのだから。

こんなの、ただ事ではない。慌てて身体から布団を引き剥がして窓際へと駆け寄る。

眼下に広がる景色は雪化粧が施された街並みではなく、思い思いの色に塗られた色とりどりの屋根だ。あんなに積もっていた雪が溶けるとは、一体どれ程の間雨が降り続けているのだろうか。

それ以前に、大量の雪が液体へと変わったという事は地上がどうなっているか。深く考えなくとも予測は出来る。

みるみるうちに顔から血の気が引き、口元も目尻も引きつっていき。とその時、ドアが大きく開け放たれた。

「リザード様……！ 大変です……！」

倒れ込むカイルの息はいつも以上に上がり、目もすっかりと開けていられない状態だ。喋る事も困難なのではないだろうか。

「カイル！ 何で雨が」

「それだけじゃ、ないんです……！」

「えっ……?」

『それだけではない』とは、一体どういう事なのだろうか。真面に返答出来ずにいると、カイルは更に言葉を絞り出す。

「津波が……来ます!」

「何……だって……?!」

ようやく声を発した時には、こちらにまで波の音が微かに聞こえるようになっていた。地響きのような、雷鳴のような何とも言いえない音だ。改めて窓にかじり付く。

此処は王都だから、街の周りには城壁が張り巡らされている。この部屋がある塔にも劣らぬ高さだ。空色に塗られた城壁と空との間には、僅かに波頭が確認出来る。

王都は大陸の中心にあるのだが、此処まで波が到達したという事は、途中に点在する町や村を飲み込んだのだろうか。

「そんな……っ!」

これ以上、被害を広げる訳にはいかない。俺が何とかしなくては。両手を左右に大きく広げて精神を集中する。と同時に、足元から風が巻き起こった。

「リザード様……! 何をする気ですかっ?!」

「あれを……止める!」

言い切ると、出来る限りの魔力を放出していく。あれ程の津波を止めるなど、並大抵の力では無理だ。

少しでも勢いが衰えてくれれば良いのだが。そう思ったが、波の勢いは止まるところを知らない。無情にも、俺の体力ばかりが奪われていくだけだ。

遂に立っている事さえ難しくなり、床に膝を付いてしまった。息は上がり、目眩もする。

「もう無理ですよ！ 逃げましょう！」

いつの間に近付いてきたのか、カイルは俺の腕にすがり付く。

『逃げる』それは『サファイアを見捨てる』という事を意味している。この国には俺の両親も居るし、幼い頃に慣れ親しんだ友人だつて居る。そんな卑怯な事を出来るものか。

「そんな事したら、この国の人たちはどうなるのさっ！」

溜まらず、振り返ってカイルを睨み付けた。が、それよりも強い瞳が俺を貫く。

「この国の人々のために逃げるんです！ 自分の身を守れない者が、他人を守れますかっ？！ 此処に留まり続けるなんて、魔導師にあるまじき行為です！ カノン様にも会えなくなりますよ？！」

捲し立てると、カイルは俺の腕を力強く引いた。

「行きますよ！」

こんなにも強く言われては言い返す言葉も無い。

声にならない声を発し、咄嗟に机の引き出しを引いた。此処には俺とカノンのペアリングが入っているのだ。それらを鷲掴みにすると懐に収め、後ろ髪を引かれる思いでダイヤへと向かった。

俺の気持ちとは裏腹にダイヤの空は澄み渡り、途方も無く広がっていた。緑色の穏やかな波がさわさわと音を立てる。

俺が草原に倒れ込んだ時には既に、他の三人も到着していた。皆の息遣いを聞けば、何かが起きたのだろうと予想するのは容易い事だ。

混乱するヴィクトや叫び出すアイリスに目もくれず、真っ先にカノンの姿を確認した。

「…………カノン、怪我してない？」

慌ててエメラルドを飛び出してきたのだろう。彼女は額から汗を流し、両手を地面に付いて肩を大きく上下させていた。腰まで届く長い髪も僅かに乱れ、耳から零れ落ちていく。

俺の問い掛けに、彼女は顔を上げると頬をほんのりと赤く染めた。

「…………うん！ アリアが守ってくれたから」

こちらへ向けてくれる笑顔に、ほっと胸を撫で下ろす。だが、『アリアが守ってくれたから』怪我をしていない。そう意図させる言葉に自然と鳥肌も立つ。

もしアリアが居なかったら、カノンはどうなっていたのだろうか。その時の状況は分からないが、アリアに感謝せずにはいられない。

皆疲れきっているのだが、いつまでもこんな所に留まっている訳にもいかない。互いの無事を確認し終わると、早々に会議室へと移動した。

腕を組んでみたり頭を抱えてみたり、それぞれが思い思いの体勢で思考の海に沈む。唸り声を上げるものの、思いが言葉になる事は無い。

大切な者を国に残してきたのは全員同じなのだ。俺のように、後悔と懺悔の念が押し寄せているのだろう。

しかも、天変地異が起きた原因が分からない。まさか噂通り、本当に『影』の仕業だとも言うのだろうか。

叫び出したい衝動に駆られ、気を紛らすために首を左右に振ってみる。とその時、カノンの異変に気付いたのだ。

目を丸くし、口を半端に開けている。唇は小刻みに震え、頬から血の気も引いていた。尋常な様子ではない。

「カノン？　どうかした……？」

そつと声を掛けると、驚いたように肩まで震わせる。一体、どうしたと言うのだろうか。

カノンに首を傾げてもみせたが、答えてはくれない。ただ、細く白い指で扉の方を指すばかりだ。

疑問を持ちながらも、その指の先にあるものを目で追っていく。

一瞬、自分の目を疑った。

そこにあつたモノとは、

「ワタシが、そんなに恐ろしいか？」

まさしく『影』と呼ぶにふさわしいモノだったのだ。漆黒の闇色に染められたローブを羽織り、薄ら笑いを浮かべる。瞳は赤黒い光を放ち、細く吊り上がってもいる。

まさか、『影』が本当に存在したとは。しかも、スティアとは違う次元にあるダイヤに現れるなんて。

底冷えする声が空気を振動させ、身体がざわつく。恐怖もじわじわと沸き起こってくる。

だが、それとは別に、何か違和感のようなものも感じるのだ。言葉を発しない俺たちに、影の目元は更に吊り上がった。

「フツ……。そうして、ただ見ているが良い。その間にワタシが世界を壊してやる……」

『世界を壊す』。今まで信じていなかった噂話を連想させる言葉だ。

目前に居る影が、果たして世界を壊せる程の力を持っているのだろうか。ダイヤに來れた時点で、それ相応の魔力はあるのだろうか。訝りながら、隅なく影の姿を確認していく。と先程感じた違和感の原因に気付いてしまったのだ。

そんな筈が無い。とは思いながらも、否定しきれない自分が居る。なんと、影の額の中央部には

「ワタシの名はジュエルだ。覚えておいてくれたまえ。また、いずれ会う事になるだろう……」

黒光りする物体が埋め込まれていたのだ。

見れば見る程、俺たちにも備わっている物を思い起こさせる。形、大きさ、付いている場所、どれを取ってみても魔導石だ。

自分が出した結論に頭が付いていかない。信じられる訳も無い。人間でもない『あれ』が俺たちと同じ魔導師だとも言うのだろうか

か。スティアには俺たち四人以外に魔導師は居ない筈ではないか。影の話も真面に聞けず、啞然とその姿に息を飲む。そうしている間に影の身体は足元の方から透けていき、最後には跡形も無く消え去っていた。

どれ程の間、影の佇んでいた場所を眺めていたか分からない。が、目に映る物は思考に邪魔され、脳には伝わってこない。

あの黒く不気味に光る石が目焼き付いて離れないのだ。

「あいつ、魔導師だった……」

無意識のうちに自然と零れ落ちる。

ほんの数秒、間を置いて別の人物が乱暴に口を開く。

「……はっ？ オマエ、何言ってるんだ?!」

ヴィクトだ。

何を言っているも何も、そのままの意味ではないか。霞のかかったような頭で、一応思考を巡らせてみる。

「だって、額っばい所に黒い雫形の石が付いてたし……」

「はぁーっ?!」

間拔けな叫び声ですら、きちんと聞こえない。耳の穴に指を突っ込んだ時ように音がこもっている。

その声を最後に、部屋の時間は止まってしまった。

とは言っても、いつかは動き出すものである。何とか冷静さを取り戻し、再び各々思いに更ける。

しかし、考えてみたところで何かを閃く訳でも無い。時間ばかりが無駄に過ぎていく。とそんな時だった。

「皆様っ！ 大丈夫ですかっ?!」

けたたましい音と共に、カイルの声が部屋中に響き渡ったのだ。

よくよく見てみると、入口で険しい表情を浮かべているのはカイルだけではなく、四人の使い魔全員だった。

詳しく話を聞き出すと、なんと影は使い魔の元へも出向いたらしい。その意図は不明だ。単なる脅しのつもりなのだろうか。

しかも、使い魔たちも影の魔導石を目撃していたのだ。にわかには信じがたいものが現実となってしまった。

次の日、俺たちは影を倒す術を見つけるため、そして影を追い詰めるための旅へと出る事になる。

「んー……」

暗がりの中で寝ぼけながら目を擦り、もう片方の手で身体を覆っている物の感触を確かめる。

ふかふかと柔らかくて握ると潰れてしまう。これは布団だ。いつの間に眠ってしまったのだろうか。しかも、またリザードの夢を見るなんて。

「はぁー……」

大きな欠伸をして、頭から布団を被ってみる。重い瞼を閉じてしまえば、また眠ってしまいそうだ。

別に、睡魔に抗う必要なんて無いのだが。

「うーん……」

ただ、あの夢の続きを見るのは嫌だ。もっと幸せな夢が良い。今度こそ、良い夢が見れますように。祈りながら、そっと瞼を閉じる。

段々と、深い眠りへと誘われていく

第9章 崩壊

鳥の鳴き声とテントに吹きつける風の音で目が覚めた。

難なく影を倒す術を手に入れた俺たちは、次の目的である影の情報収集をエメラルドで行っているのだが。迂闊にもテントを張り終えた途端、疲労のせいで眠りに落ちてしまったらしい。休憩中、ヴィクトとくだらない魔法対決なんかしなければ良かった。

こんな風に思うのには理由がある。故か胸騒ぎがするのだ。手には汗が滲み、感情がざわつく。

誰かにとんでもない何か起きたではないだろうか。まさか、それがカノンだったら。

「……カノン？」

不安で堪らなくなり、彼女が居るべき部屋へと呼び掛けてみる。

テントの中は四つに仕切られているから、この位置では彼女の姿を確認出来ないのだ。

カノンからの反応は無い。

「カノン？ 居るなら返事して？」

繰り返してみるものの、やはり返事は無い。

眠っているだけならば良いのだが。彼女の顔を見ようと、俺たちを隔てる三角形のドアに手を掛ける。

その時だ。

森中の空気を、地面を振動させるかのような破裂音が響いてきたのだ。

ただ事ではない。と咄嗟に方向転換をして外へと飛び出した。四方を確認してみるものの、何処でそれが起きたのかが分からない。視界は闇に覆われているのだから。

一呼吸遅れて、背後で誰かが忙しく動き回る音がし始める。

「……おい！ 何があつたんだ?!」

振り返るとそこには、手にするランプに照らし出されたヴィクトの姿がぼんやりと浮かび上がっていた。険しい表情で俺を見下ろす。

「そんなの分かんないよ!」

分かるなら、とつくにヴィクトを置いてそちらへ向かっている。声を張り上げる俺に、ヴィクトは更に顔を歪ませた。

「アイリスとカノンは何処行つたんだ?!」

「えっ……?!」

カノンが居ない。その言葉に、みるみるうちに血の気が引いていく。アイリスの事は忘れ、カノンの部屋の前へと駆け寄ってドアを押し開けた。

本当にカノンが居ない。部屋に敷かれた布団は平らに萎んでいる。

「何で……居ないっ?!」

あの胸騒ぎが当たってしまったのだろうか。いや、そんな筈はない。すっかり我を忘れてしまい、部屋の中を四つん這いで歩き回ると突然、ヴィクトのごつい手が俺の腕を掴んだのだ。

「おい、あつちだ！ 行くぞ！」

真後ろを指差し、顎をしゃくる。

「……分かった！」

何も分からない今の俺はヴィクトの勘を信じて後を付いていくしかない。

どうか無事で居てくれ。嫌な予感が外れてくれ。心の中で叫びながら地面を蹴った。

「何でこつちだと思っのさ！」

森の中を駆け抜けながら、数歩前を走るヴィクトに声を掛ける。手にしているランプは大きく左右に揺れ、仄かに木々の隙間を照らし出す。

しかし、こんな闇夜では、遠くの物は殆ど見えない。それなのに、ヴィクトは迷う事無く歩を進めるのだ。

「あつ?! なんの、空気の匂いが違うからに決まってるだろ！」

振り返りもせずに答える。

「空気の匂い？」

「そつだ！」

どうやら、ただ単に勘で走っているのではないらしい。ヴィクトは一応風の魔導師だから、そういった能力も備わっているのだろう

か。

と、そんな事を考えている場合ではない。

「何で爆発なんか……。アイリスが魔法で何かしたのかな……」

俺たちの中で爆発を引き起こせると言えば、炎の魔法を使えるアイリスしか居ないのだ。俺とヴィクトが魔法対決をしたように、カノンとアイリスもふざけ合っているだけなら良いのだが。しかし、ヴィクトはそんな考えをばつさり否定する。

「いや、違えな。物が焦げる臭いがしねー」

爆発が起きたのに、炎は上がっていないと言うのだろうか。

脳裏に『あるモノ』が浮かび上がる。が、そんな事があってはならない。もし現実となっていれば、二人はどうなっていると言うのだろうか。

頭を左右に振り、最悪のシナリオを払いのける。とその時だ。

「……おい、居たぞ！」

ヴィクトは真っ直ぐに前を見詰め、指を差した。その先には確かに、

「カノン！ アイリス！」

二人の姿があったのだ。見つかって良かった。と思ったのも束の間、その様子の異様さに気付く。

なんと、カノンは木を背にして倒れているではないか。

ランプも放り投げ、残ったヴィクトとアイリスの灯りを頼りにカノンの元へと駆け寄った。

「カノン?! しっかりしてっ!」

彼女の上半身を抱え上げて大きく揺さぶってみる。それなのに、全く反応をしてくれない。瞼も閉じられたままだ。

何故、こんな事になってしまったのだろうか。俺が眠ったりしなければ避けられていたのだろうか。後悔ばかりが頭を過ぎっていく。一方、ヴィクトは不意に声を張り上げる。

「オマエ、カノンに何したっ?!」

「フッ……」

鼻で笑うその声に身体が凍り付いた。

この声には聞き覚えがある。ダイヤで聞いた、あの声だ。

何故、今まで気付かなかったのだろうか。こんなにも強烈な殺気を放っているのに。

恐怖と怒りに苛まれながら視線をゆっくりと移動させていく。そこには不気味に赤黒く光る細長い物が二つ並んでいた。

「答える!」

ヴィクトが凄んでみても、影は身動き一つしない。

しかし数秒間を置いて、地の底から湧き上がるような、低く唸る小さな声が辺りに響き始めたのだ。同時に視界がぼやけ、頭の中に霞がかかっていく。立っている事さえままならなくなり、カノンの横に倒れ込んでしまった。

まさか、影はこのまま逃げるつもりなのだろうか。カノンを酷い

目に遭わせておいて。そんな事、俺が許さない。

「影……っ！」

必死に手を伸ばして抵抗を試みる。だが何も出来ないまま、意識を手放してしまった。

俺が再び意識を取り戻した時には、既に日付は変わってしまった。木漏れ日が降り注ぎ、倒れたままの俺たちの身体に光の模様を作る。

「う……」

呻き声を上げながら膝と両手を地面に付き、何とか起き上がった。近くでも物音がするから、ヴィクトとアイリスも目を覚ましたのだろう。

しかし、カノンは

「……カノンっ！ 目を開けて！」

すぐさま近寄って彼女の身体を抱き抱えても、びっくりとも動こうとはしない。

このまま目覚めなかったら。そんな恐怖までもが沸き起こり、強く揺さぶってみる。それでも駄目だ。

こちらに近付いてきたヴィクトとアイリスを気にも留めず、声を

掛け続けた。

アイリスが口を開いたのは、それから間もなくの事だ。

「何……この、痣……」

カノンの胸を指差して声を震わせる。同時に視線を移動させると、その先には確かに、いくつもの円を組み合わせたような赤黒い痣が浮かび上がっていたのだ。

こんな痣は今まで見た事が無い。何なのだろうか。

「カノン！ カノン……！」

怖くて堪らない。どうか目を覚ましてくれ。心の中で必死に叫びながら、彼女の身体を揺さぶり続ける。

すると。

閉じられていた瞼がゆっくりと動き始めたのだ。その下から緑色の瞳が姿を現す。

一時はほっと胸を撫で下ろしたが、まだ安心は出来ない。

「カノンっ！ 大丈夫?!」

声を掛けても虚ろな瞳がこちらを向くだけなのだ。

「カノンっ！ 何があったの?! 影に何された?!」

少しでも反応してくれ。と声にも、彼女を抱く腕にも更に力を加えた。

カノンは一度、僅かに首を傾げる。そして、ゆっくりと正面に向

き直って俯いてしまった。何か思い詰めたような、そんな表情だ。

この直後、彼女の様子は豹変してしまう。

「アイリスっ！ あなた、知ってたの？！ 何であそこに居たの？！」

涙で潤んだ瞳を思い切り吊り上げてアイリスの左頬を平手打ちしたのだ。しかも、俺の腕を強引に振り払って。

突然の行動に驚いてしまい、対処が出来ない。

叩かれたアイリスはと言うと、零れ落ちそうな程の涙を浮かべてカノンを見詰めるばかりだ。

「何の事を言ってるの……？！ 知らないわ！ ホントよ！」

言いながら、必死に首を横に振る。

状況が全く飲み込めないのだが。カノンはアイリスが何を知っていたと言っのだろうか。

しかし、暢気に考え込んでいる場合ではない。カノンは未だに右手を上げ、しゃがみ込むアイリスに向かって今にも振り下ろしそうなものだから。

「カノンっ！ 落ち着いて！」

これ以上、カノンに暴力を振るわせる訳にはいかない。二人の間に何があったのかは知らないが、仲間で争うなんて不毛ではないか。俺たちの敵は影なのだ。

振り上げられている腕をも包み込むようにして、カノンの身体に後ろから抱き付いた。

今度は彼女の鋭い視線が俺に向けられる。それだけではない。

「放してっ!!」

彼女の自由を奪うこの腕を小さな拳で叩き、それでも放さないと分かると、次は思い切り引き剥がしにかかる。足まではたつかせて。普段の彼女からは考えられない行動だ。

ヴィクトも隙を見てアイリスを抱き抱え、カノンから遠ざける。途端、カノンは抵抗を止めて大人しくなった。手からも力が抜けて、だらりと地面に落ちる。

「カノン……。何があったのか、俺に話して」

彼女の頭を撫でながら、耳元で囁いた。

何とか彼女の気を楽にしてあげたい。と考慮した結果だったのだが、それは何の慰めにもなっていないのだろうか。カノンは俺の顔を見ようともしてくれない。話をしようともしてくれない。

長い沈黙の後、ようやく口を開いたカノンから発せられた言葉は予想外のものだった。

「お願い……。少しだけ、お城に帰らせて……」

声を震わせ、消えそうな程の音量で囁く。

一瞬、言葉に詰まる。

「でも……カノン」

「お願い……」

その弱々しい声とは対照的に、他者の意見など全く受け入れそう

にない強さも感じさせた。

返事を待たずにカノンの身体は光を放ち始める。直後、彼女の温かな感触は俺の腕の中から消え去ってしまった。

アイリスの泣き声ばかりが響く森の中で、呆然と自分の両手を見詰める。

何をどうすれば良いのだろうか。カノンの後を追おう。とか、アイリスを問い詰めよう。とか、そんな事は考えつかない。心配や不安が心の隅から隅までを覆い尽くしている。

風が何度となく髪を靡かせ、アイリスが泣き止んでも、カノンはしばらくの間戻っては来なかった。戸惑いのせいで殆ど身動きも出せず、酷く遅く流れていく時に身を任せる。

どれ程の間、そうしていたのだろうか。視界が急に明るくなったのだ。顔を上げてみると、確かにそこにはカノンの姿があった。

「カノンっ!」

反射的に身体が動いて彼女の元へと走り寄る。恐らく、それは俺だけではない。ヴィクトもアイリスも、だ。そんな俺たちを見て、彼女の表情は険しくなっていく。

「カノン! どうしたんだよ?! 頼むから、話して……!」

彼女の肩を掴み、顔を覗き込んだ。しかしその瞬間、緑色の瞳は脇へと流れる。

それでも

「うん……」と小さく返事はしてくれた。あまり感情を込めていない、素っ気ないものだったが。

彼女は一度溜め息を吐き、嫌そうに言葉を紡ぎ始める。

「あのね。二日後に、全て終わるって言われた。だから明日……。それで最後に、光の玉をぶつけられたの……」

「……明日?!」

思わず叫び声を上げてしまった。

明日、影は世界を終わらせると言うのだろうか。何故、そんなに急に。しかも、それ程までに重要な事を俺たちには言わずに気絶させるなんて。

それに、カノンに光の玉をぶつけた理由は何なのだろうか。分からない。彼女の胸に現れた痣だってそうだ。

カノンは何か隠しているのではないだろうか。彼女の反応も疑わしく、そんな疑心暗鬼に捕らわれていく。確認せずにはいられない。

「……ホントにそれだけ?」

「……えっ?」

「だってそれだけで、泣き叫んだり、急に居なくなったりする……?」

どう考えてみてもおかしい。旅の途中で、一人で城に戻る事自体がどうかしている。大体、それではアイリスを叩いた理由が無いではないか。

俺の目を見詰め返す瞳は小刻みに揺れ、まるで子猫のようだ。

「……明日、全部終わった話すから」

小声でそれだけを言うと、目を逸らしてしまった。だが、彼女の発する強いオーラが足りない言葉を補っている。

深くは聞くな。と命令されているような感覚に陥る。

「約束……だよ？」

納得は出来ないが、他に言葉が出てこない。

そんな俺に、彼女も無言で頷いた。

明日、世界を終わらせようとするのなら、影の方から俺たちに接触してくる筈だ。

歩き続けなくてはいけない理由は無くなった訳だが、ヴィクトの『一般人を巻き込まないように』という名目の元に、未だに俺たちは歩を進めている。

頭上に生い茂る葉が日光を遮り、昏間だと言うのに薄暗い。獣道のように細いそれを分け入っていく。

そんな心配は無いのだが、はぐれてしまわないように。とカノンの手をしっかりと握った。

だが、彼女の温もりを感じていると、不安ばかりが込み上げてくる。先程言い渋っていた内容が気になって仕方無い。段々と空を覆う葉が少なくなり、日差しが強くなっている事にすら気付かない程だ。

しかし突然、そんな俺にも感じる事の出来る変化が起きたのだ。前方から差し込む光に目が眩む。

海が いや、湖が現れたのだ。降り注ぐ光が穏やかな水面に反

射し、俺たちを照らしている。光の合間から見える湖は透き通った空色だ。対岸が確認出来ないから、相当な大きさの湖なのだろう。海と見間違えるだけの事はある。

突如出現した光景に目を奪われていると、手を繋いだままのカノンが口を開いた。

「此処にしよう？ テント張るの……」

その様子は何処か遠慮がちだ。

彼女の呟きに、数歩前を歩いていたヴィクトとアイリスが振り返る。

「でもよー、まだ明るいぞ？」

そうは言うが、明るいから歩かなくてはいけない。という制約も無い。

彼女が望むなら。と口を挟んでみる。

「良いじゃん」

それに、カノンとゆっくりと話すのならば落ち着ける場所の方が良い。

やはり、先程のカノンの返答では釈然としないのだ。昨夜は一体何が起きたのか、その真相が知りたい。そうしなければ、沸き起る不安も払拭出来ないのだから。

カノンを見据え、慎重に言葉を紡ぐ。

「カノン……一緒に来て？」

「えっ？ うん……」

返事を聞くや否や、彼女の手を握っている手に僅かばかりの力を込める。ヴィクトとアイリスの顔色を気に留める事無く、強引に湖の畔を目指した。

水面の美しさとは対照的な灰色に染まる湖畔に辿り着くと、どちらからともなく腰を下ろす。草は生えておらず、小石ばかりで座り心地は悪いのだが、カノンは文句一つ言わない。

立てた両膝の上に肘を置き、指を固く組み合わせる。

「やっぱり、俺、心配で……。そんな痣、前は無かったよね……。？」

輝く湖が視界を覆うものの、心には映っていない。カノンの気配の変化を敏感に察知しようとしている。

俺の問い掛けに、彼女の居る側から微風が吹く。

「明日終わったら、全部話すから……」

「でも俺」

「お願い……！」

反射的にカノンの方を向くと、鋭いまでの瞳が待っていた。揺るぎない、確かな眼差しに追及の言葉を失う。

「分かった……」

そう返すだけで精一杯だ。

そのままカノンも話し出そうとはせず、時間ばかりが流れていった。

木の葉のざわめき、打ち寄せる小さな波の音、そよ吹く風、眩い太陽の光　そのどれもが、俺の五感を刺激するには足りない。心にのし掛かる闇の方が勝っている。

しかし、何故だろうか。

「私、話があるの……」

突如発せられたカノンの声は確実に心へと響く。

ふと視線を移動させると、彼女は上目遣いで俺を見詰めていた。

「……何？」

上手く笑えてはいないかもしれないが、何とか笑みを作ってみせる。

「リザード……」

「……ん？」

俺が首を傾げると、カノンの頬は桃色に染まる。

「……好き」

「俺も……」

返事をした瞬間、顔中の血液が沸騰したかのような感覚に陥った。

俺も告白する台詞は考えていたのだが。まさか、こんなタイミングで彼女の方から告白されるとは。

思いも寄らない出来事に、恥ずかしくて無意識のうちに人差し指で頭を掻いていた。すると、カノンが笑い始めたのだ。

別に、笑われるような事をしたつもりは無い。何故、笑っているのだろうか。

そんな不満が顔を覗かせたのだが、すぐに消え去っていた。俺の傍には想いが通じた最愛の人が居るのだ。閉じ込めていた欲求が姿を現す。

薔薇色に染まる唇に自身の唇を重ねた。そうする事が当然だとでも言うように。

先程までは無機質に感じられた物全てが、今は温かく感じられる。空、陽、湖、草木、空気さえも、俺たちを祝福してくれているような。そんな気がした。

俺にはちょっとした計画があった。誰にも言ったことは無い。勿論、カイルにも。

「俺、カノンに見せたい場所があるんだ！」

言いながら瞼を閉じ、魔法陣を描くための杖を取り出した。先を地へと向けて図形を形作っていく。

そんな俺に、カノンの表情が僅かに曇る。

「何処に行くの？ ヴィクトたち、心配しちゃうよ？」

彼女の言う通り、空は金色の光を放ち始めていた。水面の色も微かに変わっている。

だが、そんなもののせいで一生に一度の計画を崩されたくはない。ヴィクトとアイリスは待たせておけば良い。とかなり自分勝手な結論へと行き着いた。

「大丈夫！ ……出来たっ！ 来て！」

「……うんっ！」

杖をしまいながらもう片方の手を差し出すと、カノンも笑顔で答えてくれる。

彼女の手を引き、躊躇う事無く淡い光の中へと足を踏み入れた。

どうしてもカノンを連れてきたかった場所。それは真つ白な小花だけが咲き誇る一面の花畑だ。

雪国であるサファイアにそんな場所がある筈が無い。かと言って誰かに連れてきてもらった場所、と言う訳でも無い。

覚醒と同時に流れ込んできた風景、それが此処だった。俺自身、此処がどの大陸にあるのかは分からない。それでも、その風景が存在するという事だけは確信していた。何故なら、それを思い起こすと、何とも言えない懐かしさが込み上げてくるのだから。

記憶と変わらず、風は優しく花を撫でて花びらを舞い上げる。空を覆うものは何一つ無い。まるで、雲の上にも居るかのような感覚だ。

「……綺麗でしょ？」

隣に居るカノンへと微笑み掛けるが、返事をしてくれない。恐ら

く、この景色に見惚れているのだろう。

それにしても、かなり分かりやすい反応だ。カノンの顔からは表情が消え去り、筋肉も緩んでしまっている。

「……カノン。口、開いてる」

見たままを言っただけなのだが、彼女にとっては唐突な言葉だったらしい。肩をびくつかせてこちらを振り向くと、普段よりも瞼が開いていた。

「へっ？ だって此处、綺麗過ぎるんだもん……」

「でしょ？ カノンなら、気に入ってくれると思ったんだ！」

一応、カノンの好みは分かっているつもりだ。やはり、この場所を選んだのは正解だった。

作戦の第一段階が成功に終わり、思わず笑顔が零れる。だが、安心してばかりはいられない。本番はこれからなのだから。

おもむろに懐へ手を伸ばして、ずっとしまっていた物を取り出した。途端に鼓動は速度を速め、手も汗ばんでいく。取り出した物が転がり落ちてしまわないか冷や冷やしてしまう。

「……カノン。これ、受け取って欲しいんだ。渡すなら此处だって決めてたから」

言いながら小さい方のそれを指で摘んでカノンへと差し出した。

あの結婚指輪だ。

中央に埋め込まれた緑色の宝石や、緩やかな曲線を描くシルバー

の金属が光を乱反射させ、眩い程の輝きを放っている。

カノンは指輪を食い入るように見詰めて、そっと指差す。

「それ……」

「……うん。受け取って……くれる？」

果たして、この指輪を気に入ってくれるだろうか。それ以前に、俺の申し出を受け入れてくれるだろうか。

緊張のあまり、喉を鳴らして生唾を飲み込んでしまった。顔が熱を帯びていく。

一方カノンはというと、指輪を見詰めたままで顔を上げようとはしない。沈黙が続けば続く程、不安が降り積もっていく。とそんな時に。

「断る訳……無いよっ……！」

震える声で、そう答えてくれたのだ。瞬間、不安が幸福へと姿を変えた。

「俺たち、ホントは結婚なんて出来ないけど……気分だけでも、ね？」

「うんっ。ありが……とう……っ」

そうなのだ。互いに愛し合っていたとしても、一緒には生活出来ない。魔導師であるが故に。

まあ、文句を言ってもどうにもならない事なのだが。

気持ち切り替えて言葉を繋げる。

「じゃ、左手……出して？」

指輪を摘んでいない方の手も差し出し、彼女の行動を促す。すると、彼女の手がゆつくりと持ち上がった。

震えるか細い左手に自分の左手を添えて、俺には小さ過ぎる指輪を小指にはめていく。慣れない事をするから、俺の手まで震えてしまった。

何とか成し遂げると、もう一つの指輪も懐から取り出す。緊張のせいで自身の指にはめるのも一苦労だ。

それが終わると、カノンの顔の高さに左手を掲げてみせる。勿論、指輪のはめてある親指を強調させて、だ。

「これでお揃い」

恐らく、カノンの目には輝きを放つ青色の宝石が埋め込まれた指輪が映っているのだろう。

一世一代の大舞台を終えて、ほっと胸を撫で下ろす。束の間、カノンが俺の胸に飛び込んだきたのだ。

驚いてバランスを崩しかけたが、すぐに体勢を立て直す。

「……カノン？」

カノンは俺の服を握り締めて鼻を嚙る。もしかして、泣いているのだろうか。

「嬉しくて……」

声も先程にも増して震えている。

こんなに喜んでくれるとは思わなかった。計画した甲斐がある。俺にまでカノンの感動が伝染し、目から涙が零れ落ちた。

「また、来よう……」

語りかけてみるが、カノンは返事をしてくれない。不意に小さな不安が押し寄せる。

「……どうか、した？」

「ううん。また、来ようね……」

俺の感情を察知してくれたのか、カノンは顔を上げてにっこりと微笑む。そんな彼女を強く抱き締めた。

俺はこれからもずっと幸せでいられる。そう信じていたんだ。

例え明日、戦いの火蓋が切って落とされる事になろうとも。約束の無い未来であっても。俺たちなら乗り越えていける。そう、思っていたんだ

第10章 連鎖するモノ

真っ白な天井、そこにぶら下がる小さなガラス細工が散りばめられたシャンデリア、視界の隅に映る青い家具類、その全てに霞がかかっている。目尻には何か違和感もある。

もしかして、俺は泣いているのだろうか。

ベッドに横たわったままで目を擦る。するとやはり、指には水で濡れた感触が残った。

今になって、あんな夢を見るとは。覚醒のために眠りへと就いているミュの影響を受けたのだろうか。儂い幸せだった。

胸元に手を伸ばし、おもむろに首に掛かるチェーンを取り出す。

いつものように先端ではカノンの指輪が揺れている。カーテンの閉め切られた薄暗い部屋でも、僅かな光を反射させて輝く。

「ミュ……」

夢で見たカノンの笑顔とミュの笑顔が重なり、彼女の名前がぼろりと漏れた。

今日こそはミュも俺の事を受け入れてくれるだろうか。きちんと話が出るだろうか。取り留めの無い思いが次から次へと浮かび上がっては消えていく。

そうしている間に、指輪を持ち上げている腕がだるくなってしまった。指輪ごと腕を胸の上に乗せ、溜め息を吐いた。

今日、機会があればミュにこの指輪を渡そう。俺が本当に必要としているのはカノンと歩んだ過去ではなく、ミュと紡いでいく未来なのだから。

なんて格好の良い事を考え付いてみるが、実際、指輪を持たせる事でミュを繋ぎ止めておきたいだけなのかもしれない。もう、二度

と俺の元から離れてしまわないように。失ってしまわないように。ミユの気持ちを知りもしないのに、自分勝手だな。などと軽く悪態を吐いて嘲てみる。

部屋の中へ光を取り入れるため、朝だと言うのに重たい身体をベッドから引きずり出した。

カーテンを一気に開けて、全身で朝日を浴びる。

窓に映っているのは真っ白で柔らかかそうな雲と抜けるような青空、風で波打つ草原だ。こんなにも清々しい景色なのに、何故、俺の心は晴れ晴れとしないのだろうか。

「ふう……」と溜め息を吐き、視線を下に落とした。

黙っていても余計に気持ちが塞がるだけだ。着替えを済ませ、ハーブティーでも入れに厨房へ行こう。

踵を返して窓に背を向ける。とその時だ。

「嫌ああーっ！」

金切り声が廊下から部屋へ、いや、ダイヤ中を突き抜けていったのだ。突然の事に身体がびくりと震える。

しかし、驚いている場合ではない。この声はミユのものだ。これ程の悲鳴を上げるなんて、彼女の身に何かが起きたに違いない。

まさか、影が

また俺が目を見離した隙に。百年前にも悔んだ筈なのに。同じ失敗を繰り返そうとしている。

こんな事になるなら、たとえ驚かれようともミユの部屋に留まるべきだった。そんな後悔をしてみても、もう遅い。

我を忘れ、なりふり構わずに廊下へと飛び出した。ミユの部屋へ

とひた走る。
すると。

「……おい！ 今、ミュの悲鳴が聞こえなかったか?!」

「聞こえたわ！ どうしたのかしら」

途中でアレクとフレアに出くわしたのだ。俺の姿にも気付かない程に慌てふためき、大きな身振り手振りで会話をしている。髪の毛も気にしていないようだ。

その一方で俺は、そんな二人よりも明らかに動揺を隠し切れていないのだが。

「アレク！ フレア！ ミュはっ?!」

「……ラウド！」

声を掛けた事で、ようやく俺の存在に気付いたのだろう。勢い良く二人が振り向く。

「いや、分かんねー！ オレらも今、部屋から出て来た」

「ミュっ!」

二人に聞いたのが間違いだった。長つたらしいアレクの説明を聞いている時間は無い。足を止める事も無く、アレクの話を受け流した。

早く、早くミュの元へ辿り着かなくては。取り返しの付かない事態になる前に何としても。

どうか無事でいてくれ。と祈るような気持ちで彼女の部屋のドア

ノブを引いた。

「ミュっ?!」

ミュは部屋の奥に付いている窓の傍で、両手を胸に当てた状態でしゃがみ込んでいた。そこに影の姿は無い。

彼女の周りにはガラスの欠片が散乱し、降り注ぐ光を反射させている。その傍らにはスタンド付きの鏡であったらう物が転がっていた。金色の丸いフレームだけを残し、鏡がはまっていないのだ。

恐らく、ミュが手を滑らせて鏡を落としたのだろう。

この状況だけを見れば、鏡を落とした拍子に悲鳴を上げた。そんな風にも解釈出来る。

しかし、先程の悲鳴は尋常ではなかった。鏡を落とした原因が何かある筈だ。

それを裏付けるように、ミュは不可解な行動を取り始めた。

「こ……来ないで……」

胸に押し当てた両手を離そうともせず、ただ足をばたつかせる。手を床に付けば、思い通りに足を動かせるというのに。しかも、左足の臍からは血が滲み出ているではないか。

その揺れる緑色の瞳はしっかりとこちらに向いている。

絶対におかしい。

部屋の中へと歩を進める俺に、ミュの表情は険しくなる。

「やだ……っ」

何か見られてはまずい物でもあるのだろうか。それに、胸から離そうとしない手は何なのだろうか。

訝っているとその時、二つの言葉が繋がったのだ。

『見られたくない物』 『胸』これらが意味している物とは、

「まさか……っ！」

『あれ』だとしても言うのだろうか。そんな筈が無い。あの悲劇は百年前に終わったではないか。

浮かび上がった疑惑を否定しようと、咄嗟にミュの両腕を掴んでいた。そのまま引き剥がしにかかる。

「止めてっ！」

ミュも腕に力を入れて抵抗するが、それで止める俺ではない。

確認しなくては。確認して、この考えは間違っていたと、はつきりさせなくては。

だが彼女の手が胸から離れた瞬間、恐れていた事が現実となってしまうのだ。彼女の胸にあったモノ、それは

「嘘……だ……」

カノンの命を奪い去っていったモノ、長い嘆きの始まりとなったモノ、円をいくつも組み合わせさせたような赤黒い痣 忌々しい呪いの印だった。

全身から力が抜けていき、がくりと膝が折れる。

フレアの叫び声と誰かが走り去っていく足音も聞こえるが、そんなものはどうでも良い。

何故、運命はこんなにも残酷で惨いのだろうか。何故、再び苦しまなくてはいけないのだろうか。ようやく彼女と再会出来たのに。ささやかな幸せも、あっさりと俺の手の中から零れ落ちていく。

泣き叫ぶミユを抱き締める事しか、今の俺にしてあげられる事はない。彼女は必死に死の恐怖と戦っていると言うのに。やるせない思いが心を満たす。

ミユが俺の服を掴む手に力を加える度に、視界は霞んでいく。

「私……どうなっちゃうのかな……。怖い……！ やだあつ！」

言いながらミユは身体を震わせ、俺の胸元を更に涙で濡らす。彼女の痛み、恐怖、絶望、そんな感情が全てそこに込められているようだ。

遂に目頭に溜まっていたものが流れ、俺の両頬を濡らした。

「俺……あんな目に遭わせたりしないから！ 絶対……！」

カノンと同じ目に遭わせてなるものか。死なせて堪えるものか。

胸が焼けるように熱く、痛い。どうする事も出来ずにミユの頭に手を回し、更にきつく抱き寄せた。

「もう、失うのは……嫌なんだ……」

ミユの方が辛い筈なのに、そんな言葉まで漏れてしまっただけ。自分勝手かもしれないが、それが俺の本心だった。

突き付けられた未来があまりにも過酷で、しばらくはミユから手を離せずにいた。離してしまえば、またすぐに居なくなってしまうような そんな気がしてくるのだ。しかし、いつまでも抱き合ったままではいられない。いつかは離さなくては。

他にも、ミユが足に怪我を負っている事を思い出したのだ。手当てをしなくては傷跡が残ってしまう。

涙を袖で拭き、何とか笑顔を作ってみせた。

「……手当てしなくちゃね」

「えっ……?」

突然声を掛けた俺に、瞼を赤く腫らしたミユは首を傾げる。

「……足。怪我してるでしょ?」

「あっ……」

今、初めてその事実気付いたように視線を落とし、溜め息を吐く。慌てた様子もなく、彼女は俯いたままで口を開いた。

「これくらい、大丈夫だよ……」

何を言っているのだろうか。『これくらい』なんかではない。血が流れる程の傷だと言っているのに。

それにたとえ小さな傷であろうと、ばい菌が入って化膿でもすれ

ば大変だ。

「傷の跡、残るよ？」

「でも」

「良いから、そこ、座ってて」

有無を言わず、ベッドを指差す。

怪我の手当てをするには、まずは傷口を覆う布と包帯を用意しておくては。それらがミユの部屋にあるのかは分からないから、自分の部屋へ取りに行くのが確実だろう。

彼女を一人にするには、かなりの不安が残る。出来るだけ早く戻って来なければ。と重い腰を上げ、廊下へと続くドアを開けた。

えんじ色の絨毯が敷かれた床に視線を落とし、早足で歩を進めていく。

一人になった途端、堪えていた筈のものが溢れ出てくる。が、声を出してはいけない。せめて部屋に着くまでは。

震える唇を噛み締め、血が滲むのではないかという程に強く拳を握る。

昨日、記憶を取り戻す旅はもう止めよう。そう決断していれば、こんな事にはならなかったのだろうか。ミユを説得しなければ、彼女を苦しめずに済んだのだろうか。

俺のせいだ。

己を責めても取り返しはつかない。頭では理解しているのだが、出てくるのは罪悪感ばかりだ。

いつの間にか到着していた部屋のドアをこじ開け、それを背中で押し戻す。寄りかかったままじゃがみ込み、頭を抱えた。

「ふ……、うっ……」

涙は堰を切ったように止めどなく流れ、白い床に大きな染みを作っていく。漏れた嗚咽は更に悲しみを増す要因となる。完璧な悪循環だ。

しかし、こんな事をしている場合ではない。ミユを一人で待たせているのだから。

気持ちを振り切るため、右の拳を横に振って壁に打ち付けた。じんじんと響く鈍い痛みが沸き起こる思考を逸らす。こうでもしなければ、次の行動には移せないだろう。

未だに溢れる涙を振り払って、ゆっくりと立ち上がる。確か目的の物は戸棚の中にしまっていた筈だ。と記憶を頼りに探し出した。白い紙に丁寧に包まれているそれらを手にし、来た道を引き返す。

立ち塞がるドアを前にし、大きく深呼吸をした。ミユの前で泣いてはいけない。そう言い聞かせ、今一度顔を手で擦る。とその時、固い何かが胸に軽く当たったのだ。

反射的に手で触れると、円形の小さな物を確認する事が出来た。カノンの結婚指輪だ。

今日、この場で渡してしまっても良いものだろうか。迷惑に思われたいはしないだろうか。

しかし、俺の想いは伝えたい。今でも君は俺にとって掛け替えの

ない存在で、手放したくはない存在だ。どうか、死なずにいて欲しい、と。

首に手を回し、チェーンの留め金を外す。それを伝って滑り落ちる指輪を手のひらで受け止め、そっと懐に忍ばせた。

再び深呼吸をしてドアの向こう側を見据える。

「ミュ、入るよ？」

言いながらドアノブを回した。どうやら、号泣した形跡は声には表れていないようだ。震えは感じられない。

徐々に開けていく視界の奥にはベッドに腰掛けて、俯いたままで床を見詰めるミュの姿があった。

塞ぎ込む彼女へ掛けるべき言葉が浮かんでこない。何故、こんなにも不甲斐ないのだろうか。

溜め息を吐きたくなったが、必死に堪えて彼女の元へと歩み寄った。そのまま怪我をしている左足の傍にしゃがみ込む。

血が出ている割には傷は浅そうだ。だが、油断してはいけない。

白い足に滲む赤い液体を濡らした布で拭き取り、包帯を巻いていく。

「痛くない？」

声を掛けると、彼女の首が僅かに動いた。長い睫が頬に影を落としている。

恐らく、不安と恐怖で声も出せないのだろう。身体の傷よりも心の傷の方が痛々しい。

絶望の淵に居る彼女を何とかして救い出したい。彼女の心の支えになりたい。そんな感情が芽生え始め、俺を次の行動へと移させる。

大胆にもミュの隣に腰を下ろし、手を組み合わせた。その間、彼女の様子に変化は無い。

何をどう話せば良いのだろうか。決意を固めてみても、勝手に良い言葉が浮かんでくる訳では無い。床を見詰めて暫し考えてみる。

カノンは抱えている物を全部一人で背負い、俺たちにはひた隠しにしていた。その結果、呪いをどうする事も出来ずに死なせてしまったのだ。辛さ、悲しさ、悔しさ、その全てを拭い去れないままに。ミュはカノンとは違う。分かっているけど、完全には断ち切れない。

「辛くなったら、全部俺に言っただけで良いから。不安なの、隠さないで」

不安な気持ちは共有出来る。分け合う事が出来る。それを彼女にも知って欲しかった。

彼女から目を逸らせずにいると、ふとした瞬間に緑色の瞳がこちらを向いた。カノンと同じ、深い森を思わせるような色だ。強張っていた彼女の目元や口元が僅かに緩む。

「大丈夫。私……強がりなんて言えないから」

「良かった……」

声には元気が無いが、それでも答えてくれただけで十分だ。しかも、俺の言葉を受け入れてくれた。

安堵の溜め息が漏れて笑みも零れる。

しかし、それは束の間の些細な幸福だった。ミュはすぐに俺から視線を逸らし、床へと落とす。表情も元へと戻ってしまった。

「ふう……」と息を吐いて、彼女は再び口を開く。

「色々ありがとう。でも、ごめんね。一人で考えたい事あるから……」

はつきり言つて、それは感心出来るものではない。ミユを一人にするのは危険過ぎる。

とは考えてみるものの、彼女もそれを承知の上で言っているのだろう。過去を思い出して呪いを引き継いでしまった今、気持ちの整理を付ける時間も必要だ。まして、カノンと深く関わっていた俺なんかと一緒に居れば気を削がれてしまつたろう。

「……そっか」

仕方の無い事だ。何とか自身を納得させ、ゆっくりと腰を上げる。

懐に手を伸ばし、先程しまつておいたそれを取り出してみる。

一人にしなくてはいけないからこそ、渡したいと思うのだ。俺の想いを託した指輪をミユに受け取ってもらいたい。

ミユの正面に回り込むと、片膝を床に付いて視線を合わせる。間を置かず、彼女の膝の上に重ねられている小さな右手を取った。

「これ、ミユが持つてて。今の俺には必要無いから。もう、俺に返さないでね」

少し遠回しな言い方だが、これくらいが丁度良いだろう。あまりに直接的だとミユを更に困らせてしまう。

言いながらミユの手を両手で包み込み、その中に指輪を落とした。そのまま大切に握らせる。

突然の事に驚いたのだろう。彼女ははっとしたように顔を上げて俺を見詰めた。それでも何も言わない俺に、軽く首を傾げてみせる。

「えっ？　これ、何？」

瞳の色が変わった影響もあるのだろうか、頬をピンク色に染めたミュが益々カノンに似て見える。カノンもそんな仕草をよくしていた。

過去を思い出したのならば、その指輪が何なのか、説明しなくても分かってもらえる筈だ。これ以上、言葉は必要無い。

その場に微笑みを残して出口へと向かう。胸元では飾り気の無くなったシルバーのチェーンだけが静かに揺れていた。

「はぁ……」

自室に戻ってきてから、これで何度目の溜め息だろうか。両腕を組んで枕を作り、ベッドで仰向けに寝転がる。立っている事も、座っている事も辛いのだ。身体に力が入らない。

俺はこれから何が出来るのだろうか。どうすればミュの呪いを解く事が出来るのだろうか。

考えてみても、何も思い付かない。焦りや苛立ちばかりが募り、俺の心を掻き乱す。

「何で、ミュやカノンばかり……!!」

寝返りを打ち、頭を抱えて膝を折り曲げる。苛々を全て抱え込むようにして。

とその時、部屋のドアが僅かに開いたのだ。

「……おい。入るぞ?」

少し遠慮がちな声と共にドアの隙間から覗いたのは、いつもの覇気が全く感じられない黄色の片目だった。

タイミングが悪いにも程がある。ドアに背を向けたままで、首だけを反対側へと回す。

「……………何の用？」

「昼飯、持ってきてやったぞ」

そんな事を言われても空腹感はない。余計な事をされたものだ。

「……………いらない」

顔を背けて無視を決め込む。

それなのに。アレクは我が物顔で部屋に入り込み、テーブルの上に何かを乗せたようだ。音と気配で分かる。

「オマエ、最近真面に飯食ってるのかつ？ これだけでも食え」

嫌々振り返ると、テーブルの上には大皿が乗せられていて、そこから湯気が立ち上っていた。恐らくスープなのだろう。

アレクは口元を吊り上げて嫌みに笑う。

「オマエが食い終わるまで、此処に居座るからな」

言い終わるとドアまで移動して、そこに凭れ掛かった。腕も、足も組んでいて、かなり偉そうだ。

この世話焼きたがりなアレクの性格はどうにかならないだろうか。いや、無理だろう。

目を細めて不快さを全身で表現してみる。それでもアレクはふんぞり返ったまま、ドアの傍から動こうとしない。大袈裟に溜め息を吐いてみても駄目だ。

ずっと居座られるのも目障りだし、仕方が無い。

重い身体を無理やり起こして食事の席に着く。皿の中を覗き込んでみれば、大ざっぱに切られた一口大の野菜、それに同じ大きさの鳥肉が積み重なるようにして盛られていた。スープである筈なのに、具の方が多い。まして、自分の顔くらいはある大きさの皿だ。半端な量ではない。

これを全部食べると言うのだろうか。スプーンを持つ気すら起きない。

「……無理」

何も言われていないのに、ぽつりと言葉が漏れていた。

「食べ」

「無理だつてば」

一体、何なのだろうか。あんな事があった後なのに、いつも通りに食事を出来る筈が無いではないか。

一向に食べる気配を見せない俺に、アレクは先程よりも声を張る。

「さっさと食べ。オマエが食い終わらねーと、フレアの所に戻れねーだろ」

いや、俺が食べ終わらなくてもフレアの所には戻れる。と溜め息を吐いたが、アレクには伝わっていないのだろう。話題を変えて、更に話を振ってくる。

「そーいえばよー、ミユの部屋に昼飯持って行ったら、アイツ、一人で寝てたぞ。オマエ、此处に居て良いのか？」

最悪だ。俺だって、好きで此处に居るのではない。何故、振って欲しくない話をわざわざ振ってくるのだろうか。

苛ついていた気分が余計に刺々しくなってくる。スープを食べる気力も益々失せていく。

「……ミユに追い返された」

「そーか……」

ぶつきらぼつに返す俺に、アレクは俯いて申し訳なさそうに頭を掻いた。だが、その気持ちは一瞬で吹き飛んでしまったのだろう。頭に当てた手を止めたアレクははっとしたように顔を上げ、口をへの字に結ぶ。

「つつーか、話ばかりしてねーで飯食え」

何を言っているのだろうか。アレクが一方的に話を振ってきたのではないか。信じられない。

予想外の言葉を浴びせられた瞬間、その衝撃で時が止まったように感じられた。

だが、いつまでも呆気に取られている訳では無い。奥底から沸々と怒りが沸き起こり、頭へと浸透していく。

「話してばかりいるの、アレクの方じゃん！ 訳分かんないし！」

「ああっ?!」

感情に任せて怒りをぶつける。

すると、アレクは足を踏み鳴らしながらこちらに近付いてきたのだ。大袈裟に腕を振り、目を吊り上げ、全身から殺気を放つ。

「文句ばっか言って飯食わねーんなら、口の中に押し込めるぞ?!」

そう言うなり、なんとアレクはスープ皿を手を取って俺の顔に近付け始めたのだ。

かなり理不尽な扱い方をされていると思うのだが。本当に食べ物を口の中に押し込められては堪らない。しかも、俺の身体の上にスープを零されでもすれば火傷をしてしまう。

「ちよっ……何考えてるのさっ！ 自分で食べられるから！」

「じゃーさっさと食べよ！」

慌てふためきながら皿を両手で阻むと、アレクは手に持っているそれをテーブルに戻した。いや、叩き付けたと言った方が良いだろう。衝撃で僅かに具が浮き上がり、汁が飛び散る。

何故、これ程までに怒られなくてはならないのだろうか。と腹は立つが、言ってしまうえば今度こそ食べ物か口の中へとなだれ込んでくる事になるだろう。

渋々スプーンを手に取り、無理やりスープを口に含む。が、なか

なか喉を通っていつてくれない。美味しいのかどうかも分からない。

こんな状態で食べ続けられる筈が無く、すぐに限界はやってきてしまう。

「……もう食べられない。ホント、無理」

半分は食べただろうか。腹に貯まる鳥肉はなるべく横に避け、野菜ばかりを食べるようにしたのだが。やはり無理だ。

スプーンを皿の中に放り投げると、アレクは腕を組んだままで食べ残しを覗き込む。

「しょーがねーなー……。今回は許してやる」

何故、こんなにも上から目線なのだろうか。

腕を組んだままで俺を見下ろし、嫌みな笑みを浮かべる。しかし、それは長くは続かなかった。

アレクの瞳から生気が消えていき、瞼も徐々に落ちていく。溜め息まで吐いてみせる。

「また、オマエに断つときたいんだけどよー……」

そこで一度言葉を区切り、俺から視線を逸らす。

「フレアのヤツ、あれから泣き止まねーんだ。取り敢えず落ち着くまで……ミユの事、オマエに任せても良いか？」

断るまでも無い。任せるも何も、ミユを守るのは俺だ。

当然の事のように、アレクに無言で頷いてみせる。

そんな俺を見たアレクの表情に、僅かに笑みが戻っていった。

「済まねーな……。オマエもあんま思い詰めるなよ」

いや、『思い詰めるな』と言われても自然と考えてしまう。百年前に俺がカノンの呪いを解けていれば、ミユまで呪われる事は無かったのだから。

アレクはテーブルの上の皿を手に取ると出口に向かって歩いていってしまった。

そのまま部屋から出ていくのだろう。そう思ったのだが。アレクはドアノブに手を掛けると、こちらを振り返ったのだ。口元は吊り上げられているが、未だに目元には元気が無い。

「まつ、あれだけ叫ぶ気力があれば大丈夫か！」

憂いの表情と捨て台詞を残し、ドアが勢い良く閉まる。

怒りではなく、やり切れない思いが俺の心を満たしていく。

それぞれが思い悩み、苦しんでいる。今更ながら、その事実に関付かされた。

とは言っても、ミユと自分の事だけで精一杯だから、アレクとフレアの事までは考えられないのだが。まあ、それはお互い様だろう。再び身体をベッドに沈めて

「はあ……」と溜め息を吐いた。そんな時だ。

“あの子……”

不意にリザードが呟いたのだ。

「……………どうかした？」

“廊下に……………誰か居ない？”

「えっ？」

急にどうしたのだろう。アレクはフレアの元へと戻ってしまったし、フレアは泣き続けていると聞いた。ミュだって、俺の事を未だに避けているのだろう。この部屋に来ようとする人物が思い当たらないのだが。

“ちょっと見てみて？”

「でもさ」

“良いから”

この調子では、確認をしに行くまで退かないのだろう。

仕方無く、身体を起こしてドアへと向かう。食後のせいかな、更に身体が重く感じる。

言われるがままにドアノブを回し、隙間から顔を覗かせてみたのだが。

「誰も居ないよ？」

右側も左側も確認してみても誰も居ない。念のため、何度もその動作を繰り返してみても同じだ。

“そんな筈無いよ。ちゃんと見た？”

「見たよ！」

リザードなら、そんな事くらい分かるではないか。
拳を握り締めて反抗してみるが、どうやら納得していないらしい。

“おかしい。あの子、此処に来た筈なのに……”

訝るように小さく呟く。

何を根拠に、そんな事を言っているのだろうか。それに『あの子』
とは誰なのだろうか。きちんと名前と言って欲しい。

「あの子って、誰？」

堪らず聞いてみた。そんな俺に、何故かリザードは口ごもる。

“カノンの……”

「ミユの事？」

“うん。何か、嫌な予感がする……”

ミユに何か起きたとしても言うのだろうか。

もし、その『嫌な予感』が当たってしまったら。意味深な言い方
と声の低さが不安を煽る。カノンを失った時の恐怖までもが沸き起
こってくる。リザードの影響を受けているのだろうか。

“あの子の部屋、行ってみよう”

「分かった」

返事をするや否や半端に開いているドアを全開にし、足を踏み出した。

どうか、リザードの勘違いであって欲しい。祈るような気持ちでミユの部屋へと向う。

しかし、勘違いではなかったのだ。この時ミユは

第11章 諦めない

ミユの部屋の前で足を止め、胸に手を当てて呼吸を整える。

たとえ急いでいるとしても、慌ててドアを押し開けてはいけない。そんな事をすればミユを驚かせてしまう。

生唾を飲み込み、ドアの向こう側に意識を集中させる。手の甲をドアへと向け、ノックをする準備も整えた。

「ミユ？ 居る？」

言いながら手首を前後に振り、何度かドアを振動させる。しかし。

「……ミユ？」

返事は愚か、物音一つ聞こえてはこなかった。

リザードの助言を得ている今、それは不安を煽る材料でしかない。胸の内で膨れ上がり、歯止めが効かなくなってくる。

「ミユっ？ 入るよ?!」

もう、同意を求めると言うよりも叫び声に近い。

破裂しそうなまでに鼓動を速める心臓や火照っていく頬を気に留める程の余裕は無く、右肩から体当たりをしてドアを開けた。

レースカーテンの掛けられた窓からは弱い日差しが差し込み、部屋を明るく照らす。散乱したままのガラス片も、その光を四方に反射させていた。テーブルの上に乗せられたスプーンに手を付けた形跡

は無く、スプーンも皿の横に並べられたままだ。

唯一乱雑に跳ね退けられた布団だけが、そこに彼女が存在していた事を示している。

俺が部屋に着いた時にはもう、ミュはそこには居なかったのだ。

何故、部屋に居ないのだろうか。リザードの言う通り、ミュは先程俺の部屋の前に来ていたのだろうか。焦りながらも考えていると、今朝、夢で見た一場面が頭を過ぎっていった。

あの時の状況と今の状況とが重なる。百年前にカノンが呪いをかけられてしまった、あの夜だ。

こうなると分かっていたから、あんな夢を見たのだろうか。それなのに俺は

記憶が頭の中を駆け巡り、俺の思考力を奪っていく。もう、自身の行動すら制御出来ない。

「ミュっ！」

部屋の中を所構わず走り回り、ドアというドアは全て開けていく。騒がしい音を立てようが、躓きそうになるのが構わない。そんな事よりもミュの方が大事なのだから。

しかし、こんな事をしていても彼女が見つかる筈は無かった。時間ばかりが無駄に過ぎていく。

そんな俺に苛立ちを覚えたのだろうか。

“ラウド！ 落ち着いて！”

突如、リザードが声を荒げたのだ。

はっと我に返る。その拍子に、一度は確認していた筈のホビールームへと繋がるドアに伸ばしていた手が止まった。

“あの子、此処にはもう居ないから！ 他の部屋を探そう？！”

そうだ。此処に居ないのならば、此処ではない何処かに居るのだ。まだダイヤに留まっているのかもしれない。

返事もせずに踵を返し、開けっ放しにしてきた出口へと向かう。

ミュは絶対に無事だ。影に捕まる訳が無い。安心させるために、何度も何度も自分自身に言い聞かせながら。

もしかすると、彼女はまた俺の部屋に引き返したのかもしれない。一度はそんな風に考えたのだが、此処へ来る間は誰とも擦れ違わなかった。それは無いだろう。

アレクやフレアの部屋へ向かったとも考えられる。しかし、アレクの部屋は今は無人大し、ミュがフレアの部屋へ行こうとするとは思えない。カノンの記憶が戻った今、フレア いや、アイリスは彼女にとって憎しみの対象でしかない。俺以上に顔を合わせたくない相手だろう。

となれば行き先はただ一つ、会議室だけだ。その場所に用事があるとも思えないのだが、思い付く場所は全て確認しなくては。

全力で廊下をひた走り、会議室の扉を押し開ける 筈だったのだが。

無我夢中になっていて忘れていた。アレクに腹一杯になるまでスープを食べさせられたという事を。

会議室まであと半分、という所で脇腹に鈍痛が走る。最初は軽い

ものだったが、足を前へと出す度に痛みは増していく。同時に息までもが切れていく。

「っ……」

あまりの痛みには耐えきれず、両手で腹を抱えるようにして腰を折り曲げてしまった。

こうなったら他に助けを求めた方が良いに決まっている。が、そう出来ない理由があった。

先程、アレクに『ミユは任せる』と言われたのだ。しかも、アレクの傍には悲しみに暮れるフレアが居る。こんなに早く弱音を吐く訳にはいかない。

つくづく、アレクは役に立たない。俺の邪魔ばかりしている。と心の中で悪態を吐いてみるものの、それで事態が改善する筈も無い。痛みを紛らすために大きく深呼吸をし、ゆっくりと腰を伸ばしていく。俺がミユを見つけ出さなくては。

此処まで来た時と比べれば明らかに速度は落ちている。それでも、脇腹に片手を当てながら懸命に目的の場所を目指した。

重苦しく感じる扉へ左手を伸ばす。勢いは無いが、鈍い音を立てながら徐々に開いていく。

隙間から溢れ出した光に目が眩み、瞼を閉じかける。が、それは僅かな間の事だ。徐々に明るさに慣れていき、部屋の中を見渡せるまでになった。

アレクの身長を超える大きさの窓が並ぶ左側と奥の壁、そちら側に人影は無い。ミユの指定席、いや、その他の席にも彼女の姿は無い。残る右側と死角になっている空間、身体を回転させて確認して

みたが、そこにも彼女は居なかった。

「ミニユっ？ 居るなら返事して？」

一応声も掛けてみるが、部屋の中で虚しく反響するばかりだ。

会議室にも来ていないとすると、他に何処へ行くと言うのだろうか。呼吸を整えるためにも一度その場で座り込み、頭を抱えてみる。いくら考えてみても思い付かない。手当たり次第に探すしかないだろうか。

と、いつまでもこうしている訳にはいかない。時間が勿体無さ過ぎる。考え付くままに行動してみよう。

立ち上がりながら改めて部屋中を見回し、様子を確かめる。だが、変化がある筈も無かった。

両開きの扉を押し、早々に会議室を後にする。ついでに隣接する厨房も覗いてみたのだが、人の気配は無い。きちんと洗われた食器類が調理台に並び、火の点いていない焔炉に鍋が置かれているだけだ。

憎い程に長閑な空を抱く窓を横目に、静寂が包む廊下を闇雲に走り回る。腹痛は治まっていないから、速度は遅いままなのだが。

まずは普段使用している二階部分からだ。

因みに、ダイヤは三階建ての構造になっている。今言ったように、二階は主に俺たち魔導師が使用し、三階には使い魔たちの会議室と個室がある。一階部分はエントランスとホールのみだから、誰も立ち入ったりはしない。

二階部分にも俺たちの使っていない部屋が数多くある。いや、大多数と言った方が良さだろうか。

入り組んだ廊下を一つ一つ確認し、鍵の開いている部屋は更にその中も確かめる。しかし、どの部屋を覗いてみても、中は木目を基

調とした変わり映えのしない寝室ばかりだ。長方形のテーブルを中心に戸棚やクローゼット、ベッドなどが整然と並んでいる。人が入った様子は無い。

廊下を曲がれば曲がる程に腹部は悲鳴を上げ、ドアノブを握る手からも力が抜けていく。

こんな事をしていて、果たしてミユは見つかるのだろうか。こうしている間にも、彼女がどうなってしまうか分からないと言っのに脇腹を押さえながら、もう片方の手を壁に突いて身体を支え、呼吸を整える。額や背中からは汗が噴き出し、顔も風呂に入った時のように火照ってしまった。

「何処に……行っちゃったんだろう……」

言葉も途切れ途切れにしか発音出来ていない。思う通りにならない自分の身体に腹が立つ。

「どうして……!!」

俺にもっと力があれば、すぐにミユを見つけ出せたかもしれないのに。

生唾を飲み込み、瞼を強く瞑る。すると。

“……あっ!”

又してもリザードが声を上げたのだ。

“アリアなら、あの子の居場所が分かるかもしれない”

「えっ?」

良く分からない内容に、眉をひそめながら小首を傾げてみせる。

“ 使い魔なら、自分の主が何処に居るのか分かる筈だよ！”

「あつ……」

忘れていた。使い魔は様々な役目を担っているが、その中には魔導師を守るというものも含まれている。当然の事ながら、それらを実行するための能力も備わっているのだ。

だから、ミュがこの世界へ来た初めの頃、彼女がエメラルドの塔を抜け出した事もアリアは敏感に察知出来たのだ。こんな事にも気付かないなんて、それ程慌てていたのだろう。

“ エメラルドに行こう！”

「うん」

失った時間は戻らない。早くアリアに会わなくては。それ一心で瞼を閉じ、体勢を整える事無く魔力を放出した。

浮遊感が消え去った瞬間、身体の支えを失う。そのまま前のめりになりつつ崩れてしまった。手の平や膝に伝わる感触は固いものではなく、毛布のような柔らかいものだ。

俯き気味で瞼を開けていくと、瞳には真っ白な絨毯が映った。この絨毯はミュの部屋だけではなく、俺たちの部屋にも敷かれている。しかもダイヤだけではなく、それぞれの城の部屋も、だ。場所を特定するための材料にはならない。

部屋の中を見渡してみると家具は全て緑色に染められていたのだが、これもミユの部屋と判断出来るだけだ。ダイヤなのか、エメラルドなのかまでは分からない。

本当に目的の場所へ着いたのかを確かめるように、四つん這いになったままで窓へと近付いていく。

垂れ下がるレースカーテンを片手で持ち上げ、窓の外を覗き込む。ベランダ越しに望める景色はダイヤのそれではなかった。赤色の瓦屋根が所狭しと立ち並び、地面を覆っている。人であろう豆粒大のものも道路を忙しなく行き交う。

間違い無い。此処は確かにエメラルドだ。それならば。

「アリアっ！ 居る……?!」

閉じられたままのドアに向き直り、出来うる限りの声で叫ぶ。

ミユの声だとアリアへすぐに伝わるのだろう。俺の声でも伝わってくれるのだろうか。半信半疑だったが、心配は無用のようだ。カイルのものとは明らかに違う軽快な足音が間を置かずに部屋の外で響き始める。それは段々と大きく、はつきりとしていき

「ラウド様!!」

動揺とも、驚きとも取れる叫び声と共にドアが大きく開いた。その向こうには慌てた様子のアリアが居る。

「何故、こんな所へいらしたんですか?!」

ゆったりとした白色のスカートを両手でたくし上げ、丸く見開かれた瞳で俺を見下ろす。元々アリアの目は丸形なのだが、いつもの倍の大きさはあるように見える。

俺の様子の異常さに気付いたのだろう。すぐさまこちらへと走り寄り、両手を床に突いて座り込む俺の目の前で膝を折った。アリアは俺と視線を合わせ、すぐに口を開く。

「何が起きたんですか?!」

「ミュウが……!!」

今のアリアは早口なのだが、それでも喋り終わるのを待っていない。問い詰めるような声を掻き消し、必死に叫んだ。

『何故』とか『何が』とか、そんな事を伝えている時間は無い。いち早く要点だけを伝えなくては。

ミュウの名前を出した途端にアリアの表情が曇る。眉間には皺まで寄っていく。

「ミュウ様が、どうしたのですか?」

「ダイヤから……居なくなった……!!」

「えっ……?!」

頼むから、彼女の居場所が分かると言ってくれ。祈るような気持ちで、揺れる緑色の瞳を見詰め返した。

アリアは一度、衝撃で固まってしまったのだが、それは僅かな間だ。すぐに力強い瞳へと変わり、不安に怯える俺を励ます。

「大丈夫です。ミュウ様は必ず見つけ出します。少しだけ待っていて下さい」

そう言うなり、アリアは瞼を閉じて俯き、黙り込んでしまった。

俺の荒い呼吸音だけが耳に届く。

その『少しの時間』がとてつもなく長い。実際には大して時は流れていないのだろうが、焦燥感は段々と強まっていく。

もう待ってられない。
居ても立ってもいられず、乱暴に口を開きかける。そんな時だった。

不意にアリアの瞼が開いたのだ。それと同時に顔を一気に上げ、確信に満ちた瞳が俺を貫く。

「アリア」

「ミユ様は地の塔に居ます。近くには誰も居ないようです」

何故、彼女は地の塔に居るのだろうか。しかも危険を冒してまで、たった一人で向かうなんて。余程の急用なのだろうか。

とにかく、一刻も早く迎えに行こう。影に嗅ぎつけられ、彼女に危害を加えられる前に。

「ありがとう！」

感情も込めずに口先で御礼を言い、重い腰を上げた。瞼を閉じ、次の目的地へ向かおうとしたのだが。その時、

「……あつ」

一つだけ気掛かりな事を思い出したのだ。

無事にミュを連れ帰り、その後で彼女がアリアに会ったら。アリアは何と言っただろうか。

もし、俺がミュを探し回って此処へ来た事を教え、問い詰めでもしたら　ミュは自身を責めるだろう。一緒に過ごした期間は短い、これまでずっと彼女を見てきたのだ。予想は付く。

「…………アリア」

「何ですか？」

突然魔法を使う事を止めた俺に、アリアは首を傾げる。

「俺が此処に来た事…………ミュには言わないで」

口にした途端、アリアの顔色が変わった。やはり、ミュに直接言うつもりだったのだろう。

「ですが」

「ミュには、俺から言っておくから」

出来る限りの笑顔を作ってみせ、納得させようと試みる。しかしアリアは口をつぐんだまま、返事をしようともしてくれない。

卑怯かもしれないが、こうなっては仕方が無い。

「『命令』だからね。良い？」

使い魔にとって、魔導師の命令は絶対だ。逆らう事は許されない。たとえ、それが自分の主ではなくとも。

片手を腰に当ててわざとらしく偉そうな態度を取る俺に、アリア

は悔しそうな表情を浮かべて俯いてしまった。
後ろめたい気持ちが沸き起こる。

「……分かりました」

命令なんかしてしまつてごめん。と小さく呟くアリアに心の中で謝つてみるが、本人には伝わっていないのだろう。

最後に、恨めしそうにうなだれるアリアへ再び微笑みかけ、ミュが居るであろう場所を目指した。

そよ吹く風が頬を撫で、髪を横に靡かせる。口で荒く呼吸を繰り返す度に、清く澄んだ空気が肺へと流れ込む。

目前には森の木々を遥に凌ぐ高さの樹。地の塔が堂々と聳えている。あの中にミュが居るのだ。

森の中でも、木の生えていない空間に到着した俺は、照りつける太陽光に晒されていた。咄嗟に片腕でひさしを作り、前方を見据える。狙いを定めると、一気に草の生い茂る大地を蹴った。

走りながら、先程疑問に感じた事をもう一度考えてみる。

何故、ミュはたった一人でこんな場所に來たのだろうか。魔法は手に入れたのだから、用事は無い筈なのだ。

もし、それ以外に此処へ來なくてはならない理由があるのだとすれば。

もしかして、黒の魔導師を倒すための羽根をまだ手に入れていないのだろうか。それしか考えられない。

一つの結論に達した時、ようやく光に照らされた塔の中がぼんやりと見える程になった。そこには白い衣服を纏い、スカートを床に広げて座り込む女の子の姿がある。背中の中程まで流れる焦茶の髪

に小柄な身体、間違い無い。ミュダ。

「……ミュっ！」

迫り来る塔の壁に左手を突いて足を止めると、もう片方の手を膝に押し当てて身体を支えた。そうしなければ立ってられないのだ。俺の声に驚いたのだろう。俯く彼女が振り返る。

どうやら大事は無いようだ。何とか間に合った。

気付いた途端に身体の力が抜け、溜め息も漏れる。

「良かった、無事で……。羽根を取りに行くんだったら、言ってくれば」

ほっと胸を撫で下ろして言葉を掛けた。が、途中で違和感に気がき、先が途切れてしまった。

ミュの両頬が筋状に光っているのだ。何より、彼女の表情が悲しみに満ちている。

「ミュ、何が……。あつたの？」

ただ羽根を取りに来たのであれば泣いたりなんかしない。事情を聞こうと、ふらつく身体を引きずりながら歩を進めた。

俺が歩みを止めるのを待たず、ミュは口を開く。

「……呪いね、どうする事も出来ないって言われちゃった。此処に居るの、神様なんだよ？ それなのに……」

言いながら、口元だけを吊り上げてみせる。

一瞬、何の事を言っているのか分からなかった。『呪いはとけない』という言葉だけが頭をぐるぐると駆け回る。

しかし冷静になればなる程に、怒りがふつふつと沸き起こってきた。

ミュに直接『呪いはとけない』と言って、残酷にも突き放したのだ。彼女にしてみれば死刑宣告をされたのと同じだ。何の罪も無い彼女を絶望の淵に叩き付けるなんて。絶対に許せない。許さない。

「何でそんな事……！ 俺も話してくる！」

相手が神であろうと構うものか。一言 いや、相手が謝ってくるまで文句を言わなくては気が済まない。

拳を握り締めて魔法陣を睨み付ける。そのままそこへ飛び込もうとしたのだが。

「無駄だよ！ 何回行っても同じだよ……」

一歩手前で足の裾に力が加わり、それ以上前へ進めなくなってしまう。視線を落とせば、ミュが俺の服を掴んでいるではないか。無駄な事なんて無い。次はきつと、良い返事が返ってくる。そう口にしようにしたのだが、声を発したのは僅かにミュの方が早かった。

「私、駄目なんだよ……」

「……えっ？」

駄目とは何の事を言っているのだろうか。意味が分からない。

それでも、良くない事を考えているのだろう。という事だけは分かる。

「駄目って、何が？」

涙を流しながら笑うミュと目線の高さを合わせようと、言いながら膝を床に付けた。それと共にミュの視線も俺の目を追う。

あまり間を置かず、彼女は口を開く。

「この世界に来るまではね、適当に生きてたんだよ。それなのに、呪いがこんなに怖いのか。何で怖いのか？ おかしいよねっ？！ 私っ」

「おかしくないっ！」

ミュの話を目に聞いていられず、思わず大声を出して遮ってしまった。

胸が痛い。苦しい。悲痛な思いが心に突き刺さる。

堪え切れず、両腕を伸ばしてミュの身体を抱き寄せた。

「おかしくなかなないよ……。俺は、昔のミュは知らない。でも、今のミュは精一杯頑張ってると思う。もし今までが駄目だったんなら、これからを大事にすれば良いんだよ。そんな悲しい事、言わないで……」

自ら『生』を否定するなんて、絶対にしてはいけない事だ。たとえ、他人には認めてもらえなくても。

それに、『死』を怖れない者がこの世に居るだろうか。異世界での過去なんかどうだって良い。此処ではミュはこんなにも頑張っている。俺には彼女の未来が必要だ。生きていて欲しい。

俺の腕の中で、彼女が僅かに顔を上げた。その緑色の瞳は潤み、小刻みに揺れている。

「でも、神様にも見捨てられたんだよ……？」

「それでも、俺は諦めないよ。だからミュも諦めないで。何か方法はある筈だから」

神に見捨てられたなんて関係無い。諦めればその時点で終わりだ。前には進めなくなる。

呪いは絶対に解ける。自分自身にも言い聞かせるようにミュへ語り掛けた。同時に彼女の顔が歪み、大粒の涙が両目から零れ落ちる。声を上げて再び泣き出してしまったミュを更に力を込めて抱き、彼女の髪を撫で続けた。

これから起こるであろうミュを苦しめる事件は少なくないだろう。その度に彼女は挫け、行き先を見失ってしまうかもしれない。

その分、俺が強くなくては。

何があっても未来を諦めたりはしない。信じ続ける。

この決意は決して揺らぎはしない。そう思っていたのに。
過酷な運命の前に、脆くも崩れ去って行く

第12章 神託

右側に並ぶ窓から差し込む柔らかい日差しを受け、ミユの部屋へと向かう。速度を気にしながら、左手でほんの少し後ろを歩くミユの小さな手を握る。握り返してくれる事は無いが、その手から彼女の温もりを感じる事が出来る。愛おしくて堪らない。

それでも彼女に声を掛けられずにいた。

無事に彼女を取り戻した喜びと呪いに対する不安が混ざり合い、何を話せば良いのか分からないのだ。下手に話を振り、傷付けてしまうのも恐い。

無言のまま廊下を歩き進んでいく。

何度が角を曲がり、もう少してミユの部屋へ着く。そんな時だった。僅かにミユの右手に力が加わる。

「……ねえ」

突如、小さく発せられた声に足が止まった。

俺が振り向くよりも早く、ミユの口から次の言葉が紡がれる。

「羽根って何の事？」

何処か遠慮がちな声だ。

何も遠慮なんかしなくても良いのに。少しでも彼女の心を開こうと、振り向いて笑顔を作ってみせる。

ところが、それは逆効果だったらしい。俺を見て、ミユは頬をほんのり赤く染めて俯いてしまった。

少なからず衝撃を受けたのだが、それを顔や声に表してはいけない。余計に彼女を困らせてしまう。

「えっ？ 黒の魔導師を倒すための羽根だよ。もしかして、思い出してなかった？」

平静を保ち、いつも以上に明るくしようと試みた。もしかすると不自然だったかもしれない。

それでも、ミュは小さく頷いてくれた。

羽根の事を知らないのだとすれば、呪いを解く方法を聞くためだけに地の塔へ行ったのだろうか。

それなら、ミュは物凄い勇気を振り絞って塔へ行った筈だ。なのに、返ってきた答えがあんなモノだったなんて。そう考えると、改めて神に対する怒りが湧き起こってくる。ミュ自身、神に対する恐怖心を植え付けられてしまっただろう。

しかし、黒の魔導師を倒す術が羽根しかない以上、羽根は必ず手にしなくては。ミュはもう一度、地の塔へ行かなくてはならないのだ。

「じゃあ、まだ羽根貰ってないんでしょ？ 明日、一緒に行こう？ きつと一人よりも二人の方が、ミュの負担も少ないし」

一人で行かせる事なんて出来ない。酷過ぎる。

そんな俺に、彼女は俯いたままで小さく頷いた。前髪の隙間から微かに顔が覗き、その表情が曇ったようにも見える。

「大丈夫だよ。明日は神様に会わなくても」

何とか元気付けようとしたのだが、話は中断させられてしまう。

小気味の良いドアの閉まる音が聞こえると同時に、人の気配を感

じたのだ。反射的に音のした方へと顔を向けてみると、

「オマエら、大丈夫か？」

「アレク……」

アレクがフレアの部屋の前に佇んでいたのだ。

フレアを一人に出来る程、状態は良くなったのだろうか。そう疑問に感じている間にもアレクは俺たちの方へと歩み寄り、普段よりも間隔を空けて立ち止まる。両手を腰に当て、無表情で俺たちを見下ろす。

「オマエらだけで何とかしようとするなよ？ オレらも居るんだからよー」

「分かってるよ」

そんな事くらい言われなくても分かっている。と言うか、俺にミユの事は任せると言ったのはアレクではないか。矛盾しているし、訳が分からない。

何が気に食わないのか、アレクは頭を抱えて大袈裟に溜め息を吐いてみせる。昼に食べさせられたスープの事もあるし、一言文句を言っただけでやりたいが、一々こんな事に気を留めてもらえない。

この場を離れようと、ミユの手を引こうとしたのだが。

「……フレアは？」

それよりも先に彼女が口を開いたのだ。視線はアレクへ注がれ、

その瞳には一点の揺るぎも無い。

「あ？ さっき落ちて着いたみたいだからよー、一人で寝かせてきた」
「そっか……」

ぶっきらぼうに答えるアレクに、ミュは笑顔を見せる。やはりフレアには会いたくないのだろう。

その一方で、アレクの表情は一気に曇った。その周りの空気までもが一緒に淀んだように感じる程だ。

「フレアを信じてやってくれ……」

俯いて沈んだ声で呟くと、アレクは自分の部屋へ向かって歩いて行ってしまった。その背中中は小さく丸められ、威厳の欠片も無い。アレクの気持ちは分からなくもないが、タイミングが悪過ぎる。今のミュは自分の事だけで精一杯だろう。

「無理に頑張らなくても良いよ。今は自分の事を大事にしなくちゃ。俺たちも行こう？」

「うん……」

フレアに対する感情よりも、まずは呪いの事を優先させなくては。一段と暗く沈んでしまった彼女を気遣いながら、今度こそ、足を一歩前へと踏み出した。

それから程なく彼女の部屋へと着いてしまった。大した道のりではないから当たり前なのだが。

ミュはドアを開けると、すぐさま部屋の中へと入ろうとする。そこで繋いでいる手を離すのが自然なのだろうが、俺は逆に強く握り締めてしまった。

こんなにも弱っている彼女を一人には出来ない。手放したくはない。独り善がりかもしれないが、そんな感情が顔を覗かせるのだ。手を離そうとしない俺に驚いたのか、ミュは勢い良く振り向いた。

「俺、一緒に居るよ」

目を丸くする彼女を前に、心そのままに言葉が溢れ出る。迷惑になるかもしれない。とか、余計に嫌われるかもしれない。とか、そんな事なんて考えようとしなかった。

真剣に眼差しを向ける俺に、ミュも視線を送ってくれる。しかしそれも僅かな間で、すぐにまた俯いてしまった。そのまま彼女は何度か首を横に振る。

「ホントに一人で大丈夫？」

「うん……」

こうなる事は予想出来た。ただ、俺が深く考えなかっただけで。落ち込んでしまい、握る手を緩めながらも視線だけは逸らしたりはしない。

「でも、一つだけ約束して？ さっきみたいに一人で居なくなったりしないです。いつでも俺の所に来て良いから」

「うん……」

たとえ拒まれても、心の何処かで支えになっていた。たった一人で辛さを抱え込む事はないのだから。

そんな気持ち但至少でも通じたのだろうか。

「……迷惑ばかり掛けてごめんね」

アレクと別れてから初めて、彼女が反応らしい反応をしてくれた。未だに俯いたままなのだが、そんな些細な事が嬉しい。

「迷惑だなんて思ってないよ。それじゃ、また明日ね」

何故、ミユが謝らなくてはいけないのだろうか。迷惑に思った事なんて一度も無い。それどころか、俺が不甲斐ないばかりに辛い思いをさせてしまつて。悪いのはミユではなく、俺だ。

表情を変えず、彼女は再び頷いてみせる。

「うん……」

消えそうな程の小さな返事と共に、部屋のドアが少しずつ、ゆっくりと閉められていく。その向こう側に居る彼女の姿が見えなくなるまで いや、俺の気が済むまで、申し訳無い気持ちいっぱい部屋の前に佇んでいた。

自室へ辿り着くなり中央に置かれている椅子に座り、テーブルに肘を付いて頭を抱え込む。

「はあ……」

大きな溜め息まで漏れてしまった。

さて、これからどうすれば良いのだろうか。呪いを解く方法を探し出すために、何か行動を起こさなくては。

神と名乗る塔の主に頼れない以上、手当たり次第に街や村を巡って聞き回るしかないだろうか。

いや、それは駄目だ。そんな事をしてワープを繰り返せば寿命を削ってしまう。前世の二の舞だ。それでは

「うーん……」

いくら考えようとしても頭が混乱し、良いアイデアが浮かんでこない。このままでは頭痛まで起きるのではないだろうか。

一度頭の中を空にしてみよう。そうすれば、ふとした拍子に何か閃くかもしれない。

息を思い切り吸い込み、深呼吸をしようとした丁度その時だった。部屋の中がほんの一瞬だけ薄暗くなったような気がしたのだ。風を超える程の速さで巨大な物体が窓の外を横切ったような、そんな感覚だ。

だが、そんな筈は無い。此処は二階の部屋なのだ。動物が窓の外を横切れる訳が無いし、速さからして鳥だとも考えにくい。

だとすれば、一体何なのだろうか。

それを確認するために重い腰を上げ、窓の傍へと歩み寄る。レースカーテンを手の甲で持ち上げ、外を隅無く見渡した。が、何も見当たらない。

今のは気のせいでは無い筈だ。何かが確実に此処を遮った。身を乗り出して窓ガラスに片手を付き、尚も外を覗き込む。前髪もガラスに触れてしまっている。

更にガラスへと近付いて頭を激突させそうになった時、タイミン

グ良くそれは起こった。

“水の魔導師”

頭の中に直接、少し高めの男の音が響く。以前にも何処かで聞いた事があるような、不思議な声だ。

誰の声だっただろうか。唸り声を上げながら記憶を辿る　　までもなかった。

頭の中に直接語り掛けてくるなんて、あの人物しか居ない。一年前に一度だけ聞いた、あの声だ。

「……何しに来たのさ」

姿の見えない声の主を威嚇するために、何の変哲もない天井を睨み付ける。発した声もいつもより低い。

この声の人物は地の塔の主ではなく水の塔の主だろう。確か、地の塔の主は女の声だった筈だ。

それでも、やはり神だと言っのだろう。ミユを傷付けた人物の間であるのには違いない。

俺の様子にも動じず、水の神は冷静に口を開く。

“地の魔導師の呪いの事で話がある。明日、水の塔まで来い”

「何で今更。此処で話せば良いじゃん」

いくら神だからと言っても、大人しく従ってやる義理は無い。どうせ俺にも、ミユの呪いは解けないと皮肉な言葉を投げ付けるだけなのだろう。

頭に血が上り、冷静に物事を考える事が出来ない。

“ 誰にも聞かれてはならぬ内容なのだ。特に地の魔導師には。……
良いか。明日、必ず一人で来るのだぞ ”

こんな事を言われても、反抗する事しか思い浮かばなかった。先程と同じように、乱暴に口を開く。

「 そんな事言ったって、明日、ミュと羽根取りに行く約束してるし 」

これは紛れもない事実だ。後から考えてみれば時間をずらせば良だけの話なのだが、今はそんな風に考えられる程、心に余裕は無い。

これでもう、神も何も言ってこないだろう。そう思ったのに。

“ 羽根はもう、地の魔導師に渡してある ”

俺の言い訳を全否定するかのようにさらりと言い放ったのだ。流石に返事に困ってしまい、何も言い返せない。

それを俺が納得したのだと勘違いしたのだろうか。

“ 呪いを解くも解かぬも、全てお前に係っているのだ ”

哀愁を帯びたこの声を最後に、水の神はこれ以上言葉を発する事は無かった。

部屋は静寂を取り戻す。

ミユに聞かれたくない。という事は、一応は神も彼女の心中を察しているのだろうか。先程はあんなに残酷な事をおきながら、よく言えたものだ。

冷静さを取り戻すため、視線を横に流しながら溜め息を吐いた。腕を組み、更に思考を巡らせる。

水の神はこうも言っていた。

呪いを解くも解かぬも、全てお前に係っているのだ

感情の熱りが段々と冷め始め、ふと違和感に気付く。

この流れからはおかしな内容ではないだろうか。彼女の呪いは解けないと言っておきながら、こんな事を言うとは。

「まさか……」

地の神がミユに嘘を吐いたとでも言うのだろうか。もし嘘だとすれば、彼女の呪いは

刹那床を蹴り、ドアを開け放って自室から飛び出していた。向かうはアレクの部屋だ。

俺だけでは判断出来ない。他者の意見も聞かなくては。

本当ならばアレクではなく、フレアに相談した方が良いアドバイスがもらえるのだろうか。しかし、今は駄目だ。自分の事だけで精一杯なのだろうから。

ミユの部屋を通り過ぎ、目的の場所を確認する。風のような速さで辿り着くと、勢いを緩めずにドアを押し開けた。

「アレク！」

目前には椅子に座って片手で頬杖を付き、悲観に暮れるアレクの姿がある。

突然の事に驚いたのだろう。一瞬で目を丸くし、こちらに振り返った。

「…………おおっ？」

素っ頓狂な声まで上げ、頬を支えている肘はテーブルの上から落ちそうだった。

いつもなら、間抜けなアレクの姿に笑いが零れるのだろう。が、今の俺はアレクの様子を気にする事なんて出来ない。

「神様が…………俺の所に来た…………！」

先程取り戻した筈の冷静さは何処へ行ってしまったのだろうか。喜びと疑念が絡み合い、頭の中が混乱している。言いたい事すら上手く纏まらない。

「…………ああ？」

そんな俺に、アレクも眉間に皺を寄せるばかりだ。

「塔に居るのが、実は神様で…………って、それはどうでも良くてっ」

とにかく、要点だけは伝えなくては。拳を前方で握り締め、何とか言葉を紡ぎ出していく。

「ミノの呪いの事があるから、明日、俺一人で水の塔に来いっ

て！ これ、どう思う？」

何だか肝心な所を伝え切れていないような気もするのだが、力を込めてアレクを見詰めた。

その一方で、アレクの眉間には益々深い皺が刻まれていく。

「いや……。どう思う？ って言われてもよー、訳分かんねーよ」

これの何処が、訳が分からないのだろうか。余程頭が固いらしい。理不尽な文句かもしれないが、心の中で悪態を吐いてみる。

「だから、その話を信用しても良いのかって事！」

「ホントに神なら……信用して良いんじゃないのか？」

俺がこんなに必死になっているのに、何故、アレクはこんなにも呑気なのだろうか。

やはり、アレクに相談したのが間違えだった。もう、自分一人で考えよう。

アレクに膨れっ面を向け、踵を返す。

「……もう良い。この話、ミュには知られたら駄目みたいだから。ミュには秘密にしようとして」

釘を刺すように強い口調でそれだけを言い残し、さっさとアレクの部屋を後にした。

もう少し此処に留まっていれば、この後の状況は変わっていたのかもしれない。

軽く閉めたつもりが、ドアは思いの外轟音を立てる。廊下には誰も居ないし、迷惑を掛けたのはアレクだけだから別に良いのだが。俯きながら

「ふう………」と溜め息を吐き、向かうべき方向へと顔を向ける。すると、なんと。

「……ミユっ！」

頬を赤く染めるミユが廊下に居るではないか。目が合った瞬間に心臓は飛び跳ね、肩が大きく震えた。

何故、こんな所に居るのだろう。纏まらない頭の中が更にもつれていく。

「……あつ。あのね？ 私、話が」

話し掛けられても、真面に反応出来ない。それどころか彼女を無視して目の前を通り過ぎ、自分の部屋へと猛スピードで駆け込んでしまった。

片手で乱暴にドアを閉め、椅子へと飛び付く。腕もテーブルへと投げ出して突っ伏した。同時に魔法でドアの鍵を掛ける。

俺は馬鹿だ。よりもよってミユを無視してしまうなんて。今頃になって後悔が押し寄せてくる。

神に口止めされている以上、下手に会話は出来ない。いつ、口を滑らせてしまうか分からないのだ。そのせいで彼女を危険な目に遭わせてしまうかもしれない。

だからと言って、他にも会話をせずに済む方法はあったのではないだろうか。

ミュに嫌われてしまったかもしれない。心が段々と暗く沈んでいく。
そんな俺を嘲笑うかのように、廊下に響く足音がこちらへと向かってくる。重たくずっしりとしたもの、それに床と踵がぶつかり合う小気味良い足音だ。

その足音の持ち主は俺の部屋の前で立ち止まったらしい。何となく伝わってくる気配で分かる。

でも、そんな物はどうでも良い。ミュに嫌われてしまったかもしれないという事実の方が俺の心に影響を与えているのだから。

「おい。もう隠せねーだろ」

アレクの声がくぐもって聞こえる。それに対し、見えもしないのに溜め息を吐いてみせた。

こうなったら自棄だ。何を言われても答えてやらない。そう決意した矢先に、

「おい！ ミュ、泣いてんだぞ?!」

衝撃的な事実が告げられたのだ。

まさか、俺がミュを泣かせてしまったのだろうか。嫌われてしまったばかりではなく、彼女を傷付けてしまうなんて。なんて事をしてしまったのだろうか。

椅子を後ろへとずらして頭を抱えた。
更に。

「さっき、いつでも行って良いって言ってくれたのに……」

消えてしまいそうな程にか細く震えるミュの声までもが聞こえてきたのだ。アレクの言葉通り、涙を流している様子が窺い知れる。胸が締め付けられるような感覚に陥り、思わず立ち上がっていた。静かにドアへと歩み寄り、音を立てないように耳を押し当ててみる。ミュは鼻を嚙って咽び泣いているようだ。益々申し訳無くなってくる。

「ミュに嫌われても知らねーぞ？」

追い討ちを掛けるようにアレクが言葉を投げつけてくるが、俺はとつくに嫌われているだろう。

言い訳をするためではない。ミュを慰めるために、先程掛けた鍵を開ける。特有の金属音が鳴り響く。

恐る恐るドアを僅かに開けて隙間を覗いてみると、ミュとアレクの顔が半分ずつ見えた。

予想通り、ミュは桃色の頬を涙で濡らし、アレクは睨みを利かせて不機嫌そうに突っ立っている。

「教えてやれよ」

教えられない事くらい分かっているくせに。無責任な事を言わないで欲しい。

「……アレクの役立たず」

「何ー！？」

こういつ時こそ俺ではなく、仲間の出番だと思っただ。本当に肝心な所が抜けている。

これ以上アレクに期待しても無駄だろう。とミュの腕を掴み、一

瞬だけドアを大きく開けて部屋の中へと連れ込んだ。その勢いで、二人でその場にしゃがみ込む。

その状態で片手を伸ばし、ドアを押した。閉まると同時に再び鍵を閉める。その間、鬼のような形相で俺を睨み付けるアレクの顔を見てしまった。

「もう、ぜってーオマエの相談になんか乗ってやんねーからな！」

声にも凄みを利かせているが、相談に乗ってもらった覚えは無い。俺が真剣に話をしているにも関わらず、ただ受け流されたただけだ。

ドアに向かい、俺も負けじと睨みを利かせた。

捨て台詞を残し、床を踏み鳴らすような足音が遠ざかっていく。

しかし、それ以上に俺の心を刺激する存在が此処にはある。

ミュウだ。

彼女は俺に背を向けたまま、こちらを振り返ろうともしない。無理やり引っ張り込んだから、相当驚かせてしまった影響なのだろうが。

彼女の腕を掴んだまま、唇を噛み締めて勇気を振り絞る。無理に笑顔を作って口を開こうと試みた。

それでも声を発せられずに数分が過ぎ去り、遂に。

「俺の事、嫌いになった……？」

思いが言葉へと変わる。

嫌われるような事をしたのは俺なのに不安で仕方が無い。『うん』と返されるのが怖くて、涙まで出そうになってくる。

勢い良く振り返って目を丸くするミユをただただ見詰めた。視界からはみ出る程に近付いた顔も、さほど気にならない。

ほんの少し間を置き、ミユは首を大きく横へと振った。艶やかな長い髪が揺れる。

「私の方こそ、嫌われたって」

「そんな筈無い！」

思わず、声に力を込めて彼女の言葉を遮っていた。腕を掴む手にも感情が伝わり、力が入る。

俺がミユを嫌うなんて。絶対にそんな事は無い。

真剣な眼差しを向ける俺に、彼女はちょこんと首を傾げてみせる。

「ホント？」

「うん」

この状況は、なんだか経験した事があるような状況だ。そうだ、丁度百年前にカノンと心を通わせていた頃に似ている。気付いた途端に頬は熱を帯び、鼓動も速まっていくな。

懐かしい。と思うと共に、恥ずかしさまでもが込み上げてくる。次に繋げるべき言葉が見つからない。

同じように頬を赤く染めるミユから目を逸らし、必死に話題を探し続けた。

どれくらいの間、そうしていたのだろうか。ふとした瞬間に一つ

の出来事が頭を過ぎり、口を開いてみる。
すると、

「あのだ」

「ねえ」

俺とミユの声が重なったのだ。顔を上げる仕草までもが重なり、俺の目と震える瞳がぶつかり合う。その瞬間、ミユの頬が薔薇色に染まった。同時に彼女は目を伏せる。

恥ずかしさと彼女の可愛らしさから、俺も顔を伏せた。視線だけは俯く彼女へと向けたままなのだが。

戸惑いながらもミユが先に、遠慮がちに声を発する。

「……何？」

「うん。ミユ、さっき話あるって言ってなかった？」

先程は無視してしまったが、確かに廊下ではったり会った時、ミユは『話がある』と言いかけていた。恐らく、俺に会いに来ようとしてくれていたのだろう。

この予想は当たったようだ。彼女の顔が僅かに動き、前髪の間から緑色の瞳が覗く。

「あつ……。さっき教えてくれた羽根なんだけど、取りに行かなくても良いみたい」

「うん。知ってる」

それに対し、考えもせず頷いていた。それがとんでもない事態

を引き起こすとも知らずに。

「何で知ってるの？」

「えっ?!」

聞かれた途端、心臓は大きく飛び跳ねた。背中には嫌な汗まで流れ始める。

迂闊だった。

ミュに知られないためにアレクに口止めをし、彼女を無視までしたのに。こんなに簡単に、自ら口を滑らすとは。自分が情けなくなってくる。

ミュからゆっくりと目を逸らし、知らない振りをする他に打開策が思い付かなかった。

「何、隠してるの？」

聞かれても絶対に言えない。言ってはいけない。そんな決意を示すように、口をぐっと結んでみる。

それでもミュの容赦無い攻撃は続く。俺だけをじっと見据え、白いスカートを両手で握り締める。

「アレクも教えてやれって言ってたし」

「アレクは関係無いよ」

目尻を上げて僅かに頬を膨らませる彼女に、きっぱりと即答してみせた。

アレクの言う通りに行動していたら切りが無くなる。俺の考えも計画も、全て滅茶苦茶になってしまう。

答えようとする俺に、更に不満を覚えたのだろうか。数十秒間を置き、ミュは今まで以上に目を吊り上げて頬も膨らませた。

そして、次に飛び出した言葉は予想もしないものだったのだ。

「教えてくれないと絶交だよ？」

放たれた衝撃に、一瞬で心臓が凍り付く。

それ程までにミュは怒っているのだろうか。答えないと、本当に絶交されてしまうのだろうか。

そんなのは嫌だ。しかし、やはり答える訳にはいかない。

両手で抱えた頭をフル回転させ、葛藤に苦しむ。

その結果、出した答えは。

「言えないよ……」

いくら嫌われたとしても、絶交されたとしても教えられない。

神がミュには知られてはいけないと言ったから。という理由もある。だがそれ以上に、神が口止めするという事は、もしかすると明日は危険が待っているかもしれないのだ。そんな事に彼女を巻き込めない。巻き込みたくない。

うなだれ、首をゆっくりと横に振る。

ただ黙っていても、納得なんかしてくれない。それは分かるのだが、俺もこれ以上ぼろを出す訳にはいかないのだ。

悲しみとも怒りとも取れる複雑な表情で苦笑いをし、ミュはすくっと立ち上がる。

「分かった。じゃあ、私、部屋に戻る」

「ミュ……」

そんな反応をされると、更に悲しみが込み上げてくる。手を取って引き留めたい気もするのだが、そこまでする勇氣は残されていない。

俺に背を向け、鍵の掛かったままのドアを開けようと試みる彼女を見詰める事しか出来なかった。

ドアの軋む音や、ドアノブの回る音が虚しく室内に響く。

「嫌われたとしても、それでも……」

言いながら俯く。

こんな事を言ったとしても、ミュに伝わりはしないのだろう。もう、彼女の姿を視界に入れる事さえも辛い。

とその時、何やら前方が光を放ち始めたのだ。鍵が開かないから、ミュが魔法で移動しようとしているのだろうか。

ミュが此処に居ようと居まいと、どちらにしても俺の気持ちは彼女の心に届かないのだ。俺の気の済むままに言葉を紡いでいく。

「ミュを……」

言い終わる前に光が消え去る。

「危ない目には、遭わせたくないから……」

宛の無い呟きは、俺の他には誰も居なくなつた空間へと吸い込まれていった。静寂が足音も立てずにやってくる。

しばらくの間は悲しみと切なさが交錯し、この場から動けずじ
た。

第13章 代償

暗がりの中でカーテンに手を掛け、一気に横へと流す。心地の良い音を響かせながら開けた窓の外はまだ薄暗い。まるで俺の心を映し出しているかのようだ。

昨日は殆ど眠れなかった。あんな事があつたばかりなのだから当たり前前だろう。それに、今日は神との対決の日なのだ。落ち着いていられる訳が無い。

片手を胸に当て、何度か深呼吸をしてみる。高鳴る鼓動が腕まで伝わってくる。

ミュに気付かれる前に塔へ向かおう。また問い詰められてもしたら大変だ。

最後に深く息を吸い込み、上半身全体を使って肺に詰め込んだそれを吐き出した。

気分転換も兼ねてシャワーを浴び、服も着替える。神に会うから、勿論真っ白の服だ。

そうこうしている間に空は白み、部屋を明るく照らすまでになっていた。ふと窓に視線を向ければ、空は先程とは正反対の表情を見せているではないか。雲一つ無い、清々しい青空だ。

俺の心も晴れ晴れとしてくれれば良いのに。心の中で小さく呟き踵を返すと、早々に自室を後にした。

ドアの閉まる寂しい音が廊下の空気を震わせる。

本当なら、誰にも会わずに塔へ向かった方が良いのだろう。だが、頭の中からミュを追い払おうとすればする程、彼女の顔が浮かんでくる。触れなくなってくる。

その欲求を満たさそうとするかのように、足はミュの部屋へと向かっていた。

早朝に自室を出たのは、目覚める前の彼女を一目見るためでもあるのだ。

音を立ててしまわないようにドアノブに手を掛け、ゆっくりと回していく。徐々に視界が開けていき、ミュの部屋の中が目映る。

なんと、カーテンが開け放たれているではないか。

もしかして、もう起きてしまっているのだろうか。と慌ててベッドへと視線を移す。

どうやらカーテンを開けたまま眠ってしまったらしい。前髪が少し隠れる程の位置まで布団を被り、彼女は安らかな寝息を立てている。それに合わせて布団も小さく上下する。

俺の取り越し苦労だったようだ。

「良かった。寝てて」

ほっと胸を撫で下ろし、慎重にミュへと歩み寄る。此处で起こしてしまう訳にはいかない。

それでも彼女に近付けば近付く程、触れたいという欲求が高まってくる。もう、抑えられなかった。

「行ってくる」

ミュの顔があるであろう場所に向けて微笑み掛け、そっと頭を撫でる。緊張でどうしようもない筈なのに、彼女に対する愛しさを忘れる事は無い。

ちゃんと君の呪いを解く方法を聞き出してくるから。そう心の中で誓いを立て、後退りをしようとしたその時だ。

布団の中から白く、しなやかな腕が伸びてきたのだ。狙いを定めたかのように俺の服の裾を正確に捕らえ、がっしりと掴む。その握力は思いの外強く、掴まれている側の肩に力が掛かる。その瞬間、心臓が大きく飛び跳ねた。そのまま止まってしまおうのではないかという程だ。

「……えっ?!」

まさか。どうして。

嫌な予感と共に、掴まれていない手を伸ばして布団を捲っていく。みるとその中が露わになり、怪訝そうなミユと目が合った。

一気に背中から汗が噴き出す。

まさか、俺を問い詰めるために徹夜をしたのだろうか。そんな心配を余所に、ミユは小さく首を傾げる。その可愛らしさは小動物を連想させた。

「何処に行くの?」

しかし彼女の口から発せられた言葉は、俺を苦境に立たせるものだ。自然と眉間に皺が寄り、表情が引き吊る。

こうなるのが嫌だったから、夜明けと共に部屋を出たのに。まるで意味が無い。

もう、自分だけではこの状況を乗り越えられないだろう。そう判断してミユの顔も真面に見ずに上体をドアへと捻り、思い切り息を吸い込んだ。その勢いを保ったまま声へと変える。

「アレクーっ!」

部屋の空気全体を振動させるかのような音量だ。それなのに、部屋の外からは物音一つ聞こえてこない。

こんなにも危機的状況なのに、アレクは暢気に夢の中でも居るのだろうか。

「アーレークーっ！」

先程よりも腰を折り、力を込めてみる。それでも駄目だ。

「アレクって、ホントに役に立たない……」

余計な時はお節介を焼きたがるくせに、肝心な時はいつも駄目ではないか。昨日の発言といい、今日の寝坊といい、本当に駄目だ。などと理不尽な文句を心の中で呟いてみる。身体から力も抜けていく。

その一方で、未だに俺の服を掴んでいるミュの手に、僅かに力が込められるのを感じた。

「私も……行くっ」

小さく、それでいて決意に満ちた声が背中に投げ掛けられる。

だが、それを認めてしまふ訳にはいかない。

「駄目だよ」

首を横に振りながら言い、上体を元へと戻した。視線を落とせば緑色の瞳が俺を捉える。小刻みに震えてはいるものの、退く気は全く無いようだ。

「何で？」

「それは……」

「言えないなら行くっ」

横に目を流して口ごもる俺に、彼女の口調は益々強くなる。

こうなってしまうては、何を言っても無駄だろう。どうにかして誤魔化すしかない。

「……分かった、一緒に行こう？ でも準備があるんだよ。一回部屋に戻って良い？」

勿論、これは嘘だ。準備なんて既に済ませてある。

部屋に戻ると見せかけてすぐに塔へ向かおう。そう思ったのだが。
「ミュ。放してくれないと、部屋まで行けないよ」

彼女は大きく頷くものの、俺の服を放そうとする気配を見せない。瞳にも強い意志が宿ったままだ。

「部屋にも……一緒に行くっ」

皺が残るのではないかという程に、更に手の中で丸まっている布を握り締める。

カノンと違ってミュは俺に弱音を吐いてくれるが、その頑固さはカノンの頃と変わらないらしい。

「しょうがないか……」

まあ、此処ではなくても彼女を振り切る事は出来るのだ。この場に置き去りにするよりも傷付けてしまつかもしれないが、仕方が無い。

わざとらしく大きな溜め息を吐き、頭を掻いてみせる。この俺の仕草で、彼女の疑念を少しでも払拭出来ただろうか。彼女の手を掴むと、その表情が和らいだように見えた。

俺の服を放してベッドから怠そうに置き上がったミュの手を引き、今来た道を引き返す。

自室の前で

「ふう……」と細く息を吐き、覚悟を決めた。
彼女に向き直り、何とか笑顔を作ってみせる。

「じゃ、此処で待ってて」

短く言い切ると、握っている手を緩めてノブに反対の手を掛けた。これ以上ミュの顔を見ていると、申し訳無い気持ちが入り込んでくる。居ても立ってもいられなくなってしまいそうだ。

だが、放そうとした手をミュはきつく握り直す。

「入っちゃ……駄目？」

頬をほんのりと赤らめ、潤む瞳で俺を見詰める。

そんな表情をするなんて狡い。心はざわめき、部屋に彼女を入れてしまいたいという感情まで芽生え始めたではないか。

駄目だ。此処まで来ておいて、昨日と今日の行為を全て棒に振るなんて。

頭を切り替えるためにも、わざと意地悪な言葉を投げつける事にした。

「着替え、見たい？」

言いながら口元と目元を吊り上げる俺に、ミユの目が一瞬で丸くなる。

「ひゃっ！ ごめんなさい……」

叫び、林檎のように真っ赤になった顔を両手で覆って俯いてしまった。そんな彼女が愛おしくて堪らない。

可愛らしい反応をするな。などと勝手に満足し、彼女の頭に軽く手を乗せた。その手を今度はドアノブに持っていき、それを回して部屋へと舞い戻る。

名残惜しい気持ちを振り払い、ミユの顔を見なくても済むように背中でドアを押し戻した。身体の支えがすっかりするのと同時に、特有の小さな音が耳に響く。

これで障害は無くなった。もう、行くしかない。

「俺の方こそ、ごめん……」

ミユは俺が部屋から出てくるのを待っているのだろう。ドア越しの彼女に聞こえてしまわない程の音量で呟き、しわくちゃになってしまった服の裾を掴む。

胸が締め付けられるような思いに駆られながらも瞼を閉じ、神の待つ雪と氷の世界へと向かった。

ダイヤの空とは違い、この空には暗雲が立ち込めている。その雲の色が氷の塔や木々を、地面を覆い尽くす雪を染め上げ、澱んだ雰囲気へと変化させていた。

抱いていた希望が掻き消されてしまいそうだ。

だが、こんな自然現象に負けている訳にはいかない。拳を力いっぱい握り締め、目前に聳える水の塔を睨み付けてみる。それでも。

「緊張する……」

手は汗ばみ、脈も速くなっていく。生唾まで飲み込んでしまった。ミユとの一件で何処かに吹き飛んでしまっていた緊迫感が戻ってきたらしい。

足が前へと進まず、雪の中に浅く沈んだままだ。

“大丈夫だよ。あの子の呪いはきっと解ける。俺も出来るだけ力になるから”

リザードが話し掛けてきても頷く事しか出来なかった。胸に手を押し当てて襟元を握ってみても、気を紛らす効果は無い。そんな俺に痺れを切らしたのだろうか。

“ほら”

強めの言葉と共に、背中に力が加わる。誰かに押されたような感覚だ。恐らく、リザードがやったのだろう。

「ひん……」

小さく返事をし、勇気を振り絞って一步を踏み出す。風の吹く音に混じって、雪の踏み固められる音が耳に残る。

何とか湖に架かる氷の橋を渡りきり、塔の入口もはっきりと見えってきた。中は相変わらず薄暗い。筈だったのだが。

様子がおかしい。奥で何か青い光を放っているようなのだ。

それが何なのかを確かめるように、心なしか歩く速度は速まっていくな。正体は塔の中へと入る前に明らかとなった。

「何で……魔法陣がつ？」

なんと、光を放っているのは魔法陣ではないか。こんな状態は見ただ事がない。

通常、塔の中に描かれている魔法陣は触れない限り光を発したりはしないのだ。ところが、俺は一切触れていないし、他に誰かが触れる筈も無い。俺が来るのを待ち構えていたかのだろうか。

そんな疑念を裏付けるように、

“その魔法陣を潜れ”

塔の中へと入った途端、昨日も聞いたあの声の主が話し掛けてきたのだ。冷たい声に、怒りにも似た感情が沸き起こる。緊張にも劣らない。

「分かったよ」

心のままに不躑躅な物言いで答えると、今一度、魔法陣へと目を向ける。相変わらず淡く揺れる光を湛えていて、その様子は俺の進入を待ちわびているかのようだ。

それに応えるためではないが、腕も使って大きく深呼吸をし、青

い光の中へと足を踏み入れた。そつと瞼を閉じる。

浮遊感はあると言う間に消え去っていった。着地すると同時に、水に雫が落ちるような音が広がる。

俯き加減で瞼を開けてみると、そこは

「……………えっ?!」

水上だったのだ。水は透き通っていて光が乱反射し、水中に幻想的な模様を作り出している。水底では色とりどりの海藻が波打つ。俺の足元からは波紋が四方へと広がっていく。

何故、水上に立っていられるのだろうか。沈みはしないのだろうか。以前に魔法陣を通ってきた時は、こんな場所へは来なかったのに。訳が分からない。

混乱しながら顔を上げると、そこには更に驚くべき物があったのだ。

「ええっ?!」

俺の身体の幅くらいはあるつかという太さの黄色い縦長の物体、四本に枝分かれする指のようなそれ、先にある鋭い爪のような物、見るからにそれは、

“鳥っ?!”

そう、鳥の足だ。

しかし、こんなにも大きな足を持つ鳥が存在するのだろうか。少なくとも、俺は聞いた事が無い。

こんなにも非現実的な事が一度に起こるなんて。頭が付いていない。

「来たな」

呆気にとられ、目を見開いたままで口を中途半端に開けていると、頭上から声を浴びせられた。

その声色はまさに水の神、その人の物だった。いや、鳥と言った方が正しいだろうか。先程とは違い、頭の中ではなく耳へと届く。

視線を更に上げていけば、光沢のある青色の羽毛で覆い尽くされた丸い身体、短い首、水色をした身体の割には短い嘴、円らではあるが鋭い光を放つ羽毛と同じ色の瞳、と順に目に映る。

果ての無い、水の満ち溢れる所に立つ巨大な青い鳥　異様な光景だ。

「我は悠長にしていられる性格ではない。手短かに話そう」

俺の様子など気にも留めず、目の前に立ち塞がる鳥の姿をした神は話を進める。短気だとは言っても、もっと相手の事を考えて欲しい。

そんな心の叫びに気付いたのだろうか。

“その前にさ、謝る事があるんじゃない？”

リザードが口を挟み、神の発言を遮ってくれた。

「何の事だ」

“地の子にした事”

もつともな言い分なのに、神は嘴を僅かに開けて溜め息を吐く。

「あれは我がしたのではない。地の神がした事だ」

“ だからってさ！”

「 …… そうだよ！」

リザードが時間を稼いでくれた間に何とか冷静さを取り戻した俺は、リザードと一緒に思わず突っ込みを入れていた。それなのに神はまだ認める気が無いのか、目を閉じてゆっくりと首を振る。

「地の魔導師には聞かせられぬ話だと言っただろう。我が地の神の立場だったとしても、同じ事をしていた筈だ」

謝る気配も見せずに淡々と話す神に、段々と腹が立ってきた。

別に、詫びの一言くらい入れたって良いではないか。それに、もし聞かせられない内容だとしても、あの時にミユを傷付けずに済んだ方法だってあった筈だ。

拳を握って神を睨み付けてみる。その一方で、神の目付きも鋭くなる。

「良いか。これから話す事は、我らが百年かけて探し出した物だ。だが、実行するもしないもお前の自由」

神はそこで一度言葉を区切り、

「ふう……」と息を吐く。

「心して聞きなさい」

言い切る神の瞳は確実に俺を捉え、放そうとはしない。そのただならぬ雰囲気、否応無しに緊張感が高まり始める。

次の一声は唐突に発せられた。

「地の魔導師の呪いは解けぬ訳ではない」

「えっ………?」

神が放った言葉が頭の中に木霊する。

『呪いは解けぬ訳ではない』。確かにそう言った。昨日の俺の予感は当たっていたのだ。

「じゃあ、何でミユに嘔吐いたのさ！ その方法、早く教えてよ！」

真実を教えてさえいれば、ミユは心に深い傷を負わずに済んだのに。俺だって、彼女に対して負い目を感じずに済んだ筈だ。

先程神に言われた事も忘れて大声で叫んでいた。そんな俺に呆れたのか、神は目を細める。

「理由は言ったであろう。落ち着け」

落ち着け。と言われて落ち着ける程、俺は単純ではない。目を吊り上げたままで口をへへの字に曲げてみる。

「これ以上言い争いを続ける程、我は愚かではない」

無言で反抗する俺に、神は溜め息混じりで返す。

これでは、俺が『愚かだ』と言っているようなものではないか。

苛々が更に募っていく。恐らく、表情にもそれが表れているだろう。それでも神は自分のペースを崩さない。

“ ホント、さつきから何なのさ ”

ぼそつと呟いたりザードも無視し、

「 まずは…… 」と自らの翼の根元を嘴で弄り始める。

「 これを受け取れ 」

再び正面を向いた時には、神は細長い何かをくわえていた。おもむろに嘴を大きく開け、それをこちらへと落とす。

金属製ののだろうか。光を反射させながらゆっくりと先端を水面へと向け、重量に逆らわずに真っ直ぐに

その光景に見入っているうちに、ごく間近で、その何かが水面に衝突した。大量の水飛沫を上げて俺の視界を遮るところか、頭の天辺から水を浴びせる。

びしょ濡れになってしまったではないか。と心の中で神に悪態を吐き、水を拭おうと手を頭に当てたのだが。

濡れた筈の身体が何処も濡れていないのだ。

不思議な事があるものだ。この場所自体が不思議だらけだし、気にしていたら身が保たないだろう。

さつさと頭を切り替え、降ってきた物体を確認してみる。

波の収まった足元に浮かぶそれは、十字の形をした短剣だった。

躊躇いもせずにそれを取り上げ、まじまじと眺めてみる。

全長は丁度、俺の肩幅くらいの高さだ。銀色の金属製で、刀身は緑色の鞘に収められている。刀身と柄の間に当たる部分には親指の

先程度の窪みがある。それ以外には装飾も施されておらず、シンプルな造りだ。

「その窪みに玉を埋め込み、黒の魔導師を一突きすれば」

「呪いが解ける？」

「そうだ」

神の方を見向きもせず会話をする。

「玉は地の魔導師に渡してある。それを使いなさい」

それさえ実行出来れば、ミユの呪いは解けるのだ。嬉しさのあまり、そこに孕む危険に気付けなかった。

「呪いを解くばかりではない。その者の魂を消滅させる事が出来る。ただし、その剣の短さを考えれば、使った者がどうなるか……分かるな」

「……あっ」

そつだ。これ程までに短い剣を相手に突き刺すとすると、当然、相手に接近しなくてはいけなくなる。その相手が魔導師なのだ。魔法で反撃でもされれば、近づく事は簡単ではない。もし近付けたとしても無傷では済まされないだろう。

一呼吸置き、神は更に重大な事実を告げ始めた。

「その上、地の魔導師の呪いを解くにはいくつかの条件があるのだ」

言い切ると細い息を吐き、顔を上げた俺を凝視する。まるで、俺の心の中を覗き見るように。

変に脈打つ心臓をどうにかしようと、自然と片手が胸を押さえつける。

「玉には地の魔導師の魔力が貯えられていなくてはならない。十分な魔力が貯えられていれば、玉を込めた時に剣の色が変化する筈だ。魔力が必要な理由は……お前なら説明せずともいずれ気付くだろう」

俺の顔色を伺いながら、相変わらず淡々とした口調で話す。息継ぎをし、更に続けていく。

「そして何より、呪いをかけられている者を救い出したいと願う強い意志を持つ魂が必要なのだ」

その言葉と共に、神の瞳に一層力が籠もった。周囲にも威圧感が漂い、俺の緊張を最高潮までに高める。

「呪いをかけた本人の手によって殺められた者の魂が自らの意志で媒介となり、呪いを玉の中へ封じる。そうすれば、呪いが発動する事は無い」

告げられた内容があまりにも衝撃的で、頭がついていかない。いや、ただ理解しようとしていないだけだろうか。

考えたくない。という思いと、何とか理解しなくては。という思いの狭間に立ち、靄の掛かる頭を横に振ってみる。

何とかして結論を出そうと試みたのだが。

「それって、もしかして……」

震える声を出すだけで精一杯だ。そんな俺に、神は最後の―撃を
与える。

「そつだ。要するに身代わり。お前が適任だろつ」

頭が真つ白だ。混乱する事すら忘れてしまった。ただただその場
に立ち尽くし、眩い程に鮮やかな青色の物体を見詰めてみる。

一方でそれは無表情で俺を見下ろし、感情の籠もっていない言葉を
を吐き捨てた。

「黒の魔導師に致命傷を与える時の危険性を教えるまでも無かつた
な。もう、お前に話すべき事は何も無い。仲間の元へと戻るが良い」

有無を言わずに翼を大きく広げ、俺に魔法をかける。途端に視
界は光に包まれていった。身体が宙に浮いたような感覚に陥る。

もし仮に時間を与えられていたとしても、こんな状態の俺が反抗
出来る筈も無いのだが。

神から死刑宣告を下されたのはミュではなく、俺の方だったのだ。

まるで魂が抜け出したかのように、ぼんやりとしながら外へ向か
って歩いていた。胸が焼けるように熱い。瞳からは涙が溢れ出し、
両頬をはらはらと伝っていく。俺が通つた後には水滴が規則正しく

並んでいるのだろう。

氷の出口を潜って目的もなく橋を渡り、空を見上げてみる。顔に、肩に雪が降り積もり、ひんやりとした感覚が脳へと伝わってきた。空も一緒に泣いてくれているのだろうか。それとも、俺を呼んでいるのだろうか。

ふわふわと舞い降りる真っ白な牡丹雪は、天使の羽根を連想させる。俺の運命を暗示しているかのようだ。

もう、立っていられる程の元気も残っていない。膝は力無く折れる。それでもどうにか両腕で身体を支え、地面との衝突を免れた。積もったばかりの柔らかな雪は押し潰され、深く手の平の形に沈む。手にしている剣も一緒に埋まってしまった。流れ落ちた涙はそこに穴を空ける。

「はあっ……。うっ……」

嗚咽は澄んだ空気に瞬時に吸い込まれ、余韻も残さずに消えていく。

“もう……。戻ろう……。ずっと此処に居ても、風邪引くし……”

途切れ途切れに話すリザードも涙声だ。

『戻ろう』と言われても、魔法を使う事が出来るような精神状態ではない。俺には無理だ。

ところが間を置かずに身体が光始めたのだ。ワープをする時の現象と変わらない。

恐らく、リザードが俺の力を借りて代わりに魔法を使ったのだろう。別にどうでも良い事だ。

冷たい雪の感触が暖かい絨毯の感触へと変わる。見回してみれば、

確かに此処は俺の部屋だ。

朝はそんな事は無かったのに、布団はベッドの上から摺り落ちて
いる。机の上に乗っていた筈の万年筆も床へと移動していた。ミュ
か、それでなければアレクが此処に入ったのだろう。黙って居なく
なった俺に腹を立てたのかもしれない。

そこまでして聞きに行った結果がこれだなんて。悔しくて堪らな
い。

戻りつつある感情に身を任せ、開け放たれたままになっていたド
アを振り向き様に力いっぱい押し戻す。右手の下敷きになっている
短剣も握り直し、壁に向かって投げつけた。

「うわあああっ！」

恐怖を、やり切れなさを全て発散するかのように喚き散らす。両
手で頭を抱え、そのまま髪を強く握り締めた。

「何……で……っ！」

何故、運命はこんなにも非情なのだろうか。俺たちは充分過ぎる
程苦しんだではないか。

呪いを解けば、ずっとミュと一緒に居られると思ったのに。今度
こそ幸せになれると思ったのに。

嘆いても、何をしても現実是不変ならない。それでも叫ばずにはい
られなかった。

「誰か……嘘だって、言って……！ 頼むから……っ！」

もう、何もかもが嫌だ。

「……」

放心状態で立ち上がり、ベッドに這い上る。そのまま現実を放棄するかのようになり、瞼を閉じて夢の世界へと逃げ込んだ。

第14章 絶望の淵で

暗闇の中、誰かの叫び声が聞こえてくる。それに、身体が上下に揺れている。

何が起きているのだろうか。分からない。

うつすらと遠くに見え始めた光に導かれるようにして、前方へ片手を突き出した。眩い程の光は段々とこちらに迫ってくる。その先に見えた物は、

「おい！ 起きろっ！」

アレクの顔だった。

窓から差し込む光を背負い、俺の両肩を鷲掴みにしている。眉間には皺を寄せていて、吊り上げた目で俺を見下ろす。

目覚めた瞬間に見た物がこれだとは。最悪だ。

「昨日は昼飯も夕飯も、今日だって朝飯も食いに来ねーから、渋々覗きに来てやったらよー……。オマエ、いつまで寝てんだっ?!」

眉をひそめて不服さを表情に出す俺を気にも留めず、アレクは捲くし立てる。

『いつまで』とは言いが、今は何時なのだろうか。カーテンの隙間から薄日が漏れているから、夜にはなっていないのだろう。昼頃だろうか。

額に片手を当てて考えてみるが、やはり分からない。

「それに布団も掛けねーでよー、白い服のまんまだろっ？ 風邪引いても知らねーぞっ？」

自分の身体へ目を向ければ、確かに寝るにしては寒々しい格好をしている。身体を守るように膝は曲げられていて、手足は冷えていた。

そうしている間にも頭は覚醒していく。昨日の出来事も思い起こされる。あれから一日寝過ごしてしまっなんて。物凄い現実逃避だ。

「やっぱ、ミユの呪いは解けねーって言われたのか？」

考え込んでいるうちに、無意識のうちに表情が曇っていたのだろう。上半身を起こしていく俺の顔を見ながら、アレクの声は遠慮がちになっていった。表情にも哀愁が漂い始める。

「そうじゃない。」と答えようとしたのだが、口を小さく開いただけで声にはなってくれない。仕方無く、黙って首を横に振った。

「じゃー、何でそんなに冴えねー顔してんだっ？」

事情を知らないから無理も無いのだが、アレクは更に質問を重ねる。

そんな風に問い質されると、嫌でも水の塔での出来事が頭の中を占拠していく。耐えきれず、俯いて大きな溜め息を吐いてしまった。

そんな俺の気持ちを察してか、アレクは窓際へ歩み寄るとそこに凭れ掛かって腕を組んだ。細く息を吐き、小さく呟く。

「言いたくねーんなら、別に聞かねーけどよー……」

言いながら、俺から目を逸らす。

聞かないと口では言っが、聞く気満々ではないか。ドアのある壁

とは反対側に居るのだから、部屋から出て行く気は無いのだろう。どうせ、いずれは言わなくてはいけない問題だ。俺一人で背負うには重過ぎる。

俯きながら、感情も籠めずに声にしていく。

「ミュの呪い、解けるよ。ただし……」

「何だ？」

僅かに身を乗り出したアレクの表情を確認し、

「ふう……」と大きく息を吐いてみせる。

「俺がミュの身代わりになれば、ね」

言い切った瞬間にアレクの表情は引き吊り、そのまま固まってしまった。口も中途半端に開いている。余程の衝撃を受けたらしい。

悲しくて仕方が無い筈なのに、何故か笑いが込み上げてくる。

「はは……」と空笑いしてしまった。

「オマエ……何、言っただ？ 頭のネジ飛んだか？」

「そんな訳無いじゃん……。そこら辺に剣、落ちてない？」

訝しがりながらも腰を屈めて剣を探し始めたアレクを尻目に、俯き加減でもう一度大きく溜め息を吐く。

「……これか？」

さほど時間をかけずに目的の物を見つけ出したらしい。顔を上げてみると、確かに前屈みになったままのアレクの手には見覚えのあ

る剣が握られていた。嫌味な程に光を反射させ、己の存在をアピールしている。

やはり、昨日の出来事は嘘ではなかったのだ。分かってはいたが、胸に鈍い痛みが走る。

「何でこんな物騒なもん」

「それが証拠だよ」

アレクという言葉を遮り、剣を指差しながら小さく吐き捨てた。

一方で、姿勢を正したアレクは眉をひそめて鞘の付いたままの剣を払う。

「訳分かんねーよ！ ちゃんと説明しろ！」

混乱しているとも、脅しているとも取れる口調だ。いや、口調だけではなく、俺に向ける表情も。

拳を握り締め、纏まらない頭で言葉を繋げていく。

剣の使い道、剣に埋め込むべき玉の在処、ミユの呪いを解く方法、全てを包み隠さずに話したと思う。ただ、正確に伝え切れたかどうかは自信が無いが。

まるで自分に科せられた事ではないかのようだ。違う世界で起きた事を客観的な視点で伝える。そんな感覚だ。

アレクはと言うと、話を聞かせる度に大袈裟な反応をし、剣を見たり、首を振ってみたりしていた。だが、声を上げる事はしない。黙って俺の言葉に耳を傾ける。

最後には声にならない声を発し、苦悶の表情を浮かべていた。剣と一緒に拳をわななかせる。

「やっとミユに逢えたのにさ。ホント、酷いよね……」

「嘘……だろ……」

震えるアレクの声に、首を振りながら呟く。

「嘘じゃないよ……」

自分で言つて、自分で心の傷を広げてしまった。

嘘ならどれ程良いだろう。寝て起きたら全て夢だった。そんな事は起きないだろうか。

叶いもしない幻想を抱いたせいで、涙が零れそうになってくる。

瞬きを我慢して必死に堪えた。

こんな状況に置かれても、アレクには弱い自分を見せたくないらしい。

「まさかオマエ、ソレ、やる気じゃねーだろーな」

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、アレクは俺の顔色を窺うようにして見下ろす。

『やる気じゃねーだろーな』とは、『やるな』という意味だろうか。ミユを見捨てるだけでも言うのだろうか。

俺にはそんな選択肢なんて存在しない。見捨てる事なんて絶対に出来ない。

たとえ自らの命を失う事になったとしても、ミユを見殺しにするよりはずっと増した。もう二度とあんなに悲しい思いはしたくない。

堪らずに息を吸い込んでアレクを見返した。が、その顔は真剣そ

のもので説得力がある。

勢いが衰えてしまい、目を伏せて一度唇を噛み締める。そのまま小さく口を開いた。

「ミユが生きててくれるなら……。幸せになつてくれるなら……」

言い切ると再び口を結ぶ。

「……オマエ、本気で言つてんのか？」

「冗談な訳無いじゃん……」

こんな時に、こんな冗談を言える筈が無いではないか。

怒りを露わにするアレクを気にする訳でも無く、目を横に流しながら答える。

するとアレクが何かを投げつけたのか、鼓膜が痛くなる程の轟音が鳴り響いた。更に、床を振動させながら足音がこちらに近付いてきたのだ。視界にアレクの爪先が映った途端、胸倉が締め付けられる。身体が僅かに持ち上げられ、その拍子に顔が正面を向いてしまった。

耳まで真っ赤に染まったアレクの顔が物凄く近くにある。近過ぎて、ぼやける程だ。俺を貫く瞳は　もしかして潤んでいるのだろうか。

「アイツがオマエの居ねー世界で幸せになれると思つてんのか?!
一昨日だってよー、アイツ泣いてただろ?!　昨日だってオマエに『置いてかれた』って言つて泣いてたんだぞ?!　アイツの気持ち、考えた事あるのか?!」

言い返す暇も与えずに捲くし立てる。

いつもならば、すぐに反撃出来るのだろう。しかし、今は言葉が出てこない。

思い切り顔を逸らして床を見詰めた。

「おい……何か言えよ……」

脅されたって、何を言い返せば良いのか分からないのだ。自分の意志を伝えるように、そつと瞼を閉じる。

黙ったままの俺に苛ついたのだろう。持ち上げられた身体が更に浮き上がった。同時に胸も苦しくなる。

そして

「何か言えって言ってるんだろーっ!」

絶叫と共に、右頬に衝撃が走った。歯が折れたのではないかという程の鈍痛だ。口の中に鉄の味が広がる。

そう、アレクに殴られたのだ。しかも拳で。心の痛みと比べてしまえば何て事無いのだが。

殴っただけでは飽き足りないのか、俺の身体を持ち上げてベッドへと叩き付けた。それと同時にベッドも悲鳴を上げる。音の割には、背中に受ける衝撃は少ない。

それでも顔を歪めて見せる俺に、アレクは更に言葉を浴びせる。

「ふざけんな! その気持ち、オマエが一番分かってる筈じゃねーか! 何でだよ?! ああっ?!」

分かっているからこそ、そうしなくてはならない場合だってあるのだ。心の中で呟いてみるが、アレクはまるで理解していないのだろう。

アレクは今まで見た事が無いくらいに目を吊り上げ、眉間に深い皺を刻んでいる。今にも頭から湯気を噴き出すのではないかという程の怒りようだ。

「んな事したらタダじゃ済まさねーからな！」

震え上がる程の剣幕なのだろうが、俺には何の意味も無い。逆に死んでしまった後では『ただでは済まさない』なんて通用しないではないか。などと理屈をこねてみるくらいだ。

「良いか?! 変な気起こすんじゃないぞ! その時はオレがオマエを」

「でもさ、アレクたちは平気でしょ?」

一瞬の隙を突いて口を出してみる。自分の感情も無視して思い付きで言葉を並べていく。

「……………何がだ?!」

「俺が早死にするのなんてさ、見慣れてるじゃん? だから二人がミユを」

「っあああーっ!」

叫び声に驚いて顔を正面に向けた時には、既に目前にアレクの拳が迫っていた。避けられる筈も無く、今度は左頬に命中する。先程の威力にも劣らない。同じように口内が裂け、気持ち悪い味が舌を刺激する。

涙は出ていないのに視界が霞む。顔の向きを元へ戻す気力も起きず、目だけを動かしてアレクの様子を窺ってみた。

だが、はつきりとは見えない。俯いているのだろうか。という事が分かるくらいだ。俺の胸倉を掴んだままの腕の重みに加え、もう片腕の重みも同じ場所に掛かる。

「慣れて堪るかよ……！ オレらが百年間、どんな思っていたと思っただけだ？！ オマエらだけじゃねーんだ！ オレらだってなあっ！ ……くそおっ！」

激しく喚き立てられた後、胸に掛かる重みが半減した。また俺の顔を目掛けて拳を振りかざしたのだろうか。

次に襲ってくるであろう痛みを備え、思い切り瞼を瞑る。しかし、予想していた事は起こらなかった。

不意にドアが開いた小さな音が聞こえ、廊下の空気が部屋へと流れ込んできたのだ。

「……アレクっ！ 何してるのよ！」

この声はフレアだ。

恐る恐る瞼を開けていくと、未だに霞んではいるが、アレクの隣にフレアの姿を確認する事が出来た。

「止めんじゃねーよ！ コイツ、何も分かってねーんだ！ 今分からせてやんねーと」

「もう十分よ！ ラウドの頬、真っ赤に腫れてるのよ?! 血まで出てるじゃない！」

「んなもん関係ねーよ!」

二人の言い争う声が左から右へと流れていく。別にどうでも良い話だ。ただ、これ以上は殴られずに済む。という安堵感だけは沸き起こる。

ほっと胸を撫で下ろした瞬間、乾いた音が部屋中に響き渡った。フレアがアレクを平手打ちしたのだ。

アレクは自分の頬を庇おうとしたのだろう。俺を束縛する物は全て取り払われ、胸の苦しさも消え失せる。思わず

「はぁ……」と吐息が漏れてしまった。

もう殴らせないようにするためなのか、すぐさまフレアは俺とアレクの間を割って入る。

「ラウド、起き上がれる?」

囁きと共に、背中に細い腕が回った。

「うん……」

ぼんやりとしながらも、非力なフレアに全体重を預けてはいけない。と脳が指令を下し、何とか両腕を使って上半身をベッドから離していく。一人で腰を据える事は出来たが、背中は小さく丸まっているのだろう。

フレアは俯く俺を覗き込み、いつの間にか取り出したハンカチを俺の口元へと押し付ける。

「こんなになるまで殴るなんて……。何があったの?」

本当ならば、フレアにも教えた方が良いでしょう。だが、今日は無理だ。もう気力が残っていないし、これ以上は心も保たない。

顔も上げず、首を横に振る事しか出来なかった。

そんな時、前方で破壊音が鳴り響いたのだ。恐らく、蚊帳の外へ追い出されたアレクが物に八つ当たりしたのだろう。突然の事に驚いてしまい、条件反射で瞼を固く瞑る。

「はあ……」と溜め息を吐く音が聞こえ、顔に軽く息が掛かった。

「取り敢えず……口の中、濯いできた方が良いでしょう。こんなに腫れてるんだもの。中も切れてるでしょ？」

「うん……」

目をゆつくりと開けながら口先で返事をし、言われるがままに足に力を入れていく。ふらつきながらも歩を進め、洗面台を目指した。途中、突き刺さるような視線をずっと感じたが、一々気にしてもいられない。逃げるようにして前方だけを見据え、洗面所へ辿り着くなり背中ドアを閉めた。

周囲が静まり返る。

これだけ静かだと、勝手に頭の中に嫌な事が浮かび上がってくる。思考を遮るために水を流し、音に意識を集中させた。

洗面台に両手を突き、流れ行くそれをただただ見詰める。

俺だって、馬鹿な事を言ってしまったと思っただけはいるのだ。他人の気持ちを全く考えず、自分の感情も無視してあんな失言をするなんて。どうかしていた。

ただ、ミユの命だけは救いたい。という思いに嘘は無い。たとえ犠牲を払う事になったとしても。

薄い水色のカップを手に取り、水の流れを塞ぎ止める。すぐに中

は満たされ、溢れ出た水は小さな滝を創り出していく。

何となくそれを持ち上げて口へと運んだ。冷え切った水は傷口を刺激し、強烈な痛みを与えてくる。

濯ぐ前に慌てて吐き出してしまった。それでも水は赤く色付き、白い洗面台に花を散らす。

「痛つ……」

顔をしかめている間に新たな水が全てを洗い流し、何事も無かったかのように綺麗になっていた。それでも赤色は脳裏に焼き付き、俺の思考に影響を与える。

殺される。という事は、こんな痛みとは比べ物にならない程の苦痛を味わう事になるのだろう。前世で自分の命を粗末にしてきた俺だが、どうしようもなく怖い。身体が震え出しそうな程だ。

口をあまり開かず、深呼吸をし、何とか気持ちを鎮めてく。

再び水を口に含み、濯がないままに吐き出す。そんな事を何度か繰り返し、血を洗い流したと思ひ込んだ。洗面台に背を向け、部屋へと続くドアを押し開ける。

フレアがアレクに説教でもしているのだろうか。そう思ったのだが。

フレアの姿は既に消えていた。アレクだけが窓際に佇んで腕を組み、不機嫌そうにこちらを睨み付けている。

アレクは俺がドアを閉めるのを確認すると、その表情には似合わない言葉を口にした。

「悪かったな」

内容とは裏腹に、声も同じく不機嫌そうなのだが。

絶対に本心から詫びているのではない。俺が居ない間に強要されたのだろう。

「フレアに謝れって言われた？」

「じゃなきゃ謝んねーよ。悪いのはオマエだからな」

「だよな」

やはり思った通りか。と苦笑いをし、痛む頬を擦ってみる。そんな俺の様子に、何故かアレクの機嫌は更に悪くなったようだ。

「オマエ、反省してねーだろ」

足を組んで目を細める。それが、居心地が悪くて堪らない。目を横に流して小さく口を開く。

「ごめん」

「……オレが謝ったから謝ってみただけか？」

「うん」

これは嘘だ。洗面所で思いを巡らせていた通り、俺だって一応は反省しているのだ。しかし、本音は喉に支えて出てきてはくれなかった。

どうしても、アレクの前では素直になれないらしい。

「だろーな」

俺の返事を真面に受け取ったのだろう。アレクは外方を向き、口をへの字に結ぶ。

気まずいが、いつまでも洗面所の前で突っ立ってもいられない。仕方が無く、椅子に座ろうとそちらへ足を運んでいく。アレクの正面に置いてある椅子へと。

ベッドに座れば良いのに。他人が見ればそう思うのかもしれないが、俺には出来なかった。ベッドに向かえば座る前に寝転がり、アレクも無視して眠ってしまいそうだからだ。

椅子に腰を下ろすなり両肘をテーブルに付いて手を組み合わせ、その上に額を乗せた。細く息を吐きながら瞼を閉じる。脈打つように痛む頬が気を紛らしてくれるのだが、背中や手の平にじわりと染み出す汗は止まってくれない。

互いに話し掛ける事も無く、無駄に気まずい時間は流れていった。用事が無いなら出て行けば良いのに。アレクに対してそんな風に思ったのだが、言った後の反応が怖くて口には出来なかった。

いつまでもこんな空気には耐えられない。無難な言葉を探し出し、俯いたままで声へと変えてみたのだが。

「フレアは？」

「オマエには関係ねーだろ」

一瞬で会話は終了する。更に、静か過ぎる時間が流れていく。こんな状態が続くのなら、本当に自分の部屋へ戻って欲しい。不快さを表現するために、大袈裟に溜め息を吐こうと試みる。しかし、それを実行するよりもアレクの行動の方が早かった。

「簡単に諦めんなよ……」

悲しい眩きが俺の心に染み入る。それでも、俺には何の事を言っているのか分からない。

「別に、何も諦めてないし」

「自分の命、諦めただろ」

先程とは違い、硬い声できっぱりと言い切った。それが矢のように胸へ突き刺さる。

言い返すべき言葉が見つからない。

口をつぐんだままの俺に、アレクは言葉を重ねていく。

「オレは諦めねーからな」

どこかで聞いた事のある台詞だ。いや、正しくは以前に俺が言った台詞、なのだろう。

俺の思考回路はアレクと似ているのだろうか。溜め息を吐きたくなってくる。

そんな俺の様子を気にも留めず、アレクは決断を下す。

「……決めたぞ。明日、一回解散して情報収集する。んで、他の方法を意地でも探す。そんな方法に賭けてらんねーよ」

言つと、背中を壁から離れたのだろうか。アレクの重い足音が耳に入り、足の裏には振動も伝わってきた。

数秒間を置いて壁と金属が何かが擦れるような音が響き、暑苦しい気配がこちらへと近付いてくる。

とその時、何処かからか笛の音が響き始めたのだ。吹き抜ける高音は鳥のさえずりに似ていて、流れるような旋律は川のせせらぎも連想させる。

心が自然と安らいでいく。

「誰が音、流してるんだろっ……」

答えを求める訳でも無く、一人で呟いてみる。とは言っても、俺たち以外にはミュとフレアしか居ないのだが。

「落ち着く……」

音楽を聞いたのは久し振りだ。いつ以来だっただろうか。

胸が暖かくなるのを感じながら、そつと瞼を開いていく。同時に、信じられない物が目に飛び込んできたのだ。一瞬にして情景が変わる。

「何……してるのさ……」

確かに目を開ける直前、針で刺したような鋭い痛みを僅かに感じたのだが。まさか、アレクがこんな事をするなんて思いもしなかった。

穏やかな音楽とは対照的な状況に置かれ、声は震えて頭まで麻痺していく。

「怖いか？」

アレクは俺の真正面に立ち、これまで見た事も無い程の冷たい瞳で俺を見下ろす。その右手に握られている短剣は、確実に俺の胸を捉えている。鞘に収められた剣ではない。鞘から抜き取られた刀の

切っ先だ。強烈に反射する光は刃の鋭さを物語っている。

「オマエがしょーとしてた事は、こーいう事だ」

言うなりアレクは剣を一度引き、だらりと下へぶら下げた。が、それは次の行動へ移すための前振りだったのだ。

高々と剣を持ち上げ、半回転させながら逆手に持ち替える。当然、刃は俺を向く。

本当に俺を貫くつもりなのだろうか。

腕を顔の前で交差させ、視界を塞いで身構えてた時には重々しく鋭い音が鳴り響いていた。

「この恐怖、忘れんじゃねーぞ」

足音が段々と遠ざかっていき、ドアの閉まる小さな音が周囲の空気を振動させる。

腕を退けてみれば、木製のテーブルに、目の前に短剣が深々と突き刺さっていた。少しでも位置がずれていれば、テーブルから飛び出た切っ先が足を傷付けていただろう。

「そんな事、言われなくても分かってるよ……」

誰も居なくなつた部屋で一人、静かに呟いた。

酷く悲しい気分になつたのだが、短剣をこのままにしておく訳にもいかない。柄に両手を掛け、力ずくで引き抜こうとしてみる。

しかし。

「何で……抜けないのさっ！」

アレクはどれ程の力を込めて突き刺したのだろうか。今にもテーブルが割れてしまいそうな嫌な音は鳴るものの、肝心の刀身は見えてこない。

「んー……っ！」

自棄になってテーブルに片足を掛け、体重も有効利用してみる。その効果はあつたらしく、ゆっくりと剣が動き始めた。徐々に抵抗は少なくなり、遂に。

「うわあっ！」

切っ先がテーブルから離れると同時に、身体の支えも無くなる。重力には抗えず、床に尻餅をついてしまった。

何故、俺がこんな目に遭わなくてはならないのだろうか。心の中で悪態を吐いてみるが、理由は分かりきっている。俺が悪いのだ。放り投げられていた鞘を見つけ出し、刀身をその中へと収める。取り敢えず、サファイアへ戻るまでは身体から離しておこう。一緒に死までもが付き纏ってくるようで、良い気はしない。それにもしミユに見つかって、また問い詰められたりすれば大変だ。

机の引き出しに手を掛け、奥へとしまい込む。嚴重に鍵まで掛ける。

そんな事をしている間に、笛の音はすっかり止んでいた。折角、綺麗な音だったのに。もつとゆっくり鑑賞していたかった。

もう寝てしまおう。今日は精神的にかなり疲れてしまった。いや、現実から目を背けたいだけだろうか。

踵を返し、足を運び掛けたのだが。ふと思い出した。

俺の頬は今、どんな状態なのだろうか。自分で確認はしなかったが、フレアは『腫れている』と言っていた。それを放置すればどうなるか。目に見えている。

そんな顔なんて、絶対にミユには見せたくない。と再び洗面所を
目指した。

「これ……ホントに俺の顔?!」

これが第一印象だった。

鏡の向こう側に居る自分は目を見開き、間抜けな表情をしている。それ以前に、頬が食べ物をお口いっぱい詰めた時のように膨れ上がっているのだ。まさに林檎を思い起こさせ、表面の輝き方まで似ている。

フレアが心配する筈だ。

明日までに引いてくれるだろうか。不安は残るが、悩んでばかりもいられない。

鏡の上に付いている戸棚に手を伸ばし、何か良い物はないだろうか。と中を弄ってみる。

するとゴム製の、手の平サイズの袋を見つけたのだ。二つ有るし、水を入れるには丁度良い。

早速水を流し、袋の中へと注ぐ。頬に押し当てると、すぐさま熱を吸い取ってくれた。

よし、今度こそベッドの中に入ろう。そう心に決めて部屋へ戻ったのだが。またしても、そうはならなかったのだ。

「さっきの笛の音、ミュだったぞ。アイツにも一応、特技あったんだな!」

遠慮もせずにドアを押し開け、アレクが顔を覗かせた。いつもの意地悪そうな表情に戻っている。先程の出来事が嘘のようだ。これはチャンスかもしれない。

「あのさ、相談があるんだけど」

「あ？」

フレアに会ってから、心の隅に引っ掛かっていた事があったのだ。

「あの事……フレアにも言わなきゃ駄目じゃん？」

『あの事』とは勿論、神に告げられたあの内容を指している。事件現場を見られている以上、いつまでもフレアに黙っている訳にもいかない。

「当たり前だろ」

「じゃあさ、明日」

第15章 親告

爽やかな朝日とは裏腹に、憂鬱な気分で今日という日が始まってしまった。

頬の痛みが残っている。溜め息を吐きながら手を当ててみれば、鏡を見なくても腫れているのが分かる。

昨日の恐れが現実になってしまった。この顔を見たミュは何と云うのだろうか。馬鹿にされてしまえば、もう立ち直れない。

半分泣きそうになりながらも、枕の横に温くなってしまった水入りのゴム袋を残してベッドから這い出る。

俺がミュを迎えに行かなくては。昨日の打ち合わせ通りなら、アレクはフレアを連れて既に会議室で俺たちを待ち構えている筈なのだ。

くよくよしてばかりもいられない。と早々に身支度を整える。それでも不安は拭い去れず、ドアの前で頬を擦ってから部屋を後にした。

そう言えば、俺の部屋の前に置き去りにしてからミュに会っていない。あんなに酷い事をしたのに、果たして彼女は口を利いてくれるだろうか。

別の不安も膨れ上がり、手の平に汗が滲み出す。

数分も経たずに彼女の部屋の前へ着いたのだが、なかなかノブを握れない。何度か深呼吸をし、手の汗も自分の服の裾で拭う。

駄目だ。このまま此処に居ても、余計に不安が募るだけだ。行くしかない。そう自身に言い聞かせて一気にドアノブを回した。

開け放たれたドアの先に見えた光景とは

「……ミユっ?!」

なんと、ミユが窓の傍に倒れているではないか。こちらに背を向けていて、勿論身体には何も掛けられていない。カーテンも閉められておらず、日の光が彼女を照らし出している。

一瞬にして、最悪の事態が脳裏を掠めていく。つい先程まで緊張していた事なんて、すっかり吹き飛んでしまった。たとえ頬が腫れ上がっていようと、嫌われていようと関係無い。

慌てて彼女の元へと駆け寄っていた。しゃがみ込み、肩を鷲掴みにする。

「ミユっ!」

叫びながら揺さぶってみると、すぐに彼女は眉間に皺を寄せて「ん〜……」と声を上げた。どうやら大事は無いようだ。

何故、こんな所で眠ってしまったのだろうか。ほっとしたやら、呆れてしまったやら。

それでも、此処は心を鬼にして叱らなくてはいけないだろう。と尚も身体を揺さぶり、名前を呼び続けてみる。

その甲斐あつてか、ミユの瞼が一気に開いたのだ。瞬時に緑色の瞳が俺の瞳とぶつかり合う。

「そんな所で寝てたら風邪引くよ?!」

出来るだけ目を吊り上げて、怒っている事を表現してみる。しかしそれは表情だけで、心は伴っていない。

きよとんとする彼女の表情は久し振りに見た気がして、それどころではなかったのだ。やはり可愛らしい。みるみるうちに顔が熱を持っていったのだが、元から頬は赤くなっているから顔色の変化は

分からないだろう。

少し間を置き、ミュが僅かに顔を歪めた。

「身体、痛い」

「当たり前だよ！ ……大丈夫？」

そんな彼女に、条件反射で手が伸びる。

身体が言う事を聞かないのだろう。差し伸べた俺の手を掴んではくれたが、なかなか立ち上がれないようだ。一生懸命に手足に力を入れる彼女の肩を抱き抱え、ゆっくりと腰を上げた。

ミュの心を開かせようと笑顔を作ってみる。が、彼女は目を合わせようとしてくれない。

やはり嫌われてしまったのだ。胸に鈍い痛みが走る。悲しくて仕方が無い。

必死ににこやかな表情を保とうと努力してはいるが、既に引き吊っているのだろう。耐え切れそうに無い。

「行こう」と声を掛けて会議室に向かおうとしたのだが、その前に予想外の言葉がミュの口から発せられた。

「ごめんね。私のせいで……」

彼女は俺を避けていたのではなく、俺に対して罪悪感を抱えていたのだ。消えてしまいそうな声に胸が締め付けられる。

「うづん、ミュのせいじゃないよ」

ミュが謝る必要なんて無い。何も悪い事はしていないのだから。

首と手を同時に横へ振ってみせる。とその拍子にミユの胸元に目がいった。そこには信じがたいモノが浮き上がっていて、俺を落ち込ませる筈だったのだが。それ以上に俺の感情を震わせる物が輝いていたのだ。

「あつ。その、指輪……」

痣よりも更にも上、鎖骨の中央あたりで、俺が以前ミュに渡した物カノンの結婚指輪が銀色の細いネックレスと共に揺れている。

先日会った時には身に付けていなかったと思う。もし付けていれば気付く筈だ。ずっと待ち望んでいた事なのだから。

ようやく俺を受け入れてくれたのだ。

嬉しくて、嬉しくて堪らない。それなのに。奥底から込み上げてくる、このやり切れなさは一体何なのだろうか。涙腺まで緩んでいる。

頬をほんのり赤く染めながら

「えへへ……」と笑う彼女を己の感情に任せて抱き締めてしまった。温かい体温がどうしようもなく愛おしい。

「ひゃっ！ 急に……どうしたの？」

「今だけ……このままでいさせて……」

戸惑っているのが伝わってくるが、歯止めが利かない。彼女の背中を腕を交錯させ、更に強く抱く。

折角、百年越しの想いが通じたのに。これから幸せになれる筈なのに。

俺はミユを手放さなくてはならないのだろうか。彼女を置いて逝かなくてはならないのだろうか。あまりにも理不尽ではないか、神様。

このまま時が永遠に止まってしまえば良いのに。叶いもしない願いを胸に、ミユの肩越しで涙を流し続けた。

えんじ色の絨毯をミユと一緒に歩く。今日はいつもと違い、彼女が主導権を握っている。横に並んでいるから端から見れば分からないのだろうが、俺からしてみると物凄い違いだ。力を入れなくても、彼女がしっかりと手を握っていてくれる。それだけで幸せな気分になる事が出来た。

しかし、次の一言で一気に現実へ引き戻される事になる。

「ねえ。頬、どうしたの？」

ミユは上目使いで俺を見上げ、ちょこんと首を傾げてみせる。

「やっぱり……分かる？」

言っておいてなんだが、気付かない筈が無い。心の中で、自分で突っ込みを入れながら痛む頬を擦る。焦点の合わない目を細めてもみる。

「……昨日、アレクに殴られた」

「えっ?!」

「ずっと水で冷やしてたのに。相当だよな……」

起きている時だけではない。寝ている間だって頬に袋を当てていた。それでも効果は殆ど見られない。

殴るとしても、後の事まで考えて殴って欲しい。と訳の分からない文句を心の中で言い、溜め息まで吐いてしまった。

とその時、頬に温かくて柔らかな物が触れたのだ。反射的にそちらを向いてみると、まるで自分が痛みを感じているように顔を歪め、片手を俺の頬に向けるミユの姿があった。

「痛そう……」

言い終わると口を結ぶ。

まさか、ミユがこんなに関心してくれるなんて。嬉しくて、自然と笑みが零れる。

「大丈夫だよ」

言いながら、彼女の頭まで撫でてしまった。触れた瞬間、彼女の頬がピンク色に染まる。桜の花が咲いたかのようなようだ。

再び暖かな気持ちに包まれ、会議室への道のりを二人で歩き進めた。

とは言っても、遠い距離ではない。数分もかからずに重厚感の漂う扉が見えてきた。

この状況だけに、いつもよりも重々しく感じる。こちらへ迫り来るかのようだ。

数歩手前で足を止め、頭を抱えながら溜め息まで吐いてしまった。

「ミュ、開けて？」

扉を指差しながらミュの方に振り向く。そんな俺に、彼女は不思議そうに首を傾げる。

「うん。良いけど……」

恐らく、俺が部屋に入るのを躊躇っている理由が分からないだろう。

分かりやすいように、今度は自身の頬を指差して眉をひそめてみせる。

「これじゃ、アレクにバカにされる……」

アレクのあの性格だ。遠慮もせずに暴言を吐くのだろう。身構えずにはられない。

どうにか納得してもらえたらしく、ミュは首を傾げながらも扉に手を伸ばしてくれた。その後ろに隠れて身を屈める。

さあ、これで準備は全て整った。作戦開始だ。

勢い良く会議室の扉が開く。

アレクは俺の姿を確認した途端、こちらを指差して意地悪そうに顔を歪める。

「何だ？ オマエのその顔。タコみたいだぞ？」

『タコ』。その単語が頭の中をぐるぐると回り、俺の思考を麻痺させた。が、それも一瞬の事で、みるみるうちに怒りが込み上げてくる。

作戦とは言っても、臨場感を出すために台詞は全てアドリブなのだ。

いくら俺を怒らせるためだとしても、『タコ』は無いと思うのだが。

「普通、そういう事言うっ？！アレクのせいじゃん！」

拳を握り締めて反撃に出る。そんな俺に、アレクまでもが怒りを露わにして足を踏み鳴らす。

「何ー！？オマエが変な事言うからだろっ！」

「変な事なんか言ってないし！真面目な事言っただけだよ！」

「オマエなあ……！また殴られたいか？！」

また殴られるとしても、絶対に主張は曲げない。あれの何処が『変な事』なのだろうか。

アレクが相手だと、どうしても熱が籠もる。頭にも血が上り、ミユを刺激するためだという事すら忘れてしまいそうだ。

とその時、

「もう止めてよー！」

タイミング良くミユが振り返り、俺に飛び付いてきたのだ。途端に本来の目的を思い出す。

一方で、アレクたちの居る方でもフレアの怒声が上がった。

「アレクもバカね！　こんな事してたら一日潰れちゃうわ！」

恐らく、この作戦の内容をフレアには伝えていないのだろう。フレアの事はアレクに任せていたから、別にどちらでも良いのだが。肝心なのはミュだ。

直後、ミュは期待通りの言動を始める。

「私、もう帰るよ？　自分の事だし、ちゃんと情報集めて来なくちゃ」

そうなのだ。ミュに話を聞かれないようにするためには、彼女をエメラルドへ帰すしか無い。そうさせるために、わざと言い争いをして彼女を呆れさせたのだ。

帰る気満々になったミュに、アレクは慌てて口を開く。

「おい、待て！　明日の夕方までには戻って来いよ！　時間決めねーと、コイツ、うるさいからなー！」

しかも、俺に向かって嫌みな笑みを浮かべて。

俺がうるさいのではなく、アレクがだらしがらないだけではないか。本当に、アレクは自身の欠点をまるで分かっていない。

「俺は悪くないよ！　皆が遅いだけじゃん！　アレク、遅刻しないですよ？！　ミュも、今度は怒るからね？」

はっきり言って、ミュに話を振ったのは彼女の顔を見るためだ。遅刻したとしても、本気で怒ったりはしない。

こんなに腹が立っているのに、ミュに対しては自分でも不思議な程に柔らかな物言いに変わる。

不満な様子も見せず、ミュは素直に頷いてくれた。が、アレクが文句を言わない筈が無い。

「オレは遅刻してねーよ！」

「……いつつも遅刻してるじゃん」

「何ー！？」

遅刻常習犯のくせに、何を言っているのだろうか。アレクが怒る意味が分からない。

意識せずに、再び言い争いを始めてしまった。しかし、これが良かったのかもしれない。

「もう、帰るからね？！ じゃ、明日ねー！」

不機嫌さが声にも、表情にも表れている。ミュは『付き合っていないられない』とでも言いたそうに俺とアレクの顔を見比べ、身体から光を発し始めた。間を置かず、彼女の姿が目の前から掻き消える。

作戦成功だ。

それでも怒りが収まる事は無い。それは、どうやらアレクも同じだったようだ。

「作戦なんか立てなくてもよー、別に良かったんじゃないのか？
！」

「言えてる」

互いに目を合わせるでも無く、感情のままに言葉を吐き捨てた。ただ一人、フレアが呆然とアレクを見詰めている。

「どついう事……?」

たった一言で部屋が静まり返り、気まずい空気が流れ始める。

フレアの視線に居心地が悪くなったのが、アレクは肩を竦めて腕を組む。

「いや、ミユには聞かせらんねー話しなきゃダメだからよー。しよ
うがなく……な?」

「うん」

しどろもどろに話を振ってくるアレクに、曖昧に頷いてみせる。

「それって、昨日の事?」

「昨日っつーか、一昨日っつーか……な?」

「うん」

フレアに探りを入れられる度に同意を求めないで欲しい。

このままでは、いつまで経っても話は先へ進まないだろう。とテ
ーブルを指差して視線も落としてみる。

「取り敢えずさ、そこに座らない？」

「あ？ ああ……」

先程の喧嘩が嘘のようだ。アレクは文句一つ言わず、大人しく俺の意見に従う。こんな光景は、普段のアレクの態度からは考えられない。

ただならぬ事態を感じ取ったのだろう。怪訝そうな表情をしているものの、フレアもそれ以上、口を開こうとはしなかった。アレクの後に続き、いつもの席に腰を下ろす。

そんな二人の様子を伺いながら、俺も椅子に手を伸ばして腰を落ち着けた。

頬杖を付くと同時に溜め息が漏れる。口内の傷の痛みも気にならない。

「まず……何から話せば良いんだ？」

「アレクは黙ってて。俺が話すから」

これは俺の問題だ。アレクに言わせる訳にはいかない。そうは思っただが、勇気が湧かない。憂鬱になる一方だ。瞼を閉じて精神を集中させる。

「やっぱりオマエ、話しにくいんじゃない？」

「良いから」

アレクは気を遣ってくれているのだろうが、それが逆に俺を追い込んでいく。

これ以上急かされては堪らない。と覚悟を決めて目を開けた。緊

張のせいで縮こまっているフレアを見据える。

「昨日は俺が悪かったんだよ。馬鹿な事言ったから」

「えっ……？」

「オマエ……」

次に何を話せば良いのだろうか。脳内にある記憶の引き出しを探りながら、必死に言葉を組み立てていく。二人の反応も、俺には殆ど見えていない。

「俺さ、ミユの呪いの事で話があるって神様に言われて、一昨日、水の塔に行ってきたんだ。そうしたら」

昨日、アレクに聞かせたのと同じように、フレアにも水の塔で言われた内容を話していく。多分、時間も経っているし落ち着いてもいるから、昨日よりも上手く喋れたと思う。

そして遂に、話題はあの場面へと移る。

「あの剣を使えばミユの呪いも解けるし、黒の魔導師だって倒せる。でも、それだけじゃ足りないんだよ」

いくら辛くても、小刻みに震える赤色の瞳から視線を逸らそうとはしない。細く息を吐いて、少し間を置いた。

再び空気を吸い込む。

「ミユの呪いを解くためには身代わりがいる。ミユの事を思う者の命」

一瞬にしてフレアの顔が凍り付く。まるで、フレアの周りの時が止まってしまったかのようだ。

目を見開いて俺を見詰めている。

「それでさ。昨日、俺がその方法に賭けてみようとしたら……アレクに殴られた」

「あはは……」と苦笑いしながら言ってみたものの、固まってしまった表情は解れなかった。首を横に振りながら、わなわなと唇を動かすばかりだ。

フレアが掠れる声を絞り出した頃には数分が経過していたと思う。

「……どうしてよ。どうして、ラウドやミュばかり……」

フレアの頬を一筋の涙が零れ落ちる。

「嫌よ。もう、あたし……!」

遂にフレアは両手で顔を覆い、テーブルに伏せてしまった。その肩をアレクがそっと抱き寄せる。

「そうならねーように、これから情報収集するんだ。ぜってー他の方法が見つかる。じゃねーと、どう考えてもおかしいだろ」

自身にも言い聞かせているかのようだ。哀愁を漂わせながら黄色の瞳を潤ませる。

そんな二人の様子を見てみると、複雑な感情が込み上げてくる。何と表現すれば良いのだろうか。悲しいだとか、辛いだとかそんな

簡単な物ではない。憂い、痛み、やり切れなさ、その全てが混ざり合っている。

もう、この場の雰囲気にならねそうにない。

「俺、そろそろ帰るよ」

席から立ち上がり、持ち物を取るために自室へ戻ろうとしたのだが。

「ちょっと待て」

不意に、アレクに手首を掴まれてしまった。

「何？」

「オマエに話がある」

それだけを言うと強引に腕を引っ張り、廊下へと連れ出したのだ。扉が閉まる直前、

「少しだけ待っていてくれ」というアレクの妙に優しい声が部屋に響いた。

「その、神に言われた方法の事なんだけどよー」

俺の腕を乱暴に前方へ放り投げながら、アレクは静かに呟く。

「ミノの身代わりになるヤツ、ぜってーオマエじゃなきゃなんねーのかっ？」

だが、それどころではない。急に投げ飛ばされたせいで、躓いて転んでしまいそうだ。

慌てて腕を広げて常態へ戻そうと試みる。

床に衝突する寸前で、何とか勢いは止まった。踵を返し、アレクを睨み付けてみる。

「何するのさっ」

「どーなんだ？」

俺の声とアレクの声が重なった。

明らかに反省していない。文句を言っただけでやりたい気分にもなったのだが、それは段々と失せていく。

アレクの顔が真剣そのものなのだ。

「……俺が適任って言われたけど、絶対とは言われてない」

ぶつきらぼうに返す俺に、アレクは腕を組んで何かを考え始めた。眉をひそめて顔を背ける。

「そーか……。もしもダメだったらオレが……。いや、何でもねえ。んな事、考えちゃダメだよな。今のは忘れてくれ」

ぶつぶつと呟き、ゆっくりと俺に背を向ける。

一体、何を言いたかったのだろうか。独り言とも取れる先程のアレクの言葉を思い起こし、頭を働かせた。

途端に一抹の不安が脳裏を掠める。

「まさか、アレク」

「また明日な」

俺の声は完全に無視されてしまった。アレクは振り返りもせず、手をひらひらと振ってみせる。

まさか、アレクは『自分が身代わりなる』とでも言いたかったのだろうか。こんな風に言われて忘れられる筈が無い。

ただの勘違いであれば良いのだが。と思いつつも、足は自室へと向かい始める。

俺にはもう一仕事残っているのだ。情報収集をする以上、カイルにも事情を説明しなくてはならない。

また、あの話をしなくてはならないのか。沈んでいく気分を引き摺りながらも、部屋へ着くなり目的の物を取り出した。神に貰った短剣だ。

はつきり言つて、こんな物は見たくも無いのだが、かと言ってダイヤに放置しておく訳にもいかない。『もしも』の時に必要になるのだから。

鞘に付いているL字型の留め金で剣を腰に固定し、目立たないように上着を被せる。その後目を瞑り、すぐさまダイヤを後にした。

第16章 為すべき事

瞼を開けてみれば、目の前にレースカーテンで遮られた窓がある。何となく手の甲で捲り上げ、外の風景を確かめようとしたのだが。窓ガラスが曇っていた。それももう片方の手で拭い、身を乗り出して外を覗き込む。

見慣れた銀色の街並みだ。色を深めるかのように、更に空から粉雪が舞い落ちる。

何故だろう。長期間留守にしていた訳ではないのに、不思議と懐かしさが込み上げてくる。最後に此処を離れてから色々な事が有り過ぎたから、それも仕方無いのかもしれない。

一息つこうと踵を返し、椅子に手を伸ばそうとした丁度その時だ。

「ラウド様！ お戻りになったんですか！」

騒がしい足音と共に、部屋のドアが開け放たれた。いつもと同じく、そこには息を切らしたカイルがへたり込む。

普段は呆れるのだが、今日はそんな感情も湧いてこない。

「ミュ様の様子は如何ですか？ お話出来ましたか？」

円らかな瞳を一際大きく開き、目を輝かせて満面の笑みを浮かべるカイルに、ただ微笑み返していた。

しかし、カイルはすぐに何かを閃いたのか頬に人差し指を当て、視線を上へと持っていく。

「……あっ！ そう言えば、ミュ様も魔法を手に入れたんですね？ 黒の魔導師を倒すなら、どうしてお戻りになったんですか？」

頬も腫れているし」

その声は段々と不思議そうに小さく萎んでいった。何も知らないカイルにとっては当然の疑問だろう。一方で、俺にとっては触れられたくない事実だ。

核心を突く内容に笑顔を保てなくなってしまった。カイルに背を向け、逃げるようにして大して見えもしない窓の外をぼんやりと眺める。

「……ラウド様？」

透き通った声が心に響く。

いざカイルを目前にしてしまうと、言葉が喉に支えて出てきてくれない。アレクとフレアも大切な仲間だが、それ以上にカイルは家族のようなものだ。重みが違う。

何度転生しても同じ事を繰り返し、体力を消耗し、日に日に弱っていく俺をカイルは毎日見てきた。リザードの次の前世以来、俺を看取ってくれたのもカイルだ。恐らくミュが現れた事だって、俺と同じくらい喜んでくれただろう。それなのに。

こんなにも深い悲しみまでも共有しなくてはいけないなんて。

「まだ、黒の魔導師は倒しに行けなくてさ」

こんな事を言うだけで精一杯だ。

だが、これでカイルに通じる筈も無く、

「……どうしてですか？ 羽根を手に入れてないんですか？」

的外れな答えが返ってくる。

言わなくてはいけない事くらい分かっている。そうしなければ、情報収集だって進まないのだから。カイルの協力が無くては、ただただ二日間を無駄に終わらせてしまう。

カイルに聞こえてしまわないように小さく深呼吸をし、破裂しそうな程に脈打つ胸を片手で握り締めた。

「カノンの呪いが、ミュにも……」

「……えっ？」

呆気にとられている様子が声を聞いただけでも伝わってくる。首を横に振って頭の中を整理し、再び口を開く。

「明日の夕方までに呪いを解く方法を探し出さないと、俺が」

「どうしてですかっ?! ミュ様はカノン様とは違うじゃないですか! そんな事ってあるんですかっ?!」

「そんなの、俺に聞かないでよ!」

俺だって、何故こんな事になったのか全く分からないのだ。不満を俺にぶつけないで欲しい。

つい感情的になってしまい、振り向いてカイルを怒鳴りつけてしまった。みるみるうちに目を見開いていくカイルに、冷静さを取り戻す。

「じゅめん……」

謝りながら、窓の方へと向き直る。

「……私の方こそ、すみません。ラウド様とミユ様が一番お辛いのに」

何故、こうなってしまふのだろうか。他にも伝えたい事が沢山あるのに。

やり場の無い怒りを発散するかのように、唇を強く噛み締めた。

気まづくなると、決まってカイルの方から重い雰囲気を変えようとしてくれるのだ。今回も例外ではなく、

「それでは、私は情報収集に行ってきます！ ラウド様は此処でじっとしてて下さいよ？ すぐに無茶ばかりするんですから！」

普段よりも高く明るい声が部屋に響く。

無理やり陽気に振る舞っているのだろうが、それが俺の心の錘を取り除いてくれる。

「無茶なんかしてないよ」

「してますー！」

すんなりと思った言葉が口から出ていく。

自分では無茶をしているつもりは無いのだが。と立ち上がったわざわざらしく口を尖らせるカイルに、唸りながら首を傾げてみせる。

「その類だつて、どうせ無茶をしようとしてアレク様に殴られたんじゃないですか？」

凶星だ。鋭い指摘に言い返す事が出来ない。

無茶かどうかは分からないが、あんな決断をしたせいでアレクに殴れたのは当たっている。

頬を擦りながら外方を向く俺に、カイルは勝ち誇ったように両手を腰へ当てた。

「当たったみたいですね。……あっ！ 良い薬があるんです！ 少し待っていて下さい！」

「何の薬？」と問い掛けようと口を開きかけたのだが。忙しないカイルの行動に追い付ける筈が無い。

一つに束ねた青色の髪を靡かせ、ドアも閉めずに部屋から勢い良く去っていく。

まるで嵐のようだ。いつもの事だが、よく疲れないものだと感心してしまう。

どうやってあの話を切り出せば良いだろうか。思案しながら、今度こそ椅子に座ろうと手を伸ばした丁度その時だ。

「お待たせしました！」

慌ただしい足音が部屋の中に入り込む。ドアの前に現れたカイルは片手にガラス瓶を抱え、にこやかに微笑んでいた。

俺が待っていたのなんて少しの間ではない。ほんの一瞬だ。あまりの早さに、中途半端に口が開く。

「これ、口の中の傷に効くらしいですよ！」

呆然とする俺を少しも気にしていないらしい。瓶の中に詰まっている丸い茶色の怪しげな物体を一粒取り出し、こちらへ差し出しながら近付いてくる。

「それ、何？」

「薬って言ってるじゃないですか！」

薬と言われても、こんな飴玉のような薬なんて見た事が無い。大抵は粉末状なのだ。

「……ホントに効くの？」

「らしいですよ！ 試した事は無いですけど」

「えっ……」

もし失敗したらどうするつもりなのだろうか。これ以上悪化でもすればダイヤになんて戻れない。余計、アレクに馬鹿にされる。

「……止めておくよ！」

「何言ってるんですか！ 痛いままで良いんですか？」

両手を振って抵抗しているのにも関わらず、カイルは尚も俺の顔に薬らしい物体を近付けてくる。後退りながら、更に攻防を繰り広げる。

見れば見るほど怪しい。遠くからは分からなかったが、黒色や緑色の小さな粒々も沢山混じっているのだ。一体、どんな味がするのだろうか。

「それ、絶対おかしいよ！ 薬じゃない！」

「子供みたいな事言わないで下さい！」

たとえ子供みたいだろうと、おかしいものはおかしい。そんな事を言うのなら、自分でもよく見てみる。と心の中で悪態を吐きながらカイルを睨んでみるものの、睨み返されるばかりだ。

とととう壁際まで追い詰められ、逃げ場を失ってしまった。背中が壁へ激突した拍子に結んでいた口が緩み、茶色のそれが中へ飛び込む。途端、渋い味が舌に襲い掛かる。

「……苦っ！ ちょっと、助けて！」

「駄目です！ 絶対に出さないで下さいね！ じゃあ、私は行つてきますから！」

涙まで出てきているのに何とも思わないのだろうか。蹲りながら必死に手を伸ばす俺を無視し、颯爽と身を翻して走り去ってしまった。

壊れてしまいそうな程の音を轟かせ、ドアが俺とカイルを隔てる。

しばらく間、その場から動けずにいた。

「うっ……」

固そうな見た目とは違い、口の中に入れられた物は砂糖のように脆く崩れながら溶けていく。麻酔作用もあるのだろうか。段々と口内の感覚も無くなっていく。

“そんなに酷い味なの？”

「酷いってまろじゃらいよ……」

呂律も回らなくなっている。

もしかすると、喋れなくして俺を部屋から出さないようにする。というカイルの魂胆あったのかもしれないな。などと一人で考えを巡らせ、勝手に納得した。

と、それはともかく。結局、カイルには肝心な事を話せなかった。神に教えられた内容を何一つとして。

「俺、何やってるんらろっ……」

それだけではない。アレクなんて、俺の代わりにミユの身代わりになるうとしてくれた程だ。恐らく、アレクやフレアは使い魔の反対を押し切っても、自ら街へ出て情報収集しているのらろっ。ミユだってそうだ。

それに引き替え、俺は何だろっか。こんなに腫れ上がった頬で、真面に喋れもしなくて。たとえ街に出たとしても、誰も取り合っってはくれない。

溜め息を吐き、床ばかりを見詰める。

“神様にあんな事言われた後じゃさ、無理もないよ。今日くらいカイルに甘えて休めば良い。まだ明日もあるんだしさ。明日、カイルとちゃんと話して、情報収集にも行こう？”

流石はリザードだ。俺の考えている事を全て見通している。

黙って頷き、再び曇ってしまった窓ガラスも拭い、カイルが走り回っているであろう外に目をやった。

「……れもさ。ころ頬と口、明日まれに治るかな」

“うーん……”

呟いてみたが、誰も答えられる筈が無い。きっとカイルでさえも、見えない不安に苛まれ、二人揃って溜め息を吐いた。

このまま黙っていても不安や罪悪感が襲ってくるばかりだ。カイルが戻ってくるまで眠っていよう。そう思い、ベッドに寝転がろうと腰を上げる。

しかし、ふと気付いた。僅かに残っている薬を口内に留めておけば、いつまで経っても痺れは治らないのではないだろうか。

頬の状態を確認する意味も含め、痛みを覚悟で口を濯ぐために洗面所へと足を伸ばす。正面に佇む鏡の中に居る俺の頬は、

「……良くらった？」

赤みが薄らいだように感じる。腫れも少し引いたのではないだろうか。まあ、ただの気のせいかもしれないが。

あれ程までに嫌な思いをしたのだ。効果が表れない方が間違っている。などと心の中で文句を言い、コップに手を伸ばす。数回口の中を濯いで部屋へ戻った。

ベッドへ仰向けに寝そべり、身体が冷えてしまわないように布団を被る。暖房が入っているから室内は暖かいが、用心するに越した事は無い。

そっと目を瞑り、思考を閉ざす。

とその時、背中に悪寒が走ったのだ。誰かに見られているような、そんな気配も感じる。

「誰か……居る？」

布団に手を掛けて上半身を起こし、部屋の中を隅々まで見回したが、誰かが居る筈も無い。

ところが何と。

“暢気なものだな”

唸るような、地の底から湧き出るような声が微かに耳に届いたのだ。

「……誰っ?!」

我も忘れてベッドから飛び起き、万が一に備えて身構える。無意識のうちに、右手が短剣へと伸びていた。

「隠れてらいい、出てくれば?!」

威嚇のために怒鳴り声を上げてみても、相手は何も答えはしない。それどころか“フツ……”と人を小馬鹿にするように鼻で笑い飛ばす。

周囲に睨みを利かせる俺の様子を窺っていたのか、間を置いて再び語り掛けてきた。

“まだ『地の魔導師』には危害を加えない。だが、必ず君の目の前

で消し去ってやる。近いうちにな……”

同時に、ひしひしと感じられた殺気が遠退いていく。
このまま逃がしはしない。逃がしてたまるものか。

「待てっ……影！」

闇雲に剣を振り回しながら部屋の中を駆け回る。相手の姿は見えないのだから、手応えを得られる筈も無い。それでも、そうせすにはいられなかった。

声の主は明らかにカノンの仇であり、ミユを絶望の淵へと追い込んだ人物なのだ。『危害を加えない』そう言われても、絶対に信用なんか出来はしない。

健闘も虚しく、影の気配は完全に掻き消えてしまった。声も聞こえてはこない。

彼女は今、何をしているのだろうか。危険な目に遭ってはいないだろうか。どうか無事でいてくれ。

「ミユ……」

肩で息をしながら見えもしないのに窓へ駆け寄り、遙か彼方のエメラルドへと思いを馳せた。

それから時間の流れが酷く遅く感じられた。眠れる訳も無く、やり場の無い焦りと苛立ちを抱えたまま部屋の中を徘徊してみる。

落ち着け。焦っても仕方が無い。これでは影の思う壺だ。と自分に言い聞かせ、気持ちを静めようと試みる。が、それで何とかなる

筈も無かった。

影が俺に話し掛けてこられる。と言う事は、それだけの力を取り戻している。と言う事でもあるのだ。

俺たちに残されている時間は僅かなのだろう。急に死の影が色濃くなった気がする。

しかし、そんなものに負けてばかりはいられない。

窓の傍に置いてある青色に塗られた木製の机、そこにふと目が行き、思うがままに近寄っていた。百年近く閉まったままだった鍵を開け、右上の一番小さな引き出しを開ける。その中に入っていたのは、

“それ……”

「相変わらず綺麗だね。百年も放っておかれたのにさ」

青色の石が埋め込まれている、親指にはめるには丁度良い大きさの銀色の指輪　リザードの結婚指輪だ。

滑舌が治ったのも大して気に留めず、自身の首の後ろへ腕を回す。飾り気の無くなっていったネックレスを外し、次にそこへ指輪を通した。かつてはカノンの指輪が揺れていた場所で、同じように窓からの光を受けて眩い程に輝く。

“その指輪、封印してたんじゃないの？”

「……うん。でも、もう気にしてなんていられないから」

リザードの次の代の時に指輪をカイルに返されたが、カノンを守りきれなかった過去の自分が嫌で堪らなかった。だから、その自分ごとリザードの指輪だけを封印していたのだ。きっと俺も心の奥底

で拒んでいたに違いない。

しかし、過去の自分が居るからこそ、今の自分が居る。いくら否定してみたところで過去は変わらない。俺に出来るのは過去を繰り返さないようにする事だけだ。

「俺さ、あの日から内心諦めてたんだ。俺が命を捨てないとミユは助からない。どうしようも無い事なんだって」

「ふう……」と息を吐き出し、前方の壁を睨み付けてみる。

「でも、やっぱりそんなの間違ってる。何もしないで諦めるなんてさ。最後まで足掻いてみせる。神様を見返してみせる」

影に触発されただけだ。と言われれば否定は出来ないだろう。それでも俺が決意したという事実には変わりない。

「明日まで待つてなんかいられない。俺、これから街に行くよ」

焦りながらも頭を痛めて考えていた。ミユには『諦めるな』と言っておきながら、いざ自分も同じ立場に立ってみるとあっさり諦める。そんなのは卑怯なのではないかと。

ミユは今、必死に未来へ向かって生きようとしている。死の恐怖に毅然と立ち向かっている。それなのに俺は

何故、今までこんなにも塞ぎ込んでいたのだろうか。うじうじと何でもマイナスに捉え、立ち止まってばかりいた。

それでは駄目だ。前に進まなくては。

過去、此処を抜け出す時に使っていた衣服を仕舞ってある木製の箱を取り出し、その中を弄る。厚手の衣服を選んで着替え、額には念のためにバンダナも巻いた。

“ やつと戻ってきた ”

「 ん？ 」

鏡の中を覗き込みながら、リザードの何気ない呟きに首を傾げてみる。

“ ホントのラウド ”

言いながら、小さく笑う。そんなリザードに苦笑いを返す事しか出来なかった。端から見ても、今までの俺は相当の落ち込みようだったのだろう。

気持ちを切り替え、更に薄茶色で革製のコートを羽織り、白い毛の付いている筒状の帽子を深々と被る。手袋も忘れてはいけない。素手でいれば、帰ってくる頃には凍傷になってしまふのだ。

もう一度鏡を覗き込み、魔導石が完全に隠れているかを確かめる。余程の強い風が吹いたりしない限り大丈夫だと思う。

「 じゃあ、行くよ 」

“ うん ”

鏡に背を向け、躊躇う事無く魔法を使った。

長年城を抜け出していれば、人目に付かずにワープ出来る場所も分かってくる。路地裏の、日の光も届かないような狭い場所に狙いを定め、安全にそこへと降り立つ。まるで、赤レンガ造りの壁がこちらに迫り来るかのような圧迫感だ。膝の高さまで積もった雪に埋もれてしまった。

予想通り、そこだけはひっそりと静まり返っている。

“急いだ方がよいよ。すぐに日が暮れるから”

「分かってる」

粉雪の舞う中、埋まりながらも新雪を散らして本通りへ向かって駆け出した。

吐く息が白く曇る。身体へ入り込む空気は乾燥していて、喉の水を奪っていく。

サファイアの日暮れは早い。日没の合図である鐘が鳴る前に話を聞き出さなくては。店仕舞いしてしまう。

曲がりくねった道を進んで本通りに出てみても人通りは少なかった。まあ、この時間帯なら無理も無いのだが。

とにかく、情報収集と言えば基本は店に聞き込み、だろう。

「うーんと、お店は……」

一瞬頭を捻ってみるものの、考えていても仕方が無い。適当に右折し、同じように連なる赤レンガの壁を見上げながら進んでいく。扉の上には色とりどりの看板が掲げているのだ。

呪いに一番縁がありそうな店は 武器屋だろうか。ステイアには戦争なんて起きていないから、武器は男性の装飾品や護身具という意味合いが強い。

よくよく考えれば呪いとは関係無さそうなのだが、今は迷っていても駄目だ。時間が無い。

剣が十字に交差する絵の描いてある看板を発見し、身体に付いている雪も払わずに店の中へ飛び込んだ。

「すみません！」

「いらつしゃいー！」

俺の声を掻き消して店の主が叫ぶ。アレクよりも太く、迫力のある声だ。

四十代半ばくらいだろうか。中肉中背で中年の男は茶色のエプロンを掛けて袖を捲り上げ、椅子に座ってどしりと構える。栗色の髪は俺よりも短く、吊り上がる目尻には細かい皺が刻まれている。

壁に展示されている剣やナイフには見向きもせず、店主の前へ駆け寄っていた。

「あの、聞きたい事があるんですけど！」

俺の慌てっぷりを見て、客ではないと判断したのだろうか。

「……ん？ 買い物に来たんじゃないのか？」

途端に目は細められ、口はへの子に曲がっていく。『帰れ』とでも言いたそうな表情だ。

だが、此処で負ける俺ではない。

「知り合いが呪いをかけられてて、その呪いを解く方法を探してるんです！ 誰でも良いんです！ 何か知識がありそうな人……知りませんか？」

両手で拳を作り、これでもかという程に店主を見詰めてみる。
そんな俺に、目の前に居る人物は細く息を吐く。

「呪いって言うとは……魔法か？ そんなの女王様か魔導師様しか居ないじゃないか。その知り合い、そんなお偉いさんに手出したのか？ 関わらん方が身のためだぞ、坊主」

真面に取り合ってくれそうな気配は無い。

しかも、坊主とは何だろうか。俺は子供ではない。サファイアだけではなく、スティアでは十八歳で成人と見なされるから、これも立派な大人だ。

「ホントに困ってるんです！ 些細な事でも良いから」

「だから、言ってるじゃないか。何も知らない。用事はそれだけか？」

店主は気だるそうに立ち上がると、蔑んだ目で俺を見下ろす。

「営業の邪魔だ。出てっくれ」

そして何と、コートの襟の部分を掴んで、出口へ向かって俺の身体を引き摺り始めたのだ。両手をばたつかせても、びくともしない。ドアが開け放たれ、雪の混じった冷たい空気が店内へと流れ込む。次の瞬間、店の外へと放り出されてしまった。

「うわぁっ！」

「もう来るんじゃないぞ」

捨て台詞を残し、ドアは轟音を上げて容赦なく閉じられた。雪が

クッション代わりになってくれたが、北風は頬を何度も攻撃する。帽子が外れなかったのが、せめてもの救いだろつか。

「あんな言い方無いじゃん。アレクより質悪い……」

立ち上がりながら身体中に付いてしまった雪を払い、愚痴を零し
てみる。それでも怒りは収まらない。

「俺がその『魔導師様』だって」

「ラウド様！」

店のドアの向こう側を睨み付け、通りすがりの人々には聞こえないように文句を言おうとしたのだが。

背後から浴びせられたこの声は、

「じつとして下さいって言ったじゃないですか！ 何でこんな所に居るんですか?!」

カイルだ。

振り向いてみれば、怒りを表しきれていない、俺と同じ色の瞳がそこにはあった。

「お気持ちは分かりますけど、外出は禁止なんです！ 忘れてませんよね？」

いつも以上に激しい勢いで捲し立てる。口を出す隙も与えない。とその時、遠くで鐘の音が響き始めた。それを合図にしてか、街並みの向こうに見える空も段々と茜色へと変わっていく。

忘れていた。使い魔は自分の主の居場所を察知出来る。という重大な事実を。

「また無茶して……。魔導師だってバレたらどうするんですか」

「うーん、バレてないよ。あのおじさん、俺の事バカにしてたし」

「バレてからじゃ遅いんです！ 少しは反省して下さい！」

その後、カイルは俺を無理やり城へと連れ戻し、椅子に座らせて説教を始めたのだ。帰ってきてから、もう数十分は経っていると思う。

目の前には俺を見下ろすカイルが居る。未だにその勢いは衰えない。

「貴方がそんなんじゃない、私の身が保ちませんよ！」

カイルが『貴方』と言う時は俺だけではなく、リザードや他の前世での事も含めて言っているのだ。

そんなに俺が成長していないとでも言いたいのだろうか。

「一応、反省はしてるよ」

城下街での出来事もあつてか、どうしても不躰な物言いになってしまう。カイルから目を逸らし、口を尖らせてみる。

そんな俺に不満を抱いたのだろう。仁王立ちをして怒りを露わにするカイルはこちらに身を乗り出した。

「その言い方は何ですか！ 絶対、反省してませんね！」

「してるよ」

「してません！」

俺の話に耳を貸さず、きちんと聞こうともしない。

こんな状態では何を言っても無駄だろう。と無視を決め込んだ。それでも尚、カイルは不満をぶつけ続ける。

愚痴を聞き続けながら更に数十分が経過した頃、疲れが表れたのだろうか。

「まったく……」などと呟きながら、カイルは部屋から出ていってしまった。

夜には定時に食事を運んできてくれたが、真面に会話はしなかった。カイルが膨れっ面を向けてくるのだ。

仲直りなんてしていないから、当然『大事な話』を出来る筈も無く、一人きりの夜は更けていく。

今日は無駄になってしまったが、明日は絶対に話さなくては。話をして、二人で協力して情報収集をするのだ。当てられる時間は一日も無いのだから。

明日に備えて早く寝てしまおう。ベッドの中に潜り込んで瞼を閉じる。

何故だろうか。暗闇の中に身を委ねると不安ばかりが襲ってくる。影に対する不安、ミユの安否に対する不安、未来に対する不安、色々な不安が浮かんでは消え、また浮かぶ。

それでも睡魔には抗えず、時間と共に深い眠りへと沈んでいった。

第17章 奔走

何やら物音が聞こえる。陶磁器と金属をぶつけ合わせるような、そんな小さな音だ。

はつきりとしめない頭で徐々に瞼を開けていく。部屋は薄暗く、そのせいで白い天井が灰色に見える。

一体、誰が何をしているのだろうか。

布団の中で霞む目を擦りながら、音のする方に目をやると。

「……カイル」

テーブルに食器を並べている、青い長髪の人物を捉えた。

俺の声に驚いたのだろうか。カイルは手に持っていた銀色のスプーンらしき物をテーブルに落としてしまった。

「……ラウド様！」

叫び声を上げ、見開いた目をこちらに向ける。何故、そんなに慌てる必要があるのだろうか。

「おはようございます！ 今日良い天気ですね！」

しかも笑ってその場を取り繕い、訳の分からない言葉を並べる。

「今日、晴れてるの？ カーテン開いてないけど」

「えっ?!」

此処に来る前に外を見たのだろうか。上半身を起こしながら欠伸をし、髪を靡かせて窓に走り寄りカイルを眺めていたのだが。心地良い音を立てて開いたカーテンの向こう側は、

「雪降ってるじゃん」

「あ……」

決して『良い天気』とは言えないものだった。昨日の天候とあまり変わらない。

そして、他にも疑問が残る。

「しかもさ、何でカーテン閉めたまんまだったの？ 最初から開ければ良いのに」

カーテンを閉めておく意味が分からない。食事を持ってきてくれたのであれば尚更だ。

それに対し、カイルはしどろもどろに口を開く。

「ラウド様が凄く気持ち良さそうに眠ってるので、起こしてしまうのも申し訳無くて……」

言葉では謝っているのだが、行動が伴っていない。一度も俺を見ようとしないので。それどころか、完全に目が泳いでいる。

嘘だ。絶対に何かを隠している。

昨日の一件もあるから、カイルがやりそうな事なんて一つしか思い付かない。

「俺に起きて欲しくなかったんじゃない？」

「えっ?!」

丸く開かれた目がそれ以上に大きくなる。どうやら俺の勘は当たったようだ。

どうせ、また城を抜け出すのが目に見えているから、何とか阻止しようとしたのだろう。しかし、そうだとしても疑問は残る。

少しくらい寝坊しても、外出するには変わらない。それなら何故そこまで考えた時、一つの疑念が思い浮かんだ。訝りながら立ち上がり、少しずつテーブルへ近付いていく。

「まさか……」

並べられた食器の中には焼きたての丸パンが二個、ポタージュース、ハムが数枚とポテトサラダが入っていた。

それらを指差しながら、カイルに疑いの目を向ける。

「これ……変な物入ってないよね？」

「ええっ?! そっ……そんな訳無いじゃないですか!」

カイルは思い切り両手を横に振るが、この反応は間違い無い。図星なのか。

段々と頭が痛くなってくる。

「睡眠薬とか」

「どうしてそんな物」

「じゃあさ。これ、カイルが食べてみてよ」

一番怪しそうな物　ポテトサラダの器を手に取り、カイルの手に押し付けてみる。

ポテトサラダは俺の好物なのだ。勿論、カイルもそれを知っている。怪しまずにいれば、間違い無く食べていただろう。

引き下がらない俺に観念したのか、カイルはがっくりと肩を落として溜め息まで吐く。

「やっぱり、ラウド様は騙せませんね……」

いや、カイルが嘘を吐くのが下手なだけではないだろうか。しかも、溜め息を吐きたいのはカイルではなく、俺の方だ。

「最悪……」

「ラウド様が悪いんですよ！　いつも無茶ばかりして！」

頭を抱える俺に、カイルは開き直ったように説教を始めた。眉尻を上げ、腰には両手を当てている。

「ポテトサラダ以外は大丈夫ですから、朝食食べて下さい！　私はこれからサファイア女王の所へ行ってきます！」

早朝から街に出ても人が少ないのは分かるが、女王にまで情報を求めようとするなんて。それ程までにカイルも情報収集が難航しているのだろうか。

落ち込んだ気分が良くなった訳ではない。それでもカイルの腕を

掴んで口を開いていた。

「待って。昨日、何か情報集まった？」

途端にカイルの表情が曇る。俺から顔を背け、更に俯いてしまった。

「すみません。まだ、何も……」

言いながら、ゆっくりと首を振る。

「ですから今日、必ず見つけ出してきます！ もう、あんなお二人は……ラウド様が悲しむ姿は見たくないですから！」

違う。あの方法を使えば俺が悲しむ事は無い。心に深い傷を負うのは俺ではなく、ミュダ。

俯きながら、手を振り解いて走り出そうとするカイルの腕を更に強く握っていた。

「……俺、まだカイルに話してない事がある」

咄嗟に言葉を吐き出す。特に意識した訳では無いが、後で考えてみても話の出来たチャンスは今しか無かっただろう。

呟きながら、カイルの腕から手を離す。

「えっ?! これ以上、何があるって言うんですか?!」

「もし情報収集が失敗したら、『あいつ』に殺されるのは……ミュダじゃない。俺なんだ」

口にする度に胸が締め付けられる。これで三度目だが、今回は今までで一番重い症状だ。目頭まで熱くなっている。

カイルの顔を真面に見る事が出来ない。

「……………それ、どういう意味ですか?! 呪いをかけられてるのは…
…ミユ様ですよ? じゃあ、どうしてラウド様が」

「話、長くなるからさ。取り敢えず、その椅子に座って?」

頭に疑問符を沢山並べているであろうカイルの言葉を制し、窓際に置いてある、机に備え付けの椅子を指差す。カイルが動き始めた気配を確認して、俺も目の前にある椅子へ腰掛けた。

アレクやフレアの時と同じく、水の神に告げられた内容を声に出していく。溜め息を吐きながら、零れ落ちそうな涙を見せないように頭を抱える。

カイルは相槌を打つ事も、途中で口を挟む事も無く、黙って俺の話聞いていた。普段のカイルからは想像も出来ない程の落ち着きようだ。いや、強い衝撃を受けて反応が出来ないだけだろうか。

全てを吐き出しても顔を上げようとしない俺に、カイルは小さく「そうですか……………」とだけ呟いて口をつぐむ。吐息を最後に会話が途切れてしまった。

俺もこれ以上、何を話し掛ければ良いのか分からない。そこまで頭が回らないし、色々な感情が絡まり合って胸が張り裂けそうさ。カイルの方から静寂を破ってはくれないだろうか。そう思っている。

「ラウド様の事だから、すぐにそれを実行しようとしたのでしょうか？ アレク様に殴られたのだから、そのせいじゃないんですか？」

張りは無いが、優しい声で言葉を紡ぎ出す。

やはり、カイルは俺の性格を良く分かっている。こんな風に言われては、返す言葉が無いではないか。

頭を掻きながら、仕方無く苦笑いを返して誤魔化してみる。しかし、それが逆にカイルの感情を刺激したのかもしれない。

「殴られて当たり前ですよ！ アレク様が殴ってなければ、私が殴ってます！」

哀愁を漂わせながらも、いつものように捲し立てる。その姿を直接は見えないが、拳を作っただけでも殴れる体勢を取っているのだろう。恐らく、迫力ではアレクに負けてしまうが。

何とか笑顔を作り、カイルの方へと向けてみる。

「でもさ。昨日、やっと決めたんだ。最後まで諦めないって。ニコと一緒に生き抜くって」

「昨日ですか。遅いですね……」

それに対し、カイルは呆れ顔を返してくる。首を横に振ってみせてもきた。

ずっと気付かないよりは増しだと思う。

一気に笑みを膨れっ面へと変えて不服さを表現したが、カイルにとっては些細な変化だったのだろう。

「とにかく、私は女王の所へ行ってきました！ 状況が違ってても、や

るべき事は変わりませんから」

ちらりと俺の顔を見ただけで椅子からすっと立ち上がり、急ぎ足でドアへと向かう。俺の感情を無視して、このまま部屋へから出て行くのだろう。そう思ったのだが。

ドアノブに手を掛けた所で足を止め、こちらを振り返ったのだ。

「絶対に他の方法を見つけ出します!」

力強い言葉と共に、やる気に満ちた瞳と胸の前で握られた拳が俺を元氣付ける。

カイルは決して同情したり、憐れんだりはしない。かなりの勇氣が必要だったが、言って良かった。

ほっと胸を撫で下ろしながら、走り去っていく背中を見送った。

緊張の糸が切れたせいも、段々と食欲が湧いてくる。早速テーブルへと向き直ってフォークを手に取った。黙々と、ハムとパンを交互に口へ運んでいく。

ミユも今、こんな風に朝食を食べているのだろうか。元氣にしているだろうか。

自分の事が片付くと、どうしてもミユの顔が浮かんでしまう。心配せずにはいられない。

ぼんやりとしながら

「はあ……」と息を吐き、最後にスープをスプーンも使わずに飲み干す。

ポテトサラダを食べられなかったから、かなり質素な食事だった。後でカイルに文句を言わなくては。

睡眠薬入りのポテトサラダを横目に、着替えを済ませようと席を立った時だ。

忙しない足音と共にドアが開き、人が倒れ込む気配を感じた。カイルが戻ってきたのだ。それは良いのだが、一言も言葉を発しようとしなない。両手を床に突き、俯いたままで呼吸を整えている。まさか。と嫌な予感が脳裏に浮かぶ。

「……どうだった？」

溜まらずにこちらから問い掛けてみたのだが、カイルは力無く首を横に振るばかりだ。

「そっか……」

女王にも分からない呪いなのか。落胆を隠し切れず、足元に視線を落とした。

しかし、落ち込んでばかりもいられない。未来を諦めたりはしない。ミュと一緒に生き抜く。そう決めたのだ。可能性は低くても出来る限りの事をしなくては。

街に行く。反対されるのは分かっているが、それだけは絶対に譲らない。

何とかカイルを説得しようと口を開く。それはカイルと同時だった。

「俺」

「ラウド様、街に行きますよ！ さっさと準備して下さい！」

俺の言葉を遮り、こちらを強い眼差しで見据える。

一瞬、自分の耳を疑った。今、カイルが変な事を言わなかっただ

ろうか。予想外の出来事に反応が出来ない。

目を丸くして棒立ちする俺に、カイルはもう一度声を張る。

「私が何を言っても、貴方が此処を抜け出すのは分かってます！

どうせ行くなら、私の傍に居て下さった方がお守りしやすいですから！」

「……………うん！」

そして、今

カイルを横に従え、昨日同様の完全防備で人の少ない雪道を歩き進める。雲の隙間から覗く強い日差しに負けないように、手でひさしを作って上ばかりを見上げていた。昨日にも増して寒さは顔に突き刺さるが、気にしてばかりもいられない。

煌めく雪を被った看板に目を凝らす。情報収集に好ましい店を探し出さなくては。

「良いですか？ ただ店に入れば良いってものじゃないんです。情報が集まる店に行かないと」

「そんなの分かってるよ」

諭すように話し掛けてくるカイルに見向きもせず、口だけで言葉を返す。

そんな事は言われなくても分かっている。ただ、効率が良い店は何処なのかを知らないだけで。

「武器屋は論外ですよ。真面に取り合ってくれません。馬鹿にされるだけです」

それは昨日の一件で経験済みだ。腫れ上がった頬を指摘される事はあっても、子供扱いされるとは思ってもいなかった。

白く大きな息を吐き出す俺に、カイルは

「あはは」と小さな声を上げる。

何故、笑われなくてはいけないのだろうか。こんなにも必死になっていると言っているのに。

「俺の事、からかってる？」

視線を下げて、俺と同じように厚着した人物を睨み付けた。そんな俺の発言を予想していなかったのか、カイルの顔色が心なしか青白く変わる。更に両手を横に振って慌て始めた。

「そんな訳無いじゃないですか！ 事実を言っただけです！」

たとえ事実だろうと、俺の失敗を嘲笑うかのような物言いだ。こんな弁解では、俺の苛立ちは収まらない。が、今は人の目もある。

「ふーん」と適当に相槌を打ち、不快さを表現するに止めた。申し訳無さそうに頭を垂れるカイルを尻目に、視線を頭上へと戻す。

「すみません……」

「別に良いよ」

それに、今は喧嘩をしている場合ではない。何と少しでも情報収集を成功させなくては。

唸りながら看板とにらめっこをしていたが、ふと、カイルはしどろもどろに口を開く。

「また何をするか分からないから、貴方には教えたくないんですけど……」

「ん？」

首を傾げてみせると、カイルは一つの看板を指差す。

「情報収集は、こつという所が良いんです」

「……占い？」

その看板には確かに、よく占いで使われる水晶玉が描かれていた。

しかし、占いなんか当てになるのだろうか。一般人が魔法を使える訳が無いのだから、結果なんて信用は出来ない。しかも女の子ならまだしも、二人連れの男が占いの店に入るなんて。白い目で見られたりはしないのだろうか。

「ホントに行くの……?」

「当たり前ですよ！ ラウド様と一緒にだと少し面倒になりますけど、こんな一大事に気にしてられません！」

言い終わると、カイルはきつく俺の腕を掴む。鈍い痛みを感じる

程だ。

「えっ？ ちょっ」

「さっさと行きますよ！」

うろたえる俺を叱咤し、力づくで入口へと引き摺っていく。声を上げてみても、雪に足を取られてもカイルの勢いは衰えない。

遂に店のドアは押し開けられ、中の様子が露わとなった。

紫を基調とした、薄暗くて狭い部屋だ。大人五、六人が入れば手足を動かす事も出来ないだろう。壁や天井には何やら星のような光の点がいくつも散りばめられている。それなのに不気味さや圧迫感はない。

看板と同じような水晶玉が置かれた丸テーブルの奥には、黒色のヴェールを被った女の人が座っている。まるで全てを見通すかのようには凍としたアイスブルーの瞳は確実に俺を捉えている。カイルの方を見向きもしない。

その人の口から出た第一声は。

「いらつしゃると思っていました、魔導師様。どうぞお掛け下さい」

「えっ……?!」

一瞬、聞き間違えたのかと思った。

魔導石はバンダナと帽子で二重に隠しているし、魔法を使った訳でも無い。

唯一、身分が知れてしまいかもしれない瞳は外に出ているが、青色の瞳を持つ者なんて大勢居るのだ。魔導石の色と比べてみなければ、その違いは分からない。それなのに何故

「……おつ、俺は魔導師なんかじゃありません！ ねっ?!」

とにかく、何とかして誤魔化さなくては。とカイルに同意を求めたのだが。いつもなら慌てふためくその人物が涼しい顔をしているのだ。微動だにせず、にこやかに微笑む占い師を見詰めている。

「……カイル？」

呼び掛けてみても、こちらに反応を示さない。

「大丈夫ですよ。貴方様の事は誰にもお話ししません。その前に、使い魔さんが貴方様に関する記憶を私の中から消し去ってしまうでしょうけれど」

「やっぱり、気付いてましたか……」

記憶を消すとはどういう事だろうか。使い魔にそんな能力があるなんて聞いた事が無い。

と、それ以前に、世間には知られていない使い魔の存在に気付くとは。

この占い師は徒者ではない。それだけは混乱したままの俺にも分かる。

「それでは始めましょう。貴方様の場合ですと、水晶玉よりは……。こちらが宜しいでしょう」

占い師は水晶玉をテーブルの影に隠すと、今度は同じ場合に俺の顔くらいの大きさはある水瓶を乗せた。中を覗き込んでみると、溢れんばかりの水が湛えられている。水面に波紋が現れては消えてい

く。

か細い腕の何処に、こんなにも重たそうな水瓶を持ち上げるだけの力があるのだろうか。

呆気にとられている間にも、占い師は精神統一に入ったようだ。ヴェールの裾からはらりと垂れた黒髪を耳に掛け、水瓶の上に両手の平を翳す。

「さあ、お掛け下さい。貴方様の求めるものを……」

目の前に置かれた椅子に手を伸ばしながら、紡がれていく声に耳を傾ける。ぶつぶつと呪文か何かを呟いているようだ。

それも数分と続かずに、睫毛の下から覗くアイスブルーの瞳は瞼で覆われていく。同時に詠唱も止んだ。

部屋がしんと静まり返る。

張り詰めた空気の中で、緊張しながらも一心不乱に祈っていた。どうか、ミユの呪いが解けますように。犠牲を出さずに済みますように。

占いなんかに頼るなんて、我ながら馬鹿だと思う。それでも縋る他には無かった。

そんな俺の気持ちとは裏腹に、占い師の眉間には皺が寄っていく。僅かに持ち上げた睫毛を伏せたまま、苦渋に満ちた声を絞り出す。

「……誰かが妨害しているようです。見えるモノは闇ばかり……」

首を振りながら、翳していた手も下ろしてしまった。

こんな所にまで影が手を回していたとは。

落胆を露わにする俺とは対象的に、カイルは喧嘩腰で口を開く。

「……そんなっ！ ミユ様とラウド様の命が係ってるのに！ 何とかして下さい！」

「何方かが、この妨害を排除して下さい限り、私の力では……。申し訳ありません……」

「でも」

「もう止めなよ」

勢い余って身を乗り出すカイルに手を伸ばし、言葉を制してしまった。悲痛に歪む瞳がこちらを向く。

「何言ってるんですか！ 諦めないって言ったのはラウド様じゃないですか！ ……分かってないんです！ こんなに強い透視能力を持った方はこの人しか居ません！ だから」

「別に、俺は諦めた訳じゃないよ。この人を責めたってしょうがないじゃん。悪いのは『あいつ』なんだし。時間も無いし、他を当てるっ？」

此処で言い争いをするなんて無意味だ。それどころか俺たちの不安感を煽り、協力してくれようとした人さえも傷付けてしまう。

このまま此処に居ても迷惑だろう。と重い腰を上げた。ついでにカイルの腕を引いて、立ち上がるように促す。

「ありがとございました。時間が無いので、俺たちはこれで。カイルが無理言ってますみませんでした」

愛想笑いをし、社交辞令も早々に踵を返した。

カイルが口を挟んでくる前に店を出てしまおう。そう思ったのだが。

「待って下さい！」

ドアへ手を伸ばす前に、何故かカイルと占い師の声が重なった。そして、二人同時に首を竦める。

「……私の方こそ、お役に立てなくて申し訳ありませんでした。せめてもの償いに、唯一見る事の出来た未来を。……闇は砕かれ、光が求めたものは再び彼の地に舞い降りる」

気持ちは有り難いのだが、占い師の言っている意味が分からない。抽象的過ぎる。

取り敢えず、黒の魔導師は倒せるという事だろうか。

「光が求めたもの？ 彼の地？」

「これ以上は言えません。ですが、どうか希望をお捨てにはならないで下さい」

小首を傾げる俺に、丁寧に言葉を紡ぐ。その微笑みには何とも言えない哀愁感が漂っている。それなのに、真っ直ぐに注がれる瞳には説得力もある。

俺の心を捕らえ、目が離せなくなってしまうようだ。

「私はこの人に魔法をかけなくてはいけないので、ラウド様は外で待っていて下さい」

不意に掛けられたカイルの声で我に返り、肩が小さく震えた。

そうだ。ぼんやりしている場合ではない。

歩かなくても届いてしまうドアノブに手を掛け、今度こそはと外へ踏み出した。冷気が身体を震わせる。

ドアを閉める前に、ちらつく粉雪の向こう側に見えた占い師の瞳は相変わらず俺を捉えていた。憂いを帯びた表情も変えずに。

もしかすると、この人の脳裏には俺の結末の全てがはっきりと見えていたのかもしれない。

数分も経たずにカイルは店から出てきた。浮かない表情で、虚ろな瞳を下に落とす。この様子を見る限り、本当に占い師の記憶を消してしまったのだろう。

だが、感傷に浸ってばかりはいられない。目に付いた酒場、飲食店、様々な人が出入りする店を手当たり次第に当たっていく。昼食を取る暇も惜しんで、パンを片手に街中を駆け回った。時間が経つに連れてパンは寒さで固くなっていったが、身体の中に入ってしまったえば同じだ。

それでも一向に有力な情報は得られない。次第に焦りや苛立ちが表面に現れてくる。それはカイルも同じだった。

「何で！」だとか

「何なのさ！」などと小言が漏れる。その度に励まし合って唇を噛み締め、次の一步を踏み出す。その繰り返した。

占いの店もいくつがあった。が、カイル曰わく

「最初に行ったお店以外は信用出来ませんよ！」だそうだ。

試しに一軒だけ入ってみたのだが、その占い師は俺の正体を見破る事すら出来なかった。ただ、当たり障りの無い幸せな未来を言ってみせる。しかも、結婚生活の事まで。俺は絶対に結婚なんて出来ないのに。高額な鑑定料をぼったくられただけだ。まあ、支払いは全てカイルが済ませてくれたから良いのだが。

頭上から降り注いでいた銀色の天使の梯子はいつの間にか金色に染まり、街を斜めに照らし出している。

時間が足りない。

「……カイル！ 他に当てになりそうな場所……無いっ？！」

「教会なら、一軒だけ残ってます！ 関所の傍に！」

「関所って……遠いじゃん！」

関所は城壁の門に備え付けられている。カイルの指差す場所は、どう考えても今からでは間に合いそうにない。舞い落ちる雪で遠ざかる程に視界は霞み、城壁がはつきりと確認出来ないのだ。走っても数十分はかかる。

「……考えてても先に進みません！ とにかく行きますよ！」

一瞬諦めにも似た感情が湧き起こったが、カイルが払拭してくれた。たとえ無理だとしても、立ち止まる訳にはいかない。ミユと自身の未来を守るために。

息が切れても、足が鉛のように重くても、鼓動が速度を上げても前だけを見て走り続けた。多少ふらついていても衝突してしまう程の人

通りは無かったから、それも幸いしたのだろうか。

「ラウド様！ 見えてきましたよ！」

明るく高いカイルの声に顔を上げて目を凝らしてみる。まだ十軒程先ではあるが、十字架を頂く三角屋根の建物を捉える事が出来た。もう少しで辿り着ける。話が聞ける。そう思ったのに。

無情にも一番聞きたくなかった音が響き始めた。澄んだ空気を震わせて人々の動きを沈める。店のドアにも『閉店』の文字が掲げられる。

日没を告げる鐘の音　タイムオーバーだ。

結局、俺の力では見つけ出せなかった。アレクには、情報収集は今日の夕方までと言われている。結果はどうあれ、もうダイヤに戻らなくては。

「カイル、ありがとう。一生懸命探してくれて」

自室に帰って早々、外出用の衣服をベッドに脱ぎ捨てて、カイルが用意してくれた薄い青色の普段着に袖を通した。腰に短剣を差す事も忘れない。

泣き出しそうな程に潤む青い瞳を俺に向けて、カイルは束ねた髪を靡かせながら首を横に振る。

「お礼を言われる事なんて……！ 何も見つけれなかったのに……」

「ううん。俺、必死になってくれたカイルの気持ちが嬉しいから」

「ラウド様……」

何故、こんなにも物悲しくなってしまうのだろうか。今生の別れなんかではない筈なのに。カイルの目を見ていると胸がきつく締め付けられる。

「……きっと、他の皆さんが何か良い方法を聞き出していますよ！」

励ましてくれているのだろう。無理に笑ってくれるのだが、歪んだ表情が痛々しい。

「もし駄目でも、また一緒に探しましょう！ 次は絶対に」

「次は……無いと思う。占い師に見てもらった時、影に妨害されたじゃん？ 言っただけでなかったけど、昨日も影が俺に話し掛けてきたんだ。時間が無いよ」

「……そんなっ！」

こうしている間にも、影は着々と世界を滅ぼす準備をしているのだろう。影が動き始めた今、ミユや他の二人に望みを託すしか無い。情報収集に時間を割いて影の策略に嵌るなんて、本来の目的から逸脱してしまうのだから。

本当はこんな事、頼みたくなんかない。考えたくはない。しかし、今を逃せばチャンスが訪れるかどうか分からないのも事実である。

もし万が一の事があれば、頼れるのはカイルだけだ。アレクに言
って、また殴られるのだけは遠慮したい。

「もし、俺に何かあったら……これ、ミュに渡して欲しいんだ」

胸元に手を差し入れて、そこで静かに揺れている物を摘み上げる。
部屋を照らす灯りの光を反射させ、星のように瞬く。

「俺が逢いに行くまで預かって。必ず取りに行くから……」

百年前に彼女を愛した証　リザードの結婚指輪だ。

これがあれば、ミュとずっと繋がっていられる気がする。これを
ミュが持っていてくれるのならば、再会出来るという希望も持てる。
少しでも不安を消せる。

こんなの、俺の独り善がりだ。彼女に辛い思いをさせるには変わ
りないのだから。

「ごめん。ホントはこんな事、頼みたくなかったんだけどさ。一応
……ね。最後まで、やれるだけの事はやってみる。こんな頼み事、
無かった事に見せるから」

「……当たり前ですよ！　私は『ラウド様の』お帰りをずっと待っ
てますから！」

叫び声に近いカイルの声に、頷く事しか出来なかった。

凄く、凄く嬉しい。気を緩めてしまえば、俺まで涙が溢れ出して
きそつだ。

このままでは此処を離れられなくなってしまう。そうなる前にダ

イヤへ戻ろう。

「それじゃ、行ってくるから」

無理やり気持ちを切り替えてカイルに背を向けた。瞼を閉じてワ
ープに集中する。

ところが。

「私からも『もしも』の時のために。百年前に貴方に言った事、覚えてますか？」

魔法を使い始めたにも関わらず、カイルが話し掛けてきたのだ。

「えっ？」と素っ頓狂な声を上げながら、思わず後ろを振り向いてしまった。小刻みに揺れながらも、ぶつかり合った瞳は俺から離れない。

一方で、発動を始めた魔法は普段よりも緩やかな速さで光を放つ。それを気にも留めず、カイルは話を続けた。

「『自分の身を守れない者が、他人を守れますか？！』って、怒鳴ってしまいましたよね」

恐らく、サファイアに津波が襲ってきた時の事だろう。曖昧にしか覚えていないのだが。

突然昔の事を持ち出してくるなんて。どうしたのだろうか。

次のカイルの言葉を待っている間にも、俺を包み込む光は強さを増していく。

「あの言葉、撤回します。ラウド様なら、絶対にミユ様を守り抜けますから。私が保証します」

浮遊感が一瞬で消え去った。昨日の朝も目にした物が歪に波打っている。

立ち塞がる扉の前から手近な厨房へと逃げ込んだ。壁に突っ伏して嗚咽を漏らす。

あんな事を言うなんて絶対に狡い。俺を泣かせようとしたとしか思えない。

事が思い通りに運んで幸福な未来が訪れようとも、あの、悲しみに歪んだカイルの笑顔は永遠に忘れられないだろう。

第18章 現実の前に

ようやく涙も枯れて、気持ちも落ち着いてきたようだ。此処に居ても仕方が無いし、集合場所へ行こう。

涙の跡を消すために顔を濯ぎ、締め切ったドアの方へ手を伸ばした丁度その時、錆びた蝶番が軋む音が俺の耳に届けられた。誰かが到着したのだ。

何事も無かったかのような素振りを心掛けて会議室へと向かう。ミユに要らぬ心配は掛けさせられない。

今は信じよう。絶対に何とかなる。誰も死なずに済むのだ、と。恐る恐る押した扉の先に居た人物は、

「……おつ。オマエにしちゃ遅かったな」

腕を組んで窓に凭れ掛かるアレクだった。

暮れなずむ夕陽を背負い、逆光のせいで表情はよく見えない。たった一言発しただけで、情報収集の結果を報告された訳でも無い。それでも、いつもよりも低い声のトーンがその全てを物語っている。

「まあ、今日はあんま早く来られても困るけどよー」

覇気の欠片も無い声で呟き、

「ふー……」と息を吐き出すと窓の外へと頭を傾ける。そんなアレクにつられて俺も外を向いた。

空に規則正しく並ぶ鱗雲の隙間から橙の光が溢れ出し、青々と茂る草原を斑に染める。綺麗だな。などと感傷に浸れるだけの心の余裕は俺には無い。ただぼんやりと、時が経過していく様子を目に映す。

何となく俺も窓際へと移動し、左肩を窓の枠に預けた。一日中街を走り回ったせいで身体が重い。多少は泣いた影響もあるだろう。

「その様子じゃ、オマエもダメだったんだな」

「……オマエ『も』って」

答えは分かっているが、意味深な言い方に自然と声が漏れていた。

「ああ。オレもダメだった……」

やはり、か。そうは思っても、いざ言葉として突き付けられると一気に現実味を帯びる。衝撃を受けずにはいられない。

それ以上会話は進まないままに黄昏も通り過ぎ、夕闇が訪れる。自動で室内の灯りが点り、俺たちの姿を照らし出す。それでも一々互いの様子を確認したりはしない。

ミュの到着はまだだろうか。早く会って無事を確かめたい。緊張しながらも想いを募らせ始めた頃、再び部屋の扉が開いた。

「待たせちゃったかしら？」

「……おお。ちよつとな」

このアルトの声はミュではない。フレアだ。

フレアは踵の音を響かせながら指定席へと移動し、溜め息混じりに腰を下ろす。気のせいかもしれないが、昨日よりも瞼が目に見えさって見える。

「夜になるまで、ずっと情報収集してたのか？ 疲れてねーか？」

「あら。ガーネットはまだ夕方よ？ 日が暮れるの遅いもの」

「そーか」

しかし、その口調は普段と大して変わらない。と言う事は、良い報告を期待しても良いのだろうか。

「……あのさ。それで、結果は？」

躊躇いがちに、二人の会話に割って入ってみたのだが。本題を持ち出した途端にフレアは目を伏せ、口籠もってしまう。何度か首を小さく横に振り、僅かに間を置いて発せられた言葉は。

「ごめんなさい……」

アレクと同じ、否定的なものだった。

「サラ、王様の所にまで聞きに行ってくれたのよ？ それなのに、
『誰かに妨害されて分からない』って……」

「妨害っ?! ……いや、ロイもそんな事言ってたな……」

そうだ。俺が影に妨害されたのなら、他の三人だって同じ事をされていてもおかしくはない。何故、今まで気付かなかったのだろうか。

「もしかして、オマエもかっ？」

「……うん」

「じゃ、ミユも苦戦してんだろーな……。オマエに釘刺されたのに遅刻するなんてよー、他に理由、考え付かねーし……」

アレクは頭を掻きながら苦虫を噛み潰したような表情をし、「クソっ……」とぼやく。フレアが居る方からも小さく息を吐く音が聞こえた。

重苦しい空気が会議室を支配し、余計に俺たちを追い詰めていく。

「ミユが戻ってきたら……また解散するか？ ……いや、それで時間ばかり無駄にしちまったら……」

「どうすれば良いのよ……」

重たく腰にぶら下がる短剣が己の存在を知らしめてくる。まるで『自分を使え』とでも言っているかのようだ。

しかし、それは駄目だ。通じる筈も無いのに剣へ向かって『止めろ』と念じ、頭を軽く横に振った。

それでも思考は悪い方へと傾いていく。昨日の影の言葉が脳裏を掠める。

「……妨害されただけじゃない。俺、昨日影に脅されたんだ。一人で部屋に居る時に」

降り積もる不安をどうにかしようと、助けを求めようとに言葉が溢れ出していた。だが、言い切る前に意識を削がれてしまう。

部屋の入口の方から、人の気配を感じたのだ。同時にそちらから閃光がほとばしる。

「ミュっ！」

ようやくミュが到着したのだ。それ以外に誰かが来る筈が無い。振り向きざまに叫び声を上げ、そのまま彼女に駆け寄ろうとしたのだが。

何処か様子が 違う。

「オマエ、遅過ぎだろ！ 頑張りたくなるのも分かるけどよー、それにしだって」

「お待たせして申し訳ありません」

和らいでいく光の向こうには、確かに緑色の瞳が見て取れる。しかし、丁寧の一つに纏められた髪まで緑色だ。それに、纏った衣服は白色の薄い布を幾重にも重ね合わせた古風なものの 使い魔特有の服装だった。

ワープのために現れた光が完全に消え去ると、その人物は深々と頭を下げる。

「……アリア？」

何故ミュではなく、アリアが此処へ来たのだろうか。

僅かな間、思考が停止してしまった。が、すぐに嫌な予感が身体を震わせる。

まさか。

影は自分が言った言葉も無視し、ミュに危害を加えたのでは

「アリアっ！ ミュはどうしたの？！」

我を忘れてアリアへ詰め寄り、細い肩を鷲掴みにした。
臉を伏せて俺から視線を逸らすその瞳が益々鼓動を速めさせる。
手の平には汗が滲む。

「それが、高熱を出して倒れてしまいました……。今はお部屋で寝込んでいらっしやいます」

「……高熱っ？」

「はい。昨日、目を離れた隙に街へ出て行かれてしまったのです。
無理が祟ったのかもしれない」

取り敢えずは無事、という事だろうか。高熱だけならば、怪我はしていない筈だ。

ミュが大変な目に遭っているというのに、肩に入っていた力がすっと抜けていく。

不謹慎かもしれないな。などと、自身に心の中で悪態を吐いてみる。

だがそれも束の間、別の恐怖が俺を襲い始めたのだ。吐き気さえも沸き起こる。

「……待つて。じゃあ、ミュ、今は一人で部屋に居るの？」

「それが……何か？」

きょとんと首を傾げるアリアに腹が立って仕方が無い。何故、こんなにも暢気にしていられるのだろうか。

いや、アリアだけではない。アレクも、フレアもだ。

「まずいよ！ ミユが危ない！」

ミユを守るべき者は今、全員この場に居る。ミユは完全に無防備だ。影にとっては絶好の機会だろう。誰にも邪魔をされる事無く、容易く彼女に近付ける。

そう、カノンに呪いをかけた時のように。

近いうちにミユを消し去る。そう言った影の思惑が現実になろうとしているのだろうか。

「俺、エメラルドに行く！」

絶対に繰り返させはしない。

アリアの肩から手を離し、無我夢中で魔法を使おうと試みる。ところが、そうなる前に阻まれてしまったのだ。

俺の片腕にアレクの指が食い込む。

「……おい、落ち着け！ ちょっと情報収集を妨害されただけで、他は何ともねーだろっ？！ ミユは大丈夫だ！」

何を根拠にそんな事を言っているのだろうか。

俺たち三人が三人とも影に妨害されている。こんな状況、ちよつとどこの問題ではない。しかもミユに会ってもいないのに、何故彼女の安否が分かるのだろうか。

元々鋭い目を更に吊り上げてみせるアレクに負けず、俺も声を張って応戦する。

「さっき言ったじゃん！ 影に脅されたんだよ！ 近いうちに俺の目の前でミユを消し去るって！」

「……何だどつ?!」

「だから、こんな所で言い争ってる場合じゃない! 早くミュの所に行かなきゃ!」

説得している時間すら勿体無い。僅かに俺を捕らえる力が抜けた瞬間を突き、その手を振り払う。

これで障害物は取り除けた。そう思ったのに。

今度は何と、フレアが俺の前に立ちはだかったのだ。

「……待って! 影、ミュはラウドの目の前で消し去るって言ったのよね?!」

必死になって見詰めてくる赤色の瞳が鬱陶しくて仕方が無い。

「そつだよ! だから」

「今、ラウドがミュの所に行ったら影の思う壺よ! ラウドに言った言葉通りにミュを殺せるもの! 今はアリアに任せた方が良かった!」

的を得た内容なのだが、頭に血が上っているせいか真面な反応が出来ない。言葉を返す代わりにフレアを睨み付けてしまった。

俺がエメラルドへ行つたとしても何も出来はしない。フレアはそう言いたいのだろうか。そんな捻くれた感情までもが燻っている。フレアの忠告も無視して、再びワープしようと瞼を閉じた。途端に肩へ振動が走り全身へと伝う。集中力が途切れてしまった。

「待ってって言うてんだろ！ フレアの話聞いてなかったのか？！
ミュがどーなっても良いのかよっ？！」

何を言っているのだろうか。アレクの信じられない発言が心に突き刺さり、又しても身体を震わせる。

「そんな訳無い！ ミュは絶対守りたいから！ だからっ……！！」

どうでも良いのならば、こんなに必死になったりはしない。あまりに悔しくて、俯いて拳を握り締める。

「ミュ様は私にお任せ下さい！ 必ずお守りします！」

そんな俺を元氣付けるかのようにアリアは力強く言い切ると、すぐに光を放ち消えてしまった。

アリアの気持ちは有り難いが、それだけで熱りが冷める筈も無い。前方に片手を突き出し、尚も抵抗を試みる。

「……アリア、待って！ 俺も」

「オマエが行ってどーなる？！ 影を追い払えんのかっ？！ ミュの熱が下がったりすんのかっ？！」

そんなに意地悪な事を言わなくても良いではないか。俺が何も言葉返せなくなるのを知っているくせに。

いや、知っているからこそその発言なのだろう。

声にならない声を発して唇を噛み締める。そのまま頂垂れ、膝を床に落とした。

「落ち着いたか？」

「……うん」

指定席で股の上に乗せた組み合わせた手を見詰め、無気力なままに頷く。

不甲斐ない自分が悔しくて、腹立たしくて。床に座ったまま動けなくなってしまうた俺をアレクが引き摺り、無理やり此処へ移動させたのだ。

俺に気を遣ってくれているのか、アリアが去ってからしばらくはアレクもフレアも話し出そうとはしなかった。ただ、時間だけがゆったりと流れ行く。

その流れの中で何とか興奮状態から抜け出した俺だが、未だに嫌な冷や汗は止まらない。鼓動だっていつも以上に脈打っているし、喉も乾く。

落ち着いたと言っても、単に『すぐ感情的にはならず済む』状態だというだけだ。思考回路は糸が複雑に絡まり合っているかのように、正常に働いてはくれない。

「ラウドの話がホントだとすると……時間がねーって事か……。今回は神ってヤツも当てになんねーし……」

「あたしたちで何とかしましょう？ それしか無いわ……」

アレクとフレアの会話に参加する事も難しい。

「んな事言ってもよー、何とかなるのかっ?！」

「何とかするのよ! じゃないと、ラウドとミュが……!」

何となく、俺の名前が聞こえた。そんな風にしか思っていなかったのだが。

ふっと場の雰囲気が変わったのだ。緊張感が張り詰める。

「ごめんなさい……」

「ううん、別に良いよ」

フレアの謝罪は確実に俺に向けられたものだ。それだけは今の俺でも理解出来る。

目を伏せて身体を縮めるフレアに、精一杯の言葉を返した。

そんな俺たちの様子を窺いながらも、アレクはこちらに強い視線を送る。

「オマエの所に影が来た時、他に何も言っていなかったのか?」

「……えっ?」

「ミュを近いうちに消し去るって言った事以外によー」

覚えている限りでは、他には何も言われていない筈だ。声は出さずに首を振ってみせる。

「まったく……。何でオレらには何も言っておねーんだ。コイツが無茶するよ用に仕組んだってかつ？」

「可能性は……あるわね」

「性格ひん曲がってやがる……」

アレクは小さく舌打ちをしてみせるが、影の性格が最悪な事くらい分かっているではないか。百年前、既に。

その隣で、フレアは頬杖を付きながら目を横に流す。

「許せないわ。人の弱みに付け込んだり、濡れ衣を着せたり……最低よ」

「ああ」

『濡れ衣』とは、恐らくアイリスの時の事を言っているのだろう。カノンがアイリスを憎んでいた、その発端となった事件の真相は未だに分からない。影はアイリスもカノンの呪いに関わっていると書いていたが、信憑性に欠ける。何より、アイリスやフレアが人よりもよって仲間を殺せるとは思えないのだ。

フレアは瞳を潤ませて溜め息を吐く。その一方で、アレクは心此処にあらず、といったような様子だ。腕を組みながら物思いに更けている。と、おもむろに立ち上がり、虚ろな表情でフレアに向き直った。

「……済まねえ。フレア、席外してくれるか？」

「えっ？ でも、まだ」

「話の続きは明日するからよー。オマエは休んだ方が良い」

一方的な意見を押し通すと、困惑するフレアを立ち上がらせる。その肩を抱き、扉の前まで強引に連れて行ってしまった。

アレクは何かを企んでいるに違いない。精神的にも疲れ切っているだろうフレアを一人、部屋に帰すとは。一体、何をするつもりなのだろうか。

フレアの耳元で何かを囁いて廊下へ促すアレクに疑いの眼差しを向けた。

嫌な予感はすぐに現実となる。

振り向いたアレクの表情は何かを決意したかのように凜と引き締まり、その瞳は真っ直ぐに俺を貫く。決して揺らいだりはしない。

強い目力を維持してふてふてしく俺に歩み寄り、片手を目の前に差し出す。

「オマエの腰にぶら下がってるモノ、オレによこせ」

「えっ……?!」

思わず口元が引き吊ってしまった。

腰にぶら下がっている物なんて一つしかない。渡せる訳が無いではないか。

「何言ってるのさ！ そんな事、出来る訳無いじゃん！」

立ち上がりざまにアレクの手を払い退け、思い切り威嚇してみる。それなのに、アレクの勢いも衰える気配を見せない。

「オマエがそんなモノ持ってたら、危なっかしくて見てらんねーんだよ！」

「そんなの、アレクの勝手じゃん！」

それなら、最初から見なければ良いのだ。自分の都合を俺に押し付けないで欲しい。

何が気に食わないのだろうか。俺の発言に、アレクの眉間に深い皺が刻まれた。

「オマエなあ……！ まだ分かってねーのか?!」

「何がさっ!」

もう、訳が分からない。何を理解していないと言っているのだろうか。もっとはつきり言えば良いのに。

不快さを表す俺に余計に腹が立つたらしく、アレクは

「……っああっ!」と叫びながら頭を掻き毟った。そのせいで崩れた髪を振り乱し、更に声を荒げる。

「何でオマエ一人で全部背負い込もうとするんだ?! カノンを守れなかったのはオレらも同じだ! 悔しいのも同じだ! もう充分だろ!」

息を上げながらも立て続けに喋り、己の思いを吐き出す。

だが、分かっているのはアレクの方だ。俺が抱えている過去の持つ意味はアレクたちとは全く違う。

愛する人を奪われた悔しさ、憎しみ、己への苛立ち そんな感

情を抱いた事があるのか。一人遣されて生きていかなくはならない孤独を知っているのか。

決して他人に預けられるようなものではないのだ。

「同じじゃない！ 全然同じじゃないんだよ……！ 分かってないのはアレクの方だ！」

一度唾を飲み込み、息を吐き出す。改めて目に力を込めて、アレクを見据えた。

「もしフレアが目の前で殺されたとしても、それでもそんな事言える?!」

「ああ、言えねーだろーな！ 考えたくもねーよ！」

「じゃあ分かるじゃん！ 俺は背負うべき物を背負ってるだけだよ！ それ以上でも以下でもない！」

感情のままに言葉を浴びせたが、それで相手の気が収まる訳も無く。

「でも、その重荷を分け合う事くらいなら出来んじゃないか?! 何でオマエらだけ苦しまなきゃなんねーんだよ！ こんな、間違ってるだろー！」

そう、言い返されてしまった。

頭の中に昨日のアレクの手が蘇ってくる。

もしもダメだったらオレが

今の発言は正しく、その言葉を彷彿させる内容だ。

「だから、アレクが代わりになる？」

「ああ」

真剣に頷く様に、予測が確信へと変わった。

そんな事をして、一体何になるといえるのだろうか。それこそアレクの自己満足だ。無意識のうちに

「はは……」と苦笑いが漏れてしまう。

「そんな事したら、フレアが悲しむじゃん。俺たちだって、新しい重荷を背負って生きていかなきゃいけない。もっと不幸になるだけだよ」

対象となる人物がアレクに変わったとしても、あの剣を使えば犠牲が出る事には変わらない。それどころか、アレクに変わる事で余計に悲しみの輪が波及するだけだ。何の解決にもならない。

「だからって何でオマエが」

「もう止めよう？ これ以上話したって、どうせ俺もアレクも譲らないんだしさ。俺、部屋に戻るよ」

無駄な言い争いをする気は無いし、問題を増やしたくはない。とアレクの顔も見ずに踵を返す。途中で

「おい！」とか

「待てよ！」などと叫び声が聞こえてきたが、そんな物は全て無視した。

交わる事の無い俺たちの気持ちを更に隔てるかのように、扉が背

後で音を立てる。

廊下を歩いていても、部屋に戻っても心が休まる事は無かった。アレクの事を頭の中から追い払おうとするとミュの悲しみに歪む顔が、逆にミュは大丈夫だと安心させようとする就先程のアレクとのやり取りが脳裏を駆け巡るのだ。

眠るのが一番の対処法なのだろうが、こんなにも頭が冴えていては眠れる筈も無い。椅子に座って頭を抱え、どうにか時間をやり過ぎす。ミュはアリアが守ってくれている。ミュの熱が下がれば彼女と必ず再会出来る。そう信じて。

しかし、一人で居る時間が長ければ長い程、残酷な記憶が鮮明に蘇ってくる。

彼女も、俺自身の身体も、咲き乱れる花も全てが赤い。カノンが最期を迎えた時の記憶だ。

「うあ……っ！」

嫌だ。もう止めてくれ。

吐き気を堪えて涙で潤む目を瞑り、何度も『止める！』と念じ続けた。

それで収まってくれば良いのだが、映像は益々酷さを増している。遂に、血に濡れて横たわるカノンはミュへと姿を変えて

「止めるーっ！」

もう無理だ。耐えられない。

無我夢中で椅子から飛び上がり、洗面台へと駆け込んだ。一心不

乱に顔へ冷水を浴びせる。まるで、頭の中にこびり付いた血を全て洗い流すかのよう。

こんな状況だから、誰かが部屋に入ってきたなんて気付く筈も無い。たとえ、その人物が俺の背後に立っていたとしても。

「ラウド！ どうしたの?!」

声が聞こえた瞬間に悪寒が全身を駆け巡り、腕には鳥肌が立つ。叫び声を上げながら大袈裟に仰け反ってしまった。

振り向いた先には、俺にも負けないくらい目を見開いたフレアの姿があった。

「……フレアっ」

「ごめんなさい！ ビックリさせるつもりじゃなかったのよ。夜ご飯を届けようと思ったたら、ラウドの部屋から叫び声が聞こえてきたから……」

言いながら、申し訳無さそうに臉を伏せる。

俺の声は部屋から漏れ出していたのか。余計な心配を掛けさせてしまったらしい。

「……そっか。ありがとう」

謝ってしまえば、更に気を遣わせてしまい兼ねないだろう。そう思い、こちらの言葉を選んだ。

それが良かったのか、フレアの表情も穏やかになって優しい笑みが覗く。

「アレクが何も作ってくれなかったから、パンしか無いけど……。テーブルの上に乗せておいたわ。後で食べて」

「うん、分かった」

気持ちは嬉しいのだが、食欲なんて出ない。パンを見ただけで満腹になってしまいそうだ。

出来るだけ俺も笑顔を作って心中を察せられないようにしたのだが、やはり伝わってしまうものなのだろうか。再びフレアの表情が曇っていく。

「ミュの事、あんまり思い詰めない方が良いわ。って言っても……無理よね」

零れ落ちた横髪を耳に掛け、俺から顔を逸らす。まるで、自分の事を話す時のように哀愁を漂わせながら。

中途半端に優しい言葉や素振りをされると、心に降り積もった負の感情が溢れ出してくる。これ以上言葉を重ねられれば、全てフレアにぶつけてしまっただろう。

そうなる前にフレアを遠ざけなくては。精神的に弱っている人に対してぶつけられる感情ではない。

「……ごめん、一人にして欲しいんだ」

フレアに背を向けて小さく呟く。その気持ちを踏みにじる事になるうとも、こちらの方がまだ増した。

それでも

「そう……。ごめんなさい」と寂しそうに俺へ向けられた声が胸に突き刺さる。

何も言わずにフレアは部屋から出て行くのだろう。そう思ったのだが。

「辛い思い、たまには吐き出しても良いのよ？ あたしだって、聞く事くらいは出来るもの。……それじゃあ、お休みなさい」

心に余韻を残しながらドアが閉じられる。

言える訳が無い。何故、ミユまで呪われなくてはいけないのだろうか。何故、誰も救いの手を差し伸べてはくれないのだろうか。何故、俺たちは苦しまなくてはならないのだろうか。何故

そんな怒りにも似た疑問に答えられる人なんて、きっとこの世には居ないのだから。

寝室へ戻ると、おもむろにパンを手に取って一口だけかじった。味気なく、口内の水分を奪い去っていく様が余計に食欲を失せさせる。

起きていても疲れるだけだ。眠れはしないが横になろう。また誰かが此処へ来たとしても、相手をする事無く寝た振りが出来るだろう。

パンを飲み込もうともせず、ベッドへと身体を放り投げた。布団を掴んでその上に被せる。

窓から差し込む黄色と水色の二つの月明かりを浴びながら、とても無く長い夜を耐え忍ぶ。逃げられる場所なんて俺には何処にも無いのだから。そう、夢の中さえも。

文字通り、世界を揺るがす大事件が翌朝起こる事になるうなどと知る由も無く

第19章 始動

その日は至って普通に始まった。窓の外を覗いてみれば羊雲の漂う長閑な空が続いているし、そよ風は草々を波のように靡かせる。廊下だって静まり返っている。

ただ違うのは俺の緊張感だろうか。何か良くない事が起こる。そんな予感が底から湧いてくるのだ。第六感が警笛を鳴らしているかのように。

寝不足のせいで重たくなつた臉を擦り、早々に身支度を整えた。時間が無いと言っている以上、アレクたちも朝から話し合いをするつもりなのだろう。

俺の予想通り、会議室へ行った時には既にアレクもフレアも到着していた。晴れ晴れとしない表情で指定席に腰掛けている。アレクは腕を組み、フレアは頬杖を付きながらそれぞれが何かを考え込む珍しく、会話もしていないようだ。

二人の姿を横目にし、俺もいつもの席へと腰掛ける。椅子を引き摺る音を合図にしてアレクが視線を上げた。

「……遅かったな。昨日、眠れなかったのか？」

「うん、ちょっとね」

ちょっとどころではなくかなり眠れなかったのだが、言って解決する問題でもない。適当に相槌を打って話題を流す。それ以降、会話が途切れてしまった。部屋に溜め息ばかりが漏れる。

昨日は二人と酷い別れ方をしてしまったから、俺からは話し掛けにくい。それはアレクとフレアも同じなのかもしれないが。

未だに胸騒ぎを感じながらも勇気が沸き起こる事は無く、時間だ

けが虚しく過ぎ去っていく。

だが、それも長くは続かなかった。業を煮やしたのか、フレアはゆっくりとアレクの方へ顔を向ける。

「呪いを解く方法考えるんでしょ？ 今日に先延ばししたのはアレクよ。話を進めて？」

「おっ？ ああ……」

もつともな言い分に一度はアレクも顔を上げて、しどろもどろに返す。が、心は伴っていないのだろう。頭を掻きながら再び俯いてしまった。

それもそうだ。恐らく昨日のアレクの言葉なんて、フレアを追い出すための口実だったのだろう。剣の事で頭が一杯で、先の事など考えていなかったに違いない。

何故、アレクはいつも計画性が無いのだろうか。呆れて溜め息を吐きかけた時、渦中の人物が思い切ったように顔を上げたのだ。

「まず、本調べてみねーか？ 城に戻れば図書室くらいあるだろ？ 魔術書は無くても歴史書とかよー。何かヒントになるかもしれねーし」

人一倍真剣な顔で腕を組み、ふんぞり返ってみせる。

アレクにしては真面な意見だ。闇雲に外を出歩くよりも、かなり効率が良い。何故、今まで考え付かなかったのだろうか。と反省してしまっただ。

「……そうね。その方法があったわ」

「うん。良いと思う」

反対する理由も無いだろう。カイルとあんな会話をした後では帰りにくい、まあ笑って誤魔化せば良い。

一人で先の事を思案している間も、アレクとフレアは話を進めていく。

「それで、いつお城に帰るのかしら？」

「早い方が良いだろ。ミユを待つてる時間も勿体ねーからな。取り敢えず、アイツの熱が下がるまでは情報収集だな」

それは、まだしばらくの間はミユに会えない。と言う事を意味している。

昨日は無事にやり過ごせたのだろうか。危険な目には遭っていないだろうか。僅かな時間でも良いから、情報収集を始める前にミユの無事を確かめたい。

それらも兼ねて、今話し合った事をミユへ報告しに行く。そう言おうと思ひ、口を開きかけたのだが。

その前に、何やら扉の前に光の玉が現れたのだ。

一見すれば、ワープをする際の発光現象のようにも見える。光の強さ、色、そのどちらを取ってみてもワープと判断出来るだろう。

ただ、大きさが半端ではないのだ。通常、俺たちが放つ光の三倍程度の大きさはある。尋常ではない。

「……おい！ コレ、何なんだ？！」

「そんなの分かんないよ！」

突然の事態に慌てふためく俺たちを後目に、状況は刻々と進んでいく。

やがて淡くなった光の向こうに見えたものとは

焦茶の長い髪を持つ白い寝間着を纏った女の子と、肩幅以上の体長がある緑色の兎が一匹。見間違えようが無い。どう考えてみても、

「ミュっ！ アリアっ?!」

その二人だ。

ミュは城で寝込んでいる筈ではなかったのか。一体、何故そう考える前に身体が動いていた。椅子が倒れたのも気にせず彼女の元へと駆け寄る。

だが、辿り着くよりも早くアリアの体力が切れてしまった。頭を抱えてしゃがみ込むミュから手を放し、床へと崩れ落ちる。同時に光を放ちながら人へと姿を変えた。

「ミュ様を…… お願いします……」

息も絶え絶えに言葉を発する。

俺たちよりも使い魔の方が遙かに体力がある筈なのに。しかも、腕や頭には広範囲に渡って包帯を巻いているではないか。

俺たちが啞然と立ち尽くす一方、ミュは掠れた小さな声を絞り出す。

「アリ、ア……?」

あまりの弱々しさにはつと我に返ったが、彼女の瞳は恐怖に包まれていくばかりだ。咄嗟に伸ばした手が届く前に、その思いは爆発する。

「いやあーっ！」

「アリアは大丈夫だからっ！ 心配しないで！」

ミユを安心させなくては。それ一心で彼女を抱き締めた。

実際、アリアが大丈夫である確信なんて何処にも無い。こんなにも弱りきった使い魔を見るのなんて初めてなのだ。

しかし、俺の服を掴む手にも力が入らず、小刻みに震え続ける彼女に真実を伝えられるだろうか。アレクに抱えられながらも微動だにしないアリアを気にしながらも、必死にミユの冷え切った身体を擦る。

「まさか、魔法陣無しでアリアがミユをワープさせてきたのだったかっ！」

「えっ?! そんなの無茶よ！」

「それにこんなひでえ傷、昨日は無かったぞ?!」

この状況から判断すれば、アレクの推測が正しいのだろう。

だが、それが何だと言うのか。まずはミユたちの安全の確保を優先すべきだ。真実の追及なんて、後からいくらでも出来るのだから。

しかし、そんな思いが周りに伝わる筈も無かった。アレクはミユに向けて声を荒げる。

「おいつ、ミュ！ エメラルドで何があったんだ?!」

気が動転しているからなのだろうが、窓ガラスが揺れる程の音量だ。混乱の最中に居る彼女に対して投げつける声音ではない。

ミュは大きく肩を震わせ、必死に自身の手に力を込める。

「影が来て……揺れて……。怖……。かった……。っ」

何もこんな時に恐怖を呼び覚ますような真似をしなくても良いではないか。ミュはこんなにも怯え、震え、泣き出しそうになっていると言っているのに。

怒りでみるみると頭に血が上っていく。顔は熱いし、頭の血管は切れそうだ。

「そんなの後で良いじゃん！ 俺はミュ連れてくから、アレクはアリア運んで！」

「あ、ああ！」

うろたえるアレクに睨みを利かせ、一気にミュを持ち上げた。

だが、怒りはアレクに対してのものだけではない。俺自身に対しての苛立ちも混在している。

やはり昨日、エメラルドへ行っていれば良かったのだろうか。そうしていれば、ミュをこんな目に遭わせずに済んだのだろうか。俺のせいだ。

やり切れない思いを発散するかのようには扉を蹴り開け、廊下を駆け抜ける。それでも感情の高ぶりは収まらない。

ミュの部屋まで辿り着くと、そのドアまでもを力づくで足蹴にした。木が割れる音と共に姿を見せたベッドへ急ぎ、ゆっくりと彼女

の身体を横たえる。決して手を離したりはしない。俺の両手の中にある彼女の手は依然として小刻みに震えたままだ。

「もう大丈夫だから。ミュは俺が守る。ずっと傍に居るから」

「何処にも……行かないでね？」

ミュは布団の中から出したもう片方の手を俺の手に重ねる。その間も俺から視線を外す事は無かった。

彼女の心の傷はどれ程のものなのだろうか。癒してあげたいが、その術を知らないし、思い付かない。

笑顔の奥に歯痒さを閉じ込めて彼女の手を握り続けた。

可愛らしい筈のミュの顔は恐怖に歪み、呼吸も不規則になっていく。握り返される手にも段々と力が入り、俺の右手に継続的に鈍い痛みを与えている。

だが、こんな事では彼女の恐怖心は取り除けないのだろう。むしろ益々強くなっているのではないか。と懸念さえしてしまう。

添えるだけに止められていた左手を彼女の頭へ移動させ、怖がらせないように優しく撫でた。

「少し眠った方がよいよ。大丈夫。絶対、この手は離さないから」

せめて、夢の中でだけでも安らげる時を得てもらいたい。

慈しみの眼差しを向けているうちに、彼女の手からは力が抜けていく。瞼も徐々に閉じられて、表情も穏やかさを取り戻す。それなのに。

騒がしい足音が部屋の外に響き始めるのだ。それは確実にこちらへ近付いてくる。遂に、

「おい！ ラウドに話がある。ちょっとだけあつちに来れるか？」

足音の主であるアレクが顔を覗かせたのだ。いや、覗かせたころではない。遠慮がちに様子を窺いながらも、俺の返事を待たずに部屋の中へ侵入してきたのだ。とは言っても、数歩程度なのだが。しかし、問題はそこではない。話の内容だ。これではミュの不安を煽りかねないではないか。そんな心配はすぐに現実となる。

「やだ……。行かないでっ」

虚ろだった緑色の目はぱつちりと開き、その表情は再び硬くなってしまった。全身を縮めて俺を引き止める。

こんな彼女を置いて行けはしない。しかも、この小さな手は決して離さないと約束したのだ。

「此処じゃ駄目？ まだ、ミュを一人には出来ないよ」

「しょうがねーなー……」

『しょうがない』ではない。状況を考えれば分かるではないか。ミュには見えないように、後退りをしてドアへ身を預けるアレクに呆れ顔を向けた。

そんな俺を無視するかのように、アレクは哀愁に満ちた表情をミ

ユへと向ける。少し躊躇いながらも言葉を紡ぎ出していく。

「いや、アリアがエメラルドで地震が起きたって言うからよー、口
イに確認しに一回帰っただけだよー……」

先程はミユも『揺れた』とは言っていたが、まさか地震が起きて
いたとは。百年前と同じ災害ではないか。

生唾を飲み込んで、憂鬱そうに息を吐き出すアレクの次の言葉を
待つ。

「異変が起きたのは、エメラルドだけらしいぞ」

一瞬、俺の中の時間が止まった。聞き間違えたかと思った程だ。

果たして、そんな事があって良いのだろうか。怒りがじわじわと
沸き起こってくる。

「何でエメラルドだけ……?! そんなの、ミユを脅してるみたい
じゃん！」

俺が脅された時よりも質が悪い。ミユに危害を加えようという魂
胆が見え見えではないか。

許されざる事態なのに、それでもアレクは冷静さを失わない。考
えるような仕草を見せると、意外な事実を語り始めたのだ。

「それもあるけどよー、呪いを解けるかもしれねー爺さんがエメラ
ルドに住んでるらしい。そのせいかもしれねー」

信じられない内容に、怒りの中にも僅かな希望が灯る。

今度こそ聞き間違えただろうか。『呪いを解けるかもしれねーお
爺さんが居る』そう聞こえたのだが。

「それ……誰に聞いたの……？」

「あ？ アリアだぞ」

ミユの反応を見る限り、それは真実なのだろう。
複雑な心境に駆られている間にも、俺を置いて話は進んでいく。

「異変が起きたのは……エメラルドだけって……？ 皆も、探してくれたんだよね……？」

「わりい……。オレらは何も、見つけられなかったんだ……」

他に言い訳の仕様が無い。もしアレクではなく、俺に問われていたとしても言葉に詰まっていただろう。

震えるミユを前に、俯く事しか出来なかった。

そんな事をしていたせいで対応が遅れてしまった。

「エメラルドに……地震が起きたのは、私のせい……？ アリアが怪我したのだって……。やだ……。やだあ……っ」

気付いた時には、既にミユは非難する対象を自身へ変えていたのだ。硬く瞑った目尻には涙まで溜めているし、顔色も青ざめている。

「違う！ ミユのせいじゃないっ！ 悪いのは全部、黒の魔導師だから！ 自分を責めないで！」

何故、彼女が責任を感じなくてはならないのだろうか。彼女は加

害者ではなく、確実に被害者だ。

ミユの頭に当ててていた左手でその手の甲に触れてみれば、氷点下の外気に晒されたかのように冷たくなっている。両手で強く握っても彼女の手の震えは止まらない。

それなのに。」

「すぐに爺さんに会いに行かなきゃなんねーな……」

アレクがとんでもない事を言い出したのだ。

そんな事を出来る訳が無い。何を言っているのだろうか。

勢い良く振り向いてアレクを睨み付けた。

「そんなっ！ ミユがこんな状態なのに……！ 熱だっ下がったばかりじゃん！」

抱いた時の体温から考えると、ミユは平熱並みまでに回復したのだろう。それにしても、『すぐに』とは。心の傷を癒やす時間すら与えないつもりなのだろうか。

状況が状況だからと言っても、こんなにあんまりだ。

「私は……大丈夫……」

「でもっ！」

本人がそう答えたとしても、大丈夫である筈が無い。絶対に強がっている。無理ならば、はっきりとそう言ってやれば良いのだ。

ところが、彼女から返ってきた言葉は。

「このままでいる方が……怖いもん……」

儂げに微笑みながら、頬に長い睫毛の影を落とす。

言葉が胸に突き刺さる。

ミュは強がっているのではなく、そうせざるを得ないのだ。選択させているのは他の誰でもない。仲間である俺たち

「……ごめん！ ミュばかりに辛い思いさせて……！」

味わわせてしまった恐怖を代わりに背負う事も出来ない。今すぐに『死の恐怖』を取り除いてあげる事も出来ない。俺はなんて無力なのだろうか。

ミュの手を握ったままで俯き、唇を噛み締めた。それでも尚、自己嫌悪の念は心を、思考の全てを満たしていく。

「アリアの体調が戻ったら出発するからな。準備だけはしとけよ。何かあったら、オレとフレアはアリアの所に居るからよー、そこに来い」

背中に掛けられた声だって、曖昧にしか聞こえてこない。

「それとラウド」

なのに何故だろうか。そんな心境でも、自分の名前が耳に入ると反応してしまう。アレクは滅多に俺の事を名前では呼ばないから、余計に、だ。肩には力が入り、頭も僅かに上がる。

「オマエ、モノ壊したら直せよ」

言うなり魔法を使ったのだろう。背後から光を感じるし、木と木

のぶつかり合う小さな音もする。

その音と光が消えた途端、今度は正常なドアの閉まる音が鳴り響き、嫌味な程に存在感のある気配も消え去った。部屋が静まり返る。大きく溜め息を吐いてしまいたいが、そんな事は出来ない。目の前にはミュが居るのだ。自身の事だけでも精一杯な筈なのに、更に気を遣わせてしまう。

そうだ。俺が落ち込んでいては彼女の心も沈んでいくのだろう。無理にでも気丈に振る舞わなくては。

「アレクのせいで寝そびれちゃったね。もう眠れるよ」

先程と同じように頭を撫でて、笑みを向ける。すると、みるみるうちにミュの表情からも緊張が解けていく。

瞬く間に彼女の瞼は閉じられ、穏やかな寝息を立て始めた。

こんなにも小さな身体に、どれ程の痛みを抱え込んでいるのだろうか。恐らく、俺とは比べものにならない程の恐怖を与えられた筈だ。

「ホントに……ごめん……」

謝らずにはいられない。

呟きながら手を強く握る。夢の中に居るはずなのに、彼女も力を入れて握り返してくれた。

とそんな時、不意にドアが開いたのだ。廊下のひんやりとした空気が流れ込む。

「ミュ、眠ったのか？」

振り向いてみれば、そこには去っていった筈のアレクが佇んでいた。片手を垂直に壁へ突き、もう片方の手で前髪を掻き上げる。

「……まだ居たの？」

「オマエなあ……。んな言い方はねーだろ」

もう、そつとしておいて欲しい。アレクが居ると、どうせ碌な事なんて無いのだから。

大した返事もせずにミュへと向き直る。

「……オマエも休め。寝不足なんだろう？ ゆっくり出来るのも今のうちだろーしな」

少しは気を遣ってくれているのだろう。

しかし、眠る訳にはいかない。影がいつまた襲ってくるか分からないのだ。俺がミュを守らなくては。

「そんな事、出来る訳無いじゃん。ミュが狙われてるのに、放っておくなんて」

「エメラルドに地震を起こしたんだ。アイツも相当体力使っただろーし。すぐには襲ってこねーよ」

何処からそんな根拠が出てくるのだろうか。

用心するに越した事は無い。ずっと起きてミュの傍に居る。そう言おうとしたのだが。

「旅の途中で行き倒れるのと今休むのと、どっちがマシだと思ってるんだ？」

顔をしかめている間に、アレクが先に口を出したのだ。

流石に行き倒れは嫌だ。だからと言って、危険を冒したくはないしかし、『行き倒れた方が増した』と言ったとしても、頑固なアレクが引き下がるとは思えないのも事実だ。

こうなっては仕方が無い。

「……分かった。寝るよ」

眠った振りをしてこの場をやり過ごそう。そんなつもりで右手は彼女の手を取ったまま、左手を枕代わりに顔を伏せる。

ところが、俺も余程疲れが溜まっていたのだろうか。瞼を閉じた途端に睡魔に襲われ、闇の中に引き摺り込まれ

薄暗くて長い廊下に一人で佇んでいた。足元には紺の絨毯が敷かれ、天井には灯りの点いていない古臭いシャンデリアがぶら下がっている。それが凄く、凄く遠い。

間違い無い。此処は俺 僕の家だ。

こんな所で何をしているのだろうか。片手を頭に当てて

「うーん……」と考えてみる。

そうだ。喉が渴いたから、洗面所に向かっていている途中だったのだ。どうして忘れてしまったのだろう。

急がなくちゃ。と瞼を擦りながら小さな足を前に出していく。夜に一人で廊下に居るなんて怖いし、部屋の中に居るよりも寒いから、
ところが。

顔を上げると、ドアが薄く開いている部屋があったのだ。隙間から光が漏れ出している。

何だろう。誰か居るのかな。

好奇心一杯で、音を立てないように中をそつと覗く。そこに居たのは青みがかつた黒色の短い髪のを持つ男の人と、肩よりも長い銀色の髪のを揺らす女の人。僕のお父さんとお母さんだ。

二人とも悲しそうな顔をして、何か喋っている。

「貴方のお母様も仰っていたけれど、私も心配で……。貴方の家系も、私の家系もブロンドの髪の方なんて居ないでしょう？ あの子、丁度五歳だわ。前の魔導師様が亡くなったのが七年前。どう考えても」

「だからって、まだ決まった訳じゃないよ。同年代の子は沢山居る。ブロンドの髪だって、別に珍しくない」

お母さんの声なんて、今にも泣いてしまいそうなくらい震えていた。そんなお母さんの肩をお父さんが抱いて、優しく擦る。

何の話をしているのか、難しくても良く分からない。それでも何となく分かる事もある。

「でも、やっぱり考えてしまうのよ。いつか遠くない未来に、あの子が私の元を離れていってしまうんじゃないか、って。……そんなの嫌です！ 殆ど外へも出してもらえず、命を削ってまで働かされるなんて！ あの子が可哀想……！」

「私だって嫌だ。あの子は我がヴァルター家の大事な跡取り。国に……世界に渡したりはしない」

きつと僕の話をしているのだ。

でもどうして、こんなに悲しそうなのだろう。お母さんなんて、とうとう両手で顔を覆ってしまった。お父さんだって、空いている手で拳を作って辛そうに顔を歪めている。

僕が何かしてしまったのかな。今日の出来事、更に昨日、一昨日と思い出してみるけれど、原因になりそうな事は考え付かない。

それでも、僕のせいで二人が悲しむのなんて絶対に嫌だ。

「お母さん……。泣かないで？」

我慢出来ずに話し掛けてしまった。

それが良くなかったのだろうか。二人ともビックリしたように顔を上げて、僕を見たのだ。

「……ラウド！」

「こんな時間に……。どうしたの?!」

お母さんがお父さんの腕をすり抜けて、こちらに走ってくる。それが何故か怖くて、半歩くらい後退りしてしまった。

「ぼく、お水がのみたくて……」

「まあ。そうだったのね」

答えを聞くと、一気に二人の顔に笑みが戻っていく。すぐに柔らかそうで大きな両手が僕へと伸びてきた。身体がふわりと浮いて、そのまま暖かな体温に包まれる。

「お母さんが連れて行ってあげるわ」

やっと、いつものお母さんに戻ってくれた。ほっとしたのも束の間、僕を抱いている手に力が入る。少し苦しいくらいだ。

「お母さん……？」

「何処にも……行かないでね……」

風が吹けば消えてしまいそうな声で囁く。子供心にも、これ以上は聞いてはいけない。そんな気持ちにさせられてしまった。

硬く心地良い足音を聞きながら両親の居た部屋を後にする。

垂れ気味の優しい、それでいて哀愁の漂う銀色の瞳に見送られて

「ん……」

薄暗かった景色が段々と明るさを増していく。それでも視界はぼやけていて、何処に居るのかいまいち分からない。

何やら、女の人の声は聞こえたのだが。頬に暖かな温もりを感じながら、視線を上へと持っていく。

緑色の物が二つ目に入った。ダイヤの草原を思わせる、愛しくて懐かしい色

「ミユ……?」

そう、彼女の瞳だ。見間違える筈が無い。何度か瞬きをするうちに、視界も明確さを取り戻していく。

慈しみの中にも、切なさを感じさせる表情だ。まるで、夢の中で見た両親のような。

その表情を保ちながら、彼女は俺の下瞼の線に沿って当てていた親指を這わせる。こんな動作をしよう事は。

「うわっ！俺、泣いてた?!」

これしか考えられない。

俺は今まで、ミユに泣き顔をまじまじと見られていたのだろうか。あまりに恥ずかし過ぎる。

両手で頬を、いや、顔全体を力ずくで擦ってみる。しかし、涙は拭いても羞恥心までは拭い切れない。顔だけではなく、耳も、首までもが真っ赤になっているのだろうか。

その筈なのだが。ミユはそれを指摘する事無く、部屋の中心に向かって指を指す。

「フレアがご飯持ってきてくれたから、食べよう?」

恐らく彼女は俺に気を遣ってくれているのだろう。喋り方は普段と同じあどけないものなのだが、笑顔が硬いのだ。

一番気を遣わせたくない人に、こんな思いをさせてしまうとは。鈍く痛む胸を気にしながら、ミユの頭をそつと撫でてみる。

「そうだね」

心の中では『ごめんね』と謝りながら、彼女に微笑み返した。

ミユの言った通り、部屋のドアとさほど変わらない大きさのテーブルの上には盛大なフルコース料理が並んでいた。これをフレアが持ってきたと言うから心配になったのだが、ミユの話だとアレクが作ったらしい。

フレアの料理には一度痛い思いをさせられている。俺が初めて会議に参加した日、歓迎会と称してフレアの特製シチューを無理やり食べさせられたのだが。お陰でその日一日は舌が麻痺してしまい、味が全く分からなくなってしまうのだ。

と、それはともかく。

今日の料理は異常だ。何故、こんなにも胃を酷使しそうな食べ物ばかりなのだろうか。よく見てみれば肉類、揚げ物、グラタン、チーズフォンデュ。どれもアレクの好きそうな物だ。

唯一、気を利かせてくれたのだろう。俺の目の前で、顔程の大きさの皿に乗った山盛りのポテトサラダが『食べる』と言わんばかりに待ち構えている。

昨日は家事を放棄したから、罪滅ぼしのつもりなのだろうか。

「病み上がりで、しかも怖い目に遭ったばかりなのに、こんなに食べられる訳無いよね。アレク、何考えてるんだろう……」

するにしても、時と場合を考えて欲しい。

見ているだけで満腹になりそうな料理に呆れる一方で、ミユはナイフとフォークを手に取って、俺に向かって無邪気に笑ってみせる。

「折角作ってくれたから、頑張って食べるよ〜！ お腹空いてるし〜」

いや、彼女が頑張る事は無いのだ。残したとしても、アレクに文句は言わせない。

「無理しなくて良いからね」

「うん！」

心配する俺に、ミユは更に眩い程の笑みを返してくれた。心に暖かな灯りが点る。

彼女がステーキに手を伸ばすのを眺めつつ、俺も早速ポテトサラダを口に運んだ。まったりとした、この絶妙な味わいが堪らない。流石は俺たちの中で一番料理の上手いアレクが作っただけの事はある。

俺が食事を楽しむ一方で、ミユはステーキを切る事も難しそうだ。手が震え、そのせいでナイフと皿がぶつかり合う。甲高い音が鳴る度に、彼女の頬は桜色から桃色、薔薇色へと紅潮していく。高熱を繰り返してしまったのではないかと心配してしまう程だ。

「やっぱり、食事なんて無理だね。まだ寝てた方が」

「ちっ、違うのっ！ これはっ……」

体調が思わしくないのなら。そう考えての事だったのだが、ミユに思い切り否定されてしまった。ついでに、ようやく切り取ったステーキの塊を口へと放り込む。

もしこれが体調の悪化ではなく、他に原因があるのだとしたら。一つしか考え付かない。

「そっか、分かった！ ミユは可愛いなあ」

「……ばびびっべぶぼっ?!」

食事中のリスのように頬を膨らませている彼女に、思わず満面の笑みが零れた。

きつと照れているのだ。頬の色なんて、薔薇色を通り越して唐紅色にまで変わっている。いや、顔全体と言った方が正しいだろうか。瞳も潤んでいるし、可愛過ぎだ。

「ちゃんと食べ物飲み込んでから喋ろうね？」

それでも、彼女の言った言葉はきちんと聞き取りたい。

同意を求めるようにして首を傾げ、にっこりと笑ってみせたのだが。喋る事を妨害する全ての物を飲み込んだ彼女の口から発せられたのは、

「ラウドのバカ〜っ……」

衝撃的な一言だった。

「バカって……」

思った事を口にしたただけなのに。いくら何でも馬鹿は無いと思うのだが。

落胆を隠し切れず、一人肩を落とした。

しかめっ面のまま、ミユはひたすらナイフとフォークを動かしてステーキを平らげていく。俺もポテトサラダを口に入れたが、あまり美味しくない。こんな状況、もう嫌だ。

「……ミユっ」

堪らずに声をかけたのだが、不機嫌そうな表情は変わらない。一体、どうすれば良いのだろうか。迷った挙げ句、俺が取った行動は、

「ステーキばかりじゃなくて、野菜も食べなくちゃ」

好物を彼女に分け与える、というものだった。

口を付けていないスプーンで『これでもか』という程すくい上げ、彼女の目の前に差し出す。

「これ、何〜？」

「ポテトサラダ」

細かく刻んだ生野菜とチーズを混ぜ込んだ黄緑色のマッシュポテト、何処からどう見てもポテトサラダだ。それを彼女は物珍しそうに凝視すると、指で一すくいして口の中へと入れた。

「ホントだ！ 不思議〜！」

言いながら、目を細めて無邪気に笑う。凄く嬉しそうな反応なのだが、何が不思議なのか良く分からない。

小首を傾げて考えていると、ミユは

「私が知ってるポテトサラダは白いの！」と教えてくれた。改めて、

彼女は異世界人なのだ。と思い知らされる。

そんな事をしているうちに、いつの間にか和やかな雰囲気へと変わっていた。会話が進むと、自然と食も進む。不思議なものだ。

俺にも負けない勢いでミユも口を動かさし、食べ物も片付けていく。量で言えば、流石に俺の方が勝っているのだが。

その勢いは最後のホールケーキへと移っても衰える事は無い。綺麗に半分に分けると一方を俺の目の前に、もう一方を自身の目の前に運ぶ。

「まだ食べるの……？ 大丈夫……？」

「大丈夫っ」

言い切ると、彼女は早速ケーキを口一杯に頬張る。

どう見ても大丈夫ではない。無理をしているようにしか見えないのだが。

やはり心配で、何とか止めるように説得を試みる。それなのに。

俺がいくら

「止めた方が良い」とか、

「お腹が破裂する」などと言っても、彼女は全く聞く耳を持たないのだ。それどころか、益々ペースは上がっていく。

もう何を言っても無駄だろう。と言うか、逆効果かもしれない。

諦め半分でこっそりと溜め息を吐き、ケーキの崩れていく様を見届けた。

予想通り、ケーキを全て食べてしまったミユは腹を抱えて呻き声

を上げ始める。

「食べ過ぎた〜……」

「だから言ったのに……」

ケーキを食べていなければ、こうはならなかった筈なのに。

愚痴を零しながらも彼女を抱えてベッドまで運ぶ。今朝抱き上げた時よりも、かなり体重は増えている。腹部を見てみれば妊婦のようだ。言葉も出ない。

「うう……」

「大丈夫？」

とは言え、苦しそうな彼女の顔を見ると心配せずにはいられない。何より、彼女は病み上がりなのだ。

なるべく優しく布団を被せ、艶やかな焦茶の髪に触れる。その流れに沿って、何度か手を動かした。そんな時だ。

「今日は……何処にも行かないで……」

小さくはあるが、ミユの心からの叫びなのだろう。聞いただけで胸が締め付けられるような、そんな感覚に陥る。

「勿論だよ！ ミユを一人になんて出来ないし」

元より、俺の方から此処で夜を明かす事を許してもらうつもりだった。彼女を危険に晒すような、そんな真似は絶対に出来ない。

意志を示すためにも、ベッドの傍に置いてある椅子へ腰を下ろし

た。

しかし、彼女の表情は更に不安さを増していく。

「風邪、引かないでね？」

「大丈夫だよ！ 俺、風邪引いた事無いし」

「でも」

「じゃあさ、ミユのコート借りるよ。勝手にクローゼット開けて良い？」

風邪を引いた事が無いのは事実だ。しかしそれでは、彼女は納得してくれないのだろう。

ミユが微かに頷いたのを確認すると、クローゼットへと向かった。扉を開けて、掛けてある衣服の中から一番暖かそうな緑色のコートを運び、すぐに椅子へと舞い戻る。彼女の精神的な負担は出来る限り減らしてあげたい。

実際にコートを羽織ってみると、腕の丈は短いものの、身体と腿は隅無く覆ってくれた。これなら寝冷えはしないだろう。

ミユの片手を取り、しっかりと握り締める。もう片方の手で彼女の頭を撫でながら。

「おやすみ」

身体を休めるのなら真っ暗な方が良い。と部屋の灯りを消したのだが。指を鳴らした途端、彼女の手が力が入められたのだ。

暗闇が怖いのだろうか。いや、そうに違いない。カノンが呪いをかけられたのは光の届かない闇の中だったのだから。

俺がずっと付いているから。大丈夫。心配しないで。ミユの寝息

が聞こえ始めるまで、心の中で何度も彼女に語り掛けた。

第20章 希望へ

一体、何が起きたのだろうか。

身体に衝撃が走り、闇の中から現実へと引き戻される。

瞼を開いてみれば、部屋は既に明るくなっていた。霞のかかる視界の先には焦茶の長い髪を持つ人物　ミュの姿がある。辺りを見回してみれば、どうやら他にも人が居るようだ。

話し声も聞こえてくるのだが。

「も　良い　？」

「はい！　お掛け　、　ありませ　。　エメラルド

帰り　」

寝呆けているせいか、はっきりと聞き取る事が出来ない。両耳に指を突っ込んでいるかのようだ。

それでも、大事な話をしているのだろう。と言う事は伝わってくる。

しっかりしなくては。頭の中を覚醒させるために首を何度か横へ振った。強く瞬きもしてみる。

次の瞬間、

「そーいう事だからよー、今日、出発するからな」

これはアレクの声だ。

発生源を目で辿ってみると、そこには確かにアレクが居た。部屋の出口の傍に寄り掛かり、腕を組んでこちらを見ている。眉間には細い皺まで寄っている。

つい先程は『出発する』と言っていた。恐らく『ミユの呪いを解く旅に』だろう。それならアリアは回復したのだろうか。

少し頭を捻ってみたものの、考えるまでも無かった。俺の隣にはアリアが佇んでいたのだから。ベッドの中に居るミユの片手を握り締めている。

窓の傍にはフレアの姿も確認する事が出来た。誰もが神妙な面持ちで口をつくむ。それ以上話を繋ぐことはしない。

皆の気持ちは分かる。この旅には俺たちの未来や希望が全て係っているのだから。失敗でもすれば思いは粉々に潰されてしまうだろう。

だからと言って、過剰に心配しても仕方が無い。こんな時だからこそ、笑顔でいなくてはいけないと思うのだ。

昨夜からずっと繋いでいたミユの右手に自身のもう片方の手も添えて、彼女に自ら微笑んでみる。

「大丈夫だから。信じよう？」

絶対に呪いは解ける。犠牲なんて出さずに済む筈だ。

自分にも言い聞かせるかのように語り掛けていた。そんな俺に、彼女も頷きながら微笑み返してくれる。それなのに。

アレクは折角和んだ雰囲気ぶち壊すような発言を始めたのだ。

「オマエら、どーせ準備してねーだろ？ 一時間だけ待っててやるからよー、それまでに何とかしろ」

この上から目線は何なのだろうか。よりもよって、人を小馬鹿にするような笑みまで浮かべて。

何より、昨日のうちに準備が出来なかったのはアレクのせいでは

ないか。訳が分からない。

考えれば考える程に怒りは浸透していく。

「昨日、あんなにご飯食べさせといて、そういう事言う?! 動けなくなるの当たり前じゃん!」

言われて当たり前前の事を言っただけだ。

しかし、何故かアレクまでもが怒りを露わにする。壁から身体を離し、拳まで作っているではないか。

「オマエ、作ってもらって文句言うのか?! 何時間かかったと思っただっ?!」

「そんなのアレクの勝手じゃん!」

「何ー!?!」

俺が文句を言われる筋合いは無い。むしろ、残さずに食べた事を褒めて欲しい程だ。

だが、俺の思いはフレアには伝わらなかったのだろう。アレクを睨むのと同じ目つきで俺をも貫く。

「はいはい。そんなんじゃ、すぐに時間無くなるわよ? アレクもラウドも此処から出てって」

何故、アレクと同等の扱いを受けなくてはならないのだろうか。反抗はしたいのだが、相手はフレアだ。後が怖い。

そんな俺を余所に、アレクはフレアに不満をぶつけ始める。

「オレは準備終わってるぞっ?! 何でコイツと一緒に出てかなくちやいけねーんだっ?!」

「……あら。ミュの着替えとか、女の子の持ち物とか見たいのかしらっ。」

「おおっ?! そんなんじゃねーよ!」

蔑みの言葉を吐き出すフレアの顔は先程アレクが俺に向けていたような表情だ。鼻で笑われ、アレクは慌てふためく。

それはいい気味なのだが。ミュを覗き見するとも取れる発言は聞き捨てならない。お陰でミュも恥ずかしがってしまったではないか。

「……アレクの変態」

俺が彼女の傍に居る限り、そんな事は絶対に許さない。男として最低の行為だ。

思い切り目を細めてアレクに軽蔑の眼差しを向けた。

「何ー!? 違っつて言っただろっ?!」

「もう、だから二人ともバカなのよ! 今すぐ出てっつて!」

不意に予想外の方向から飛び出した荒い声に、思わず肩がびくつく。

昨日に引き続き、また馬鹿と言われた。何故、俺が。そう思う間も無くフレアは大きな溜め息を吐くと、殺気を放ちながらアレクに近付く。そのまま太い腕を鷲掴みにし、廊下へと放り出してしまった。

か細い腕の何処にそんな力があるのだろうか。呆然とその光景を眺めていたのだが。そんな事をしている場合ではなかった。

なんと、フレアは俺の方にまでやってきたのだ。わななく肩と拳、靡く黒髪、怒りに震える赤い瞳、禍々しいオーラ。それらは正しく鬼だ。

恐怖で固まってしまった俺の腕を掴むと、力尽くで出口へと引き摺る。椅子を倒しても気に留めない。

「ちよっ……自分で歩けるからっ！」

「……うるさいわ」

口を出してみれば、凄みを利かせて返される。

決死の抵抗も虚しく、とうとう部屋と廊下の境界に辿り着いてしまった。途端に身体の支えを失う。

「うわぁっ!」

尻に衝撃を受けると共に、ドアから耳をつんざくような轟音が放たれた。

「オマエのせいで追い出されたじゃねーか……」

「……アレクのせいじゃん」

尻餅をついたまま、ドアをひたすら見詰める。

今のは何だったのだろうか。まだ心臓は信じられない程に強く鼓

動している。精神的な衝撃もかなりのものだ。

やはりフレアを怒らせてはいけない。と改めて痛感させられる。

一方、アレクはこんな事には慣れているのだろうか。立ち直るのは俺よりも早かった。

「……………くそっ！ 行くぞ！」

乱暴な声を吐き捨てる。そちらを見上げてみれば、苦虫を噛み潰したような顔をしたアレクが廊下の先を睨み付けていた。

「何処にさ」

「オマエの部屋に決まってるんだろ！」

言いながら、俺の腕を掴んで上へと引き上げる。手加減無しだ。しかし、頭の中はそれどころではない。

「何でアレクまで?!」

「準備手伝ってやるって言ってんだ」

アレクが付いてくれば『あの話』を持ち出してくるに決まっている。喧嘩になるだけだと言うのに。もう、考えるだけでうんざりだ。

「……………いらないし!」

「喋ってねーで行くぞ!」

俺の話聞く気はあるのだろうか。たとえ愚痴ったとしても、効果は全く無いだろう。それならば。

鬱陶しい手を振り払おうと試みる。勢い良く腕を振り回してみたのだが、力の勝るアレクにかなう筈が無かった。顔色一つ変えはしない。

結局苦勞は報われず、フレアにされたのと同じように、俺の部屋へと向かって廊下を為すがままに引き摺られる。

なんて無様な姿だろうか。

部屋まで到着すると、ベッドがある方向へ物のように投げ捨てられた。もう黙ってはいられない。

「何す……ぶっ！」

「さっさと着替えろ」

文句を言おうと振り向いてみれば、今度は顔目掛けて旅用の真っ白な服を投げ付けてくる。一体何なのだろうか。

怒りで頭には血が上り、蒸気が吹き出しそうだ。拳だつて、血が滲むのではないかという程に握り締める。

それなのに、アレクは完全にお構い無し。といった様子だ。勝手に人のクローゼットを漁り、真っ白な衣服だけを適当に丸めて麻袋に詰め込んでいく。

「目的地はクレストアツて村だ。エメラルド王国から北に三日歩けば着く。オマエも一応覚えとけ」

こちらを見ようとせせず、しらっと言って退ける。これでは怒りに震えている俺の方が馬鹿みたいではないか。

大きく溜め息を吐いて自身を宥めるものの、着替える気にはなれなかった。アレクの目の前なのだ。不用意に短剣を手元から離してもすれば奪われる事は確實、隙は見せられない。

「オマエ、何してんだ？ 着替えろって言ってるんだろ」

そんな俺の警戒心を知ってか知らずか、アレクは怪訝とも、呆れとも取れる表情で手を止める。

何をしているのかと聞かれても、別に何もしていない。答える必要も無いだろう。と口をへの字に曲げた。

それを見ると、アレクは頭を掻きながら細く溜め息を吐く。

「その物騒なもん、取られるとでも思ってたのか？」

凶星だ。心臓が小さく飛び跳ね、眉尻も僅かに動く。

その微妙な変化に気付いたのだろう。アレクは更に口を開いた。

「そこまで捻くれてねーよ。その話はしばらくお預けだ。旅が失敗するまでな」

言い切ると、再び手を動かし始める。

本当に信用しても良いのだろうか。疑わしい所は確かにあるが、いつまでもこうしていても時間を無駄にするばかりだ。

仕方無く、俺も旅の準備に取り掛かる。着替えを済ませ、必要な物をかき集めた。とは言っても食料や食器、寝具などはアレクが管理を担当しているから、俺の持ち物なんて本当に衣類や洗面道具くらいなのだ。

互いにそれ以上は話そうとせず、無言のままに作業は進んだ。

アレクが真面目だと、物事はかなり順調に進む。準備を終えて再びミユの部屋の前に辿り着いた時にはまだ時間に余裕があったように思う。

それなのに、アレクは確認もせずにドアを開け放ち、反対側のノブを壁に打ち付けた。何かが破裂したのではないかと言う程の音量だ。

「おいっ！ オマエら、終わったか？！」

「今、終わったわよ」

そんな不作法極まり無い行為にも、フレアは何処か満足そうな笑みを浮かべる。アリアも頭に巻いた包帯を避けながら額に浮いた汗を拭う。二人の前には腰の高さ程にまで膨らんだまん丸の麻袋が置かれていた。

この中身全てがミユの持ち物なのだろうか。三日程度の旅なのに物凄い量だ。俺の倍はある。

荷物に目を奪われながらも、ふと異変に気付く。

ミユの様子がおかしい。ベッドの上の布団に顔を埋めたまま、身動き一つしない。

「……ミユ？ どうしたの？」

俺が居ない間に何かあったのではないだろうか。不安に駆られながらも彼女に近付き、そつと頭に触れた。

すると、なんと。振り返った彼女の顔は林檎のように真っ赤に紅潮していたのだ。瞳には涙まで溜めている。眉も顰められていて、『助けて』と言わんばかりの表情ではないか。

「えっ?! どうしたの?! フレアに苛められた?!」

原因と言えば、それくらいしか思い付かない。そうでなければ、アリアに怒られたか、だ。

しかし、フレアは怪訝そうに目を細めるばかりだ。

「失礼ね。相談なら乗ってあげるって言っただけよ?」

腰に両手を当て、溜め息まで吐いてみせる。

そうは言われても納得出来る筈が無い。

「じゃあさ! 何でミュ、泣きそうになってるの?!」

「あら。ミュ、答えても良いかしら?」

苛立つ俺とは対照的に、フレアはミュに柔らかな笑みを向ける。

何故、彼女に許可を求める必要があるのだろうか。原因を教えると言っているだけなのに。

そう思ったのだが、フレアの問い掛けにミュは硬直してしまった。頬に差す赤も色濃くなっていく。そして、

「……駄目〜っ!」

瞼を瞑り、力の限りに叫ぶ。

フレアかアリアのせいならば、俺が叱りつけてあげるのに。言えない理由でもあるのだろうか。首を傾げて思案に暮れるばかりだ。そんな時に。

「皆様、楽しそうで良いですね」

「……そーか？」

アリアとアレクの惚けた会話が聞こえてきたのだ。
これの何処が楽しそうなのだろうか。こちらもちちらで訳が分からない。

俺が混乱の真っ只中に居る中、アリアは丁寧に頭を下げる。

「それでは、私は帰ります。皆様、頑張ってください」

掴みどころの無い、あどけない笑顔だ。しかし、その瞳には筋の通った心の強さが見て取れた。

アリアは神に告げられた『あの方法』の事を知らない。旅が失敗すればミュウが殺されると思っている。それを危惧しているのだろう。そう思うと胸が締め付けられ、鈍い痛みが走る。

ミュウもいたたまれなくなったのか、顔を伏せながらアリアに駆け寄り、小さな手で縋り付いた。

「私、今度は……約束守るから」

「えっ？ 何ですか？」

消えそうな程に小さいミュウの呟きに、アリアは小首を傾げる。

「ちゃんと、エメラルドに帰るから……」

「……当たり前ですよ！ お待ちしています」

こんな二人のやり取りを見ると、数日前のカイルとの会話を思い出してしまう。

カイルは今、何をしているのだろうか。俺の帰りを待っているのだろうか。此処からではサファイアが見える筈も無いのに、何気なく視線を窓の方へと移動させていた。その時、光り輝く何かが目に飛び込んできたのだ。

それは細長くて、ボタンがいくつか付いた複雑な構造の銀色の管。恐らく笛だ。机の上に、無造作に置かれている。

先日聴こえた笛の音はミュのものだった。とアレクは言っていたが、これの事だろうか。

機会があればもう一度聴きたい。旅の途中でも、旅が終わった後でも。そんな欲求を抑えきれず、気付いた時には窓際へと歩み寄って笛を手にしていた。魔法で手の平に収まる大きさまで縮めると、壊してしまわないように、丁寧に懐へと収める。

丁度その時、見計らったかのようにタイミング良く背後から息を吸い込む小さな音が聞こえてきた。

「……………じゃ、オレらも行くぞ。エメラルドのあの場所に集合だから」

そつだ。感傷に浸ってばかりもられない。

哀愁の漂うアレクの言葉を背に受け、しっかりしなくては。と踵を返す。刹那、部屋にはミュ以外、既に誰も居なくなっていた。なんと行動が早い事か。

置き去りにされたミュの荷物を笛と同じように魔法で小さくし、フレアのせいで倒された椅子の横に落ちている緑色のコートも手に取る。

健気に嗚咽を堪える彼女の元へ辿り着くと、空いている手で涙に

濡れる頬に触れた。

「はい。これ、荷物。それにコートも。また熱出したら大変だからね」

言いながら、昨日は彼女がそうしてくれたように親指を下瞼に沿って這わせ、溢れ出す涙を払う。そのまま手の平は離さずに髪へと移動させ、慈しむように撫でた。

ミユの気持ちは痛い程分かる。本当ならば大声を上げて泣きたい筈だ。

しかし、俺がいくら言葉を投げ掛けたとしても、何の慰めにもならないのだろう。

どうしようもなく歯痒い。が、仕方の無い事だ。荷物を彼女の手の中に預け、コートも小さく震える背中へと回した。

「行けそう？」

俺の問いに、彼女は俯きながら小さく頷く。すると間を置かず、ごく間近でワープをする光を感じたのだ。

そっと頭を撫で、俺も彼女に遅れを取らないように魔法を使った。

エメラルドの集合場所と言えば、此処しか無い。

ミユの瞳と同じ色　新緑の葉がひしめく森が目前に永遠と続いている。所々に空間も出来上がっているが、それは先日の地震で受けた傷跡だろう。視界の中心には枯れ葉が重なる赤茶けた細長い道が蛇行している。

これが俺たちの希望へ続く道

この道の先に何が待っているのか、本当のところは分からない。しかし、前に進まなければ何も始まらない。ただ信じるのみ、だ。心の奥底に広がる疑念を封じ込め、エメラルド王国の城壁に背を向けて行く先を見据える。左隣には手を繋ぎ合ったミュ、更に隣にはフレア、アレクと並んでいる。

やはり、恐怖は拭えないのだろう。小刻みに震えるミュの手に気付き、『大丈夫だよ』と言う意味も込めて微笑み掛けてみる。そんな俺に、彼女も小さく頷き返してくれた。

「誰が掛け声掛けるの？」

「あ？ そーだなー。やっぱ、ミュじゃねーか？」

不意に遠くで会話が始まる。

そう言えば、百年前の旅もこんな風に始まったのだ。確か、あの時の掛け声も彼女が発したと思うのだが。

昔へと思いを馳せているうちに、ミュは準備を整えたようだ。大きく息を吸い込む。

「じゃ、いくよ？ せーのっー！」

「しゅっぱーっっー！」

揃った掛け声と同じく、全員で最初の一步を踏み締めた。

ミュを庇うようにアレクが大股で前へと出て、フレアもそれに従う。彼女の隣は勿論俺だ。

数回枯れ葉を踏んだ時、ふと左手に力の抵抗を感じた。

「ミュ？」

彼女の足が止まりかけたのだ。後ろを振り返って崩れた城壁、いや、もっと遠くを見詰めている。

先程、あんな事があつたばかりなのだ。アリアの事でも考えているのだろうか。

俺も城に隣接する塔を見据え、心の中で『必ずミュを無事にエメラルドへ送り帰すから』そう誓いを立てた。

森の入口では日光を感じていられたのだが、地を踏み締める毎に光は葉に遮られていく。夜闇とまではいかなくとも、カーテンを締め切った部屋よりも薄暗い。

度々エメラルドには来ていたが、旅とは異なる状況だった。森の中に入る事はまず無かったのだ。

雪原ばかりのサファイアとは物凄く環境が違う。見た事の無い植物も生息している。などと考えながら、景色に目を奪われていると

「あつ！ この花、可愛い〜！」

突如ミュが俺の手を離し、道を逸れてしまったのだ。鞆のように跳ねて数歩程度走ると、こちらに背を向けてしゃがみ込む。

そんな彼女の行動に気付いたのだろう。アレクは目を吊り上げて声を荒げる。

「オマエ、何やってるんだ？！ 置いてくぞ？！」

「ひゃっ！」

肩をびくつかせ、咄嗟に俺の元へ舞い戻る彼女がまた可愛らしい。

まるで子犬のような反応だ。

先程までミュが見詰めていた場所には、釣り鐘に似た形状の淡く光る白い花が群生していた。これなら彼女がこんな行動を取ってもおかしくはない。そう思っていたのだが。

数分も経たずに新しい物を見つけると、それ目掛けて走り寄る。いくらミュだとは言っても旅の途中、これは遊びではないのだ。彼女も充分過ぎる程に理解している。にも拘わらず、何度も繰り返すとは。

十回目くらいだろうか。再び離れてしまった彼女に目を向け、訝っている。

「いい加減にしろよ?!」

煮えたぎる怒りを抑え切れなくなったのだろう。全身で怒りを露わにし、アレクが彼女を子供に対してするように抱え上げた。ばたつく小さな足を諸ともせず、地に踏み鳴らす。終着地は俺の目前だ。

「オマエ、ミュ捕まえとけ！」

「しょうがないなあ……」

とは言ってみるものの、口元は緩んでいるのだろう。頬を膨らませて、彼女の手を改めて握り締め、横へと引き寄せた。

気持ち新たに、止まっていた足を前へ動かす。恐らく、ミュはわざと明るく振る舞っていたのだろう。そう考えると行動せずにはいらなかった。

茂みから顔を覗かせた青白い光を放つ赤い葉を指差してみる。

「あつ！ あそこにも何かあるよ？」

「ホントだ〜っ！ 行こうっ？」

そのまま二人で駆け寄り、しゃがみ込んだ瞬間、

「オマエら……やる気あるのかっ？！ 無いなら帰れーっ！」

アレクの絶叫が森中に木霊した。

歩いても、歩いても腹の虫は収まらない。

あんなに怒鳴る事も無いではないか。少しはミュの気持ちを察して欲しいものだ。

「アレクもあんなに怒鳴らなくても良いのにね」

落ち込んでしまったのだろうか。歩く速さだって、出発した頃と比べると半減している。話し掛けてみても返事をしてくれない。

ミュがそんな状態なのに、アレクはお構い無しだ。振り返りもせず自分のペースで進み、フレアとの会話を楽しんでいる。

「ホント、アレクって無神経……」

遠ざかっていく背に悪態を吐いてみたところで、その勢いは衰えない。

「ミュもそう思っじゃない？」

悔しくて彼女に同意を求めてみた。しかし無反応だ。

俺だって彼女との会話を楽しみたいのに。益々悔しさが込み上げてくる。

「どうしたの？ さっきから何も喋ってないけど」

耐え切れず、思いを言葉として吐き出してしまった。ついでに顔も覗き込んでみる。

しかし、ミユは俺に見向きもしない。生気の無い表情で、虚ろにこう言ったのだ。

「疲れた〜……」

溜め息まで吐いてみせ、額と赤らめた頬を拭う。

そう。彼女は落ち込んでいるのではなく、体力を消耗していたのだ。しかも喋れなくなる程にまで。

「大丈夫？」と声を掛けようと思ったのだが、そうはならなかった。口を開くよりも先にアレクとフレアが振り返ったのだから。

「オマエ、疲れんの早過ぎるぞ?!」

「だって、こんなの慣れてないんだもん……。道なんて舗装されていないし、小石だって落ちてるし……」

言いながら、ミユは目を横に流して頬を膨らませる。

アレクは俺の愚痴には反応しなくせに、他人の失敗には反応出来るのか。都合の良い耳だ。

アレクとフレアがミユに呆れ顔を向ける一方、俺は前方に居る二人に対して顔をしかめた。

とにかくミュを休ませなくては。状態の悪い道はこれからも続くだろう。何より、病み上がりである身体に負担は掛けさせられない。

「休憩した方が良いよね」

何事も無かったかのように正面に向き直り、更に枯れ葉を蹴散らすアレクに一言言ってやろうと口を開く。同時に足も止める。

ところが、声になる前にミュが俺の服を両手で掴んだのだ。皺が残るのではないかという程きつく握り、揺れる瞳で俺を見上げる。

「……大丈夫っ」

そんなにも健気に強がるなんて狡いではないか。だが、ここで認めては駄目だ。

溜め息を吐きつつ、何とか気持ちを切り替える。此処ぞとばかりに

「でも、また倒れたりしたら大変だよ？ 何だったら俺が抱っこしても」

「オマエらっ！ イチャイチャするな！」

思い切った発言をしようとしたのに、何なのだろうか。アレクが大袈裟に指まで差して振り返ったのだ。それに釣られてフレアまでもが振り返る。

しかし、そんな事をアレクに言われる筋合いは無い。

「アレクだって、フレアとイチャイチャしてるじゃん！」

「してねーよ！」

「手繋いだり、楽しそうに話してさ！」

「オマエもしてただろ！」

俺は『していた』のではなく、『したかった』のだ。それなのに、折角のチャンスを無駄にされて。

振り絞った勇気を返して欲しい。

「出来る訳無いじゃん！ 二人で俺たちの事無視して、どんどん先に進んでさー！」

「あら。でもそれ、あたしたちのせいじゃないわ。ミュのせいよ？」

皮肉の混ざったフレアの笑みと共に、二人の視線がミュへと注がれる。

「ミュっ！ オマエ、聞いてるのかつ？！ オマエらがはしゃぎ過ぎてたからじゃねーか！ 反省しろっ！」

「自業自得ね」

やはり、彼女の心中を無視した発言だ。遂に苛々が頂点に達し、声を荒げてやろうと思ったのだが。肝心のミュは口をぼかんと開けて、小首を傾げるだけなのだ。

本当に今までの話を聞いていなかったのだろうか。一気に脱力してしまうではないか。

拍子遅れで

「は〜い……」と返事をするミュの頭を撫でてあげる事しか出来なくなってしまうた。

まあ、それがミュウの憎めない所であり、可愛い所でもあるのだが。

結局、ミュウが悪い。と言う結論に至り、休憩は先延ばしになってしまった。それでも彼女を放っておく訳にもいかない。懲りずに

「抱っこする」と提案してみたのだが、今度はミュウに拒絶されてしまった。顔を赤らめていたから、照れ隠しなのだろう。と予測出来るものの、強い衝撃を受けた事には変わらない。

落胆を隠しきれず、俺からの会話も途切れがちになってから数時間経っているだろう。ふとアレクが足を止めたのだ。

「おっ！ あそこに川があるな！ 休憩するぞ！」

「やった〜！」

指を差された方を見ると、小川ではあるが、確かに草木の間からせせらぎが顔を覗かせている。此処からでもその水の透明さと美しさを感じられるが、ミュウの笑顔の眩しさには敵わない。

「ミュウ、あっちに行って」

「おい！ オマエ、ちょっと付き合え！」

「…………えっ?!」

ミュウを誘おうと手を伸ばしたのだが、気付いた時には空を掴んで

いた。いつの間にか近寄ってきたアレクが背後から俺の首に腕を回し、引き摺り始めたのだ。

今日は本当に何なのだろうか。アレクに振り回されてばかりだ。いい加減にして欲しい。

溜まりに溜まった鬱憤を晴らすと、丸太のように太い腕に手をかける。だが、もうその時には目前に底の見える水面が迫っていたのだ。

「水浴びするぞ！」

「うわぁっ！」

避ける事も出来ず、せせらぎに身を投げられてしまった。すぐに立ち上がったが、既に頭の上からびしょ濡れだ。

「何するのさっ！」

「よし！ これでオマエも思う存ぶ……っ！」

こんな事をされてまで高笑いに付き合ってる義理は無い。川岸で両手を腰に当てる仁王立ちするアレクの顔を目掛けて、両手一杯の水をぶちまけてやった。それを合図にアレクも川へと足を踏み入れる。

そして、

「うわっ！」

「今のお返しだ！」

倍の量はあるつかと言う程の大量の水が返ってきたのだ。

「何のつもりなのさ！ また俺の邪魔して！」

「オマエら見てたらイライラしてなー！」

「なっ……！」

アレクの嫌味なにやけ顔を見た瞬間、今度こそ堪忍袋の緒が切れた。

「それだけで……俺、こんな目に……！ 何考えてるのさ！」

無我夢中で手をせせらぎに突っ込み、勢いに任せてアレクに水を掛けていく。

「やっと、ミュと一緒に居られるのに！ 楽しい筈なのに！ 俺に恨みでもあるの?!」

しかし、アレクが放る水量も相当のものだ。相殺されて跳ね返った水飛沫が互いの身体を更に濡らす。

「笑ってないで何か言えば?! イライラするの、アレクの方」

「オマエ、アイツに言ってねーだろ」

「……何が?!」

「『愛してる』」

不意に放たれた言葉に、思わず手が止まった。遮る物の無くなった大量の水は俺の顔を直撃し、身体のバランスを崩す。咄嗟に足をばたつかせたお陰で水面との衝突は避けられた。が、今はそんな事はどうでも良い。

絶対にアレクが変な事を言った。鼓動は一気に速度を速め、顔は血液が沸騰したかのように熱を帯びている。

「いや、オマエ、ガキだからなー！ 『好き』の方が合ってるか？
何なのだろうか。訳が分からない。

「見てたら分かるんだ。くっ付きそーで、くっ付かなくてよー。ムシヤクシヤしてくる」

頭が真っ白だ。

「のんびりしてたら、後でどーなるか分かんねーぞ」

きっぱりと言い切ると、アレクは放心してしまった俺の腕を掴んで川から引き上げる。何かに気付いたのか、手を離すとすぐさま踵を返して片手を振り上げた。

「もう行くぞー！」

「嘘っ！ もうっ？！」

「いつまでもこうしてたら、すぐ日が暮れるだろっ？ 早く来い！」

「……はい」

遠くから聞こえてくるのはミユの声だろう。せせらぎの上流の方に目を向ければ、歪んだ彼女とフレアの姿を確認する事が出来たから。

冴えない頭で、ぼんやりと二人の会話を聞いていた。

飛沫を散らしながら頭を振り、何とか頭の熱を冷ます。ミユが俺の手を取ってくれた時までにはどうにか彼女の顔を見られるようにはなったが、目をまつすぐに、となると無理だ。

高鳴る鼓動を気にしつつ、びしょ濡れのままで変わり映えのしない薄暗い森をやり過ぐす。吹き抜ける風が服を僅かに靡かせながら、いつも以上に体温を奪い去っていく。まあ、火照った身体には丁度良いだろう。

日が殆ど差し込まないから、森に入ってからどれ程の時が流れていったのかは分からない。それでも時折覗かせる光の筋は銀色から金色へと変化していた。夕暮れが近いのだろうか。

とそんな時、

「……寒くない？」

なるべく視界に入れないようにしていたミユが俺の顔を覗き込み、左手を日溜まりのように温かな両手で優しく包み込んだのだ。心配そうに眉尻まで下げて。

冷めかけていた頬が再び熱を帯びる。

「大丈夫だよ。ミユの手、温かいし」

首を振って否定はしたものの、咄嗟に作った笑顔は固いのだろう。

それでも彼女は頬を赤らめる。

「……でも、他は寒いでしょ？」

「うーん、ちよつと寒いけど、もうそろそろ」

「よし！ 今日はこちらで野宿するぞ！」

もうそろそろ野宿の準備をするだろうから。そう言い掛けた所で、丁度良くアレクが足を止めた。前方には、四人が寝転ぶには不自由しないであろう程度の空間が広がっている。相変わらず、空は木の葉で閉ざされたままなのだが。

一度の夜を明かすだけだから、これで充分だ。

よくぞミユの視線を俺から外してくれた。今回ばかりは今夜の宿泊地とアレクに感謝せずにはいられない。

取り敢えずミユを早めに休ませなくては。まずは夕食を作って、その後は

「ラウド、ちよつと良い？」

腕を組んで思索していると、視界の中にフレアの顔が入ってきた。何処か遠慮がちで、思い詰めた様子で。ゆっくりと俺の正面に立つ。

「何？」

「聞こうかどうか迷ったんだけど、やっぱり心配で……」

しどろもどろに話すと、一度目を伏せる。

「あの短剣、此処に持ってきたの……？」

その言葉が放たれた瞬間、心臓が大きく脈打った。

小さな声を更にひそめてはいるものの、此処にはミュも居るのだ。もし聞かれてもすればとんでもない事態になる。

焦って周囲を見回してみたが、そんな心配は無用だったようだ。

アレクがミュを今し方出したのである。深緑色の四角錐の小屋の、四つある部屋のうちの一つへと押し込めている。こちらの様子なんて気にも留めていないだろう。

「どうなの？」

「えっ？ …… あっ、うん。持ってきたよ」

ミュには見られないように身体を移動させ、左側の上着を捲ってみせる。目にする度に、俺の心に影を落とす物がそこにはあるからだ。

フレアは俺の手の動きを目で追ってそれを確認すると、今度は懇願するような眼差しを俺へと向ける。

「ねえ、お願いよ。これ」

「おい！ オマエら！ 夕飯の支度するぞ！」

だが、フレアの声はアレクの叫び声に掻き消されてしまった。アレクはテントの前に仁王立ちし、不機嫌そうに顔を歪める。足下には木の枝が山積みになっている。

「……今行くわ！」

アレクの反応に慌てたのだろうか。これまでの話なんて何も無かったかのように、フレアはアレクの元へと走り去ってしまった。

まあ、最後まで聞かなくても、何を言おうとしていたのか予測は付くのだが。

頭を掻きながら

「はあ……」と溜め息を吐き、俺ものんびりとフレアの後を追った。夕食の準備とは言っても、俺の担当する仕事はただ一つ。水の用意、だ。実際に調理をするのは専らアレクで、フレアの仕事も火を起こす事くらいである。

調理の途中、アレクに

「オマエ、さっきフレアと何してたんだ？」と疑いの目を向けられたが、

「怪しい事じゃないよ」と適当にあしらった。事実、大した話はない。

それでもアレクは不機嫌なままに鍋に野菜を放り込み、気だるそうに中身をかき混ぜる。そうこうしているうちにスープの匂いが辺りに充満し始めた。それが鼻をくすぐり、食欲を掻き立てる。

料理を作った張本人が味見をして満足そうに頷くのを見届けると、すぐさま二枚の皿に野菜スープを装った。それを両手に持ち、ミュがちょこんと座っている小屋の一室へと向かう。

「ミュ、出来たよ。ちゃんと食べて、体力付けなきゃ」

フレアとあんな会話をしたからだろうか。緊張は解れたようだ。

ミュを目の前にしても、頬に熱は感じない。

眠そうに瞼を擦る彼女に無理やりスープ入りの皿を一枚押し付け、尻だけを小屋の床へと落ち着けた。冷たい風が頬を撫でる。

「私、眠い……」

「駄目だよ！ 食べなきゃ明日大変だよ？」

「う……」

文句を言いながらも、渋々スプーンを尖らせた口へと運ぶ。もごもごと、ゆつくりと食べ物を噛み砕いていく彼女の姿に、思わず笑みが零れていた。

まあ、食べてくれるなら良いか。これはこれで可愛い。などと考えながら、自分もスープを喉に通す。温かな野菜と風味豊かな香りが身体に染み入る。

食事の間はミュと殆ど会話はしなかったが、彼女が居心地が良いのであればそれで良い。傍に居られるだけで、穏やかな気持ちになれるのだから。

食事が一段落すると皿をテントの外へ出して、布団の中に横たわるミュの右手を取った。皿なら片付けなくともアレクがフレアのどちらかが取りに来てくれるだろう。ミュの傍からは離れられない。

「夜、まだ怖いんでしょ？」

恐らく、その恐怖は呪いが解けるまで続くのだろう。小さく頷く彼女の顔を見るだけで、心の悲鳴が聞こえてくるかのようだ。

「大丈夫だよ。ずっと傍に居るから」

言いながら、小さな手を一層強く握る。そんな俺ににこやかな笑

顔を見せてくれると、彼女は瞼をそつと閉じ、穏やかな寝息を立て始めた。

明日も一日歩き通した。それならば、俺も寝てしまおう。

まずは冷たい外気を遮断するためにドアを手を繋いだままで隣の部屋へと移動し、遠慮もなく声を出して欠伸をした。しかし、いくら眠くても着替えは済ませなくては。川に入った服で眠りたくはない。

「ちょっとだけごめんね」と彼女へ囁いて手を離し、寝間着に着替える。それが終わるとすぐに手を握り直し、身体を布団の中へ潜り込ませた。一息吐いて瞼を閉じた時、

オマエ、アイツに言ってるねーだろ。『愛してる』

ふとアレクの言葉が蘇ってきたのだ。

『好き』の方が合ってるか？

同時に、あの小川での出来事が脳裏を目まぐるしく駆け回る。思考もそちらへ偏ってしまう。

駄目だ。このままでは眠れなくなってしまっではないか。

時が来れば伝えられる。焦る事は無いのだ。そう自身に言い聞かせながら、頭から布団を被ってしばらく呻き声を上げていた。

その『時』が明日だとも知らず、夜は更けていく

第21章 星に願いを

旅二日目

朝食は昨夜の残りを持ち合わせのパンで軽く済ませ、早々に身支度を整えた。小鳥が朝の訪れを告げる中、時の移り変わりを判断しにくい薄暗い森を突き進む。

昨日と同じように先頭にはアレクとフレア、左隣にはミユといった並びで隊列を組んでいる。ただ違うのは張り詰めた緊張感、憤り、不安。俺たちの気の持ちようだろう。昨日のような浮かれ気分は微塵も感じられない。

それを表すように、アレクとフレアは神妙な面持ちで時折振り返り、俺たちに顔を向ける。

伏せられたミユの目からは未だに涙が零れ落ちそうだ。俯き、唇を噛み締めて木の葉を踏む彼女の手をしっかりと繋ぎ止める。

今朝、彼女が影の夢を見てしまったのだ。

「足掻いても何も変わらない」と脅されたらしい。

これはただの夢で、決して現実ではない。それは分かっている。俺だけではなく、四人全員が理解しているのだろう。それでも気にしないでいるなんて無理があるのだ。

口では彼女に

「気にしちゃ駄目だよ」と言ったが、心の中では己にも言い聞かせていたのだろう。

無駄な事なんて無い。これからそれを証明してみせる。ミユの呪いを解く。という形をもって。

一分一秒でも早く、目的の地を踏み締めたい。そんな思いが俺たちを突き動かす。黙々と、向かい風を切って前を見据える。

村までの距離はどれ程縮まったのだろうか。中間地点には到達しただろうか。掻き上げた髪を風に靡かせながら、

「ふう……」と息を吐き出す。

朝から休憩もせずにひたすら歩を進めたせいか、腿に軽い倦怠感を覚え始める。そんな時、ミュがすつと息を吸い込んだのだ。

「ねえ！ 皆、何か話そうよ〜！」

勢いを止めずに前へ向かって吐き出す。握っていない手で、胸の前で拳まで作っている。

彼女の声に呼応するように、鮮やかな黄色と赤色の瞳がこちらを向いた。アレクなんて、目を細めて口元を吊り上げている。嫌味な笑顔だ。

「あ？ 喋ったら、オマエ、またはしゃぐだろ」

「そんな事無いもん！ また疲れるの嫌だし」

そんな挑発的な態度にもめげず、ミュは頬を膨らませる。やはりリスのようで可愛らしいのだが、至って彼女は本気なのだろう。

しかし、アレクは未だにミュを小馬鹿にするような笑みを浮かべたままだ。

「いや、はしゃぐな！」

「はしゃがないもん！」

「もう、二人とも止めてよ。ミュ、そんな事してたら、また疲れるわよ?」

いい加減に腹が立ってきて、アレクに一言言ってやろうと思ったのだが。一足先にフレアに場を制されてしまった。ミュに呆れ顔を向けた後、アレクを叱り飛ばして前を向かせる。

このままでは俺の気が収まらない。

「アレクなんか放つといて、俺と話そう? ミュの仇は俺が取るから」

束ねた長髪を風に遊ばせて暢気に口笛を吹くアレクの後頭部に睨みを利かせた。

そんな俺にミュは首を傾げるばかりなのだが、今は分からなくても良い。行動を起こせばきっと分かってくれるだろう。

チャンスは意外と早く訪れた。

空腹のせいで腹が雷のような音を立て始めた頃、頭上から光の帯が現れたのだ。見上げてみれば、左斜め前方に、筋状に葉の隙間から青空が顔を覗かせている。と言う事は、

「あつ! あそこに川があるよ? 休憩しよう?」

「おつ! そうだな! 昼飯でも食うか!」

そう、川がある筈なのだ。

俺よりも先に、それに気付いたのだろう。ミュの指差す方向には

確かに小川を見る事が出来た。規模や水の透明度からすると、昨日水浴びをした川と同じ物だろう。

またアレクが何か仕掛けてくるのではないか。不安に駆られて身構えたが、どうやら杞憂に終わったようだ。今回は無事、川岸でもミュの隣を独占する事が出来た。

しかし、その小さな幸せを蔑ろにしても成し遂げたい事が俺にはある。

にこにここと楽しそうに包みを広げて白い丸パンを持つミュの袖を引っ張り、様子を窺ってみる。

「……ミュっ」

「何？」

そんな俺に、彼女はちょこんと首を傾げた。可愛らしい反応をするから、僅かに頬が熱を帯び始めたのだが。見惚れている場合ではない。

「疲れてない？」

「うん、大丈夫だよ！」

頷く彼女は元気そのものだ。強がってはいないだろう。

「じゃあさ、ちょっと見てて？」

「えっ？」

アレクがぎゃふんと言う様をミュにも見届けてもらいたい。

今度は反対側に首を傾げる彼女に、見ていれば分かるから。と心

の中で投げ掛け、決意も新たに腰を上げた。目指すは此処から然程離れてはいない人物、川岸で大口を開けてフレアと笑い合っているアレク、だ。

さあ、今こそ報復の時

「アレク」

「……あ？ 何だ？」

フレアとの会話を中断された事が気に食わないのだろう。眉間に深い皺を寄せて、アレクは背後に立つ俺を見上げる。

「話があるんだけど」

「何のだ？」

「ミュの仇」

言葉と共にアレクの顔目掛けて指を差す。直後、その眉間の皺はより一層深くなった。

「何の話だ？」

「忘れたなんて言わせないからね」

「……はっ？」

このままでは埒が明かないではないか。話の途中でフレアの仲裁が入るのも嫌だし、仕方が無い。

中途半端に口を開けて無表情で俺たちのやり取りを眺めるフレアを横目に、アレクの筋肉で引き締まった腕を掴んで無理やり立たせる。

「おい！ 訳分かんねーよ！ 説明しろ！」

「何で分かんないのさ！ そっちの方が訳分かんないし！」

どうすれば、つい先程の出来事を忘れられるのだろうか。しかも、自身が招いた事態を。

呆れながらも掴んだ腕をミュの居る方向とは逆 川の下流へ力の限り引つ張ってみる。アレクの肩の関節が外れようと知った事ではない。

しかし、そんな事をされてアレクも黙っている筈が無かった。

「分かんねーもんは分かんねーんだよ！」

ブレーキを掛けるために踏ん張ったのだろう。いくら力を込めても、この場から動かなくなってしまうた。

アレクに対する苛立ちと思い通りにならない現状に、遂に怒りが爆発する。

「……アレクってバカっ?!」

「何ー!?!」

実力行使に出ようと仇の胸倉目掛けて片腕を伸ばしたのだが。同

時に俺の胸倉も締め付けられてしまった。平行に並んだ腕の先には炎を宿したかのようにぎらつく腫がある。まっすぐに俺の目を貫き、放そうとはしない。

「バカじゃなかったら何なのさ！ 記憶障害?!」

「オマエなあつ！ また殴られてーのか?!」

「何でそんな事言えるの?! ……別に、俺の事殴ったとしてもフレアに嫌われるだけだろうけど!」

「……ああつ?! オマエ、調子に乗んなよ?!」

まさに一瞬の出来事だった。

足が地を離れて身体が浮き上がる。景色が流れていく。アレクの真正面を見ていた筈が、小石の隙間から雑草が伸びている地面、逆さまに映し出される森、雲一つ無い真っ青な空、揺れる水面、背中に強い衝撃が走る。息を吸い込もうともがけば口に、鼻に水が雪崩れ込む。

「うつ……! げほっ! ごほっ!」

「ざまあみる! オレをバカにした罰だ! もう一回言ってみる! 次はこんなもんじゃ……うおお?!」

俺だって、やられてばかりではない。指を差して嘲笑うアレクの頭上に魔法で大量の水をぶちまけてやった。アレクの身体がすっぽりと隠れる程に、しかも数秒ではなく数分もの間だ。

相手がもがいている間にゆっくりと起き上がり、息と体勢を整え

る。

「……何回でも言ってるよ！ バカバカバカ！」

「……くそっ！ やりやがったな?!」

互いにずぶ濡れになり、川岸とせせらぎの中で睨み合う。とアレクが殺気を放ちながら川の中に足を踏み入れたのだ。歩を進める度に飛沫を放つ。拳も作り、完全に戦闘態勢に入っている。

「ぶん殴ってやる！ 黙ってそこに突っ立ってる！」

「やっぱりバカじゃない?! 抵抗しない訳無いじゃん！」

刹那、首を右側へと捻った。放たれた拳は俺の左頬ぎりぎりを通り過ぎ、行き先を無くして空を切る。それでも肩から体当たりを試みてくるので、咄嗟に右へと身を翻した。

アレクはすぐに態勢を立て直し、今度は俺の腰目掛けて手を伸ばす。

「ちょこまか動きやがって！ ……ついでにその凶器もよこしやがれ！」

「……なっ、何言ってるのさ！ 話、すり替わってるし！ しかもそれが失敗するまでお預けだって」

「んな事言った覚えなんかねー！」

「はっ……?!」

また避けようと思ったのだが、この時ばかりは気が動転してしま
った。右に避ければ良いものを左へと身体を動かしてしまい、伸び
てきた手は俺の右腰を捕らえる。

これを好機と考えたのだろう。口元をにやりと吊り上げると、次
は対の手で短剣を奪いにかかる。

しかし、このまま奪われて堪るものか。指が柄に触れる寸前で、
その腕を両手でがっしりと掴んだ。

「……放せ！」

「嫌だ！」

いくら凄まれようと、怒鳴られようと絶対に怯まない。互いに引
く事は無く、しばらくの間揉み合いの死闘を繰り広げた。

息も絶え絶えになった頃、ようやくフレアの介入で決闘に終止符
が打たれた。最後の方はもう、何のための喧嘩だったのか分からな
くなってしまった程だ。短剣を奪われずに済んだ事がせめてもの救
いだろう。

結局、ミユに良い所を見せるどころか仇討ちさえ叶わなかったで
はないか。のんびりと悲観に暮れる間も無く、携帯用の小屋に押し
込まれて着替えを要求された。仕方無く、飛沫を散らしながら衣服
を脱ぎ捨てる。

「……アレクのバカ」

「バカはオマエだろ」

真向かいの部屋に居るアレクへ吐き出す愚痴だって、先程のような元氣は無い。

何故、こうなってしまったのだろうか。物事の無情さを呪わずにはいられない。

アレクとフレアの魔法で濡れた髪も乾かされ、すぐさま旅を再開させる。隣に居るミュは不思議そうに俺を見上げるばかりだ。

悔しくて彼女の顔を真面に見る事が出来ない。気を紛らすために、休憩中に摂り損ねた柔らかな丸パンをかじる。

「ねえ。さっき、何がしたかったの？」

「……ミュの仇討ち」

喧嘩を売った目的はこれだけだ。しかし、彼女は納得してくれなかったのだろう。パンを頬張り続ける俺に、更に質問を重ねる。

「うーん、何の仇？」

「だから、ミュの」

「そうじゃなくてっ」

ミュは両手で拳を作り、口をへの字に曲げる。彼女が求めた事とは違う答えを返してしまったのだろうか。

どのような言葉を求めているのだろうか。分からない。

不機嫌なままに首を傾げてみせると、彼女の表情は不満そうなものから呆れ顔へと変貌していった。目を細めて、肩まで落とす。

「もう、良いよ。バカなんだから……」

「酷っ！」

決死の覚悟で挑んだのに、劣いの言葉どころか罵りの言葉が返ってくるとは。衝撃のあまり、半分にまで欠けたパンを握り潰してしまっただけではないか。いつそ泣いてしまいたい。

しかし次の瞬間、そんな気分も全て吹き飛んでしまうような物が現れたのだ。

突如として視界全体が発光しているかのように眩しくなる。薄目でなくては耐えられない。暗い空間に入り浸っていた目が光に慣れるにはしばらく時間がかかった。

足を止めたアレクの肩越しに、遠くに見えるのは川。いや、もっと大きい。此処からでは対岸も見えないから湖だろうか。水面は宝石箱を引っくり返したかのように輝き、穏やかな波の動きに合わせて瞬く。

途端、俺の中の時間が止まってしまった。

「どうするのよ……」

「……どうしたの？」

「いや……。とにかく、あそこまで行くしかねーだろ……」

三人のやり取りだって上の空だ。

百年前の情景がありありと蘇ってくる。真っ青な空に同色の湖、カノンの桃色に染まった頬、暖かな緑色の瞳、その全てがつい先程の事のように。

まさか、この湖は

「もしかして」

「オマエら、いつまで突っ立ってんだ？ 行くぞ」

零れた眩きを遮られ、ふと我に返る。だが、すぐには反応出来なかった。フレアの手を引いて地を踏むアレクをただただ見送る。

「今、何言いかけたの？」

たとえミュに話し掛けられたとしても、視線は湖に釘付けだ。

「ミュ、覚えてない……？」

「えっ？」

「分かんないなら……良いんだ」

そうだ。俺が思い出したからと言っても、必ずしも彼女も思い出してくれるとは限らない。

それでも期待せずにはいられなかった。大事な、とても大事な過去なのだから。胸に小さな痛みが走る。

何とかミュに微笑み掛けてはみるものの、上手く笑えてはいないだろう。それを補うようにして彼女の右手に触れ、そっと握る。

何とも言えない郷愁を帯びた空気を纏い、前を歩く二人の後を追った。

一歩一歩、確実に湖へと近付いている。木々が織り成す洞窟の終わりに広がる風景は次第に大きくなっていく。

ミュの手の温もりを確かめると胸はやんわりと暖かくなり、気持ちも安らぐ。先程の心の痛みも感じられない。空の色の移り変わりと共に、どんどん想いが膨らむ。

旅の目的も、置かれた状況も、使命の重さも百年前とは違う。それでもこの場所を意識せずにはいられないのだ。

百年前は彼女に先を越されてしまった。同じ場所で二度も後悔はしたくない。

今の俺にとって、未来を生きていくために『これ』は必要な事だろう。愛し、愛されているという自覚が生まれるから。それに、ミュに俺と同じ思いをさせてはいけない。と、より一層心に深く刻み込めるから。

アレクに急かされたからではない。全て己の意志だ。

決めた。

「しょうがねーな……。今日は此処で休むぞ。明日どうするかは後で考えるところとして、オマエら、夕飯の準備」

「ミュ。こつち来て？」

「えっ？ うん……」

湖に到着して早々、アレクの言葉を振り切ってミュを丸い小石が無数に散らばる湖畔へと連れ出した。金色の空の下、伸びた影を二つ並べる。此処からだ木が邪魔をして、アレクやフレアの居る位置からは死角になっているだろう。

同じように金色に輝く湖を眺めながら、思い切って息を吸い込ん

だ。

「……思い出した？」

「うん……」

木の葉のざわめきと共に、冷たい風が髪を靡かせる。火照った顔や身体も撫でて、上昇した体温を奪っていく。

「……さっき、バカって言って……ごめんね？」

「良いよ。気にしてないから」

「……嘘っ」

「……うん。今は……嘘だった」

こんなにも途切れ途切れの会話をしただけで鼓動は速まり、手の平には汗が染み出す。

しかし、これでは何だか彼女にはぐらかされた気分だ。

「……って、俺、こんな話がしたかったんじゃないかって……」

気を落ち着かせるために

「ふう……」と息を吐き出す。一呼吸置き、ミユの方へと向き直った。

「今度は俺に言わせて欲しいんだ」

「えっ……？」

動揺しているのだろうか、揺れる瞳を俺に返してくれる。

「俺、ミュの事が好きだ」

態度では何度も示してきた事、それでいて一度も言葉にはしなかつた事

想いを告げた途端にミュの顔は、いや、耳も首も薔薇色へと変わった。目を丸くして、ただひたすら俺の顔を見詰める。言葉では何も返してくれない。

「……ミュは？」

こんなにも無反応だと、胸の奥に閉じ込めてきた恐れが現実になつてしまうのではないか。そんな負の感情が湧いてきてしまう。それでも彼女は口をつぐんだままだ。

「……俺じゃ……駄目？」

やはり、俺ではなくてリザードを。そう思ったのも束の間、ミュの首が僅かに振れた。

一気に肩の荷が降りる。

「良かった……」

これで、ようやく正真正銘の両想いになれた。そう思つて良いのだろうか。

俺が笑みを零す反面、ミュは全く表情を変えない。

どうしたのだろうか。と顔を覗き込もうとした瞬間、彼女の口が

僅かに開いた。

「……………聞いても……………良い？」

「……………何？」

何かを思い詰めたように一度目を伏せ、再び俺の瞳を上目遣いで見詰める。

「私を好きになったのは……………カノンの生まれ変わりだから？　ラウドが好きなのは、今の私とカノン……………どっち？」

瞬間、身体に電撃が走った。

まさか、ミユも俺と同じ不安を抱えていたなんて。胸が締め付けられる思いだ。

射るような瞳から逃れて今一度考えてみる。が、考えるまでも無かった。

今、この時を共有しているのはカノンではない。ミユだ。俺に笑顔をを見せてくれたのも、一緒に頑張ってくれたのも、心の支えとなってくれたのも全てミユだ。勿論、愛しているのも。

何より、ミユとカノンの性格は似ているようで似ていない。

頼りなさそうに揺れる瞳を前に、一言一言丁寧に紡ぎ出していく。

「確かに……………きっかけはカノンだったよ。でも、今の俺はミユが好きだ。断言出来るよ。それじゃ……………駄目かな」

俺の想いを受け取ってくれたのだろう。彼女は大きく首を振って

溢れんばかりの笑顔を見せてくれた。

だが、尋ねられてばかりでは俺の不安は解消されない。ミュも正直な想いを言葉に、形にして欲しい。

「ミュは……？」

「私も……リザードじゃなくて、ラウドが好きだよ」

「ありがとう……」

想いを全て込めて、ミュの身体を抱き寄せた。

ミュの両手も俺の背中に回っているから、全身で彼女の温もりを感じる事が出来る。心地良いリズムで刻まれる鼓動の音、花のように優しい匂い、僅かに加わる圧力、その全てが愛おしい。

欲求が満たされると、名残惜しくも徐々に身体を離していく。いつもとは何処か違う、桃色に染まった柔らかな笑顔を改めて見詰めた。

「俺も不安だったんだ。ミュが俺じゃなくて、リザードを見てるんじゃないかって……」

こうして話をしてみると、何だか恥ずかしい。照れ隠しのために、頭を掻きながら

「へへ……」と誤魔化してみる。

「その指輪を付けてくれた時は凄く嬉しかったよ。でも、よく考え

てみたら、俺じゃなくてリザードが贈った物なんだよね。だからさ、ミュウが受け入れてくれたのは、リザードだけなんじゃないか……っ
てさ」

皮肉なものだ。あんなに待ち望んでいた事だったのに、結果的には不安を煽るものとなってしまったのだから。

苦笑いを試みるものの、心のわだかまりは晴れない。堪らずに目を伏せた。

「過去の記憶が無かったら、私たち、普通に恋、出来てたのかな……？」

「うーん、そうかもしれないけど……でも、悪い事ばかりじゃないよ。記憶のお陰でミュウに逢えたし、それに……」

そう言えば、これをミュウに見せるのは初めてだな。などと考えるつ、おもむろに胸元へ手を伸ばす。指先で冷たい金属の感触を探り、ぐいっつと引っ張り出した。

「これ、お揃い」

指輪がゆらゆらと揺れ、中央に埋め込まれた青色の宝石が橙の日光を乱反射させる。

彼女も自身のチェーンを目線の高さに掲げてみせた。

「……うん。お揃い……」

言いながら、益々頬を赤らめる。

こんなにも穏やかな気持ちになれたのは久し振りだ。この時が永遠に続けば良いのに。そんな事を考えながら、彼女と二人で小さく

笑い合った。

空が赤紫色に変わっても、星々が姿を現しても此処を動く事はない。世界で一番優しい夜闇が俺たちを包み込む

「綺麗だね……」

「うん……」

ミュの言葉通り、空には満天の星が輝いている。サファイアで見える空よりもその数が多い。黄色と水色の二つの月も完全に顔を出しているから、光の量は半端ではない。それが湖にも映し出されている。まるで宇宙に居るかのようだ。

恐らく、思わず見惚れてしまう程の美しさなのだろう。が、今の俺にはそれをも霞ませてしまう存在がある。

ミュだ。

「私、こんなに綺麗な空、この世界に来て初めて見た……」

月明かりに照らされた、感慨深い横顔に心奪われる。もう耐えられそうにない。

「ミュ。こっち向いて？」

「えっ？」

彼女が振り向くより早く顔を近付けて、強引に唇を奪う。たとえ

驚かれようと構わない。
触れるだけの短いキス

「私のファーストキス……」

「あはは……」

俺にしてはなかなか大胆な事をしたものだ。

恥ずかしそうに目を伏せる彼女に負けず劣らず、俺の鼓動も速まっているのだろう。頬も高熱を発している。

今、この時が夜で良かった。林檎のように赤く染まっているであろう顔を見られずに済む。

ぼんやりと幸せの余韻に浸っていると、不意に彼女が顔を上げたのだ。

「あつ、流れ星！」

歓声を上げて天を指差す。彼女の喜びようが声だけで伝わってくる。

すぐさま示された方角を目で辿ってみたのだが、それらしき物は見当たらない。ただ、無数の星が留まったまま瞬いているだけだ。

「えっ？ 何処？」

「もう消えちゃった……」

「なんだ……」

折角、ミュウが教えてくれたのに。一瞬でも良いから一緒に見たか

った。きちんと消えるタイミングを考えて欲しい。

酷く残念で、がつくりと肩を落とす。と隣からクスリと笑い声が聞こえてきたのだ。

「笑う事ないじゃん」

別に笑われるような事はしていないつもりなのだが。しかし、彼女は衝撃的な言葉を紡ぎ出した。

「だって、可愛いんだもん」

「可愛いって……」

『可愛い』とは、女の子に対して使う言葉ではないのだろうか。確かに子供の頃はよく性別を間違えられたが、こんな顔でも男だ。多少なりとも傷付く。

俺の周りの淀んだ空気を察したのか、彼女は咳払いをして再び口を開いた。

「あのね。元の世界では、流れ星に願いをかけると叶うんだよ」

「えっ？ ホント？」

「うん」

彼女の居た世界にはそういう類の魔法が存在しているのだろうか。ステイアでは聞かれない話だ。

それでも、もし本当に願いが叶うのだとしたら

「あっ！ また流れ星！」

思考を遮るかのように、ミュウが再び天を指差す。その先には、

「えっ?! ホントだ!」

今度こそ己の目で捉える事が出来た。白い筋を描きながら、右から左へと移り行く 流れ星だ。

消え去っても、まだ食い入るようにして空を見詰める。そんな事をしていたせいか、また彼女に笑われてしまった。でもまあ、これは良しとしておこう。

ミュウは俺に希望を与えてくれたから。

ミュウは何を願ったのだろうか。機会があれば聞いてみたい。

しかし、俺は決して口には出来ないだろう。教えてしまえば、絶対に彼女を不安がらせてしまうから。

また一つ、秘密を作ってしまった。

生きて、ミュウの未来を見続けられますように

第22章 涙の村

俺たちは悩んでいた。いや、『アレクが』と言った方が正しいだろうか。

朝の清々しい空気を吸い込んで、目の前に広がる湖を眺める。昨日とはまた違う青の世界、水平線に霞がかかっているせいで空と湖の色が一体化してしまった不思議な景色だ。宝石のように輝く波の穂が唯一、風景に変化を与える。

絡め合わせたミユの指の感触が胸に温かさをもたらす。こんな状況で、真面に悩み事に付き合える訳が無い。

「……で、どーする？ どっちに行けば、村があるんだ？」

「そんなの、俺たちに聞かれたって分かんないよ」

元より、エメラルドの土地勘なんて皆無に等しい。エメラルドには何百、何千回と来たとは言っても、計画性も無くがむしゃらにワープしていただけだ。冷静だったとしても、これ以外に答えようは無かっただろう。

「こうなったらよー、勘で行くしかないんじゃないか？」

「それで違ったら、どうするのよ……」

「じゃー、どーしろって言うんだっ？！」

遂にアレクは苛々をぶつけ、唸り声を上げながら座り込んでしまった。頭を抱えて苦悶の証を眉間に刻む。フレアが宥めるようにそ

の肩を抱いても表情が和らぐ事は無い。

今日で旅を始めて丁度三日目、終着地へ辿り着く予定の日だ。

湖畔を囲むようにして道が二手に枝分かれしている。どちらか一方が近道で、反対側は遠回り。最悪、村には辿り着けない。運が悪ければ旅は長引いてしまう。だから焦るのも、悩むのも分かるのだが。

いくら悩んでみても、答えが出ない事は明白だ。

ミュと二人、顔を見合わせて溜め息を吐くしかなかった。

もう、思い切ってどちらかに進むしか無いのではないだろうか。

アレクもさっさと覚悟を決めて欲しいものだ。頭を捻るミュの

「うーん……」という声を聞きながら、そんな事を考えていると。

不意に、何かに気付いたように彼女が顔を上げたのだ。そのまま視線はこちらを向く。

「……今、何か言った？」

「えっ？ 言っていないよ？」

多分、俺は唸り声を上げていないと思う。

瞬間、ミュの眉が僅かに中央へと寄る。

「じゃあ、何か聞こえなかった？」

「……ううん」

ミュの唸り声以外は。心の中で呟きながら、首を横に振ってみせた。更に彼女の眉が中央へと寄る。二本の皺が出来るまでに。

恐らく、納得出来ないのだろう。首まで傾げて何やら考え込み始めてしまった。

空耳ではないか。とは思うのだが、こんな顔をされては言うに言えない。唸り続ける彼女を見守りながら、アレクの回復を待ってみる。

とその時、再びミユの顔が動いたのだ。今度は俺ではなく、湖に向かって左へ延びる道を見詰めている。右手の人差し指もそちらへと向いた。

「ねえっ！ きつとこっちだよ！ 声、聞こえたもん！」

「えっ………？」

『こっち』とは、確実に村へ繋がっている道の事を言っているのだろうか。それ以前に、声なんて全く聞こえなかったのだが。

困惑する俺の様子に、ミユは拳を作って頬を膨らませる。間を置かず、

「絶対こっちなっ！ 行こうよー！」

「えっ?! ちょっと、ミユっ?!」

彼女は俺の手首を握って左側の道へと引つ張り始めたのだ。深まる森の木の幹や葉のせいで、みるみるうちに視界が狭まっていく。

一体、何がどうしたと言うのだろうか。訳が分からない。

いくら走っても手首に加わる力が減少する事は無い。振り返りもせずに、足場の悪い道をひたすら走り続ける。

「オマエら！ ちょっと待て！」

背後からアレクの怒声が飛んできてもお構い無しだ。

絶対におかしい。少し無鉄砲な所はあるが、他人を顧みずに行動するなんて。いつものミュではない。

「ミュっ！ どうしたのさっ！」

このままではいけない。と左腕を無理やり引いて彼女を停止させる。反動で彼女は背中から俺の胸に飛び込んできた。

「今日のミュ、何だか……変だよ？」

ゆっくりと俺を見上げる緑色の瞳は小刻みに震え、今にも泣き出しそう。何も答えようとはせず、ただ視線を送ってくる。

どうしたものか。と考えているうちに、慌ただしい足音がすぐ傍まで迫っていた。アレクとフレアが俺たちの前に回り込んで道を阻む。息も付かずにアレクのがっしりとした手がミュの肩に乗せられた。

「オマエなあ……。説明くらい、ちゃんとしろよ」

まるで、俺の心の内を代弁しているかのような言葉だ。

フレアも同じ気持ちなのだろう。ミュにも負けない程に、不安に苛まれた表情で彼女の返事を待つ。

「ごめんなさい……」

木々がざわめけば掻き消えてしまいそうな声量だ。それだけを絞り出すと、ミュは口を結んで俯いてしまった。

とにかく、状況を詳しく把握しなくては。ミユを責めるつもりは無い事を伝えるためにも、宥めるようにして口を開く。

「さっき、声聞こえたって言ってたよね？ その声、何て言った？」

「『こつちだ』って……。この道の方から聞こえたの」

答えるなり、彼女は一晩明かした場所を顧みる。

「どんな声だった？」

「男の人なんだけど……。何処かで聞いた事ある……。神様かな……」

「うーん……」と考える素振りを見せると、再び俯いてしまった。確かに、聞き覚えのある男の声なんて俺たち以外には神くらいだろう。

しかし、それでは話が矛盾する。これから聞き出そうとしている情報を神も知っているのならば、今、この場に俺たちが居る筈が無い。俺が水の塔に いや、ミユが地の塔に行った時に、既に神の口から直接その方法を教えられただろう。リスクの高い『あの方法』も聞かずに済んだ筈だ。

「……取り敢えず、それを信用するしかねーな……。それでダメだったら、ワープして引き返す。一日、到着が遅くなるけどよー、ずっと考えててもしょうがねーだろ」

「……そうね」

アレクとフレアもミュの話に納得がいかないだろう。沈んだ面持ちで首を横に振る。

雰囲気には似つかわしくない穏やかで新鮮な風が俺たちを撫でる。吐き出された三人分の溜め息も持ち去っていく。

重たい足取りで先へと歩み始めた二人に遅れを取らないように、ミュの手を引いて前方を見据えた。

歩いていても会話は皆無に等しい。俺とミュだけではなく、アレクとフレアも、だ。横目で俺たちの姿を確認しながら歩幅を合わせ続けていく。その様子からも計り知れない不安を感じられた。

こんな状況だから、考えずにはいられない。

「神様なら……何でミュにだけ道を教えただろう……」

自然と言葉も漏れていた。

「えっ……？ うーん、やっぱり、呪いをかけられてるのは私だから、かなあ……」

答えはあまり期待していなかったのだが。ミュは少し遠慮がちに返してくれた。振り向いてみると、困り顔の彼女と目が合う。俺が握っていない方の小さな手は真っ白なスカートをきつく掴んでいる。

「でもさ、解き方を探してるのは俺たちも一緒だよ？」

もし仮に、神が俺に死刑宣告を突き付けた後で新たな方法を見つ

けたのだとしても、ミユにだけ手助けするだろうか。その必要性は全く感じられない。むしろ不自然だ。

「うーん、分かんないよ……」

そんな俺の言葉に、唸りながら小首を傾げる。

彼女の言う通り、分からない事だらけだ。絡まる思考をどうする事も出来ず、視線を元へと戻す。

「きつと、アレクたちもそれが引つ掛かってるんだよ」

声の主が本当に神なのか、そうではないのか。何のために、こんな事をしたのか。

俺が不安ばかりを口にしたから、ミユにも気持ちが悪染してしまったのだろう。手を握る力が強まったと思ったら、彼女の体温を僅かに感じ取れるまでに腕が近付いた。

「大丈夫だよ。俺が付いてるから」

もし何か起きようとも、ミユを傷付けようとする者に容赦はない。決意にも似た感情と共に、彼女へ笑顔を向ける。瞬間、アレクとフレアが目を細めて振り返ったのだ。

「オマエなあ。『俺』じゃなくて、『俺たち』だろ？」

嫌味な口調で吐き出すと、アレクは片方だけ口元を吊り上げてみせる。

別にどちらでも良いではないか。そんな文句を言いたくなかったが、言葉にしても喧嘩の引き金を引いてしまっただけだ。心の中に留めておこう。

代わりに、すぐさま前へと向き直るアレクたちに溜め息を吐いた。

それからというものの、時間の流れは酷く長く感じられた。時々ミユの方から話し掛けてきてくれたが、途中で口籠もってしまう。

それは恐らく、俺が曖昧な返事しかしていなかったからだろう。いつもなら彼女が発する一言一言が嬉しいのに、まるで頭に入っていない。心にも響かない。

先程の出来事を考えれば、当然と言えば当然なのだが。

昼食を摂った時も、僅かな休憩時間でさえもそんな調子だった。

アレクとフレアには呆れられて、溜め息まで吐かれる始末だ。それ程までに呆れるのなら、一度俺と同じ立場に立ってみる。と言ってやりたい気もしたが、流石に口には出来なかった。

三日間歩き続けた事もあってか、足にはかなりの疲労が蓄積している。腿や脛ら脛は浮腫み、足の裏にも多少の痛みが走る。

道の選択を誤ったのだろうか。そう思い始めたのも束の間、前方に森の出口を思わせる金色の光が浮かび上がったのだ。

「……村かもしれない」

そうであって欲しい。いや、そうである筈だ。

少しでも早く不安を打ち消そうと、心も、足も速まっていくな。それはアレクとフレアも同じだったようだ。ただ、ミユだけは、

「大丈夫？ ゆっくり歩いた方が良い？」

「ううん、先に行つてっ」

逸る気持ちよりも疲労が勝ってしまっている。言いながら、繋いでいた手を放されてしまった。
心では『ごめん』と謝りながらも、彼女の言葉に甘えてアレクとフレアに続く。

その先に待っていた物とは

確かにそこは村だった。高々と掲げられた木製の看板にだって『クレスト』と記されている。

しかし、こんな事があって良いのだろうか。

「村って言っても……瓦礫じゃねーか……」

「酷いわね……」

見るも無惨な正に『瓦礫』だ。おびただしい数の丸太が積み重なる山、散らばるガラス片、それらの塊が十以上はあるだろうか。つい最近まで『家』として機能していた物だろう。

丸太を組み合わせた数軒の家屋は原型を留めているものの、窓枠には何もはまっていない。吹きさらしの状態だ。

遅れて到着したミュも、あまりの光景に驚愕の声を上げる。

「こんなの……酷過ぎるよ……!!」

緑色の瞳からはみるみると涙が溢れ、地面を濡らしていく。

先日の地震を自分のせいだと思ってしまった程だ。彼女の心痛は計り知れない。

俺の胸に飛び込んで泣きじゃくるミュをただただ抱き寄せた。そ

れ以外に何も出来ない己が齒痒くて仕方が無い。

こんな状態では団体行動は無理だと判断したのだろう。

「オレは話聞いてくるからよー、オマエらは此処で待ってる」

アレクは憂いを纏った瞳で俺たちに視線を送ると、重々しい足を前に出す。

「あっ……」と声を上げたフレアも置いて、たった一人で村の奥へと行ってしまった。

泣き続けるミユの背中を擦りながら、アレクの動向を眺める。機能を保っている家を一軒一軒訪ねては中に入り、出てきたと思えば俯きがちに首を振る。俺がいくら焦っても、アレクに活気が戻る事は無い。

アレクが俺たちの元へ戻ってきた時、遂に恐れていた言葉が発せられた。

「……オマエら、落ち着いて聞いてくれ」

それだけを告げると、一度言い淀む。

「この村に、呪いの事を知ってる爺さんなんか居ないらしいぞ」

瞬間、頭が真っ白になった。それでも絶望感だけは襲ってくる。駄目だ。こんな話、認める訳にはいかない。

「アレク、場所間違ったんじゃないの?!」

「んな訳ねーよ！ 看板にも『クレスト』って書いてあっただろっ

？ ……いや、もう一回、聞いてくる」

何故、どうして

哀愁を漂わせて踵を返すアレクを視界の隅に追いやり、一層強くミユを抱き締めた。

昨日思い描いた未来はただの夢物語で終わってしまったのだろうか。本当の意味で互いの心を分かり合えたばかりなのに。

ミユの、俺の想いを踏みにじるための旅なんかではなかったのに。

「何のために、俺たちは此処まで……！ そんなの信じない……」

それだけではない。俺たちには帰りを待っていてくれる人たちが居る。帰らなければならぬ理由がある。

何より、俺自身が生き残りたい。

温もりを求めるようにして、顎をミユの頭に当てた。そんな時だ。フレアはすうっと息を吸い込む。

「次はきつと、アレクが話を聞き出してくるわ。だから大丈夫」

「無責任な事言わないでよ！ 『きつと』なんて……駄目だったらどうするのさっ！」

駄目だったとしたら、フレアが俺の代わりになってくれるとでも言っただろうか。そんな覚悟も無いくせに。

自制が利かず、己の感情を真っ直ぐにぶつけてしまった。

瞬間、ミユの身体が大きく震え、事の重大さに気付かされる。

「あつ……。ごめん……」

俺が弱気になればミユの希望も失われてしまう。既に呪いを解く方法を得ている事も知らないから、旅が失敗すれば死ぬのは自分だと思っっている。

フレアだって、俺たちを慰めるために言葉を掛けてくれた筈だ。

「ミユ、ごめんね……」

なんて事を言ってしまったのだろうか。今になって後悔の波が押し寄せてくる。

俺の胸を涙で濡らす彼女をこれでもかと言う程抱き締めた。

フレアが漏らす嗚咽も聞こえてくるが、怖くてその顔を見る事が出来ない。目を横に流して瞼を伏せた。

この最悪な状態が改善する事は無かった。黄色の瞳が俺たちの姿を捉えても、だ。

フレアを泣かせてしまったから、怒鳴られるのは覚悟していた。それ程の事をしたのだから、仕方無いとも思っている。

だが、アレクは問い詰める事も、弁解を求める事もしない。誰も俺を咎めないのだ。それが逆に心苦しい。

ただただアレクはフレアを気遣い、妙に優しい慰めの言葉を投げ掛ける。

全員が落ち着いた頃合を見計らって、アレクは静かに話し始めた。

「……一人だけ、話を聞けそうなヤツが居てよー。飯も宿も、ソイ

ツが用意してくれる。でもよー、あんま期待すんな。様子が……おかしい」

最悪の結果だ。

受けた衝撃が思考力を低下させ、身体力が抜けていく。当然、ミユを支えていた腕も緩む。その瞬間、彼女が地面にくずおれてしまった。慌てて膝の下と背中へ腕を回して抱き抱えたが、俺の服を掴む手には先程までの力強さは感じられない。

それでも、やはり諦める訳にはいかない。ミユのためにも、俺自身のためにも。

アレクは普段の態度が成っていないから、肝心な時にこそボロが出る。アレクが駄目ならば、己の力で聞き出すのみ。

「やっぱり、アレクに任せたのが駄目だったんだよ！俺が聞いてくる！」

「……無駄だ！村のヤツら全員に聞き回ったんだぞ？！それにオマエ、そんな状態のミユを置いてくのか？！」

「……っ！」

叫ばれた途端、歯止めが利かなくなってしまった。堪えていた物が溢れて頬を濡らす。

俺には足掻く権利さえ与えられないのだろうか。あんまりではないか。

俺の感情を無視するかのようアレクは大きく息を吐く。生気の無い細められた目も向けられた。

「……行くぞ」

言葉で俺を突き放すと、フレアの手を取って身を翻す。

「何で……っ！」

何故、そんなに冷静でいられるのだろうか。仲間の命が係っているのに。何とも思わないのだろうか。

睨み付けても、叫んでも二人は距離を広げていく。空間だけではなく、心も遠ざかっていくように感じられた。

ミユを抱いて震える足を前に出し、ゆっくりと進んでいく。夕闇の中、倒壊を免れた家の正面に俺たちを置いていった二人が居るのだ。嫌でもそこへ行かなくては。

フレアは俯き気味だが、アレクはしっかりとこちらを見据えている。

俺が玄関前の段差の手前で足を止めると、薄茶の長い髪が翻る。躊躇う事も無く、ノックの音が数回鳴り響いた。

「さっき話を伺った者です！ 開けて下さい！」

普段のアレクからは考えられない口調だ。しかし、紛れも無くアレクの声だ。

いつもの調子なら、猫を被っている。と口を挟めた所だが、今の俺にそんな余裕は無い。

アレクの声に呼応するかのようにドアが開く。この家の主だろうか。姿を現したのは茶髪を一つに結った女の人だった。顔立ちからすると、三十代半ば程だろうか。温和そうな人だ。

一度は恐縮したように身を縮めてしまったが、すぐに表情は解れ

ていった。

「お待ちしておりました。どうぞ、お入り下さい」

片手を屋内へと翳し、俺たちを招き入れる。

この人が驚くのも無理は無い。滅多に人前へ姿を現さない魔導師が四人揃って押し掛けてきたのだ。至って普通の反応だろう。

だが、アレクは『様子がおかしい』と言っていた。人は見掛けに依らない。とも言っし、気は抜けない。

それを裏付けるように、アレクは険しい表情で頷いてみせる。

「ミュ、行くよ……」

何より、この家で俺たちの運命が決まる。と言っても過言ではないのだ。

ミュが微かに頷いたのを確認すると、先に家主に従ったアレクたちの後を追った。

俺たちが通されたのは廊下の突き当たりにある部屋 恐らく居間だ。俺たち魔導師の個室と比べるとかなり狭いが、一般家庭においては標準的な広さだろう。木の幹をそのまま輪切りにされた台を持つ円卓に、同じデザインの椅子が七脚、他に食器棚等も置かれている。

フレアがミュのために椅子を引いてくれたので、早速彼女を委ねた。しかし、背凭れが無くて心許ない。フレアに助けられながら彼女の右隣に腰を下ろし、すぐさま腕を小さな背中に回した。

そうこうしているうちに、アレクは心の準備を整えたのだろう。

間隔を置いて座った家主を見据え、一人で話を切り出す。

「早速ですが、オレに話して頂いた内容をコイツらにも詳しく聞かせてやって下さい」

言葉と共に、俺たち三人の視線も家主へと注がれる。

場の雰囲気にも飲まれたのだろうか。それとも話したくない事なのだろうか。注目を浴びたその人は緊張した面持ちで細く息を吐き出す。

「はい……。魔導師様方が探していらつしやるお爺さんだと思われる人は、村よりもまだ少し北に行った場所に住んでいるようなのです……」

何とか最後まで言葉を繋げると、力無く俯いてしまった。

アレクの言う通り、確におかしい。口から出てくるのは曖昧な言葉ばかりではないか。

考えれば考える程に不安は増していく。思わず生唾を飲み込んでしまった。

その後も女の人は口籠もり続けた。唇は動かすのだが、声を発する事は無い。張り詰めた空気が更に俺の心を急かす。手の平には汗が滲んでしまった。

しかし、この人の気分を害してしまえば情報を得られなくなってしまう可能性がある。辛抱しなくては。

耐え難い時の流れに身を置いてから、どれ程経過したのだろうか。家主の震える声が周囲へと伝わる。

「……ほんの一週間くらい前に家と人影を見たのよ。顔は見えなかったけれど、腰が曲がっていたから、お爺さんかお婆さんなんじゃないかって思うのですが……。今まではそこに家なんて無かった筈なのに……」

話している間も、家主は誰とも目を合わせようとしない。

話の内容に自然と眉間に力が入る。アレクも僅かに身を乗り出した。その表情は依然として固いままだ。

「その前はいつ、その場所に行ったんですか？」

「……一ヶ月前くらいだったかしら。薬草を摘みに、たまに行くのよ」

答えると再び俯いてしまったが、アレクへ向けた表情や声に曇りは無い。嘘や偽りではないのだろう。

しかし、だからと言って鷓呑みに出来る話ではない。

一ヶ月前には何も無かった場所に、一週間前には家が建っていたなんて有り得ない事だ。家を建てたのが魔法を使えない一般人だという事を前提に、だが。それに、時期を考えてみても出来過ぎている。

絶対に認める訳にはいかない。この話を認めれば、旅立ち前に感じていた不安が現実となってしまう。と何とか都合の良い解釈へと持っていく。

「……それ、見間違えたって事、ありますか？」

「オマエ……」

そう、ただの見間違えならば心を患わせる必要も無いのだ。希望だって完全に失われはしない。

アレクの視線を感じながらもそれを無視し、家主を食い入るように見詰める。だが、俺の期待を裏切り、

「家なんて大きな物、見間違える筈がありません。人影は、確証はありませんが……」

そう言い返されてしまった。しかも明確な口振りで、揺るぎない瞳をこちらに向けて。首まで振ってみせる。

それ程までに完全否定するのか。溜め息を漏らさずにはいられない。俯いて、右手で拳を作って握り締めた。

俺の行動が反感を買ってしまったのだろう。

「ふうー……」と誰かが息を吐き出す。一拍置いて、アレクが口を開いた。

「疑ってしまって、すみません」

「いいえ、とんでもないわ。少しでもお役に立てるのなら」

それに対して返ってきたのは笑い混じりの明るい声だ。顔を見なくとも目を細めて微笑む家主の表情が思い浮かぶ。

だが次の瞬間、言葉が矢となって俺たち 特にミュの胸に突き刺さる事になる。

「魔導師様には感謝しているんです。先日の地震でこれだけの被害を受けたのに、村からは犠牲者が出なかったのですから」

思わず顔を上げてしまった。正面に陣取る人物は想像通り、にこやかに微笑んでいる。

悪意も、言葉以上の意味も持ち合わせてはいないのだろう。素直な感謝の気持ちを表しているだけだ。

しかし何故だろうか。その笑みが逆に皮肉に見えてしまう。

あの時、ダイヤに居た俺たちは地震に気付けなかった。ミユとアリアの状態を考えると、二人も着の身着のまま避難してきたのだろう。

誰一人として対処出来なかった。魔導師失格、そう取られても仕方が無い。

「う……。ふえ……………」

ミユなんて、テーブルに顔を埋めて咽び泣き始めてしまった。頭を撫でても収まる事は無い。胸が締め付けられる。

「……………気に障る事、言ってしまったかしら……………」

「いいえ、気になさらないで下さい。ありがとうございます」

こんな時でもアレクは冷静だ。慌てふためく女の人を宥めて、丁寧に辞儀を試みせる。

間を置かず、此処に居ても埒が明かない。とでも言いたそうに立ち上がると、腰を落ち着けたままの俺たちを見下ろした。

「……………行くぞ」

低く唸るように呟き、返事を待たずに踵を返す。威圧的であり、悲愴感も漂う背中ではドアの先に続く廊下へと消えていった。その後を慌ててフレアが追う。

俺はと言つと、渋々ながらも一応家主に頭を下げて、涙を流し続けるミュを抱き抱えた。歩きながら耳元に顔を近付ける。

「悔しいのは俺たちも一緒だから。ミュは何も、悪い事なんてしてないからね」

囁き掛けると、彼女も小さく頷いてくれた。

部屋の隅には具沢山のスープとパンが置かれていて、湯気と共にブイヨンの香りが立ち上る。夕食時なのだが、誰も口に運ぼうとはしない。

俺とアレクが借りる事になった二階の一室に集まって、これからの事を決めようとしているのだが。一向に話は進まない。木製の質素なベッドに座って片手で頭を抱え込み、憂鬱な気持ちを唸り声や溜め息として吐き出す。隣に居るミュも、向かい側のベッドに居るアレクとフレアも同じように塞ぎ込んでいる。

認めたくはないが、旅は　そう、失敗してしまったのだ。こうなるのも無理は無い。

「……………で、これからどうすれば良いんだ……………？」

ようやく発せられた声だつて、アレクらしからぬ弱々しい物だ。

「こんな……………罫に決まつてる。ミュが聞いたつて言つてた声だつて、もしかしたら黒の魔導師かもしれないし……………」

『かもしれない』ではなく、そうとしか考えられない。どうして

も希望は残しておきたいから、口では断定しなかった。いや、出来なかった。と言った方が正しいだろうか。

「また情報収集する？」

「……いや、そんな時間はねーよ。いつ、また天変地異が起きるか分かんねーからな……」

躊躇いがちに切り出されたフレアの言葉もアレクは退けてしまう。

「じゃあ、答えなんて二つしか無いじゃん。行くか、逃げるか……」

俺たちに逃げ場所なんて無い。何処へ逃げたとしても影は俺たちを見つけ出し、戦いを仕掛けてくるだろう。しかし、それでも

『生』への執着心、それが前に進む決意を鈍らせる。

だが、ミュは違っていた。

「行くしか……ないよ……」

「ミュ……」

「信じるしか……ないよ……」

怖くない筈が無い。行きたい筈が無い。その証拠に緑色の瞳からは大粒の涙が溢れている。彼女の手を、衣服を濡らしていく。それなのに。

彼女は自身の命よりも世界を選んだのだ。異世界である、このスティアを。

その決意が此処に居る全員の心を揺さぶる。

「……オマエらがそれで良いのなら、オレは何も言えねえ……」

アレクの声は震えているし、フレアも咽び泣いてしまった。俺の視界も溜まった涙で歪んでいる。

こんな悲しみに満ちた空気に堪えられなくなってしまったのだろ
う。

「私……もう、休むね……」

ミュは覚束ない足で立ち上がろうとする。両手をベッドに突いて前屈みになり、上体を浮かせて　とその瞬間、均衡が崩れてしまった。咄嗟に両手を伸ばして、辛うじて彼女の身体を受け止める。

「無理しないで」

こんなにも身も心もぼろぼろになるまで追い詰めてしまうなんて俺にもつと力があれば。そう思わずにはいられない。

彼女を向かいの部屋に運ぶと、すぐさまベッドへ寝かせた。小さな右手を両手で包み込み、何とか微笑み掛けてみる。

「何があっても、絶対にミュは死なせないから……」

「ありがとう……」

そんな俺に、ミュも笑顔を返してくれた。が、とても弱々しい。見ているだけで胸が張り裂けそうだ。

片手を彼女の脛の上に被せて眠りを誘う。度重なる心身の疲れのせいだろう。数分も経たずに寝息を立て始めた。

頬には涙の跡が残っているが、穏やかな寝顔だ。この寝顔を明日も、明後日も、その先も見続けたい。こんな思いは俺の我が儘だろうか。

「ミユ、許して……くれるかな……」

誰に問うでも無く、一人静かに呟いた。

第23章 遠ざかる未来

最初から心の何処かで感じていた。この旅は失敗するのではないかと。漠然としたイメージではなく、確かな根拠を持って。

だって、そうではないか。

第一に、ミュ以外の俺たち三人は情報収集を妨害されていた。これだけならば、呪いを解かれたくはないから。と単純に説明付ける事が出来る。

しかし一方で、ミュは情報を持ち帰る事に成功した。影に狙われている彼女が、だ。真っ先に妨害されてもおかしくはないのに。

何か意図的な物を感じてしまう。疑い始めれば切りが無い。

俺たちが得る情報を一つに絞り、そこへ確実に誘き寄せる。そうすれば時間もかけずに、楽に俺たちに接触を持てる。しかも『あいつ』の性格だ。ミュの心に深い傷を負わせて弄ぶつもりなのだろう。なんて卑劣なのだろうか。人の信じる心に漬け込んで、むざむざと捻り潰すなんて。

目を逸らしてしまい明日はすぐそこまで迫っている。この夜闇が明ければ、俺は

「やっぱり……怒る、よね……」

目の前に横たわるミュに問い掛けてみるが、返事は無い。そんなの当たり前だ。彼女は今、安らかな夢の世界に居るのだから。

誰にも聞かれる事無く、細やかな呟きは跡形も残さずに消えゆく筈だったのだが。

不意にドアが鈍い音を立てたのだ。廊下の空気が部屋に流れ込んで、冷気が足元を走り抜ける。

「当たり前だろ。考えるまでもねーよ」

「アレク……。フレア……」

振り返ってみれば、二人が部屋の入口に陣取っていた。悲しげな表情で腕を組み、俺を見下ろす。

すぐさま視線をミユの方へと戻した。

「俺さ、いつかはこうなるんじゃないかって思ってた。考えてみれば変な事ばかりだったし」

独り言のように喋ってみる。まるで現実感が無い。

「神様だって、百年間探し回った結果があれだったんだ。俺たちだけじゃ、他に見つかりっこ無いよ……」

弱音なんか吐きたくはないのに。諦めの言葉ばかりが出てきてしまっ。

「ラウド、逃げましょうよ！ わざわざ罠に嵌る事なんて無いわ！
ねえアレク、そうでしょう？」

声を聞いただけで、フレアの必死さが伝わってくる。それでも、俺もアレクもすぐに返事は出来なかった。背後からは頭を掻き切るような音まで聞こえてくる。

「そうかもしれねー……。でもよー……」

「逃げたって、時間稼ぎにもならない。すぐにあいつは俺たちを追

つてくるよ。それに、ミュは……」

ミュは命懸けで運命に立ち向かおうとしているのだ。その思いを止める事なんて誰にも出来はしない。

もし彼女が躊躇う事があるとすれば、それは俺が抱えている秘密を知ってしまった時だろう。隠し通すと決めたあの秘密を。

首を振りながら、そっと瞼を閉じる。

一方でフレアは

「でも……！」と声を上げたが、その先の言葉は続かなかった。恐らく、アレクに制止されたのだろう。苦痛に満ちた小さな呻きが耳に残る。

間を置いて、アレクが寂しげな声を振り絞る。

「此处で話してもミュを起こしちまうかもしれねーし、あっちの部屋に戻らねーか？」

もつともな意見なのだが、否定せずにはいられなかった。再び首を振って、ミュの手を包んでいる両手にきゅっと力を込める。

「ミュを一人にはしたくない……」

と言うよりも、彼女の傍から離れたくはない。自身の肌で温もりを感じていたい。俺に残された時間が僅かなのだとしたら、余計に。しかし、そんな思いは二人には届かなかつたのだろう。

「でもあたし、ちゃんとラウドと話したいわ」

「オレもだ。……じゃ、オレかフレア、どっちかが交代で此処に残

る。それで問題ねーだろ？」

俺を置き去りにして、二人で話を纏めてしまった。いつもの事ながら、やはり悔しい。

それでも言い返す元気は無く、ただただ沈黙を貫く。

「オマエ、先に話してこい。オレは後で良い……ってか、後にしてくれ」

「分かったわ」

二人が言いたい事は大体分かってている。想像すればする程、元より塞がっていた心が更に沈んでしまう。

「あたし、先に部屋に行ってるわ。ラウドも気持ちの整理が付いたら来てね」

言い残された言葉と共に、ドアは静かに音を立てた。廊下で響く足音も遠ざかっていく。

従わずにいられたら、どれ程楽だろうか。腰を上げる気も起きない。大きな溜め息も出てしまった。

その直後、

「アイツの話、聞いてやってくれ。オマエの気持ちは分からなくもねーよ。でもよー、このままじゃ、オレらが後悔する」

溜め息混じりの言葉が背中に投げ付けられた。アレクにそんなつもりは無いのだろう。だが、俺にしてみれば脅迫されたようなものだ。

そんな風に言われてしまっただけでは、無視する事なんて出来ないでは

ないか。絶対に狡い。と思いつつも、一度瞼を閉じて気持ちを切り替える。

「ミュ、ちょっと待っててね」

言いながら、彼女の頬に片手を当てた。反射的に微かにしかめられる顔も、

「ん〜……」と漏れる小さな声も愛おしくて堪らない。

名残惜しさを引き摺りながらも、ゆっくりと立ち上がる。出口を譲るアレクの顔も真面に見ずに、部屋を後にした。

指定された部屋のドアを静かに開ける。その隙間からは、仄かなランプの光に照らされたフレアの姿を確認する事が出来た。手前にあるベッドに腰を下ろし、こちら側に背を向けている。足音や気配から俺の存在に気付いてはいるのだろうが、振り返る事はしない。近寄りがたい雰囲気だな。などと思いつつも、足を一歩前へと踏み出した。そんな時だ。

「もう、ホントにこうするしかないの……?」

か細い声が空気を震わせる。未だにフレアは微動だにしない。思わず足が止まった。

「えっ……?」

「行くしか……ないの?」

繰り返される声は今にも泣き出しそうな程に震えている。
返す言葉が出てこない。フレアからは見える筈も無いのに、俯きながら首を振ってみせる。

「あたしがミユの立場だったら……きつとラウドを恨むわ。ミユも同じかどうかは分からないけど……。でも、可能性はあるわ」

「……うん」

「好きな人に恨まれて、嫌われて、好きな人を泣かせて、悲しませて……。それでもラウドは後悔しない？」

目を合わせた訳でも無いのに、心を見透かされたような感覚に陥ってしまった。ミユの泣き顔が脳裏を掠めていく。力が加わり、だらりと開かれた両手は拳へと変わった。それだけでは足りず、唇も噛み締める。

「それは……」

「ミユに直接許しを請う事も、謝る事だって出来なくなるのよ。その覚悟がある？」

後悔しない。と言えば嘘になる。ミユに恨まれたり、嫌われてしまふのは確かに苦しい。悲しませるなんてもってのほかだ。

しかし、俺がこうでもしなければミユは殺されてしまふのだ。笑う事も、悲しむ事さえも出来なくなってしまう。そちらの方が遙かに辛い。

何度自問自答を繰り返しても結果は同じだ。

「ミュが二度と笑えなくなるより、俺が嫌われる方が……ずっと良い。後悔するとかしないとか、そんな問題じゃないよ。俺はただ」

「ミュが助かったとしても、笑うなんて……無理よ。ラウドなら分かるでしょ？　それがどんなに辛い事か」

「じゃあ、どうしろって言うのさ！　俺が諦めればミュは殺される！　ミュを助けるためには俺が殺されなきゃいけない！　俺だって、こんな事……！」

あまりにも理不尽な言葉に声を荒げてしまった。次から次へと感情が溢れては冷静さを奪い去っていく。

「後悔しない訳無い！　覚悟だつて出来てないよ！　やっとミュに逢えたのに、それなのに……！」

もう耐え切れない。感情が心の許容範囲を超えている。涙すら出てこない。

ぶつける所の無いそれを全て抱えるようにして、その場に蹲ってしまった。頭を抱えて目を思い切り瞑る。

胸が苦しい。辛い。怖い。嫌だ　苦痛に支配されながらも不思議な事に、

「酷いわよね……。あんまりよ……」

フレアの小さく、微かな囁きは確実に耳へ届く。

「あたしには選べないわ。どっちか一人の命なんて……。だから、

逃げて欲しかった。一分でも、一秒でも良いから」

声が消え入ると、部屋は静寂に包まれた。ところが間を置かずに、ベッドの軋む音が響いたのだ。フレアの気配と足音がこちらへと近付いてくる。そのまま俺の前で立ち止まり、座ったのだろう。白いスカートの裾が目に入り込む。

「四人で笑って帰れたら……って、ずっと思ってたわ。でも、もう……決めたのよね……」

顔を上げてみれば、すぐそこに赤色の瞳があった。長い睫毛が影を作り、物悲しさを強烈に印象付ける。

フレアにこんな表情をさせているのは俺なのだろうか。そう思うと居た堪れなくなってくる。咄嗟に目を逸らす。

「ホントは行きたくなんかない。それでも、行くしかないから……」

ミュは『死』を覚悟している。俺だけ逃げ出す事なんて出来はない。彼女のせいにはしたくないが、これが事実だ。

項垂れて、首を軽く振ってみせる。すると力強い声が返ってきた。

「あたし、絶対許さないわ。黒の魔導師も、ラウドにこんな決断をさせた神様も」

「フレア……」

それまで憂えていた人物だとは思えない。瞳 いや、表情に生気が宿っている。眉尻や目尻はきりっと上げられていて、意志の強さを読み取れた。

その瞳で真つ直ぐに俺を貫き、

「ただ……」と言葉を繋げる。

「これだけは約束してくれる？ 最後まで望みは捨てないって」

「……うん」

フレアだけではない。カイルとも、そして自分自身とも交わした約束だ。

自信を持って言い切れる。最後まで足掻いてみせると。決意も新たに大きく頷いてみせた。

恐らく納得はしていない。それでもフレアはこれ以上、俺に詰め寄るうとはしなかった。早々に立ち上がり、部屋から姿を消す。今はアレクに事の顛末を話しているのだろう。

ベッドに移動するどころか腰を上げようとせず、俯いて物思いに耽る。

去る直前、フレアはにっこりと笑って言葉を残した。それが波紋を描くかのように心に響いていく。

やっと本音を聞かせてくれたわね。ありがとう

別に本音を話したつもりは無い。ただ、取り乱してしまっただけだ。それなのに、俺が礼を言われるなんて。

わだかまる気持ちをどうにかしようと思いを押し付けてみる。だが、どうにかなる訳が無かった。余計に苦しくなるだけだ。

こんな事をしている場合ではない。早く気持ちを切り替えなくては。後にはプライドを賭けた戦いを控えているのだから。

瞼を閉じて暗闇に身を置き、

「ふう……」と息を吐く。そうこうしていると、重たい足音が聞こ

え始めたのだ。みるみるうちに近付いてきて、部屋の前でぴたりと止まる。

「入るぞ」

『駄目だ』と答えられたらどれ程良いだろうか。だが、もしそんな事を言えば怒鳴られるに決まっている。最悪の場合、殴られるだろう。

『入っても良い』とは正直言えず、薄目を開けてアレクの様子を窺うに止まった。

言葉通りにドアを開け、再び足音を鳴らし始める。数歩程度で俺の正面に回り込むと、どかりと腰を下ろした。威圧的なオーラまで漂わせている。

第一声は唐突に発せられた。

「オレが何言いたいのか、オマエも分かってんだろ？」

口調は既に脅しに近い。有無を言わせない迫力がある。

だが、此処で屈する訳にはいかない。意地でも己の信念を貫き通す。

言葉ではなく、鋭い視線を向ける事で意思を表明してみせた。同じように揺るぎない黄色の瞳が俺の瞳とぶつかり合う。

「ミュだけじゃねーよ。オレらだって、オマエを犠牲にしたくねーんだ。フレアの話からも伝わっただろ？」

だから、アレクを犠牲にしると言っただろうか。まるで理屈が通っていない。無茶苦茶だ。

無言のまま首だけを振ってみせる。その間も視線を外したりはしない。

「寄越せ」

「……嫌だ」

「寄越せって言ってんだろ」

「絶対に嫌だ！」

迫り来る手を咄嗟に払い退け、両手で包むようにして短剣を庇う。途端にアレクの目は一際険しさを増した。

「オマエ、そんなに死にてえのか?! ソレさえ渡せばミユと一緒に居られんだぞ?! 百年越しの願いが叶うんだぞ?! 素直になれよ!」

死にたい訳が無い。願いを叶えたくない訳も無い。しかし、己の欲望のために他者の未来を奪うなんて。出来る筈が無いではないか。

「……その言葉、そのまんまアレクに返すよ! そんなに死にたいの?! 前にも言ったじゃん! フレアを悲しませて、俺たちに罪を背負わせる事になるんだよ?! やっぱアレクは分かかってない!」

荒々しい声で思いの丈を吐き出す。言葉を投げ付けける程に、アレクは苦虫を噛み潰したような顔へと変えていく。

これでようやく諦めただろうか。そう思ったのも束の間、アレクは予想外の言葉を口にし始めたのだ。

「『生きたい』って言うてくれ……」

先程までの威厳は何処へ行ってしまったのだろうか。紡がれる声は切なさに震えている。

言葉を失ってしまった。

「『死にたくない』って言うてくれ……」

一体、アレクに何が起きたと言うのだろうか。

啞然とする俺を気にも留めず、大きな口は途切れがちながらも心内を紡ぎ出していく。

「オマエの方こそ分かってねーみたいだから教えてやる。オマエが無茶しまくって、寿命縮めて、オレらがどんなに辛かったか。フレアなんかよー、泣かねー日が無いってくらいだったんだぞ？」

そこまで言い切ると、アレクは俯いて前髪を掻き上げる。小さな溜め息まで漏らした。

「オマエの命はオマエ一人の物じゃねえ。そんなに軽い物じゃねーんだよ。こんな事、終わらせられる筈だろ？ 幸せになれる筈だろ？ それなのによー、何なんだ……。仲間が減って、悲しむヤツが居て……。そんなの、もう……。見たくねーんだよ……」

涙こそ見せていないが、俺の心を揺さぶるには充分だ。こちらの方が泣き出しそうになってくる。

しかし、だからと言ってアレクに使命を擦り付ける理由にはならない。これは俺が成し遂げなくてはいけない事だから。カノンを守

り切れずに、ミユにまで呪いを引き継がせてしまったこの俺が。代わりなんて何処にも居ない。

意を決して短剣を鞘から抜き取り、柄を両手で握った。力はいれしていないから、切っ先は床を向いている。仄かなランプの灯りの下でも、刃が反射させる光は角度が悪ければ目を眩ませる程だ。

それを顔の高さまでゆっくりと持ち上げて、すうつと息を吸い込んだ。

「これは元々、神様が俺にくれた物だ。アレクのものじゃない」

目前の人物に言い聞かせるように、正確に紡いでいく。

「何を言われても渡すつもりは無いよ。……剣だけじゃない。使命も、重荷も、全部アレクには譲らない。もし、どれか一つでも取られたら、百年前から引き摺ってる後悔を振り切れなくなるから……」

ミユを置き去りにする後悔よりも遥かに重い後悔だ。俺自身が彼女を守り抜けなくては、百年間も転生を繰り返してきた意味も失ってしまう。

翳していた物を下ろし、焦点をアレクに合わせる。そこには覇気が全く無い虚ろな瞳があるばかりだ。

「オレの気持ちは……伝わらなかつたんだな」

「じゅん」

本当は『生きたい』『死にたくなんかない』と言ってやりたかった。だが、そんな事をすればアレクに『死ね』と言っているのと同

じだ。絶対に出来はしない。

淀みきった部屋の空気に耐えきれず、剣を鞘に戻しながら腰を上げた。アレクに背を向けて出口を目指す。

「おい、何処に行くんだ？」

「外の風に当たってくる」

掛けられた言葉にも足を止めたりはしない。振り返る事も無く、白々しくかわした。

ミュの元へと直行しようか。とも迷ったのだが、気持ちを整理しなくては彼女の前で涙を見せてしまうだろう。眠っているとは言え、不安を増長させるような事はしたくない。

ランプも持たずに部屋を後にし、階段を下りる。静まり返った薄暗い一階も通り抜けて、突き当たりの玄関を開けた。

世界で一番切ない夜闇が俺を包み込む

村に到着した頃の晴天は何処へ行ってしまったのだろうか。円盤型に開けた空に昨夜のような眩い輝きは無かった。恐らく、灰色の幕が俺と光源とを隔てているのだろう。

村の傍らへと移動して木の幹に背中を預ける。狭い夜空を見上げながら、

「はぁ……」と息を吐き出した。

「……リザード。昨日のミュとの話、聞いてたんでしょ？」

“えっ？ うん……”

俺たちの声以外には鳥の鳴き声と木々がざわめく音しか聞こえてこない。ひんやりとした風が頬を手荒く叩いていく。

「俺さ、星にも見放されたのかな。昨日掛けた願い事、叶えてくれなさそうだし。また願いを掛けたくても、これじゃ、流れ星探せないよ」

叶えてくれないのなら、せめて泣けない俺の代わりに涙を流してくれば良いのに。嘆いてはみるのだが、天候は変わりそうにない。

“ごめん。俺がカノンの呪いを解けてたら、ラウドにこんな事させなくて済んだのに……”

「良いよ。辛いのは一緒じゃん？」

“でもさ、やっぱり”

「ストップ。それ以上言われたら、俺、リザードの事恨んじやいそうだから」

俺から話を切り出したのに、こんな言い方は酷いと思われるかもしれない。だが、それが事実だった。

口籠もってしまったリザードを気にしつつ、希望の無い頭上から視線を落とす。とその時、胸元に固い小さな何かが当たったのだ。

一体何なのだろうか。無気力ながらも訝って片手で確かめてみる。鎖状の細い金属に、先端にはドーナツ型の物体。間違えようが無い。明らかにリザードの結婚指輪だ。

チエーンに繋いだまま、指輪だけを手の平の上に転がす。この重みが酷く愛おしい。

「ミュ……」

呟きながら、きつく握り締めた。

たとえ命を失う事になろうとも、俺は本望だ。悲しいが、念願を果たす事は出来る。ただ、ミュを想うと不憫で堪らない。理由も分からずに、たった一人遺されるのだから。

「諦めないけど……それでも駄目だったら、ごめん……」

痛みが分かるからこそ辛い。胸が締め付けられるようだ。

此処で謝ってもミュには伝わらない。それは分かっているのだが、謝らずにはいられなかった。

そんな俺を見兼ねてか、

“その気持ち、地の子には伝えないの？”

意を決したようにリザードが話し掛けてきたのだ。先程の事を気にしているのだろう。声に勢いはあるが、張りは無い。

それでも否定せざるを得なかった。

「伝えられる訳無いじゃん。そんな事したら、ミュにバレるよ」

出来る事なら伝えたい。しかし、知れてしまえば一巻の終わりだ。彼女を救えなくなってしまう。それなのに。

ぶっきらぼうに返しても、相手は退こうとしない。

“言葉にも色々あるじゃん。声だけじゃなくて、文字とかさ”

「文字？」

“うん”

『文字』とは『手紙』と言う事だろうか。俺の気持ち、望み、願い、その全てを手紙に

「……そっか。リザード、ありがとう」

何故、今まで気付かなかったのだろうか。

明日は待つてくれない。急がなくては。焦りを抱きながら、服に付いた埃を払いもせず、大地を蹴った。

部屋の奥に、申し訳程度に置かれた小さな机と椅子。そこに腰を下ろして、一枚の便箋を広げる。筆記用具の持ち合わせはなかったから家主に借りようと思ったのだが、既に眠ってしまったらしい。俺の呼び掛けにも反応は無かった。仕方無く、許可を貰わずに居間から戴いてきてしまったのだ。

入口から見て手前側のベッドにはアレクが横になっている。こちらに背を向けていて、珍しくいびきを掻いていない。

こんな時によく眠れるものだ。と呆れながらも、眠っていてくれて良かった。と胸を撫で下ろす自分が居る。

「ふう……」

さて、手紙を書くと言っても、具体的に何を書けば良いのだろうか

か。筆をインクに浸しながら、頭の中で試行錯誤を繰り返す。まずは宛名だ。ただ単に『ミユへ』と書いたのでは安っぽい気がする。どうせなら、それだけでも思いが伝わるような何かを。刹那、天からの囁きが聞こえたのだ。一気に筆を走らせる。

「これでよし……っ」と

次は肝心の内容、一番気を遣わなくてはいけない物だ。端的、且つ明解に気持ちを表現しなくては。

唸りながら、これまでの出来事を思い返す。ミユと出逢い、傷付き、励まし合い、愛し合った掛け替えの無い数週間

ミユの様々な表情が脳裏を駆け巡る。言葉では言い表しようのない思いが心を、いや、全身を満たしていく。

とその時、何やら異変が起きたのだ。便箋の上にぽたぽたと水滴が落ちては黒の滲む海を形作る。

一体、何事だろうか。訝りながら手を頬に当ててみれば、筋状に水が流れた跡を確認出来た。と言う事は。

「あれっ……」

もしかして、俺は泣いているのだろうか。

「何で……」

今頃になって涙が出てくるなんて。タイミングが悪過ぎる。そう思いながらも、心の何処かでは納得していた。

だって、そうではないか。ミユは短期間ながらも、胸が詰まる程の、沢山の思い出を与えてくれたのだ。しかも彼女がこれを目にする時には、彼女と俺は

端的に文章が纏まる筈が無い。想えば想う程に涙として溢れ出て

くる。もう、手紙を書くどころの話ではなくなってしまった。

荷物の中からタオルを引っ張り出して目の下に押し当てる。こうでもしなくては、いつまで経っても机の前から離れられないだろう。駄目になってしまった便箋を真新しい便箋に交換する。嗚咽を漏らしながら、震える右手を必死に動かした。

危惧した通り、手紙が完成した頃には湿った便箋が机の片隅に山積みになっていた。俺がミユの元へと戻った後もその場に留まり、ひっそりと俺の嘆きを代弁していたのだろう。

人一倍素直で、繊細な君へ

最初に言わせて欲しい。ごめんね。こんな結末しか選べなかった俺をどうか許して。何度も考えたけど、同じ所に行き着くんだ。君を死なせたくはない。そのためには、こうするしかなかったんだ。

これから今までの事を白状するけど、一つだけ約束して？ 絶対、自分自身を憎まないで。恨まないで。これは俺が選んだ結果で、君が悪い訳じゃない。君の性格だから自分が悪いって考えちゃうだろうけど、君が自分自身を呪う事が、俺にとって一番辛い事だから。

良い？ じゃあ、話すよ。

俺、君を置いて水の塔に行ったよね？ その時、神様に言われた

んだ。君を救いたいのなら、誰かが呪いの身代わりになるしかない。その役目は俺が一番良いだろうって。

そんな事、他の誰かになんて頼めないし、頼みたくもない。誰かの犠牲の上に掴んだ幸せなんて、本当の幸せじゃないから。

いつまでも君と一緒にいたかった。やっと出逢えたんだから。でも、それは叶えられない願いだった。君か俺か、どちらかの命しか選べないのなら、迷わず君の命を選ぶよ。

もう、あんなに悲しい思いをするのは嫌だったんだ。そんな思いを君に押し付けてしまった俺と言える事じゃないよね。本当にごめん。

ただ、これだけは誓うよ。君みたいに長い間待たせたりはしない。絶対に逢いに行くから。だから、それまで少しだけ我慢して？ほんの少しだけ。

最後に、君に出逢えて本当に良かった。愛してる。たとえ何度生まれ変わったとしても、この気持ちは変わらないから。

生まれてきてくれて、ありがとう。

君を永遠に想い続ける者より

第24章 黒の瞳

いつ命の灯火が消えるとも知れないのに、熟睡出来る筈が無かった。ミユの片手を握ったまま微睡んでは、ふとした拍子に覚醒する。その繰り返しだ。

それなのに、朝を迎えても不思議と眠気は感じられない。寧ろ汗えてしまっている。

今日はやると決めていた事があるのだ。まあ、寝坊をせずに済んだから丁度良いのかもしれない。

ミユの頬に唇を落とし、夜明けと共に行動へと移した。

まずは手慣らしだ。部屋、廊下、階段、居間　行きがけに目に付いた家の破損箇所を片っ端から直していく。ひび割れた木の壁は瞬く間に新品同様となり、板で応急処置を施された窓枠にもガラスが嵌る。

一通り内部の修復を終えて外へと出てみれば、見上げた空は旅立ちに相応しい、雲一つ無い朝焼けだった。昨夜の雲は何処へ行ってしまったのだろうか。何とも皮肉なものだ。

と感傷に浸っている場合ではない。誰かに見つかる前に事を済ませてしまわなくては。

早速、一軒分の建材となっていた瓦礫の脇へと歩み寄り、精神統一に入る。先程直した窓や壁とは訳が違う。家一軒を丸ごとなのだ。それ相応の体力と集中力が要る。

瞼を閉じつつ、息を大きく吐き出す。完成図を頭の中にイメージして、直れ、直れと念じる。そんな時に。

“ラウド、何してるのさ！　家一軒建て直すなんて……体力無くなるよー！”

リザードが横槍を入れてきたのだ。

「ちょっと黙ってて。気が散るから」

と言っても相手が納得する筈が無く、

“黙ってられる訳無いじゃん！　すぐに止めなよ！”

荒々しく喚き散らす。

今日ばかりは無茶をしていると認めよう。しかし、俺だって引き下がる訳にはいかない。こうしなくてはならない理由があるから。諦める気配を見せないリザードに無視を決め込み、改めて拡散してしまつた思考を統合する。

全てはミノの涙を笑顔に変えるために

ずっしりとした、丸太が引き摺られる重々しい音、ガラス片がぶつかり合う小気味良い音　波が押し寄せるようにざわめき始め、棹に収まればすうつと引いていく。それと同時に身体中から汗が噴き出し、息も切れてしまつた。まるで、街中を全速力で走り回つたかのような。

それでもくずおれるまでには至らなかつた。予想していたよりも行けるかもしれない。

瓦礫の山はあと十軒分程、と言つたところだろうか。額の汗を拭いつつ、黙々と作業を続けていく。未だに怒鳴り続けるリザードを無視したままで。

しかし、先程の考えは甘かつた。とすぐに気付かされる事になる。

魔法を使えば使う程に体力は奪われ、視界は霞む。心臓も悲鳴を上げているし、膝は体重を支えきれなくなってしまった。

魔法を使つてはしゃがみ込み、少し休憩してから立ち上がる。何度それを繰り返しただろうか。周りを見回してみれば、ミユの涙を誘った物は半分に残っていた。俺はこれから先、ミユを延々と悲しませる事になるかもしれないのだ。どうせ果てるなら、せめてこれだけは

負けてはいけない。と己に言い聞かせ、腕の力も借りて膝を伸ばす。刹那、立ち眩みに襲われた。顔から血の気が引いていく。

「っ……」

思い通りにならない身体が疎ましくて堪らない。リザードが黙り込んでしまったのにも気付かない程だ。

再び折り畳まれた膝を奮い立たせ、瞼を閉じる。とその時だ。

「……ラウドっ！ 何してるのっ?!」

焦りにも似た悲鳴が周囲を、村を振動させる。瞬時に全身が凍り付く。

「……ミユっ」

「もう止めてっ！ 一人でこんな事したら倒れちゃうよっ!」

最悪だ。一番見られたくなかった人に見つかるなんて。

どう言い逃れれば良いのだろうか。そう考えている間にもミユは俺の胸の中に飛び込み、潤む瞳で俺の顔を見上げる。

もう、笑って誤魔化すしか無くなってしまった。

「心配掛けちゃったかな……。大丈夫だよ」

そうは言ってみても説得力が無い。声は掠れているし、瞼だつて重いのだから。

そんな俺の言動が余計にミユの機嫌を損ねてしまったらしい。

「バカあゝっ！　大丈夫じゃないよっ！」

「ごめんごめん。もうしないから」

頭を掻きながら謝ってみても彼女の目は吊り上がり、頬は膨らんでいくばかりだ。赤みも増していく。

困ったな。手が付けられなくなる前に、何か手を打たなくては。苦笑いしながら考えていると、彼女は強引に俺の腕を取って村の外れへ向かって歩き出したのだ。一本の木の幹の前で足を止めると、何も言わずに俺の両肩を鷲掴みにして圧力を掛ける。抵抗も出来ずに、されるがまま幹を背凭れにして腰を下ろした。

座れた。という安堵感からだろうか。全身の力が抜けていく。大きな吐息まで漏れてしまった。

続けてミユも大袈裟に溜め息を吐き、俺の隣に腰を下ろす。いつもとは違って騒がしい音を立てながら、だ。目を合わせた訳でもないのに、突き刺さるような視線まで感じる。

疲れからくる物と共に、冷や汗まで溢れてくる。無意識のうちに手で額を拭っていた。

彼女は様子を窺いながらも、不機嫌な声色で切り出す。

「何でこんな事したの……？」

「……お世話になった恩返し」

心内が透けてしまいそうで怖かったのだが、いつまでも目を逸らしたままではいけない。と彼女に笑顔を向けた。とは言っても、上手くは笑えていないのだろう。

予想通りのしかめっ面がそこにはあった。

「……それだけ？」

「うん」

『うん』としか答えられない。言葉を重ねれば重ねる程にボロが出てしまいそうだから。

これでは言い逃れなんて出来ないのは分かっていた。が、強い視線を直に浴び続けると悲しくなってくる。

不本意ながらも折角二人きりになれた時間、それを無駄にはしたくない。今日という日に、こんなに苦い思い出を残したくはないのに。

そんな俺の気持ちを嘲笑うかのように、冷たい風が何度となく俺とミユの間を摺り抜けていく。

この雰囲気は何とかしなくては。それ一心で頭を働かせる。その甲斐あってか、彼女の気持ちを紛らしてくれる物の一つだけ思い付いたのだ。しかも、俺の心をも癒やしてくれる物を。

懐に手を突っ込み、ある筈の『それ』を探し当てる。手の平の上に乗せてみれば、収縮されているにも関わらず金属特有の鋭い光を反射させた。

壊れていないか確認しつつ、『それ』をミユの前へと差し出す。

「あのさ。これ、持ってきてちゃった」

「へっ?」

やはり、小さままでは分からないらしい。彼女は目を白黒させて、首まで傾げてみせる。その仕草が小鳥のように可愛らしいので、思わず笑ってしまった。

魔法を解いて『それ』を元に戻していく。正体分かるや否や、彼女の視線は俺の手の平から顔へと移った。

それもその筈だ。俺が持っているのは、彼女はダイヤに置いてきたと思っ込んでいるであろう銀色の笛なのだから。

固まって微動だにしないミュに、更に笛を近付ける。

「これ、吹いて?」

「……えっ?! 今っ?!」

「うん。ミュの笛の音、聞きたい」

笑みを絶やさず、きっぱりと言って退けた。

彼女は困ったように少しだけ俯くと、上目遣いで俺を見上げる。

「……でも、村の人に迷惑掛かるよ?」

「大丈夫だよ」

こんな早朝に故意に音を出すなんて非常識極まりない。確実に睡眠妨害だ。しかし今を逃せばもう、彼女の笛の音を聞けないかもしれないのも事実なのだ。

神様も今日くらいは俺の我が儘を許してくれるだろう。と食い入るようにミノの瞳を見詰める。

そんな俺の反応に、彼女は益々困ってしまったようだ。

「他にもあるのっ。それに……」

言いながら、長い睫毛も伏せる。

「何？」

「恥ずかしい……」

絞り出された声は掻き消えてしまいそうな程に弱々しい。薔薇の花弁を散らしたように、彼女の頬がぱあっと赤く染まっていく。手元を見れば、カ一杯にスカートを握り締めている。

恥じらいを見せる彼女があまりにも可愛らしいので、また笑いが吹き出てしまった。

「今更、恥ずかしがる事無いじゃん」

「む……」

いくら頬を膨らませても、潤んだ瞳で見詰められても折れはしない。

俺の意志の強さに観念したのだろう。彼女は笛を掴み取ると、幹の裏手へ回り込んだ。枯れ葉の擦れる音が止むと、普段よりも一オクターブ低い声で威嚇する。

「吹くから、見ないでっ」

だが、彼女の紅潮した顔を思い出すと全く恐く聞こえないのだ。

「分かった」

そう返す時でさえ笑い混じりになってしまった。

背後から大きな呼吸音が何度か聞こえた後、慎ましやかな音楽会は始まった。

恐る恐る紡がれる出だし、揺れる旋律、息切れしてしまう収束部分、全てがミユの緊張を物語っている。外は音が反響しないから、その微妙な変化が強調されているのかもしれない。

それでも彼女は演奏を止めようとはしなかった。息を吸っては空気を震わせ、時間に温かみを持たせていく。

その直向きさが、懸命さが凄く嬉しい。他の誰でもない、俺だけのために紡がれた音なのだ。どんなに素晴らしい演奏家でも、彼女以上に俺の感情を揺さぶれはしない。心の籠もった美しい音

頬に生暖かいものが伝う。

演奏が終わると、彼女はこれまでで一番大きく息を吐き出す。大袈裟に

「ぶはあ……」なんて声も出さずから、笑いを堪えられなかった。頬を二の腕で擦りながら演奏の余韻に浸る。

一方で、ミユは何処か遠慮がちだ。俺の隣にちょこんと座り直し、子犬のような眼差しを向けてくる。

「やっぱり下手だったよね……」

頬には未だに赤みが差しているが、表情は冴えない。

「そんな事無いよ。綺麗な音だった」

そう返すと、彼女は眉間に皺まで寄せてしまった。悲しそうに目も伏せる。

「……嘘っ」

「嘘じゃないよ」

何故、嘘を吐く必要があるのだろうか。突然せがんだのにも関わらず、素晴らしい演奏を聞かせてくれたのに。

俺の感動を分かってもらおうと、手は自然とミユの頭へ伸びていた。艶やかな髪の毛の流れに優しく沿わせる。

そんな幸せも長くは続かないものだ。無慈悲な現実は突如として舞い戻る

「オマエら、こんな所に居たのか?!」

けたたましい声に、悪寒が全身を駆け巡った。鳥肌は立つし、かなり心臓に悪い。

顔を上げてみれば真正面に、アレクが偉そうに仁王立ちしていた。隣には寒さに顔をしかめるフレアも居る。

「出発するぞ！ オマエらの荷物は持ってきてやったからよー」

折角の雰囲気つぶち壊してはないか。

もつと他に気の利いた言い方は無いのか。文句を言ってやるうと口を開きかけたのだが、アレクによって阻まれてしまった。

俺の荷物を放り投げてきたのだ。魔法を解いたのだろう。小さくしてあったそれは空中で徐々に膨れ上がり、俺の腕の中で鈍い音を立てる。中身を確認しろ。と言わんばかりに大きく口まで広げている。

大事な物は肌身離さず持っているし、別に忘れ物をしたとしても大した事は無いのだが。まあ、仕方が無い。

ミュも同じ事をしているのを気配と音で感じながら、怠い上半身を木の幹から離れた。一息吐き、折り重なる衣服を掻き分けていくところが。

「ありがと……あれっ？ 足りない……」

いくら弄ってみても見当たらないのだ。昨日仕上げたばかりの『あれ』が。

「ああっ？」

「……取りに行ってくる」

汚す訳にはいかないから、あれだけは手元から離していたのだ。

まさか、机の上に置き去りになっているのだろうか。誰かに見られでもすれば堪ったものではない。一度、確認に戻るしかないだろう。

こんな短時間で体力が回復する筈も無く、立ち上がればまた目眩が襲いくる。呼吸も若干苦しい。それでも重たい身体を引き摺って、痛い程の視線を浴びながら戸口を目指した。

踏み出す度に軋む木目の床、段差が堪える階段、手を壁に突きながら進んでいく。あともう少し

「良かった……。あつた……」

ドアを開ければ、薄暗い中に一筋の光が差した。先にはベッドが二つにこぢんまりとした机、その一角に降り注ぐ朝日を受ける白く四角い物が見て取れる。

予想通りだ。昨夜、仕舞い忘れたのだろう。

一先ずほつと胸を撫で下ろし、早々にミユへ宛てた手紙を手にとった。ところが、だ。

踵を返した俺の視線の先には、

「アレク……」

黄色の瞳が待ち受けていた。その目つきは物悲しくもあり、苛立っているようでもある。

「オマエなあ……。少し考えろよ」

「何が？」

「何がじゃねーよ」

あからさまに不機嫌さを露わにする俺に呆れたのだろうか。今度は面倒臭そうに片手で頭を掻き、重量感のある足を持ち上げる。

アレクは俺の前でぴたりと止まると、片手をこちらに差し出して

きた。手の平の上には、何やら丸く白い光沢のある物体が乗っている。

「これ、何……？」

「ただのキャンディだ。オマエにやる。疲れた時には糖分だろ」

どうやら俺の行動は見透かされていたらしい。まあ、村の景観を見れば一目瞭然なのだが。

断る理由も無く、言われるがままに飴玉を摘むと口の中に放った。広がるのは砂糖の甘さだけ、特別な味付けは一切されていない。それが安らぎとなって、全身に染み渡っていく。

そうしている間もアレクの視線は俺から離れない。

「取り敢えず、少し休憩しろ。これから何が起きるか分かんねーかならな」

今度は溜め息を吐いてベッドを指差す。

これも断る理由が無いから、言葉も返さずに素直に従った。自身の足音が妙に耳に残る。

寝転がりたくなる衝動を抑え、柔らかな感触に包まれながら呼吸を整えていく。もう一方のベッドにはアレクが陣取っていて、物凄い圧迫感を与えてくる。

向かい合いながらも互いに目を伏せ、口をつぐむ。俺は疲れのせいなのだが、恐らくアレクはこちらの様子を窺っているのだろう。

この緊張状態の中、そつと口を開いた。

「ミュ、崩れた家見た途端泣き出しちゃったからさ。もう泣かせた

「なくて……」

瞬間、アレクの目がこちらを向いた。顔を見なくても気配で分かる。

「だからってよー、そこまでする事ねーだろ」

「自己満足なのは分かってる。でもさ……」

そうせずにはいらなかったから。喉まで出かけているのに声にならない。

唇を噛み締める。

「あんま無茶ばっかすんなよ。ミュ、心配させるだけだぞ」

「うん……」

今更こんな事を言うなんて。内心で憤りを感じながらも、軽く頷いてみせた。

あまり間を置かず、吐息混じりに

「アイツら待たせてるから、そろそろ行くぞ」と腰を上げる。そんなアレクに思わず制止を求めていた。瞬時に小さな風が巻き起こる。

「これ、預かっててくれない？」

「……何だ？」

「俺に何かあったら……ミュに……」

託せるのはもう、目の前に居る人物しか居ない。

反応を窺いながら、おずおずと手紙を差し出す。アレクだって、一目でこれが何であるのか分かるだろう。殴られるのも覚悟の上だ。予想通り、茶色の眉と眉の間には深い皺が刻まれた。

「絶対、だよ」

それでも、俺も怯む訳にはいかないのだ。瞳に力を宿してアレクを見据える。

俺の思いが通じたのだろうか。乱暴ながらも手紙を取り、俺に背を向ける。

「オレもな、諦め悪いんだ。後先考えねーで突っ走る。前に言った事覚えてるか？ オレはオマエの邪魔するからな。隙、見せんじゃねーぞ」

『前に言った事』とは何だろうか。話を聞きながら頭を働かせる。最近の事から神と話をした時の事まで。すると一つの言葉が頭を過ぎったのだ。

その時はオレがオマエを

やはり、そう言う意味だったのか。と心の何処かで納得してしま

う。
一度も振り返らずにゆっくりと歩を進め始めたアレクに、決意も新たに拳を握り締めた。

先程よりも疲れは感じない。それでも会話もせず、アレクに付

いて家を出る。日光を直に浴びるなり、思い描いていた通りの場所に残された二人の姿を確認出来た。

しかし、その様子は普通ではない。ミュはフレアに腕を掴まれ、立ち上がれない状態になっていたのだ。

恐らく部屋の中の事態を想定し、俺たちを追い掛けようとしたミュをフレアが制止してくれていたのだろう。その証拠にフレアと目が合った瞬間、彼女の拘束は解かれる。

俺が荷物の前に到着すると、ミュは小首を傾げて俺を見上げた。可愛らしい仕草なのだが、その何気ない変化が俺に緊張感を与える。

「忘れ物、見つかった？」

「うん」

「何を忘れたの？」と聞かれそうに怖かったのだ。が、彼女にそのつもりは無いらしい。

良かった。とほっとしながら、何となく荷物に手を翳す。勿論、魔法をかけるために、だ。そんな俺の行動に彼女の表情は一変した。

「駄目だよっ」

ガラス玉のような目を吊り上げ、頬まで膨らませる。荷物の上で止まっていた手も払い除けられてしまった。

俺が魔法を発動させる前に、荷物はみるみるうちに縮んでいく。

「また、ミュに心配掛けちゃった」

こんな筈では無かったのに。と今更嘆いてみてももう遅い。

大丈夫だよ。そんな意味も込めて笑ってみたのだが、彼女の表情を変える事は出来なかった。

溜め息を吐きたいところをどうにか抑える。そんな時に。

「オマエらに最終確認するけどよー」

背後でアレクが囁いたのだ。振り返ってみれば、憂いを帯びた目で俺とミユを見比べている。

「これで……良いんだな？」

そんな事を聞かれても、だ。

「……うん」

「俺は……ミユが良いなら」

彼女が肯定するのならば、そう答える以外には無い。

「そーか……。じゃ、行くぞ」

大して感情も込めずに呟くと、アレクは薄茶の長い髪を横に靡かせる。フレアも一度は悲しげに俺たちを見たのだが、歩き始めたアレクへすぐに寄り添う。

俺とミユの二人だけが取り残されてしまった。足が石にでもなっってしまったかのように、なかなか動いてくれない。

「私たちも……行くこう？」

ミユも俺と同じように、必死に恐怖と戦っているのだろう。口ではそう言うものの、前へ進む気配は見せない。スカートを力一杯に握り締めている手は震えているし、顔だって強張っている。

いたたまれなくなり、彼女の両手を取っていた。本当は抱き締め
てあげたかったのだが、今はそんな事を出来る場ではないだろう。
それでも彼女の震えは徐々に収まっていき、硬直も解かれ始める。
それを支えに、俺も足を運んでいく。

最終局面を迎えるであろう敵地へと向けて

再び鬱蒼と生い茂る森の中へと足を踏み入れた。脇道なのだろう
か。昨日までの道以上に、碌に整備をされていない。所々窪んでも
いる。注意しなくては躓いてしまいそうだ。

耳に届くのは風が木の葉をざわめかせる音や、俺たちが地を踏み
締める音くらいだろう。時々、鳥の爽やかな鳴き声も聞こえるが。
ミュどころか先を歩くアレクも、フレアすらも話を持ち掛けようと
はしない。

こんな状態では余計に緊張が増してしまう。それが握っている手
からミュに伝わってしまうのではないか。と別の心配までしてしま
う。

何とかならないだろうか。落ち葉が重なる道に視線を落とし、声
も上げずに考える。

息を吸い込み、思い切って口を開いた。

「それにしても、アレクって敬語使えたんだね」

良い話題が思い付かず、咄嗟に俺の前を歩く人物を馬鹿にしてみ
る。まあ、適切な選択だろう。

「普段のアレクがあれじゃん」

ふてぶてしくて騒々しい。村での態度とはかけ離れている。目を細めて、こっそりとアレクの背を指で差してみせた。

「ミュは笑いを堪えきれなかったのだらうか。片手を口に当てて「ぶっ……」と吹き出してしまった。」

「私もビツクリしちゃった」

恐らくアレクではなく、俺の何かが笑いを誘ってしまったのだらう。おかしな仕草でもしていたのかもしれない。

それでも、彼女に笑顔が戻った事が素直に嬉しかった。

「敬語使うアレクって、絶対おかしいよ……」

この和やかな雰囲気絶やしてはいけない。と更に話を膨らませようと試みる。

しかし、こんな事を言われてアレクも黙っている筈が無かった。

「オマエら、聞こえてるぞっ?!」

「ひゃっ! ごめんなさいっ!」

顔だけではない。振り返ったアレクは拳を震わせ、全身で怒りを表現している。出発当日の朝、ダイヤでのフレアの殺気にも引けを取らない。

そんなアレクに、ミュは肩を竦める。

「謝んなくても良いよ。アレクだし」

だが、いくら怒ろうとも事実が変わりはしないのだ。

「オマエ、どーいう意味だっ?!」

「そのまんまの意味だよ」

「何ー!?!」

そんなに言われるのが嫌なら、普段の態度を改めれば良いのに。頭から湯気でも吹き出しそうなアレクに、目を細めて呆れを表す。どうやら呆れたのは俺だけではなかったようだ。

「もう、一々喧嘩しないで。ホントにバカなんだから……」

話の外に追い出されていたフレアまでもが振り返り、気だるそうに溜め息を吐いてみせる。アレクのみならず、俺に対してまで。

何故、俺が叱られなくてはならないのだろうか。訳が分からない。自分の発言を棚に上げて心の中で悪態を吐いてみる。勿論、俺を睨み続けるアレクに冷ややかな目を向けたまま、だ。

と突然、

「あっ……」

フレアが小さな声を上げたのだ。その視線の先には俺たちの姿は無い。道の前方 目的地の方を向いている。

何かを見つけたのだろうか。とフレアの指差す場所に目を凝らしてみれば。

「家だ……」

一瞬、時が止まったように感じられた。

見間違えようが無い。森の中に置かれると保護色になってしまっただが、形は明らかに丸太小屋だ。一回り小さいものの、村の建物に似通っている。

もう言い争いを続けている場合ではない。運命が決定付けられる瞬間がすぐそこまで迫っているのだから。

否が応にも緊張感が高まる。心臓は激しく鼓動しているし、生唾まで飲み込んでしまった。

しかし、此処で立ち止まっている訳にはいかない。歩みを再開させて、力の入る小さな手をきつく握り返す。

この掛け替えの無い温もりは絶対に守り抜く。そんな覚悟を決めて

アレクはフレアを置いて、一目散に小屋へと突進していった。到着を待たずに腕を伸ばし、ドアを激しく打ち鳴らす。

「誰か居ますかっ?!」

呼び声だつて、森中に轟く程の音量だ。

だからだろうか。すぐに小屋のドアは開け放たれた。その奥には何やら人影が見えるのだが。アレクの身体が邪魔をしていて、しかも木が影を落としているから、顔ははっきりとは分からない。

一目確認しようと目を細める。とその時だ。

ミュの手に力が入り、足もぴたりと止まった。

「どうしたの?」

様子を窺いながら彼女の顔を覗き込んでみても、目を丸くするばかりで何も返してはくれない。
それも束の間、低くて若々しい、聞き心地の良い声が前方から発せられる。

「やっと来たね。ミュ、久し振り」

『久し振り』とはどういう事だろうか。彼女の名前を知っている。と言う事は、少なからず面識があるのだろうか。

しかし、

「ミュの知ってる人……？」

こう聞いてみても、彼女は表情を変えずに首を振るばかりなのだ。しかも予想だにできなかった言葉が彼女の口から飛び出す事となる。

「何で……私の名前、知ってるの……？」

まるで恐怖の対象に当てられた声だ。唇は震え、途切れ途切れに発せられる。

こんなの尋常ではない。

咄嗟にミュの盾になろうと我が身を呈していた。繋いだままの手も後ろへと回す。

当然視線も小屋の方へと向くから、ドアの前に佇む人物を見据える。先程は良く確認出来なかったが、纏った衣服は全て黒、後方に靡くマントも漆黒だ。おまけに襟足だけ長く伸びた短い髪も、細められた瞳も黒い。唯一、露出した肌だけが雪を思わせる程の白色だ。二十代前半の青年、と言った所だろうか。決して老人と呼べる年齢ではない。

その人物は嫌みに笑い、口元を吊り上げた。

「フツ……。君だけじゃない。僕はこの場に居る全員の名前を知っている」

「オマエ、何デタラメ言っつて」

「そこで虚勢を張っているのがアレク、僕を見て呆然としているのがフレア、後ろでミユを庇おうとしているのがラウド」

何故、どうして。疑問ばかりが頭を掠め去る。言葉が出てこない。一方で黒尽くめの男はアレクの言う事など完璧に無視し、呆然と立ち尽くす俺たち一人一人を上から睨み付けていく。更にアレクに対しては、

「それに、僕は『オマエ』じゃない。『ルイス』だ」

勢い良く目前まで歩み出て、見る者を凍り付かせるかのような瞳で貫く。

俺たちの様子に満足したのだろう。黒尽くめの男　ルイスは「フツ」と他人を小馬鹿にする笑い声を上げ、親指で背後の小屋を指し示す。

「まあ、立ち話もなんだし、家に入ったら？」

俺を馬鹿にするアレクよりも腹立たしい態度だ。さも白々しくあしらい、返答も聞かずに身を翻す。

悔しいが、逆らう事も出来ない。互いに頷いてみせると、小屋への第一歩を踏み出した。

居間へ通すなり、ルイスは脅すような物腰で俺たちを席へと誘う。無言のままに、冷酷なまでの目つきで。その視線をかわしながら周囲の様子を窺った。

部屋の中はあまりにも殺風景だ。椅子とテーブルしか無い室内には、日の光も真面に差しはしない。天井に吊られたランプの灯りを頼りにするくらいだ。

そんなものを諸ともせず、威圧的な態度を取る人物は壁に凭れて両腕両足を組み、尚も俺たちを見下ろす。

見れば見る程に怪しい。服装は村人の物とは明らかに違う。誰も好き好んで黒を選んだりはしない。

瞳の色だってそうだ。こんなにも深い黒、夜の闇すらも負けそうな程に黒い瞳は見た事が無い。いや、黒色と言う事自体が異常なのだ。

まさか、この人は影に操られているのだろうか。だから瞳の色が変質して

警戒心を剥き出しにする俺たちに、その異常な目は細められた。

「何処から話せば良い？」

表情と同じく、全く関心の無い口調だ。

そんな様子にアレクは耐えきれなくなったのだろう。

「爺さんは何処にやった……?!」

あからさまに殺気を放ち、両手を突いてゆらりと立ち上がる。それなのに。

「そんなモノ、最初から居ない」

相手は微動だにしない。まるで氷のようなオーラだ。

「何言つて」

「僕が偽の人影を創り、村人に見せた。それじゃ、不満かい？」

言いながら嫌みに笑う。

と此処で一つ引掛かったのだ。『人影を創った』とはどういう事だろうか。良く意味が分からない。

怒りと戸惑いが複雑に絡まり合ってしまった、ミユの異変に気付く事が出来なかった。

「ルイスが教えてくれた話、全部……嘘？」

不意に、か細く震える声が隣から聞こえたのだ。慌てて彼女の顔を覗き込んでみれば、瞳には涙が溜まっているではないか。

にも関わらず、疑問を投げ掛けられた人物は冷ら笑う。

「今更気付いたのかい？ 素直で助かる……」

ととうとう大粒の涙が零れ落ち、ミユの両頬を濡らす。堪らずに彼女を抱き締めたのだが、漏れる嗚咽は止まりそうにない。

そんな彼女を見てアレクの勢いも増す。

「ふざけんな！ オレらが、どんだけ必死に探したと思っただ？」

「！」

「そんなモノ、知らない」

彼女の気持ちは何だと思っているのだろうか。何処まで俺たちを馬鹿にすれば気が済むのだろうか。服が彼女の涙で濡れる程に、怒りは脳に、心に浸透していく。

だが、感情に任せてばかりでは何も解決はしない。一つ一つ疑問を解消していかなくては。

「ふう……」と息を吐き出し、何とか冷静さを取り戻す。

「……待つて。『人影を創った』って、どついう事？」

「フツ……。流石、君は勘が鋭いな……。こうすれば分かるかい？」

俺の問いに満足げな笑みを浮かべると、ルイスは指を鳴らした。

刹那、身体は支えを失い、視界は揺らぎ

受け身を取る暇も無く身体は落下し、尻に鈍い痛みが走る。傍らで小さな悲鳴を上げるミュウが心配になって、すぐさま彼女へと向き直った。が、どうやら大事は無いようだ。安否を問う俺に、大丈夫だと意思表示もしてくれた。

しかし、安心するのはまだ早い。まずは状況を把握しなくては。

唯一全てを知っているであろう人物が高笑いする中、改めて視線を周囲に巡らしてみる。

視界に入ったものは木製の壁でも、低い天井でもなかった。生い茂る緑のみ。家そのものが無くなっているのだ。

一体何が起きたのだろうか。考えられるのは、

「家が……消えたっ?!」

それ以外には無い。

こんな事が起きれば誰だって驚くに決まっている。にも関わらず、

漆黒の人物は驚愕を露わにするアレクに目の色を変えた。

「ハハツ！ まだ分からないのか？ 良い物を見せてやる」

まるで悪魔のような笑みを浮かべ、家が掻き消えた時と同じように指を鳴らす。

直後、あつてはならない事が起きたのだ。

「いやあっ！」

「ミュっ！」

如何にも闇を強調するような姿 黒のローブ、その奥に広がる影、赤黒く光る目らしき物 俺たちの敵がルイスから伸びる影から現れ、沈黙のままにその場に留まる。

咄嗟の判断でミュに覆い被さった。彼女だけは絶対に守らなくては。百年前の悔いが俺を突き動かす。

一方でルイスは感情も込めずに、しらつとあしらうのだ。

「心配する事はない。これも偽物だ」

鼻で笑い、片手でマントを翻す。その仕草が癩に触って仕方が無い。

「こんな事が出来るのは誰だと思う？」

対抗心だつて表面に出るから、問われれば頭を必死に回転させる。途端に、とんでもない仮説が思い浮かんだのだ。

「まさかっ……っ！」

影に操られていると言うだけで、こんな事が出来る筈が無い。しかも、この時代に影の正確な容姿を知っている者は俺たちくらいだろう。

「……そうだ。さっきの家も、人影も、前のミユの高熱も、エメラルドに現れた影も、地震も、ミユを村におびき寄せたのも……全て僕の魔法」

唯一人、俺たちの人生を狂わせた張本人を除いては。

「生まれ変わったのは君たちだけじゃない。僕が現世での」

その証拠に、横風に煽られた奴の黒髪の下から覗いたのは、

「黒の魔導師だ」

決して忘れる事の出来ない、闇色に染まった魔導石だった。

第25章 真相

何故、すぐに気付かなかったのだろうか。声を聞けば分かる筈なのに。

あの時は気力を失っていたから、記憶するだけの余裕は無かったのかもしれない。それにしても、こんなに重大な事を思い出せなかったなんて。

サファイアで俺を脅迫したのは影ではない。目の前に居るこいつだ。

それに飽きたらず、ミュに危害を加え、操り、陥れた。彼女の脅威であり、カノンを殺した宿敵 絶対に許さない。怒りなんて生易しいものではなく、狂気が沸々と煮えたぎる。胸まで焼け付くように熱くなっている。

「お前がミュとカノンを」

「いやああーっ！」

收拾の付かない感情を奴にぶつけようとしたのだが、ミュの悲鳴に遮られてしまった。耳を塞ぎ、力の限り声を振り絞る。抱き締めても震えは収まる事を知らない。

こいつはこれ程までの恐怖を彼女に与えているのだ。

「許さない！ 絶対にこの手でお前を裁いてやる！ 今すぐに！」

「おい！ ラウド、落ち着け！」

何故、アレクは俺を止めようとするのだろうか。身を乗り出して、

今にも飛びかかってきそうな勢いだ。

アレクだけではない。フレアまでもが目で訴え掛けてくる。そんな事をするから、思わず二人を睨み付けてしまった。

隙を見て、奴は

「フツ……」と息を吐き出す。

「君も大した事は無いが、使い魔もそうだとはい……」

憎らしい笑みを浮かべ、わざとらしく顔を逸らした。が、すぐに視線は俺たちの方へと戻る。正確にはミュヘ、と言った方が良さだろうか。

「僕が黒の魔導師だとも気付かずに、あっさりと僕の話信じた。まあ、僕には好都合だったが」

要するに、こいつはアリアをも騙した。これまでの話も総合すると、二人に『呪いは解ける』と偽の情報をもたらしたのはこいつだ、と言う事になるだろう。

信じられない。卑劣極まりない行為だ。

「僕は影のように気長じゃない。さっさと終わらせよう……」

俺たちに反撃する隙を与えず、黒の魔導師は片手を胸に当てて、すぐにその手で空を切り裂く。勢いでマントも翻る。

すると、奴の足元から青白く光る魔法陣が放たれたのだ。百年前にも俺が描いた魔法陣が。

いけない。飲み込まれる前に避けなければ。そう思っている間も魔法陣は膨れ上がり、あっという間に俺たちの足元にまで到達して

浮遊感が消え去ると、目が眩む程の日光の下に晒された。雲一つ無い青空に、絨毯のように敷き詰められた白い花たち、何一つ変わっていない。俺と彼女が愛を誓い合った時、そして最愛の彼女を奪われた時から何も。

出来れば此処には来たくは無かった。嫌でもあの惨劇が頭の中を駆け巡る。吐き気がする程の己の不甲斐なさを思い知らされるかのようだ。

この幻想的な雰囲気にはつかわしくない人物は呆然とする俺たちを見下ろし、表情も変えずに言葉を投げ付ける。

「……と言いたい所だが、君たちに見せたいものがある。僕は悪趣味じゃないからね」

更に鼻で笑つてもみせた。

これの何処が悪趣味ではないと言っのだろうか。百年前と全く同じ状況下に置き、ミユをも殺そうとしているくせに。

黙っていてやる義理も無い。先程言い損ねた分も含めて、思いを吐き出そうと息を吸い込む。ミユを片手で抱きながら、もう片方の手で拳も作った。ところが。

至近距離でないのにも関わらず、奴の黒い瞳ばかりがどんどん迫ってくるのだ。吸い込まれる。そう考える間もなく、奴の瞳孔が確認出来るまでに瞳は近付き、視界は隙間無く黒に覆い尽くされた。その時、不意に目眩が襲ってきたのだ。

「うっ……」

立ち眩みの時とは違う。思考までもが拡散していく。これも魔法

なのだろうか。

しかも、体調に支障をきたしたのは俺だけではないらしい。ミユも、アレクもフレアも呻き声を上げている。

遂に意識までもが遠退いていき、身体は地に落ちる　　筈だったのだが。そうはならなかったのだ。

暗闇の中で視界は利かないし、ミユも俺の腕の中には居ない。それだけならば、気絶したと思うだろう。だが、身体で風を感じられるし、木の葉のざわめく音も聞こえてくる。

徐々に目が慣れていくに連れて、置かれている状況も把握出来るようになった。

此処は森の中だ。しかも俺だけではなく、仲間全員がこの場に居る。

「何でこんな所に……」

奴の意図が分からない。こんな所に俺たちを連れ込んで、一体何をしようと言うのだろうか。

「それより、アイツは何処に行ったんだっ?！」

「まさか、いきなり襲ってくる気じゃ　　」

「あれっ！　見て！」

フレアの只ならぬ叫びに、目が自然と差された指の先を向く。何やら小さな淡い灯りが闇に浮かんでいるのだが。

その光はとある人物を照らし、輪郭を露わにする。

あまりの光景に驚愕してしまった。

「……カノン！」

絶対に見間違えたりするものか。筋の通った鼻に円らな瞳、腰まで届く艶やかな髪、真っ白なワンピース、その全てがカノンである事を物語っている。焦点の定まらない瞳は宙を追い、茂みを諸ともせずはこちらに近付いてくる。

彼女を照らす物はどうやらランプだったようだ。歩を進める度に手元で左右に振れ、橙の炎が揺らめく。

四人揃ってタイムスリップでもさせられてしまったのだろうか。一体、何のために。疑問ばかりが浮かんでくる。そんな中、

「やだっ！ カノン、来ちゃ駄目っ！」

ミュが突如として絶叫したのだ。

「……ミュ？」

「駄目だよおっ……！」

俺が声を掛けても、こちらに見向きもしない。目を見開いてカノンに訴え掛ける。

一方でカノンは無表情のまま、足を休めたりはしない。ミュの声が届いていないかのようだ。

カノンの様子に、遂にミュの膝はくずおれてしまった。手を突いて何とか身体を支える。

彼女を此処までにさせるものとは何だろうか。思い当たる事と言えば

「もしかしてっ……！」

もっと深く考えれば良かった。カノンが纏っている白い衣服、そしてこの場所が何を意味しているのかを。

「アレクっ！ 何突っ立ってるのさっ！ カノンを止めなきゃ！」

こんなものは八つ当たりだが、僅か前方で立ち尽くすアレクに腹が立って仕方が無い。

「ああっ?!」

「カノンが呪いをかけられる！」

「……何っ?!」

刹那、アレクと共に大地を蹴った。最大、最悪の危機に晒されようとしているカノンを助けるために。

「カノン！ 止まって！」

「来るなっ！」

絶対に止めなくては。何が何でも。それ一心で力の限り声を振り絞り、両手を振り回す。

それなのに、カノンは尚も足を進めるばかりだ。立ち止まるどころか、表情を変える事さえしない。

そんな事をしている間に、俺よりも足の速いアレクはみるみると遠ざかっていく。すぐにカノンまであと十数歩という所まで辿り着いた。

頼むからカノンを止めてくれ。自らも走りを止めず、二人の行方

を見守る。ところが、なんと。

「なっ……!! 何でだっ?!」

アレクの試みは失敗したのだ。伸ばした腕もカノンを遮りはしなかった。アレクは目を丸めて振り返り、彼女を穴が開く程に見詰める。

こんな時まで役に立たないなんて。理不尽なのは分かっているが、怒らずにはられない。

「アレクっ! 何してるのさっ!」

「どうなってんだっ?! カノンに触った途端、オレの手が透けやがった……!」

「えっ……?!」

信じられない。そんな事が果たして起こり得るのだろうか。

驚きのあまり、必死に動かしていた足も止まってしまった。言葉を重ねようにも、何と重ねねれば良いのか分からない。アレクも自身の両手を目線の高さまで持ち上げて硬直している。もし質問出来ていたとしても、何も返せはしなかっただろう。

とにかく俺が何とかしなくては。此处で諦める訳にはいかない。

「カノン! 戻って!」

このまま事態が進めば、待っているのは絶望だけなのだ。過去を変える事が出来れば彼女の苦しみも、憎しみも、俺の後悔も、嘆き

も、全てを無に還せる。何より誰も死なせずに済む。死なずに済む。それなのに。

両手を広げて進路を妨害する俺を無視し、カノンは突っ込んできたのだ。身体が触れた瞬間に接した部分　俺の胸から下が半透明に透け、彼女はそこを突き破る。

「うつ………?!」

アレクの言った通りの事が起きてしまった。己の身体が透けるなんて。訳が分からない。

混乱している間にも、カノンの背中と揺れる髪は夜の闇に吸い込まれていく。

「カノン………っ!」

また俺は何も出来ないのだろうか。見ているしか無いのだろうか。何故、こんなにも俺は

既に足は身体を支える機能を失ってしまった。膝を打っても痛みも感じない。

「うわああー　っ!」

だが、心は悲鳴を上げている。胸はきつく締め付けられ、地に突いた手の甲には涙が落ちて水玉模様を描く。

叫んでも、嘆いてもカノンには届かないのだろうか。風に流され、見えない空に消え行くのみ。

俺たちの願いも虚しく、その時はやってきてしまった。

前方で小さな足音が止まり、地の底から湧き上がるような声が発せられる。

「来たな、カノン……」

「……えっ?! 影っ!」

ランプの灯りもカノンに遮られ、二人のやり取りは此処からでは何も見えない。

「此処、何処っ?! 何でっ?!」

それでも、彼女の声を聞くだけで焦りが伝わってくる。

「キミはワタシが連れてきた」

恐らくカノンはミュと同じように、影に操られて此処まで来たのだろう。こんなにも重大な異変に気付かずに、過去の俺は暢気に小屋で眠っていたのだ。

なんて頼り甲斐のない男なのだろうか。

「やだっ! 来ないでっ! ……きゃあっ!」

「大人しくしている……」

今だってそうだ。声だけではなく、手を伸ばしてもカノンに届きはしない。

「止める……」

こんなにも近くに居るのに。止められる筈なのに。

「何……する気……?!」

「止めてくれ……!」

これ以上、彼女を苦しめるな。未来を奪うな。そんな事を出来る権利がお前の何処にある。

思いを濡れる瞳に託し、影が居るであろう場所を睨み付けた。

しかし、思っただけで過去が変わる筈も無く。

「いや……っ」

「覚悟しろ……」

「カノンっ!」

雷鳴の何倍もあるつかと言う程の破裂音が轟き、森中全ての物を震撼させる。小さな悲鳴を最後に、カノンの声はぶつりと途絶えてしまった。

駄目だった。また繰り返してしまった。俺はあまりにも無力だ。

憎むべき相手が高笑いする中、声にならない声を発する。握り締めようとした雑草さえ手を通り抜けて、何事も無かったかのように風にたゆたう。

それからの出来事は俺の記憶通りだ。

アイリスが一足早くカノンの元へ駆け付け、僅かに遅れてリザーとヴィクトも影と対峙する。混乱したり、わめいたり、威嚇した

りと三者三様の振る舞いをしたのだが、結局は影に傷一つ付けられなかった。

反撃も叶わずに全員が気絶させられ、重たいものが地面に落ちる音が響く。影もそれに満足したのか、四人を鼻で笑って気配を消した。

次の瞬間

「ハハハッ！」

視界は全てが空色に染まり、耳には奴の高笑いが届く。背や手足には固い感触が伝わる。俺の身体は仰向けに転がっているのだろう。しかし、そんな物はどうだって良い。ミユは過去の恐怖の記憶を揺さぶられたのだ。しかもそれを塗り替える事も出来なかった。

ごめん。彼女に対する謝罪の言葉しか浮かんでこない。溢れる涙を気にも留めず、傍で起き上がるうとしているミユに抱き付いた。

「……ごめん！ 俺、カノンを止められなかった……！」

あんなに守ると約束したのに。謝っても、謝っても謝り足りない。締め上げているのではないかと言う程に彼女をきつく抱き、己の不甲斐なさを呪う。

そんな俺を奴は軽く笑い飛ばし、蔑みの目で見下ろした。

「間抜けだな。意識だけを飛ばして見せたものを書き替えようとするとは！」

「なっ………！」

では、いくら足掻いても抗えなかった。と言う事だろうか。俺たちを笑いものにするために、奴はわざわざあんな過去を見せた。と

言うのだろうか。

もう、怒りすら湧いてこない。全身から力が抜けていく。

反論する気配の無い俺を見かねてか、アレクが代わりに怒声を張り上げる。

「オマエ、何のためにこんなモノ……！」

「ミュ、驚いた？」

だが、それも奴にとっては何の意味も成さないのだろう。全く聞こえていないかのように言葉を切り返し、俺たちを　ミュを嘲笑う。

あんなにも残酷な事をされたのだ。ミュも酷く打ちのめされて、言い返せはしないだろう。そう思っていた。

だが、

「今の……何？ 私、こんなの　」

「今、見せたモノが真実だ」

黒の魔導師をまっすぐに見詰め、途切れ途切れに言葉を繋ぐ。奴が返せば首を小さく振ってもみせる。

「でも、私が知ってるのはアイリスがカノンを呼び出して、行ってみたら影が居て　」

「ミュ、何言ってるの？ アイリスはカノンを呼び出したりしてないわ　」

「えっ……?」

ミュが嘘を吐いているとは思えない。それでも黒の魔導師のみならず、フレアもきつぱりと否定した。ミュには悪いが、俺もカノンのあの様子は『呼び出された』と言うよりは『操られていた』と言うべきだと思う。

彼女の動揺を見て、黒の魔導師は更に続ける。

「間違っているのは……ミュ、君だ」

「でも」

「影が君の記憶だけを作り替えた」

「えっ?」

記憶を作り替える。果たしてそんな事が出来るのだろうか。一時は疑念を抱いたのだが、すぐに払拭された。

サファイアで情報収集を行った時、カイルが他者の記憶を一部消し去ったのを思い出したのだ。

一方で、ミュは未だに信じられないのだろう。首を振りながらも、不敵に笑う奴から目を逸らそうとはしない。

「君の記憶は魔法で作られた偽物だ」

「嘘っ!」

「嘘を吐いてどうする。君は影の策略に嵌まったただけだ」

つまり、こいつは使い魔の能力をも持ち合わせている。と言う事だろう。とんでもない奴だ。

しかも、己がした事をアイリスへ責任転嫁した。だからこそ、アイリスはカノンの憎悪の理由が分からずに取り乱し、カノンは何の疑いも持たずにアイリスを憎み続けたのだ。

俺たちの結束を砕こうとでもしたのであるか。たったそれだけのために、カノンの心はずたずたに切り裂かれて

「フレア、ごめんねっ！ 私っ……！」

「ミュが謝る必要なんて無いわ。それに、ミュはあたしを受け入れてくれたじゃない」

「フレア……」

いや、カノンだけではない。ミュも、フレアもアイリスも深く傷付いただろう。

二人の仲違いにやっと終止符が打たれた。そう、百年目にしてようやく、だ。

にこやかに微笑むフレアとは対照的に、ミュは頭を垂れてしまった。握られた手には震える程の力が込められている。

元凶は影だ。彼女が自分を責める必要は無いのに。言葉よりも先に手が出ていた。いつもよりも低い位置にある彼女の頭へ伸ばし、優しく撫でる。

そんな事をしていたから、フレアの異変には気付けなかった。

「アイリスから呼び出されたっていう事は、もしかして……」

「ああ、そうだ」

それまでの笑顔からは想像も付かない。怒っている。と言うよりは怯えている。と取れる声を敵へと向けた。そんなフレアに、奴も満足そうに笑いながら頷く。

一体、何の話をしているのだろうか。よく見えてこないのだが。無闇に言葉を挟めない。しかし、アレクは違ったようだ。

「オマエ、まだ他に記憶を書き替えてる、なんてのはねーだろーな……」

身を乗り出し、力強い拳を作って脅し迫る。それを面白がるかのように、睨まれた相手は口元を吊り上げた。視線もアレクへと移動する。

「知りたいかい？」

ところが、その言葉にフレアの方が強い反応を示したのだ。表情を強張らせて慌てふためく。今にも奴に走り寄っていきそうな程だ。

「待って！ アレクとラウドには」

「覚悟しろ……」

アレクはともかく、何故、フレアの口から俺の名前が。そう思う間にも黒の魔導師は両腕を大きく広げ、魔法を使う準備に取り掛かった。

瞬時に過去へ飛ばされた時と同じ異変が襲ってくる。

宝石のように輝くせせらぎに足を投げ出すカノン、その背後には森、カノンが着ている衣服から推測しても、これは旅の一場面に違いない。

黒の魔導師が『覚悟しろ』と言ったくらいだ。余程の出来事を見せるつもりなのだろう。しかも、アレクと俺に関係している何かを一体、何があったのだろうか。

あれこれ思考を巡らせていると、茂みからアイリスが現れた。何処か遠慮がちな表情だ。

「カノン、ちょっと……良い？」

「……何？」

問われたカノンが首を傾げると、アイリスはおずおずと彼女へと歩み寄り、すぐ隣に腰を下ろす。

「後で話があるの……。暗くなってから、二人で会わない？」

「……今じゃ駄目？」

カノンの否定的な答えに納得出来なかったのだろう。アイリスは背後の森へと視線を移し、小さな溜め息を吐いた。瞬時にカノンの視線もそちらへと移動する。

「あの二人には……聞かれたくないのよ……」

「あれじゃあ……聞こえないと思うんだけど……」

二人が眺める先には天高く聳える、水と風で創られた渦を巻く柱

があった。恐らくリザードとヴィクトの魔法だろう。

こんな事をした覚えはあの時以外には無い。カノンが呪いをかけられた日の休憩時間以外には。

魔法の柱に呆れ返るカノンを見て、アイリスの緊張は解れたようだ。

「……………そうね」

言いながら、カノンへにっこりと微笑む。

「今までの事、謝ろうと思ったのよ。あたし、カノンと上手く話せてなかったでしょ？」

そう言えば、前々から二人の仲は良かった。とは言えない状態だったかもしれない。などと思いつつも、塞ぎがちになっていく会話に耳を澄ます。

「今まで黙ってたけど、あたし……………」

「何〜？」

言い淀むと、アイリスは頬をほんのりと紅色に染めて川にその顔を映した。

次の瞬間、信じられない言葉が飛び出したのだ。

「……………リザードの事、好きなのよ……………」

「えっ?! 嘘っ!」

カノンと一緒に『嘘だ!』と心の中で叫び声を上げてしまった。頭が真っ白で、もう何も考えられない。

それでも時は確実に進んでいく。

「でも、諦めたわ。二人がこんなに仲が良いのに、あたしが敵う筈無いもの……」

憂うアイリスと、目を丸めて絶句するカノン　相反する二人の髪を風が優しく撫でる。風が止むと、居たたまれなくなったらしいアイリスが立ち上がった。ちらりとカノンに視線を投げて身を翻す。

「驚かせてごめんね」

「……アイリスっ」

カノンも咄嗟に手を伸ばしたが、それよりもアイリスの行動の方が早かった。一目散にカノンと距離を離していく。そのまま姿を現したのと同じ場所へと消えてしまった。

その光景を見届けると景色は歪み、ぼやけていき

又しても、鬱陶しい程に澄んだ青が視界を埋め尽くす。

知ってしまった過去はあまりにも衝撃的だった。受け止めるにはそれ相応の時間が必要だ。

降り注ぐ日光が今の俺には眩し過ぎる。起き上がる事もせず、腕で両目を覆い隠した。

「オレは……知ってたぞ」

「ごめん……。俺、気付かなかった……」

『気付かなかった』ではなく、『気付けなかった』が正しいだろうか。溜め息ばかりが漏れる。

「だから嫌だったのよ……」

こんな過去ならば、必死になって止めようとするのは当たり前だ。フレアの衝撃もかなりのものだろう。気怠そうな声からも窺い知れる。

「……良い？ これは百年前の事よ。あたしには関係無いわ」

本当にそうなのだろうか。アレクもこの事実を知っていたのならば、二人とも少なからず影響を受けていた筈だ。

今になって思い返してみれば、兆しはあったと気付かされる。アイリスが俺を リザードを見ると決まって口ごもってしまったし、向けられる視線の回数もヴィクトよりは多かっただろう。

これではミュの事を鈍感だ。などとは言えないではないか。俺も同じ事をしていたのだから。

黒の魔導師は『記憶を書き換えた』らしい事を口にしていたから、ミュも初めて事実を知ったのだろう。フレアを食い入るような眼差しで見詰め、声を振り絞る。

「じゃあ、フレアは……？」

しかし相手は、

「聞かなくても分かるでしょ？」

考える事も無く即答してしまった。

「でもさ、やっぱり気になるよ……」

フレアが良くても、このままでは俺たちが引き摺ってしまつ。きちんと決着を付けて、過去を断ち切らなくては。そんな思いで口にしたのだが。

返ってきた言葉は。

「それじゃあ、もし、あたしの気持ちが変わってなかったら、ラウドはあたしを好きになつたりするの？」

俺が気移りし易いみたいな言い方ではないか。ミュも目の前に居るのに配慮が無さ過ぎる。

驚きのあまり、思わず飛び起きてしまった。ミュの視線をひしひしと感じながら、フレアに瞳で抗議する。

ところが、フレアよりも凄まじく間違つた捉え方をした人物が居たのだ。

「オマエ、そんなのぜってー許さねーぞ！ 身勝手過ぎるだろ！」

アレクだ。

血相を変えて跳ね起き、鬼のような目つきで俺を睨み付ける。気に障る事を口にもすれば、すぐさま殴りかかってくるだろう。

一人で勝手に勘違いをしないで欲しい。

「誰も『そうだ』なんて言ってないし！俺が好きなのはミュウだけだよ！」

しかもミュウに更なる誤解を与えてしまいかねないではないか。俺の想いはそんなに安っぽくはないのに。

それでもアレクの腹の虫は収まらないのか、鋭い視線は離れずに睨み合いは続く。

険悪な雰囲気が漂う中、フレアは一人気持ちを切り替えて敵と対峙する。

「これくらいで、あたしたちの絆が切れると思ったの？浅はかね」

同時に、俺たちの視線も敵へと移った。何が面白いのか、奴は鼻で笑った後に片手でマントを払い退ける。風も手伝ってか、布のはためく大きな音が耳まで届く。

「僕は真実を教えたただけだ。影の汚いやり方は許せない。……他意は無い」

何が『汚いやり方は許せない』だ。散々ミュウを弄んでおいて。それならば、自分自身をも許せないと云っているようなものではないか。

どうやら俺にも怒りの感情が舞い戻ってきたらしい。心のままに歯を食い縛り、拳にも力を入れる。そんな中、ミュウが静かに口を開いた。

「……待って。どうしてカノンが呪いなんか……。アイリスは何もしてないし、狙われる理由なんて」

「理由は十分ある」

「えっ……？」

カノンに呪いをかけたのは単なる気紛れではない。と言う事だろうか。理由とは一体

黒の魔導師からは一切の表情が消えていた。ミユを見下ろす瞳は氷よりも遙かに冷たい。真新しい剣のようでもある。

瞳だけではない。奴の全てが彼女を拒絶し、恐ろしい程の殺気を放つ。

そこにはとんでもない真実が秘められていたのだ。

第26章 光と闇

それは奴の口から唐突に発せられた。

「君さえ消えていなくなれば、世界は闇に染まる」

凍える闇色の瞳はミユを捕らえて離さない。

「何……言つて」

「聞こえなかったかい？ 君さえ消えていなくなれば、世界は闇に染まる」

頭を抱えて全身で拒絶を示す彼女に、再び同じ言葉を紡ぎ出す。淡々としていて、それでいて重みのある口振りだ。

易々と信じる事なんて出来ない。奴の言っている事は大袈裟ではないだろうか。単なる脅しとしか思えない。

「そんな筈無いじゃん！」

「オマエ、何言つてんだ？！ 訳分かんねーっ！」

俺とは若干考えが違つかもしれないが、アレクも同時に声を張り上げる。

黒の魔導師は嫌みに顔を背け、鼻から息を吐き出す。それも僅かな間で、すぐに瞳は元の位置に戻ってきた。

「言つて分からないのなら、行動で示そう」

そう言うなり、手の平を上にして片手を天に翳す。すると、それを支えとして黒い靄が渦を巻き始めたのだ。

この光景は百年前にも一度見ている。紛れも無く、影が闇の矢を創り上げた魔法ではないか。

「何をしている。掛かって来い」

俺たちに攻撃をする機会を与えなかつたくせに酷い言い種だ。いや、言葉だけではなく、声色も、吊り上げられた口元や目元も気に食わない。

それでも文句を言っている暇は無いだろう。奴の暗黒の魔法は衰える事を知らず、完成するのは時間の問題なのだから。

「しょうがねー！ オレらもいくぞ！」

アレクの苛立った声に、俺もフレアも頷いて肯定の意志を表した。だが、ミユは

周りを気に掛けている余裕も無いのだろう。固く目を瞑り、俯き加減になっている。小さな両手はスカートを思い切り掴んでいるし、身体だつて小刻みに震えている。彼女の全てが痛々しい。

堪らずに、彼女の肩に腕を回した。そのまま己の胸まで引き寄せ

る。

「大丈夫。落ち着いて。俺が付いてる」

言い聞かせるように、宥めるように囁く。その間も黒の魔導師から目を離したりはしない。

「でも、怖いよっ。立てないよっ……」

「怖いのは当たり前だし、立てなくても良いから。前に言ったじゃん？」

「えっ……？」

漏れた声に、視線を落として表情を緩める。その先に居る彼女は涙目で俺を見上げ、小首を傾げていた。

「俺がミユを守る」

彼女が怯えるのならば、俺が支えれば良い。彼女が歩けないのなら、俺が彼女の足になれば良い。絶対に奴の思い通りにはさせない。

再び敵へと向き直って睨みを利かせる。俺の決意も、怒りも、焦りも全て託して。

ところが、予想外の所から水を差されてしまうのだ。

「オマエら！ こんな時に惚気てねーで、さっさと羽根出せ！」

呆れなんかではない。アレクは確実に怒っている。眉間には皺を刻み、髪を振り乱してこちらを振り向いた。

何が『惚気ている』だ。俺にそんなつもりは全く無い。ミユを励まそうとしていただけではないか。

無神経にも程がある。

黒の魔導師へ向けていた筈の怒りはアレクへと行き先を変えた。

彼女から身体を離して身を乗り出し、拳を握り締める。

「アレク、ホント分かってないよね！」

「何をだっ?!」

そんな俺に、アレクも益々不機嫌になっていく。眉間も更に狭まった。

何故、アレクが怒らなくてはいけないのだろうか。訳が分からない。

「こんな時だからだよ！フレアが怖がってたら、アレクだって励ますじゃん！」

「何ー!? んな事ねーよ！」

そんな筈が無い。自分を棚に上げて何を言っているのだろうか。

『絶対に励ますに決まっている』そう口にしようと半歩程アレクににじり寄る。ところが、又しても邪魔が入ったのだ。

一瞬で太陽を思わせる紅の光が視界を塞ぎ、俺とアレクを隔てる。同時に火傷しそうな程の熱気も発せられた。

これはただの光なんかではない。炎　フレアの魔法だ。一瞬で焼け付くような炎は消失した。が、俺とアレクの殺気を掻き消すには充分だ。先程まで俺を睨み付けていた黄色の目はまん丸に見開かれている。

「二人とも何してるのよ！　大バカね！」

「大バカ……」

いくら何でも大馬鹿は無いと思うのだが。
状況も考えずに肩を落としていると、今度は敵が俺たちに呆れ顔を向けた。

「さつき言わなかったかい？ 僕は影のように気長じゃない」

フレアが怒る訳だ。奴の頭上に浮かぶモノはもはや霧などではない。立派な漆黒の矢と化している。

「……マズい！ このままじゃ殺られる！」

「だから言ってるじゃない！」

たじろぐだけのアレクに、フレアは顔を林檎のように真っ赤に染めた。それをも打ち消してしまいそうな強烈な色彩を放つ緋色の羽根が一枚、虚しく空色の宙を漂う。

この攻撃はあいつを封印するためではない。闇の矢との相殺を狙ったの事だ。敵の混乱を煽り、追い詰めて、呪いを解く方法を本人の口から聞き出す。

ミュを除く俺たち三人はそのつもりでいる。進むべき道はもう、これくらいしか残されていないから。恐らく、ミュも奴を封印する気は無いだろう。

それぞれの思惑を胸に、魔導石の中に収めてある羽根を取り出す。心配していたミュも何とか成功したようだ。

円を描くようにして漂う色彩豊かな四枚の羽根を見上げ、アレクは当然の事のようにこの場を取り切り始めた。
しかし。

「よし！ オマエら、分かっているな？！ 羽根に力を……何っ？！」

言い終わる前に、敵はとんでもない行動に打って出たのだ。

羽根を出したばかりの無防備な俺たちに向かって、完成したばかりの闇の矢を放つ。勿論、予告も無しに、だ。

俺たちの中で一番背の高いアレクを超える奴の身長、その三倍以上の全長があるだろうか。矢に成りきれずに纏わりついた同色の霧を振り切りながら、轟音を伴って空気を切り裂く。

奴の混乱を煽るところの話ではない。

「……逃げろっ！」

言われなくても分かっている。と言わんばかりにアレクを無視し、座り込んだままのミュを抱き上げた。もう一度矢に目をやり、攻撃の及ばない範囲を見定める だけの筈だったのだが。

ふとした拍子に、違和感に気付いたのだ。

この矢は果たして俺たちを狙っているのだろうか。

「オマエ！ 何してんだっ？！ 早く逃げろ！」

疑問が生じたのは俺だけのようだ。アレクはけたたましく叫ぶし、ミュとフレアの痛い程の視線も感じられる。それでも矢から目を逸らす事が出来ない。

「あの矢、何だかおかしい……」

「ああっ?!」

瞬間、三人の視線は取り払われた。恐らく、俺が見ている物の方へと移ったのだろう。

百年前と比べると、矢の全長が短い気がする。三分の二程度、と言ったところだろうか。

いや、それだけではない。矢が俺たちを狙っているのなら、先端部はこちらを向く筈である。なのに、僅かに上を向いているのだ。

「アイツ、焦って間違ったんじゃねーのか？」

間違えたのなら、あいつが余裕の笑みを浮かべられる筈が無い。と暢気なアレクの声を頭の中から追い払い、更に脳を働かせる。

俺たちの背後には花以外に何も無い。ならば、後方を狙ったのではないだろう。

とすれば、考えられるのは頭上だ。そこにあるのはただ一つ。閃いた瞬間に冷や汗が吹き出し、一気に血の気が引いていく。

「……違う！ 矢が狙ってるのは……羽根だっ！」

「何っ?!」

俺の勘は当たったのだろう。黒の魔導師は嘲りながら目を細める。

「フツ。今更気付いても、もう遅い……」

その小枝のような人差し指が指し示す先には漆黒の矢、此処まで到達するには一分もかかりはしない。

このままでは奴を陥れる術を失ってしまう。

「おい！ この羽根、どーやって元に戻すんだ?!」

「そんなの知らないよ！」

他人に聞く前に自分の頭でも考える。心内で罵ってみるが、俺もアレクの事は言えない状態だ。気持ちばかりが急いでしまい、思考回路が上手く機能してくれない。

事態が好転する筈も無く、遂にその時はやってきてしまった。

寸分の狂いも無い。疾風のごとく、細長い黒の塊が俺たちの真上を通過する。自身と同色の淡い光を放ちながら合体しようとする四枚の羽根をことごとく分断し、吹き飛ばしてしまった。

それだけではない。なんと、ミユの地の羽根は奴の矢の直撃を受けてしまったのだ。中心を射抜かれ、瞬時に粉々に砕け散る。星のように神々しく、繊細に瞬きながら儚く消えていく。

僅かな希望が一瞬で打ち砕かれた瞬間だった。

「私の……羽根っ……！」

目前に俺の腕の中に居るミユのか細い片手が伸びる。指先は彼女の羽根を求めてもがき、煌めく光をなぞっていく。

だが、何にも触れる事は無い。

奴を嵌めるつもりでいたのに、実際に嵌められたのは俺たちの方だったのだ。なんて無様なのだろうか。

怒りよりも無力感が勝っている。次に取るべき行動は何だろう。だとか、そんなものは一切考えられない。頭が真っ白だ。アレクやフレアの声もぼんやりとしか聞こえてこない。

それなのに。

「本番はこれからだ。よく羽根を見る」

憎むべき奴の声だけははっきりと耳に届く。

俺たちから攻撃する手段を奪っておきながら、まだ飽き足りないとは。しかも、地の羽根を失ってしまった今、他の三枚の羽根は何の効力も持ち合わせてはいない。

そうは思いながらも、奴につられて赤、青、黄が色鮮やかに映える白の地面へと視線を落とした。

刹那

そよ吹く風に遊ばれながら、三枚の羽根がふわりと宙に舞い上がる。一体、何故。そう思う間も無く、次なる変化が起き始めたのだ。四枚の時には光の矢と成るべく、淡い色彩の輝きは徐々に眩い白色へと変容していた。それが今度はどうだろうか。三角形を描きながら、黒色の靄を発生させている。

靄は渦巻き、膨れ上がり、羽根をも取り込む。そうして出来上がったのは両手を広げた程の横幅がある、一枚の大きな漆黒の羽根だ。

「どっ……なつてんだ?!」

「黒の魔導師を倒すための羽根なのに……何で黒く……?!」

訳が分からない。これではまるで、俺たちの羽根が奴と同じ力を纏っているみたいではないか。

異様な存在感を放つ羽根を呆然と見上げるばかりだ。とその時。

「えっ?」

俺のごく近くで光が発生しているらしい。視線をどちらに向けても眩しく、全体的に青みがかっているように見える。

それもその筈、光の発生源は俺の額にある魔導石だったのだ。そ

の証拠にアレクの額も、フレアの額も魔導石と同色の光を放っている。

光は時間と共に強さを増し、漆黒の羽根に更なる変化を与える。細長く、金属のような艶を備えた矢へと。同時に全身から力までが抜けていく。

「オレ、何もしてねーぞ?!」

「あたしもよ!」

「勝手に力が出ていつてる……!」

遂に矢が完成したらしい時には既に視界は霞み、その形を曖昧にしか捉えられなくなっていた。

影や目の人物の矢と似通っているように見えるそれは俺たちの意志に関係無く、音も立てずに頭上から姿を消した。一直線に突き進み、敵の懐へと飛び込む。

一方で、奴はこうなる事を予期していたのだろうか。声を発する事も、たじろぐ事もしない。

衝突した結果は 俺が理解出来た事と言えば、矢ではなく、黒の魔導師がその存在を維持している。と言う事だけだった。

そこまでは何とか見届けられたのだが、もう限界だ。何度も大きく空気を吸い込んで息苦しいし、心臓も酸素を送り込もうと激しく脈打っている。汗も額から、背中から滝のように流れ落ちていく。愛おしい筈のミュの重みも、今は苦痛以外の何物でもない。腕を支えきれずに手放してしまった。

「うっ……」

「……きゃっ！」

膝までもが悲鳴を上げ、彼女の隣に崩れ落ちる。両手を突いたお陰で顔面は大地との激突を回避出来たが、しばらくは立ち上がれそうにない。

「ごめん……」

このままではミユを守る事なんて出来はしないだろう。今朝の無謀な行為の付けがこんな所に回ってくるとは。

「やだっ！ 大丈夫っ?!」

悲鳴にも似た彼女の声と共に、額に柔らかな物が触れた。いつもなら暖かく感じるであろうそれは、ひんやりと冷たい感触として脳に伝わる。

自分の事のように顔を歪める彼女に何とか微笑んでみせたものの、上手く笑えてはいないのだろう。彼女が笑い返してくれる事は無かったから。

直後、アレクとフレアの足元も俯き加減の視界に映り込む。怒っているのか、心配してくれているのか。どちらなのかは分からないが、俺の元に駆け付けてきてくれたのは確かだ。

「これくらい的事で倒れるとは……。此処に来る前に、一体、何をしてきたんだい？」

「オマエには関係ねーだろ?!」

嫌みに言い放つ敵に対し、自身の言葉で刃向かえない事に腹が立つ。アレクに便乗して、四肢を地面に突いたままで睨みを利かせるので精一杯だ。

そんな俺を馬鹿にでもしているのだろう。奴はこちらを見て薄ら笑う。

「……まあ良い。だが、これで分かっただろうか？ ミユが……いや、『地の魔導師』が居なくなれば、どうなるのかが」

奴独特の、俺たちを試すような回りくどい物言いが一々癪に障る。

アレクも奴の態度に苛立ちを覚えたのだろう。爪先から奴の方へと振り返り、荒々しく切り返す。

「はつきり言えよ！」

いや、アレクだけではない。ミユも、フレアも同じなのだろう。

奴に向けられた鋭い瞳が全てを物語っている。

それでも。

「フッ……」

奴は冷めた笑いで吹き飛ばす。

段々と鮮明さを取り戻していく視界の中には瞼を閉じ、顔を背ける奴の姿　と思いきや、何かを決意したかのように闇色の瞳はこちらへと向き直った。その間も不気味な笑みを崩したりはしない。

「君たちは、神に四つの色が合わさると光の魔法が使える、とでも

言われたのだろう」

正確には俺が神に言われたのではなく、前世で聞いた記憶があるだけだ。まあ、大して変わりはないのだが。

「都合の良い事だけを教え、都合の悪い事は言わない。……実に神らしい」

敵は反吐を吐くように言葉を放り、顔をしかめる。

都合の悪い事とはつまり、赤、青、黄、三枚の羽根が闇の羽根へと変わった事を指しているのだろうか。

「君たちは考えた事があるかい？」

二度程自身の頭を人差し指で小突き、また薄ら笑う。

「闇が何色で構成されているのか」

言いながら、両手でマントを翻してもみせた。倒れる前ならばそんな態度に怒り心頭なのだろうが、今は別の事に思考が片寄ってしまっている。

もし、あの羽根の現象が奴の質問の答えとなっているのなら。おぞましさのあまり、吐き気を催しそうだ。

何故ならば

「んなの、黒に決まってるんだろ！」

考える。と言う作業をしているのだろうか。それともかなり頭が

固いのか。アレクの怒号が響き渡る。

一気に黒の魔導師は呆れ果ててしまったのだろう。気怠げに髪を掻き揚げ、睫毛を下瞼へ落とした。

「此処までできておきながら、まだ分からないのか……」

その口調から、溜め息を吐く事すら億劫な心情も窺い知れる。

「闇を形成する色は、赤、青、黄」

それでも言い切ると小さく笑い、闇を取る事で場の空気を変えた。

「つまり、ミユを除く君たち三人だ」

やはりそうなのか。

この身体に流れる力は光にもなり、闇にもなる。言わば『諸刃の剣』だ。

一歩間違えば、あいつと同じようにミユの命をも脅かしかねない。俺の、この力が。

信じたくはないが、それが事実なのだろう。

「染料も、この三原色を混ぜれば混ぜる程澱んでいくだろう？ それと同じだ」

だからカノンを殺した。今もミユを殺そうと企んでいる。彼女が居なくなれば、俺たちの力は光の物とはならないから。

俺の腕に縋ってきたミユの両手は僅かに震えている。健気に敵を睨み付けてはいるが、心では涙を流しているのだろう。

寄り添う俺たちに一瞬向けられた奴の視線は刃物のようだ。

「君たちが決まって白い衣服を纏っているのは、自分たちが光だけの存在であるという思い込みか、それとも……」

足を一步動かして横を向き、腕を組みながら数歩間隔で往復する。

「そうであつて欲しいという、ただの願掛けか」

突如として足を止め、すぐに再び歩き出す。

「まあ、これも君たちではなく、神が決めた事なのだろうが」

花を薙ぎ倒す敵の足音と、静かで低い声だけが空気を振動させる。

「……と、此処まで話してきたが」

黒の魔導師は凜と声を張り、歩みを完全に止めた。正面へと向き直る、ミユを捉えたその瞳はそれだけでも心臓を止めてしまいそうな程に鋭い。先程までとは比べものにならない禍々しい殺気を放っている。

「要するに、緑……『地の魔導師』さえ居なくなれば、光の魔法を使う術は失われる。もう邪魔は入らない」

口を動かしながらも、奴は再び戦闘態勢へと入った。同じように片手を天に翳し、黒色の靄を呼び寄せる。大きさでは劣っているが、その威力は相当のものだろう。

そんな脅しにも怯まず、アレクは飛びかかっていきそうな勢いのままに奴へ食つてかかる。

「だからカノンを殺したのか?!」

「ああ、殺した。今、この場に『地の魔導師』が居る事は影も想像してはいなかっただろうが、また殺せば済む話だ」

「こんなにも簡単に『殺す』という単語を吐ける事が許せない。人の命を何だと思っっているのだろうか。」

「あからさまに殺気向けられて、平静でいられる筈が無い。大きく震えるミユの手が口の代わりに恐怖を伝える。」

「俺が、そんな事させない……!」

身体が言う事を聞いてくれていれば、アレクが叫ぶよりも速く、奴に殴りかかっていたところだ。

声を振り絞る俺を奴は鼻で笑い、僅かに口元を吊り上げる。瞬きと同時に、ミユを貫いていた瞳がこちらを向いた。

「そんな身体で何を言っている?」

視線だけではなく、言葉も胸に突き刺さる。

何も言い返せない。こうなったのは奴のせいだとしても、元々は俺の無鉄砲な行動が原因である。唇を噛み締めても悔しさは拭えない。寧ろ強くなっていく一方だ。

言い淀んで顔を歪める俺の様子に、奴は満足したのだろうか。

「それに……」と続ける。

「羽根は無くなったのだ。僕を倒すどころか、傷付ける事すら出来ないだろう?」

「やってみなくちゃ分からないわよ！」

「フツ……。勝手にそう思い込んでいればいい」

俺の代わりにフレアが対抗してくれたが、それも軽くあしらわれ
てしまった。

そうこうしている間にも敵の魔法は完成しつつあるようだ。漆黒
の魔導石は鈍く輝き始め、浮かんだ黒の靄は色濃くなり、渦を巻く。

「僕は全力でミュの命を奪う。君たちは全力でミュの命を守るのだ
な」

渦を巻く程に靄は凝縮され、やがて一つの弾となった。人の頭く
らいの大きさがあるそれは暴風を孕み、黒の髪を、衣服を巻き上げ
る。

それだけではない。奴の周囲に咲き誇る白い花も全て散り、天高
く舞い上がる。俺たちの頭上まで飛ばされた後、はらはらと降り注
ぐ様はサファイアで見る雪のようだ。

「まあ、呪いがある限り、ミュが助かる事は無いだろうが」

儂い命を数百、数千と奪い、遂に弾は奴の手を離れた。地面擦れ
擦れをまっすぐに飛行し、掠めた花の命までをも奪っていく。

凶器を放った張本人は反動で上体を反らしながらも、悪魔のよう
な醜い笑みを浮かべている。

自分の勝利でも確信しているのだろうか。その体勢のまま、声高
々に宣言したのだ。

「今度こそ、『地の魔導師』の時を千年間止めてやる！」

第27章 出逢えた奇跡

低く唸るような不気味な音を立てながら、闇の弾は着々と俺たちに迫り来る。

何かとんでもない言葉を聞いた。などと悠長に考えている場合ではない。

相手は本気だ。確実にミユの いや、四人全員の息の根を止めるつもりでいる。

何が何でも彼女だけは守らなくては。思い通りに動かない身体と湧き上がる恐怖を引き摺り、必死に頭を働かせる。とその時、

「オマエら！ そこに伏せてる！」

突如としてアレクが俺たちの前に飛び出したのだ。弾を見据えて両腕を前方に突き出し、足元から小さな風を呼び寄せ始める。

それを見るや否や、フレアまでもが立ち上がった。躊躇う様子も見せずにアレクの横に並び、体勢を整えつつ、すつと息を吸い込む。

「フレア！ オマエ」

「あたしもやるわ！」

「……分かった。殺られるなよ！」

今回ばかりは二人の姿が頼もしく見える。俺の残された力では攻撃を防ぐどころか、勢いを弱める事すら出来なかっただろう。

微風は一気に旋風へと変わり、俺たちの四方を取り囲んだ。花びらを散らし、大地を削り取る。砂塵までもが宙を飛び交い、腕で作

つたひさし無しでは目を開けていられない程だ。

次にフレアの指先から火花がほとばしり、一瞬で竜巻に燃え広がる。視界は橙一色だ。体感温度は変わらないのだが、竜巻の周辺は物凄い熱気なのだろう。陽炎が出ている。

こんな状況下にあっても、闇の弾が発する音は掻き消えはしない。次第に大きく、鮮明になる。炎に遮られて目視は出来ないが、衝突は時間の問題だろう。

「……来るぞ！」

叫びながら、前方に居る二人は地を踏み締める。

咄嗟に俺も隣で蹲るミュの身体を押し倒し、その上に覆い被さった。

「ミュっ！」

来る時に備えて思い切り目を瞑り、無事にやり過ごせるようにと祈る事しか出来ない。

刹那、空が割れんばかりの轟音が花畑を震撼させた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8224c/>

純華の誓い～ブルーサイドストーリー～

2010年12月14日03時06分発行